# 鍔鳴り天狗

陣出達朗

春陽文庫

鍔鳴り天狗◎陣出達朗

春陽文庫 A
4/12
400

A－4－12

天真爛漫、天衣無縫、豪放磊落、考えようによってはおめでたいとも受けとられかねないほどの自由人というのが本編の主人公――東西南北のさだめなく浮き草をたのしむ素浪人は名のって浮草左膳！　が、剣の流儀は北辰一刀流を皆伝の上、鍔鳴無刀流という五百二十流剣法の中にもない、パチンと鍔鳴りの間に相手が斬られるという妙剣をも持つ剣豪である！　その左膳がのんびりとした旅の途次で、なぜか謎の武士団の襲撃を受けたのであった！　それは左膳があまりにも信州松代十万石真田家の若殿鶴太郎君に瓜二つのためだった……!?　左膳にからむのは、道中師地獄虫の三太と、娘軽業師お紋、鳥追いお蝶の美女二人――！　――〝夕霧城〟の騒動にまき込まれた浮草左膳はいかなる裁きをみせるか!?　明朗時代作！

装画＊木俣清史

# 鍔鳴り天狗

## 陣出達朗

春陽文庫

# 鍔鳴り天狗◎陣出達朗

春陽文庫 A 4/12 400

定価400円
0193－010412－3066

春陽文庫

2506

# 鍔鳴り天狗

陣出達朗

春陽堂

鍔鳴り天狗

陣出達朗

春陽文庫

春陽文庫

# 鍔鳴り天狗

陣出達朗

春陽堂

# 鍔鳴り天狗（つばなりてんぐ）

「その店子は、毎日、一両ずつ松兵衛へくれるということじゃから、こりゃまあ、どうしたあんばいじゃろけ」

水のみ百姓の松兵衛が、別に一軒の借家を持った。つまり、家主とか、大家とかいう身分になった——と、いうことさえ、この妙義村はじまって以来のビッグ・ニュースなのに、その店子……つまり松兵衛の家を借りている借家人が、一日に一両ずつ、松兵衛へ支払っている。と、いうことは、そんな話をきいただけで、聞いたものの目を、でんぐり返らさずには、おかなかった。それでは、百姓の松兵衛が、

「どこに？」

「どんな家を建てて」

「どんな人に貸したのか？」

という段になると、松兵衛一家のもの以外には、だれにもわかっていないのである。だれかが、それを尋ねても、松兵衛は、うんにゃ……と首を横にふって、



セミ

妙義村の百姓、松兵衛が、

「やぬし様になった」

と、いって、かいわいの人々は驚きのひとみをみはった。松兵衛は、文字どおりの、水のみ百姓であった。したがって、びんぼうでもあった。貧乏であったから、その住まいもたいへんおそまつなもので——雨の日など、雨もりの水滴を受け入れる器物の配置に、かならず一汗かくという、これも文字どおりの、あばら家ずまいだった。——その松兵衛が、一躍にして、

「大家様になった」

と、いうのであるから、かいわいの人々が、おどろきのひとみをみはるのも、無理のないことだった——。しかも、

「それは言えねえだ。それを言うと福の神が逃げてしまうだに」

「借家人は、福の神様だかえ」

「毎日、一両ずつくれるんじゃから、たいした福の神様じゃよ」

「神様のくれる小判はあぶねえけに気をつけてよく改めて見ろや、そのうち木の葉に化けてしまうかもしれんけに」

「だいじょうぶじゃ、小判は三日たっても、四日たっても、ヤマブキ色で歯でかんでみても、カチカチ堅いけに、正真正銘の天下の、通用金じゃよ」

松兵衛は、だれに、なんと言われようと、その借家人たる店子を、信じてうたがわない。松兵衛が、家を建てて、その「福の神」に貸してから、きょうで五日になる。福の神は、毎日、吹きたての、新しい、びかびか光る一両小判を、松兵衛へあたえた。

松兵衛は、はじめのほどは、その福の神をキツネの化けた人間かと思い、おのれの目をうたがいまぶたをなんべん、手のこうでこすって見返してみても、福の神は、やはりほんとうの人間であることにまちがいはなく、

「夢か？」

と、からだをつねってみたが、からだはつねれば、やっぱり普通に痛い。

「あれは、正真正銘の人間さまにまちがいない。きっと、何かわけがあって、あんなところにお住みになる気持ちになられたのであろう」

そこで松兵衛は、その店子——いや、福の神を、すっかり信用することにしたのだった。

碓氷峠を南へ降りて、横川の関所を通り、安中の城下へ向かうみちすがら、目を右のほうへ向けると、がいこつの群像かとみまごう、奇妙な山を、すぐ頭の上に仰ぐことができる。上州三名山のひとつ、妙義山の姿である。金鶏山、金洞山、白雲山などの峰々が相寄って、この天下の奇山を形づくっているのだが、最高峰三千

八百余尺の、噴出集塊岩より成るこの全山は、長の月日に、その表面の土の部分は洗い去られ、いつか岩骨ばかりの姿となって——月夜の晩など、この山を見上げると、その怪奇な形相に、だれしも、ぞっと膚にアワのたつのを覚えるという。

妙義村は、もちろん、この山のふもとにあるわけだが、村とふもとの間にある、クヌギの林は、新緑の候ともなると、目のさめるような美しさに色どられ、このあたりを通るものは、だれしもおもわず、

「緑の湖にも比すべき美しさ。新樹の、このように澄んで美しいのを、ほかに見たことはない」

異口同音にそう言って、この、クヌギ林の緑の美しさを、ほめそやすのを常とした。それは、頭上に立ちはだかっている、奇石怪岩の、がいこつ山……妙義の山が、樹木一本もない灰色であるのに比べてふもとの緑の美しさが、目だってさえてみえるからのことで、いわば、頭上の怪山、妙義の山が、この緑のクヌギ林の引き立て役をしているわけであった。

この、クヌギ林の下が、浅くはあるが、一つの渓谷をなしていて、そのかなたに、榛名山や、赤城の山が見え、ここからながめる風光はいたって上々なのであるが、ほとんどの人が、その風光の絶佳であるのを知らないのは、だれも、わざわざ、往還からはなれて、このクヌギ林の中へはいって行かないからのことである。

だから、このクヌギ林からながめる風光の美しさを知っているのは妙義村の住民だけなのであった。

なぜかといえば、このクヌギ林は、妙義村の住民たちが、お上の命によって、それぞれの区域を分け合って、年に一度か二度、木々の世話をやいていたから、ここからながめる風光の美は、いやというほど満喫していたわけである。

百姓松兵衛も、このクヌギ林、いく十坪かの世話を持たされていたので、時おりここへやって来て、いく百本かのクヌギの世話をしていたのであるが、かれのクヌギ林は道にもっとも近く、林の入り口が、それに当たっていた。

さて——話は、五日まえにさかのぼる。その日、松兵衛は、ただひとりでこのクヌギ林へやって来て、こつこつと、きんべんに、お上のために、クヌギ林の世話をやいていた。

——と、横川のほうから、ひとりのりっぱな服装をした武士が、編みがさをかぶって、このところを通りかかったが、武士は、松兵衛のクヌギ林のところで、ふとたち止まって、あたりを見まわした。

そして、道ばたへよって、仙台平のはかまをまくり上げようとして、ためらった。

小用がしたかったのらしい。

しかし、行儀のよさそうなその武士は、道ばたで小用を足すことにちょっと気まりの悪さを覚えたのか、道ばたでするのを思いとどまって、つかつかと、クヌギ林の中にはいっていった。

そこであたりをみまわし、だれもいないと知ると、くだんの武士は、はじめて安心したように、上等に光るはかまをまくり上げ、春雨の降るように、いとも静かに小水を放った。その態度は、なかなかに上品であった。武士はまことに快い放水を試みながら、この風光絶佳の視界を、飽きることなく賞しつづけた。

赤城の空には、白い雲が浮いていたし、榛名は、青い染料を、頭から一浴びしたかのように、青々とそびえている。渓谷の向こうには、田畑がひろびろと、夏がすみのかなたにまでのびていて、緑の稲苗が、まるで毛せんを敷いたように、初夏の日にはえて、すがすがしい。頭上には、クヌギの緑が、日の光を吸って、やわらかい木漏れ日を、林の中へおとしているし、季節のうるさ者である、セミの声が、ここかしこで、夏の交響楽をかなでている。

「う……む」

武士は、小用を終わってからでもそこに立っ

たまま、動こうとはしなかった。そして、ややあってから、ううむ……と、うなったところから察すると、よほど、このクヌギ林の中からながめる風光が、気に入ったのらしい。木にもたれて、風光を賞してみたり倒れている木に腰をかけてながめをむさぼってみたり……。そのうち、人のいるけはいに、ハッとしてふりかえった武士は、近くに松兵衛が、クヌギの虫をとっている姿をみつけると、つかつかと寄って来て、

「よいながめじゃのう」

と、いきなり、ここからながめる風景の、常でないのを、松兵衛へほめた。

「へい……？」

松兵衛は、身なりのパリッとした武士に、つかつかと寄って来られ、いきなりながめをほめられたので、めんくらい、返事のしようにに困って、

「あ、ありがとうごぜえます」

と、ほおかぶりをとると、あわてて、ぺこんとおじぎを一つした。武士は行儀のいい人間とみえて松兵衛のおじぎをうけると、かれもまた編みがさをとって、ていねいに腰を一つ折った。色の白い、さかやきの青い、どこからながめても、身分のありげな、貴公子ふうの武士だった。衣服の紋は六連銭。年は二十三、四というところであろう。

「この所は、そちのものか」

武士は聞いた。松兵衛はドキンとした。お上から派遣されて来たお役人が、この林を調べに来たのではなかろうか、と思ったからである。

このクヌギ林は、妙義村の住民が世話をやいているとはいえ、かってに木を切ったり、売ったりはできないのである。このクヌギ林について、松兵衛たちの自由になるのは、下枝や雑枝を払った、その払い枝をおのれの家へ持ち帰って、たき火にするくらいのもので、幹はそだてるだけで、それを自由に、どうするというわけにはゆかなかった。

ときどき、クヌギを一本、二本と盗伐してい



た松兵衛は、不意に見知らぬ武士に声をかけられ、お上の役人かと思い、びっくりドキンとしたは、無理のないことだった。

「へい。ここは、おらッちの世話やいてる林でごぜえます」

松兵衛は、カメの子のように首をちぢめながら答えた。すると武士は、ひとりうなずいて、松兵衛へ頼むように、こう言った。

「ここからながめる風景は、まことに気に入ったゆえ、ここに家を建て、ここに当分の間くらしたいと思う。よろしく、家を建て、この身の世話を頼む」

家を建てるといっても、ことはそう簡単には、まいらない。ここに家を建てるには、まずこの林をきりひらかなくてはならない。この、クヌギ林は、お上のものである。みだりに切りひらくことは、許されるものか、許されないものか、それは考えてみるまでもないことだった。それに、家をたてるには、材木がいる。かわらも必要だったし、くぎもかべ土も、土台の石も……。

「そんなものも、何ひとつごぜえましねえし、だいいちに、ここの木を切れば、お上からきびしいおとがめをうけますで」

松兵衛は、こまった顔をし、六連銭の紋どころをつけた衣装の貴公子へ、おそるおそる、家を建てることの、どだい無理であることを述べた。すると、貴公子ふうの武士は、こともなげにこう答えた。

「材料は、竹の二十本もあればこと足りるであろう。金をつかわすゆえ、竹と、そのほかに、屋根にふく板と、むしろを買って来るがよい」

それから、松兵衛の前へ、小判を二枚なげあたえ、

「柱は、この自然の木を利用すればよい。この木へ、竹をくくりつけ、屋根と壁を勘考すれば、それで家ができあがる」

なるほど、それなら、二、三時間もあれば家

ができるのに違いない。松兵衛は、二両の小判をつかむとさっそくそれらの材料をあつめて来た。竹と板とむしろを、必要なだけあつめても、すべて二分とはかからなかった。松兵衛は、家を造るだけで、一両二分という金をもうけた。

クヌギとクヌギの間へ竹をひっかけ、それへ板を渡して屋根をふき、周囲は、何枚かのむしろでかこった。へやは板を並べ、その上へ、むしろを敷けばそれで、六連銭の御意にかなった。

「この自然の樹木の柱の家こそとうとくもまた風流のきわみじゃ」

六連銭は、新築のひと間の中にすわると、さも満足そうに、そこからながめる絶佳の風景を賞しながら、

「当分、ここにてやっかいに相なる、晩には、酒を二升はこんで来るがよい。食事は少量でよいが、酒は必ず二升を忘れるな」

そこで、また小判を一枚ぽんと松兵衛へ投げあたえた。きょうの家賃と、食費と、二升の酒代だった。一日の家賃と、食い料と、二升の酒代に一両とは……おつりのほうが多すぎた。

松兵衛は、すっかり喜んでしまった。福の神以上の大福の神がとびこんで来たものである。日がくれると、ろうそくの灯をおいて、六連銭は、二升の酒をひやのまま、うまそうに飲んで、酔うにつれて、大声を出したり、柱とすもうをとったり、ひとりであばれていたが、そのうち、ぐうぐうと高いびきをかいて寝てしまった。おとなしそうな人物だが、飲むとあばれる癖があるのらしい。

あくる朝、松兵衛と、娘のお紋が、朝の食事を運んでゆくと、六連銭は、すでに起き、家の中にすわって、風景をながめていた。そして、ご苦労……と言って、また一両の小判をきょうの分として、松兵衛へくれた。衣服の紋はしみったれた六連銭だが、気まえはいたって豪気にできている。

松兵衛の娘のお紋は、ことし十九——あかぬけのした、このようないなかの娘とは、どうしても思われない、都みやこしたところのある美人であった。

それもそのはず。お紋は、つい十日ばかり前に、花のお江戸から、母親の病気見舞いに帰村したばかりの、江戸みがきの娘だったのである。お紋は、十三の年に、江戸の遠縁をたよって、奉公に出たのであるが——いつの間にか、両国広小路の見せ物小屋の娘軽わざ師として、一流の人気者になってしまったのである。お紋は、小さいときから、身が軽かった。妙義山へのぼって、村の子どもたちと鬼ごっこをしても、お紋だけはどうしてもつかまえることができなかった。

「松兵衛どんちのサル娘」

と、村の子どもたちは、お紋のことを、そう言った。お紋は、じっさいに、サルよりも身が軽くて、ときおり妙義の山へあらわれるサルを追っかけ、岩から岩をとんで、サルの先まわりをし、サルの首へ投げなわの輪をひっかけたりし、村童たちから、やんやのかっさいをうけた。

そういう軽い身が、お紋の生きる道をひらいてくれて、今では両国のからくり座では、なくてはならない人気者となっているのだった。母のおよしが、この春から病の床につき、しきりにお紋を恋しがるので、松兵衛は人にたのんでお紋のもとへ手紙を出した。そこでお紋は、からくり座の改装休業をさいわいに、半月のひまをとって、この村へとんで帰ったのだった。奇麗になったお紋の娘すがたを見ると、母のおよしはびっくりし、その日から病気はうそのように快方に向かった。

「こんなうれしいことはねいだ」

と、松兵衛は涙を流してよろこんだ。お紋が美しくなって、元気な姿を見せてくれるし、およしがうす皮をはぐように、日一日と病気からのがれてくれるし、クヌギ林に借家を一軒もって、家主さまになれるし、その店子がまた気ま

えのいい武士で、毎日一両ずつくれるし、
「まるで、盆と正月とが、一度にやって来たようなものじゃけン」
そう言って、三日めも、四日めも、お紋に三度の食事と、二升の酒とを持たせて、クヌギ林へひそかに運ばせてやった。
お紋は、帰りには必ず、新しい吹きたてのヤマブキいろの銭を、一枚もらって来、
「あのおさむらい様は、いったいどこのおかたでしょうか。ずいぶんと変わったおかたですことねえ。あんなに気まえのいいおかたって、ひろい江戸にも、ひとりだっていません」
と、六連銭の武士の気まえのいいのに感心し、あのような人は、江戸にもいないといって、しきりにその太っ腹であるのをほめそやす。
そして、きょうで、五日め、お紋は、その福の神へ夕食と酒二升をカゴに入れて運んで行って、
「おや？……」
クヌギの柱の家の前で思わず立ちどまり、わが目をうたがった。六連銭でない武士が、へやの中に、でんとあぐらをかいてすわっているではないか。髪は五分さかやきで、黒えりに、白一色の着ながしの武士である。無精ひげも相当なものだ。そして黒く染めぬいた衣服の紋は、一枚の寛永通宝である。お紋が、わが目をうたがったのも、むりからぬことであった。なぜなら——その寛永通宝の武士はクヌギの家の中で、あまりに堂々と、なんの気がねをするふうもなく、まるで大昔から、このクヌギの家の主人であるかのように、平気の平左ですわっていたからである。
（妙だわ）
お紋は口の中でつぶやいた。六連銭が、一枚の寛永通宝に化けていたとて、どうせ穴あき銭に変わりはないのだから、それほど気にする必要はなかったのだが、頭の髪が五分さかやきに早変わりをし、無精ひげをはやしているのが、



お紋には納得いかなかった。
無精ひげをはやし、五分さかやきになってこそおれ、よくよく見ればその顔はまぎれもなく、きょうの昼まで、ここにすわっていた、あの六連銭の貴公子の顔に、まちがいなかった。
（こんな不思議なことはない）
お紋は、もう一度、われとわが目を、手のこうでこすってみた。が、やっぱり五分さかやきの、このひげづらの武士と、きょうの昼まで、ここにいた六連銭の、さかやきの美しい武士とは、同じ顔であった。無精ひげをそり、さかやきをそれば、そっくりそのまま、六連銭の貴公子にもどるのに違いない。
（でも、さかやきが半日で五分ものびるはずはないし、おひげも、半日のうちにあんなにのびるはずはない。——と、したら、これはやっぱり別の人かしら）
お紋は、キツネに化かされたようにしばらくのあいだ、そこに立っていた。すると、寛永通宝のその武士はあぐらをかいたまま、いきなりこんなあいさつをした。
「拙者の名は左膳という。姓はいや、姓はその昔たしかにあったのだが、いつか失念いたしてしまった。それで、いまは、ただの左膳でとおしている」
「……」
「しいて姓を……と聞かれるときは、浮草と答えることにいたしておる。拙者には元来、東もなければ、西もない。北もなければ南もない。浮き草のごとく、風の吹くままに動いてくらすゆえに、浮草とみずから名のるゆえんである」
左膳と名のるその武士は、問われもしないのに、みずからそうあいさつをし、
「実は、拙者さっき、このところへはいりこんで、小便をいたしていると」
「まあ……」
お紋は、耳のつけ根を、桜貝のようにあかく染めた。花のつぼみの娘のまえで、ぶしつけな

ことばをいささかもてれずにしゃべるこの武士の、神経の太さにあきれてしまったのである。

「ここにすわっていた、六連銭の御仁が、拙者にむかって〝頼みがござる〟と声をかけたが、拙者は小便中であったから、ふり向かなかった。拙者元来、放尿中に美しい風景をながめることが好きなので」

「……？」

お紋は、いよいよあきれてしまった。どこまでのほうずにできているのであろう——この武士は？

「やがて、こころよい放水も終わったので、拙者はじめてふりかえって、なにごとでござるか、と答えると、この家の主人の六連銭のいわくには、

——貴殿を武士と見奉ってお頼み申す。一両日のあいだ、この家の留守番をお願い申したい。と、そこで拙者は、武士であるてまえ、承知いたした、と答えた。それで、拙者は、この家の中にきょういちにちと、あすいっぱいすわっている義務があるゆえ、かくのごとく、こうしてすわっているのでござる」

左膳という武士は、お紋へ、こう言って、

「そこでさっそくじゃが、酒をちょうだいにおよぼうかな。きょうの家賃、食費、酒代の一両は、預かっているゆえ、お渡し申す」

むしろの下から、小判を一枚とり出して、お紋の前へ置いた。そして、六連銭の武士から、ふつか間の費用として二両あずかっているゆえ、安心して拙者をふつか間だけ養うように、とつけ加えた。お紋は、おかしなおさむらいさんだこと、と、笑いたくなるのをがまんして、

「おさむらいさんは、六連銭さまのお兄弟？それとも、おいとこ？」

と、聞いた。とても似ているから、お紋には、そうではなかろうかと思えたのである。

「兄弟でもなければ、いとこでもない。ただの他人同士だ」



左膳は、真顔で答えた。お紋はしかし承知しない。

「でも、おひげをそれば、そっくりそのままのお顔になりますよ」

「道理で拙者も、さっき、あの御仁を見たとき、どこかで拝見したことのある顔だと思った」

自分の顔に似ている人間を見かけて、どこかで見たことのある顔だと思った——とは、たいへんのんきな人だと、お紋はおかしくおもった。左膳は、そこでひげづらをなでながら言った。

「それでは、拙者もひげをそることにいたそうかな。留守番は、なるべく家の主人の顔に似せておくほうが、訪問客をまごつかさせずにすむからのう」

そこで左膳は、そばにおいてあった大刀を、いきなり抜いて、お紋へさし出して、

「これを構えていてもらいたい」

「あれ、こんなおッかないものを……どうしますので？」

お紋は、肝をつぶして、手をひっこめた。左膳は、そういうお紋にはかまわず、

「これを下段に構えていてくれれば、それでよろしいのだ。つまり、鏡に使うのだ」

大刀の刀身におのれの顔をうつして、それを鏡の代わりとし、ひげをそろうというのである。お紋は、やっと左膳の意図を了解したので、おそるおそる大刀を構えた。

左膳は、おのれのつばを指先につけると、ひげづらへ、それをこすりつけた。それからわきざしを抜くと、ひげをそりはじめた。

「うふふふふ」

お紋は、左膳のその様子がおかしく、思わず笑った。笑うと手がふるえて、大刀もふるえた。

「笑ってはいかん。鏡がゆれるので、拙者の顔が、うつったり消えたりする」

左膳は、お紋をたしなめた。しかし、お紋の笑いは、こんどは両手へうつっていて、お紋の

手がしきりに笑い、大刀が——いや、鏡まで笑って、どうしても静止してはくれなかった。
「ダメじゃ」
左膳は、お紋から大刀をもぎとると、柱、いや、クヌギへ、そのきッ先を打ち込んだ。そして、それを鏡にひげをそった。
「まあ……六連銭さまとそっくりですこと、まるでうり二つですわ」
そり終わった左膳の顔をながめて、お紋はひとみを丸くした。かれは青いさかやき、これは五分さかやきの違いがあるだけで、ほかは、そっくり、そのままだった。
あくる朝、九時半ごろ、お紋が朝の食事を運んでゆくと、クヌギの家の表で、寛永通宝の浮草左膳が、両の手を高くさし上げたまま、不動明王のように微動だにせず、じっと突っ立っていた。
きょうも一日、上州の空は照りつけるのであろう。空には雲ひとつなく、青一色に澄んで、



クヌギ林は、セミの声でかしましかった。
「まあ……どうなされまして？　左膳さま」
お紋は、左膳から三間ばかり離れたところで立ちどまって、不審そうに、左膳へ声をかけた。
すると、左膳は、
「しっ！」
と、お紋を制し、目で、近よるではない、と合い図をし、
「セミ……セミが鳴いているさいちゅうだから、近よってはいかん」
と、低い声で、早口に言った。
「セミ……？」
お紋はあきれた顔をし、頭上のクヌギのこずえを見上げた。セミの姿は見えないが、たしかに、すぐ近くで、一匹たかい声で鳴いているセミがいる。
「木ではない。ここだ」
左膳は、セミにきこえたら悪いかのようにささやくようにお紋へ言った。
「どこ、ここって？」
「ここだ」
「ここって？」
「ここだ。ここを見よ」
左膳は、さし上げた二つの腕の右のほうを、目で教えた。お紋は左膳の右の腕をみあげた。なるほど、手首のところに、セミが一匹とまって、さかんに鳴いているのが見える。
「まあ、あんなところに」
お紋は、おかしくなるのをがまんして、
「とって上げますわ。じっとしていて……」
と、忍び寄ろうとすると、
「いかん」
と、左膳は首をふって、それを制した。
「セミは拙者の腕を、木の幹とまちがえて止まったのだ。セミは、これが拙者の腕であることを知らずに鳴いているのだ。このままにしていて、存分に鳴かせてやることこそ、慈悲というものだ」
「まあ」
お紋は二の句が継げなかった。いかにセミが人間の腕と、木の幹とをまちがえたからといっても、そのままにして、じっと突っ立っているとは……これはよほどの変人でないかぎりできる芸当ではなかった。
「いま、拙者が表へ出て、大きくあくびを一つした。人間あくびをするときには、両の手を上へさし上げるものだ。そのとき、このセミがとんで来て拙者の腕に止まった。そして、止まったかと思うとたん、じい……っと鳴きはじめたのだ。拙者は、セミを脅かすのもきのどくと思い、こうして、あくびをしたままの形で立っているのであるゆえ、けっして、拙者に近よってセミをおびやかさぬように」
左膳は、至極まじめに言うのだった。お紋には、返事もできなかった。なんという天真な心情の持ち主であろうか——この左膳という、一文銭の武士は……

そのうち、セミは鳴き終わると、ジイ……と最後の声を残し、ひらひらと羽をふるわして、空へとびたっていったが、その拍子に、左膳の顔へ小水をひっかけた。

「まあ、恩知らずのセミですこと」

お紋は笑うかわりに、こう言ってセミの無礼をとがめ、その場をごまかした。左膳はセミの小水の伝わるほおをなでながら、

「ひんやりとしていいここちだ。これはおそらくセミのお礼ごころであろう」

## つば鳴り無刀流

「あしたの朝になれば、六連銭の青びょうたんから頼まれた、留守番の役めがすむというものだ。それまでのしんぼう……」

左膳は、六連銭の留守宅の一室にすわり込んで、午後おそく、お紋の運んでくれた、一升とくり二本を前において、ごくン、ごくンと、ころよい冷や酒をノドへ鳴らしていた。

留守宅の一室——と書いたが、この自然木の柱でつくられた、にわか造りの家は、一間きりしかなかったから、左膳は、全部のへやを占領し、その中にばんきょしているわけで、ここから見る夕日は、美しかった。左膳は、その夕日をさかなに、ごくン、ごくンと酒を飲む。赤い夕日の光線を、酒といっしょに、のどの奥へのみこんでゆくと、なんとも言えない。不思議な味を覚えるのだ。

「酒に一段と風味がついて、これはまことにかたじけないさかなである。太陽をさかなにする、これほど豪勢な酒はおそらく征夷大将軍といえども、太陽をさかなに、酒を飲むというぜいたくは知らないであろう」

これも、浮き草の身なればこそ味わえるありがたさであろう——と、左膳は達観する。そして、ごくン、ごくンとあおって、あうっ……あうっ……と、太陽を吸うて、それを腹の中へのみくだす。

なんとなく、世界じゅうで、自分がいちばん大きな人物になっているような、錯覚におそわれる。なにさま、太陽を一吸い、一吸い……太陽をかじり取っている左膳だから……。左膳は、赤い太陽を、あまりにみつめすぎたせいか、腹がすこし痛くなってきた。そこで視線を横へそらした。が、目がくらんでいて、何も見えない。赤や黄色や、ダイダイ色や緑の光のはん点が、ちらちらするだけで、せっかくの風景が、さっぱり左膳の視野へははいらない。

「こりゃいかん。すこし、太陽を食べすぎたかな」

左膳は、湯飲み茶わんを持った左の手で、まぶたの上をこすってみたが、眼孔の中に宿った、太陽のかけら——光のはん点は、よういにぬぐいとることができなかった。

「しかたがない。目の中の太陽のかけらが消えるまで、目をつぶっていよう」

左膳は、そこで両の目を閉じ、目を閉じたまま、湯飲み茶わんに酒をつぎ、ごくン、ごくンとあおった。そして、太陽の光をさかなにした。

——と、例の道ばたから、ふたりの、深編みがさの武士が、この、クヌギ林の中へはいり込んで、いっせいに放水をはじめた。

人間にも、犬のような習性があると見えて、旅をするものは、このところを通ると、だれでも、一応は、ここへはいって、小用を達したくなるらしい。

「おい、あれを見ろ」

さきに放水を終わった、深編みがさの武士のひとりが、まだ銀色の水のなわを、土の上にそそいでいる、別の武士へささやいた。

「あんな所で、酒を飲んでいるではないか。おやおや、気が変になったのか、両の目を閉じて……」

「おう、たしかに、あれは」

「頭が五分さかやきになっているところが、す

こし妙だが、あれからさかやきをそらなければ、あれくらいにのびているわけだ。うむ、すこし気が変になっているようだな。酒を飲みながら、何やらカジっているふうをするが、何もカジってはいない。ハテ、めんよう……」

「まことか、それは」

往来から、六人ばかり、いずれも深編みがさをかむったのが、クヌギ林へはいってきて、かさの中から、目をつぶって、酒をたのしんでいる左膳のほうをうかがって、

「まちがいなし」

「このようなところに、居を構えているとは意外であった」

「直ちに」

「待てっ。せいては仕損じる」

一行は、往来へ引き返してゆくと、円陣をつくって、なにやら相談をぶちはじめた。あまりいい相談ではなさそうである。声が低いので、何を相談しているか、ききとれない。クヌギ林の中では、左膳、ようやく両眼を見ひらいた。もう、太陽のかけらのはん点は、左膳の眼孔からは消えて、夕日に美しい上州の風景が、目に映る。

「酒は口より、恋は目より……ということばがあるが、あれはうそだな」

左膳は、夕日に赤い上州の風景をさかなに、ごくン、ごくンと湯飲み茶わんの酒を、ノドの奥へ流し込みながら、そんなことをつぶやく。

「目をつぶって飲む酒の、いかにまずいかを、しみじみと知らされた。酒は、太陽を吸いながら、よき魚のさかなをつつきながら、はたまた、こうして、ながめのいい風景を見ながら飲むところに、いい知れぬ味わいがあるものだ。めくらの飲む酒は、さぞまずいことであろう」

左膳は、目をつぶりながら飲んだ酒が、たいへんまずく、いま、こうして、目をみひらいて、赤い夕日の下の、上州の風景をさかなにして飲む酒に、えもいわれぬ佳味を覚えたことから、



「酒はやっぱり、目で飲むものと覚えたり。酒は、口で飲むものではないと知った」

酒について、ひどく悟りをひらいたようなことをつぶやくのであった。これも、浮き草主義の、左膳らしい感懐なのであろう。そして、酒は、太陽の光とともに、よき魚のさかなとともに、また絶景をながめながら飲むもの……とはいっても、美人を前にして飲むものであると言わないところに、左膳らしさがあったのである。およそ、美人を前にして、酒を飲むほど、あじけないものはない——というのが、左膳の持論なのであった。そのうえ、杯をとり上げた瞬間、たのみもしないのに、美人が気をきかして、ちょうしをとって、酒をついでくれるにいたっては、その酒はドブ水のようにまずくなって、吐きけさえもよおす左膳だった。

「すべからく、酒はこうして、ひとり静かに、おのれの欲するままに、ついで飲むのにかぎるというものだ」

左膳の、いま飲んでいる酒の環境は、そういう条件に、ぴったりと合っているわけである。だれもじゃまするものはいないのはありがたい。

ひらら、ひららと、つがいの白チョウが、もつれながら、左膳のすわっているそばまで舞い込んで来たが、すぐに、裏の林へ通り抜けてしまった。

「チョウはいいなア。行きたいところへ、すきな場所へとんでゆけるからな」

左膳は、だいぶ酔いがまわってきたらしく、湯飲み茶わんを下へおくと、両手をひらひらさせ、チョウの舞うまねをしてみたが——そのまま、ごろんとあおむけにひっくり返ったとみるや、もう雷のようなイビキをかいて、深い眠りにおちいってしまった。同時に、赤い太陽も、上州の山かげへ沈んで、夜は静かにしのび寄って月が出た。月は、十三夜の月であった。風はない。が、クヌキ林の中は、なんとなく、ざわ

めいている。クヌギの枝々に宿った、このあたりを、くらしの場にしている鳥どもの、夢の中で発する寝言なのであろうか。

月の光は、左膳の寝ている姿を、くっきりと浮かせて——左膳は、もうイビキこそかいてはいないが、ぐっすりと、石のように眠りこんで動かない。じわり……じわり……これは、土を踏む人間の、かすかな足音だ。ひとり、ふたり、三人……七人、八人。クヌキ林の土が、しっかりと踏まれて、

「かさを」

だれかが、ひくい声でささやいた。八人の深編みがさの武士は、林の中で立ちどまると、音のしないように、かむっていたかさをとった。

月光の中に、いずれも、一癖あるつら構えを八つ浮かばせ、八人はおもいおもいに、かさを、クヌギの枝にひっかけると、刀の下げ緒を解いて、それをたすきにかけ、はかまをもも立ちにとった。

「ぬかるな」

「だいじょうぶ」

足音をころして、そっと忍び寄ってゆく。左膳は、ふたたびイビキを発しはじめた。八人の武士はちょっと足を止めたが、左膳のイビキが、本物であると見てとると、ふたたび近よってゆく。みしッ……にわか造りの家の床だから、足を踏み入れると、床板が鳴る。ひやッとして、左膳の寝姿を見やる。左膳のイビキは、すこしも変わらない。

(悟られていない)

安心して、ふたりあがり、三人あがり、ついに、八人とも、家の中へはいり込んで、

「まちがいはないか」

左膳の寝顔をのぞきこんでいるひとりへ、いちばんあとから上がった、首魁らしい武士が、低い声で聞く、

「まさに……」

のぞきこんでいたのが、太鼓判のようなうなずきを、大きくうなずいて、

「六連銭の家紋が、寛永通宝たった一枚にかわっているだけで、まちがいなく、われらが捜しもとめている……」

「よし」

と、首魁らしい武士はうなずいて、刀を静かに抜くと、きッ先を左膳の寝顔へさしつけた。

刀のきッ先と、左膳の顔との間は三寸。月の光を受けて、きッ先がぴかりと青白い光ぼうを放ち、左膳の顔が、あざやかに浮いて見えたが、左膳は動かない。イビキのかきっぷりもすこしも変わらない。あきらかに、深い深い睡魔のとりこになっているのだ。

「よし！」

刀をひいて、首魁は、ほかの七人へ目くばせをくれた。抜けという合い図だ。秋の野の、スキッ原のように白い刃が左膳のまわりに揺れる。斬りつける者、ふたり。斬りそんじた場合に、すかさず斬りかかるものふたり。あとの四人は、相手がとび起きて、逃げるようなことがあれば、直ちに横から斬りつけられる位置に、身をひいた。いわゆる、鉄桶の陣構えがととのえられると、首魁は、低いが、鋭い声で、

「斬れッ！」

と、気合いをかけるように、叫んだ。

「えや……っ」

ひとりが、床板をはげしくけって、するどい気合いとともに、必殺の剣を、床板まっ二つに斬りはなたんず勢いで、打ちおろした。剣は寝ている左膳の左肩へ、落星のように、青白い光の尾をひいて……。

とたん！　左膳のからだは、烈風に吹かれた、地上のミノムシのように、ころころッと、右へ三回転、すばやい寝返りを打った。寝返りを打った左膳、いつつかんだのか、大刀を抱いている。大刀をさやごと抱いた左膳——人をくったものである。ぐうぐう、わざと、高いびきだ。取り巻いた武士たち、一瞬、円陣を拡大さ

せたが、また……じりッ、じりッ、と、左膳の寝姿を、取りつつむ。

「斬れッ」

首領らしい武士が、ふたたび大喝した。もう遠慮はいらない。相手は、こちらを小バカにしてのタヌキ寝だ。

「えやッ」

「くそッ」

ふたりは、ならんで斬り込んだ。その剣のするどいこと、こんどこそ、完全に二太刀は見舞うことができた——と、見えた瞬間、

「あう……っ」

「むう……っ」

斬り込んだふたりの武士が、脾腹をおさえてのけぞって倒れ、同時に、パチン……つば鳴りの音。そして、

「やっ」

「いない」

と、叫んだ。武士たちの驚きの声をよそに、左膳の姿は、小屋の外の、月光の降りそそぐ、クヌギ林の外へ飛び出していった。続いて、残りの五人も抜刀のまま、それに従った。左膳は、一本のクヌギをうしろだてにとって、六人へ油断なく構えた。

「無風流なやつらめ」

「……？」

「せっかく飲んだ、二升の酒でいい気持ちになって、夢をたのしんでいたのに、無粋なものを打ち込んできて……拙者を妙義山のタヌキとでも、まちがえているのか」

「二升……うむ。いよいよまちがいなし。命はもらった」

首領は、ほかの五人へ、めくばせをした。土を踏んで、五人は、ぐるり、と左膳の前、三方へ陣を敷いた。

「タヌキ狩りにしては、大げさな。タヌキの出るのは十五夜と相場がきまっている。こよいは十三夜だ。ふつか早い、帰れ」



左膳は、そう言いながら、相手の何者であるかを、月の光に、たしかめてみたが、いずれも、襲われる覚えのない相手ばかりであった。

「東西南北のさだめない拙者、したがって浮き草をたのしむ身の拙者に、白刃のごちそうをうける覚えは、かけらほども持たぬが……人ちがい、いや、タヌキ違いではなかろうか」

しかし、襲撃の武士たちは、白刃を引こうとはしなかった。

「斬り込めッ」

六人が、いっせいに、左膳へ斬りかかっていった。

「あっ」

「うう……」

折れくぎのように、ふたり、前かがみに倒れたのは、やはり、襲撃のほうの武士であった。それと、同時に、パチン……つば鳴りの音だ。刃をさやに収めた音である。左膳、相変わらず、クヌギをうしろだてに、油断なく三方を見すえている。

「手ごわい、これほどできるとは知らなかった。ぬかるな」

首領の武士は、残った左右の武士へ、つぶやくように言って、

「なんとしても打ち取れ、それッ、もう一度ッ」

月に、四本の刀身がきらめき、気合いとともに、三たび左膳を襲った。が、また、ふたり、アヒルの鳴き声のような声を絞って、丸太を倒すように、ぶっ倒れ、それと同時に、

パチン……。

つば鳴りの音。

そして、左膳は相変わらず、クヌギをうしろだてにして、すくッと突っ立っている。残るは、ふたり、首領と、その配下だ。こうなると斬り込めない。斬り込めば、つば鳴りの音とともにこちらがやられてしまうことは、十中の八までは、まちがいのないことだ。しかし、ひっ込むわけには、いかなかった。味方の六人がや

られているのに、残ったふたりが、目的を果たさずして逃げるということは、ひきょうにもなるし……うまくゆけば、最後のふたりの剣で、相手を倒せるという僥倖をつかめるかもしれない。十中の八の、あとの二が、勝ち運となって、形勢逆転してくれないともかぎらない。

「ひくな」

と、首領が声をかければ、

「おう」

と、残った配下が、それにこたえる。その声は、恐怖のふるえを帯びていて、生きている人間ののどから出る声にしては、奇妙きてれつな、ひびきを蔵していた。斬り込んでくると見て、左膳こんどは、刀を静かにさやから抜いた。抜いたかと思うと、刃を上に向けて、ぐいと、ふたりの前へさし出した。

「拙者の、剣の流儀は、つば鳴り無刀流という。つば鳴り無刀流などという流儀は、わがくに五百二十流剣法の中にもない流儀だ。拙者だけの流儀だから、世間には知られていない」

左膳は、刀身を前へさし出しながら、剣の流儀の講釈をはじめだした。

「つば鳴り無刀流というのは、読んで字のごとしで、つば鳴り……つまり、刀をさやへもどしたときには、すでに相手が斬られているという、すばやい剣法で、刀が見えないから、無刀のごとくに思われる。しかし刀は必ずさやをはなれ、それからさやへもどっている」

「……」

「そこで、こんどは、こうして先に抜いておいて、それから、刀に一働きしてもらってから、さやへおさまるまでの速さを、ごらんに入れよう」

左膳は、まるで大道の居合い抜きのような口上を述べると、

「打ち込んで来い」

と、相手の首領へ言った。瞬間それにつられたように、ふたりは気合いとともに斬り込んで



来た。

パチン……つば鳴りの音。同時に、斬り込んで来た、最後のふたりも、折れくぎのように、横腹を押えて、左膳の足もとへひれ伏すように、倒れてしまった。

あくる朝、江戸へ帰ることになったお紋が、クヌギばやしの左膳へ、別れのあいさつにゆくと、おどろいた。左膳のすがたは、どこにも見えず、そのかわり、八人のさむらいが、あちらのクヌギ、こちらのクヌギの木にしばられたまま、すわっているのである。かれらは、かれらの刀の下げ緒で、うしろ手にしばり上げられ、クヌギの木に背中をもたせているのである。そして、刀は白刃のまま、ひとりひとりの前に、つきささられてあるのだ。

お紋は、驚きのつぎに、あきれてしまって、その中のふたりへ聞いた。

「この家のおひと、どこへ行かれたか、ごぞんじはないでしょうか」

すると、問われたさむらいは、しばられているのを、若い娘にみられたので、いかにもてれくさそうに、

「そのまえに、拙者たちの、このいましめを解いてはくれぬか」

と、いささかの虚勢を張りながら言った。お紋は、むッとなった。両国のからくり座できたえた度胸をもっているお紋であったから、そんなふうに、さむらいの威厳をかさに着ていばられると、つい反抗心を投げつけたくなるのが人情で、

(ふん。どうせ浮草左膳さんにしばられたのだろうが、だらしなく縛られているくせに、いばったりして……)

腹の中で、そうおもったから、わざとじらしてやった。

「この家のおひと、どこへ行ったのか、それを教えてくださったら……」

それを教えてくれたら、いましめを解いてあ

げるわ、と、そばへ近寄らずにいると、さむらいはいまいましそうに、
「この家の、白衣の男のことか」
「ええ」
「一刻ばかりまえに、どこかへ出かけていった」
「どちらのほうへ」
「あっちだ」
手でしめすわけにはいかなかったから、さむらいは、あごをつき出して、妙義村のほうを教えた。
「じゃ、わたしの村のほう？」
「そなたは、どこの村のものかは知らぬ。が、あちらへ行ったことだけは、たしかだ——ところで、このいましめを解いてくれ」
「妙ね」
お紋は、首をかしげて、
「あちらへ行ったのなら、わたしの家へ来そうなものなのに」
「そのようなことは、拙者たちの知ったことではない——この、いましめを解いてくれ」
「セミのおさむらいさんは、わたしの村を通りすぎて、安中のほうへでも行ったのかしら」
「そなたは、あの武士をよく知っているのか。あの武士は、どこから来たのだ」
さむらいは、お紋が、なかなかに、いましめを解いてくれないので、あきらめ、そんなせんさくをした。
「知りません。どこから来て、どこへゆくおかたなのか——ただ、とても偏屈なおかたということしか、ぞんじません」
お紋は、さむらいたちのいましめを、解いてやろうともしないで、くるりときびすをかえし、左膳を追って白い街道をかけだしていった。

## お蝶がさ

妙義の村から、ひがし南へ、やく一里半ばかりくだって行くと、横野という、むかしから、スミレの花が名所となっている、土地に達する。ここのスミレの花は、季節的には、ややおそく咲くのが特徴で、その花盛りの候は、セミのよく鳴くころであるという。いまが、その盛んの時で、むらさきの染め出しもうせんをしきつらねたように、二万坪ばかりの花野は、夢の国へでも行ったように夢幻的で、新続古今集のなかの、
——紫の根はう横野のつぼすみれ、真袖につまん色もむつまじ
と、よまれている和歌のように、だれでも、この自然の紫もうせんをみれば、その上に寝ころんだり、紫の小花を摘んで、たもとの中へ入れたくなるのが人情で、
「まあ、きれいなこと。こんなに美しい花の原っぱって、見たことない」
いま、妙義のほうからやって来た、ひとりの女が、この紫の原の端にたって、おもわず、こう嘆声を上げた。
鳥追いがさをかむって、三味線を横にかかえているから、看板どおりに受け取れば、鳥追い女ということになる。色のしろいほおに、かさの紅緒が、にくらしいほど、あざやかで、ひとみに、いいようのないチャーミングな光がただよっている。かたほうのつまを、チョイと引きあげて、帯の下へさし込んでいたから、緋のけ出しからこぼれる、シラカバにかんなをかけたようなすねが、これまた色気を散らして——こういう、自然の紫敷布のそばに立たせても、すこしもそれが不自然に見えないのは、この女の、もってうまれたからだの味というよりは、ながい年つきの間に、みがきあげた、後天的な洗練のたまものであろう。年は、二十三くらいかな——といったら、彼女はおこるだろうか？
「こんな美しい敷きぶとんを見たので、とたんに足のつかれが出てきた。まだ朝のうちだもの、すこしこの上で寝てゆこう……ッと」
鳥追い女は、楽天家と見えて、そんなこと

を、ひとりつぶやくと、つかつかッと、花のもうせんの上を歩いていった。とたん、破れ鐘のような、すさまじいでっかい叱声が、ちかくから飛んで来て、鳥追い女の、白いすねをすくった。

「こらッ……花を踏んではいかんぞッ！　もどれッ」

鳥追い女は、その声をきくと赤いけ出しを烈風のなかの旗のように乱し、びっくりして花敷き物の外へ逃げかえった。

「ああ、びっくりした。花のなかへはいって、こんなにしかられたの、はじめてだわ」

びっくりしたので、心臓がやぶれかかったのであろう。鳥追い女は、胸のあたりを、手ッこうをつけたこぶしで、四、五回とんとんたたき、うろたえ騒ぐ心臓をなだめしずめると、やっと落ちつきをとりもどし——大喝一声のぬしはだれやらんと、かさの首を横へねじむけた。花の敷き物の端から、三間ばかりなかへはいったところに、半径六尺ばかりのあき地があった。あき地といっても、緑のクローバーの草がいっぱいにはえていて、紫のスミレ花が、そこだけ咲いていないという意味のあき地だ。そこに、ひとりの、白ずくめの、五分さかやきの武士が、ごろんと寝ころんでいる。白ずくめの衣服の武士は、刀のさやをまくらにして、のびのびと両足をのばし、青い午前の大空を見上げて、気持ちよさそうである。

「ちょいと、そこの、白いひと」

鳥追い女は、すこし横に移動していって、その武士と、最短距離の地点にたつと、すこしおこったように、花の中へ呼びかけた。が、しかられたあとだったので、さすがに、花を踏みしだいて、中へはいろうとはしなかった。

「拙者が、雪だるまに、みえるのかな」

武士は、あおむきにねながら、女のほうへ視線をくれようともしないで答えた。

「雪だるま？」



女は、けげんそうに、武士のことばをおうむにかえした。

「雪だるまにでも見えたから、そこの白いひと、と呼んだのであろう」

「お召しものが、白ずくめだから、白いひとと呼んだんだよッ」

女は、むかむかしているのらしく、ことばじりに、ひどく針があった。

「白いものを着ているから、白いひとか。ハハなるほど。黒ずくめなら黒いひとというわけだな。その伝でゆくと、生まれたてのやや子に、白いものを着せて、赤ン坊とは、どういうわけかな」

「もしッ」

女は、いよいよかさの下で、ほそい柳のまゆを、ぴりりッとふるわせて、

「そんなことよりも、なんだって花の中へ、わたしがはいって悪いの！」

「ああ、そのことか。あわれな女俗物め！」

「何があわれな女俗物なんです。わたしが、花ン中へはいろうと、はいるまいと、わたしのかってではありませんか」

「そうは、いかん」

「この花は、おさむらいさんの花なんですか」

「いや」

「だったら、文句いう権利ないでしょう」

「しかし、注意する義務があるから、どなったのだ」

「義務？　あんたは、お金もらって、この花の番をしているの」

「違う」

白い武士は、むくッと起きあがって、あぐらをかいた。浮草左膳だった。左膳は、はじめて、鳥追い女の姿を、心ゆくまでながめながら、

「人間は、だれでも、花を愛する権利がある。と同時に、花をいたわってやる義務もある。拙者がいまどなったのは、その義務のほうを遂行したまでだ」

「どういう意味です。その義務というのは」
「愚問っ」
と、左膳は、首をふって、
「人間が花を踏めば、花はおしつぶされて、かわいそうだ。花は人間に踏まれるために咲くのではない。チョウをあそばせ、人間の目をたのしませるために、咲くのだ。それを非情にも踏みつけるのは、心ある人間のとらざるところ、この理がわからぬから、哀れなる女俗物といわれるのだ」
「ちょいと、おさむらいさん！　あんまりひとを小バカにしないでおくれッ」
女はほんとうにおこった。足もとの草を麦踏みのようにとんとんと踏んで、
「おさむらいさんは、そこへ花を踏まずに、行けたンですか！」
「もちろん」
と、左膳は、うなずいてこたえた。
「拙者は、一本のスミレも踏みしだくことなしに、ここへ来た。ここからながめる花の野は、また格別である」
鳥追い女は、承知しない。
「うそおっしゃい。鳥じゃあるまいし、どうしてそこへ、花を踏まずに行けるもンですか。自分は、花をふんで、そこへ行っていながら、ひとが花の上を踏むのをどなるなんて、おさむらいさんこそ、男俗物よ」
女は、くやしかったので、口をきわめて左膳を攻撃した。
「拙者は、花はふまん。そこからここまで、いっそく飛びに飛んだ」
「三間もありますよ」
「判官さまは、檀ノ浦で、船を八そうも一気に飛んだ。ほんとうは九そうなのだが、口の悪いのがくそ飛びといったので、八そうにしたのだという。判官さまが八そうの船をとんだのに、拙者が三間くらいの花の上を飛ぶのに、なんの不思議もない」



左膳は、すずしい顔をして、そんな故事をもちだし、応戦する。鳥追い女は、いよいよくやしがって、
「じゃ花の上を飛んで、そこへゆけばいいのですね」
「花さえ踏まなければ、ずっと向こうへとんでも、いっこうにさしつかえはない。だが、女には、ここまでとぶのは、むつかしかろう」
「越後の板額女将は、ナギナタをふりあげたまま、鳥坂の城の上から、三丁はなれた敵のまン中へ、とび込んでいったという記録がありますよ。板額が三丁とんだのに、この鳥追いお蝶が、三間くらいの花の上がとべないなんて、そんな不公平な話って、ありませんよだ」
「鳥追いに、お蝶か。なるほど鳥とチョウチョウなら飛べるだろう。論より証拠。いまよう板額どのの腕まえを、拝見いたそうか」
左膳は、笑っている。左膳は、女にそばへ寄られることが、極度にきらいである。きらいだから、花の上をあるいてはいかん、と、さっき大喝したのだ。どなって足どめしておけば、女は花の中へはいって来ない。はいって来なければ、左膳は、女くさい空気を感じることなしに、ゆうゆうと、花をたのしみ、花の中で寝ていることができるというものだ。
ゆうべは、訳のわからない刺客の一団におそわれ、久しぶりで、峰打ちではあったが、つば鳴り無刀流の妙技を発揮したが、おかげできょうは、いささかねむい。
この美しい、スミレの花の、ひろい敷き物をみて、左膳は、ひとねむりしたくなったのである。いい気持ちで、青空を見上げて、眠りの神さまのお迎えをまっていると——お迎えは来ずに、鳥追い女が来た。そばへ来られたら、眠るどころではないと、左膳はとっさの機転で、花を踏んではならんとどなったわけだが、女はひっこむどころか、花の上をとんで、自分のそばへ来るというのである。

（こいつはヤブヘビだった）

苦笑していると、鳥追い女は、ほんとうに花の上を三間がとこ、飛び越えるつもりか、五間ばかり、うしろへさがった。駆け出して勢いをつけるためなのであろう。

鳥追いのお蝶は、悲壮な表情をかさの下にみせ、しばらくのあいだ、左膳のすわっている花の中の、草のあき地をにらんでいたが、やがて、三味線のさおのまんなかを、右の手でつかんで、さっとさしあげた。まるで、ヤリなげ選手の姿勢である。こういうかっこうで、駆けだすつもりなのらしい。

「えいっ」

すさまじい、気合いを一つ。気合いをかけたのは、決意の悲壮さをしめして、あわれであった。お蝶は、その気合いとともに、ものすごい速さで駆けだした。それは、まさに、越後は鳥坂の城壁から、大ナギナタをさしあげて、敵陣めがけてとびおりる、大力無双の、板額女将の勇姿にも似て、凄絶であった。お蝶は、けだしの赤い色を、燃えるみどりの草々のうえに乱して——はしること三間。ておいのイノシシのような速さで、紫のもうせんの端までくると、

「や……ッ」

まことに、いさましい掛け声をかけて、跳躍をこころみた。鳥追い女の意地。なにがなんでも、飛び抜かねば女の意地がたたない。

お蝶のからだは、スミレの花の敷き物のうえを、大きく放物線をえがいて飛んだ。が、その意気、その決意は壮たるものであったが、お蝶の跳躍力は、いかんながら、決意の半分にも達しなかった。

「あっ……」

お蝶は、十一、二尺とんだところで、あおむけにひっくりかえり、左膳のすぐ目のまえで、美しい奥を、一瞬ではあったが、ちらと展開させてしまった。が、そこは女。女のたしなみ。あおむけにひっくりかえり、幕の内をご披露に



およんでも、すぐに左手で、すそをかきあわせるだけの、本能性運動神経だけは、もちあわせていた。

「ああ、いた……」

お蝶は、スミレの花のうえへ起きあがって、てれくさそうに、ゆたかなしりを、なでさすった。三味線は、さいわいにして、無事であった。左膳は、にがりきって、お蝶をにらんでいた。思わぬところで、目の保養させてもらった、などと喜びにやにやするのは俗人のことで、左膳には、ああいう幕の内を拝観することは、どうも気もちがわるいのらしい。

「うごくな！」

左膳は、手をふって、お蝶へ、静かに、じっとしていろと、どなった。

「うごくと、そこの空気が、こちらへ流れてくる」

「……？」

お蝶は、いたいおしりを、スミレのもうせんのうえに、すこし浮かしぎみにし、しきりに顔をしかめながら、さすっているのだが、左膳が、うごくなとしかったことの意味が、のみこめないらしく、

「わたしだって、生きているンだからね、動きもしますよ！」

くやしそうに言いかえした。左膳は草の上に寝かしてあった刀をとり上げ、たもとにつつみ、

「うごくと、においをふくんだ風が流れてきて、刀のけがれに相なる」

見えた、とも、見えなかった、とも、そんなことには、いささかも触れないで、においをふくんだ風がながれてくる……と、文学的なことばをつかうあたり、浮草左膳せんせいは、なかなかの粋人であった。

「においをふくんだ風ですって」

お蝶は、しかし、それを別な意味にとって、自分の身のまわりを、くんくん鼻をならしてかいでみて、

「これは、スミレの花のにおいですよ。花というものは、じっとしておけば、におわないものだけど、かき乱すとにおいが散ってくるんですよ。わたしが、いま、どすんと、ここへしりもちをついたので、花のにおいが、急にひろがったんですよ。おさむらいさんは、花を愛して、そこに休んでいなさるくせに、花のにおいをきらうなんて、まったくボクネンジンのぶ風流ものね」

お蝶は、くやしかったので、そんな毒ぜつをはいた。左膳は、自分の鼻のさきに漂う空気を、てのひらで払いながら、

「拙者は、なるほど、花を愛し、花のにおいをめでて、その花のにおうてくるのを、こうして待ってはいるものだが——いまのような一瞬の花、そのにおいを待ってはいなかったぞ。鳥追い女お蝶の花のにおいは、いささか強烈すぎて、拙者には迷惑だ」

左膳は、まだ鼻先にただよう空気を、てのひらで払っている。

「わたしの花のにおい、ですって」

「花は半開きをよしとす、と古人は言っている。おまえのような、満開の花から発するにおいは、いささか、へきえきものだ」

そのとき、お蝶は三味線を花のうえに置くと、すくっと立ちあがり、やッ！　と声をかけ、一そくとびに、スミレの敷き物のうえを飛んだ。くやしがって、大飛躍をこころみたものだから、今度はよくからだが浮いて、うまいぐあいに、左膳のいる草のあき地へ、すっぽりと落ちこむことができた。が、しりもちをついたことは、前回とおなじであった。お蝶はしりもちをつくと同時に、左膳の胸へ、

「あれッ」

と、必要以上にしがみついた。とびこんで来、しりもちをつき、いきなりしがみついたので、左膳は、あやうくあおむけに倒れるところだった。が、たもとにまいていた、刀のさやじりで、すばやくからだをささえたので、倒れることだけはまぬがれた。お蝶は、そのあいだに、電光のはやさで、彼女の特技たる指さきの秘術をつかって、左膳の懐中物を、すりとってしまったのである。

「動くなというのに、なぜうごいたのだ」

左膳は、女くさいのをきらって、お蝶をつきとばすようにしながら、しかった。

「そうは、ゆきませんわ」

お蝶は、すった紙入れを、乳ぶさのしたへ押しこんで、そしらぬ顔で、

「いつまでも、あそこにすわっていては、スミレの花がかわいそうだから、うごいたのよ。花を愛するがゆえに……」

お蝶が、鳥追いがさをぬいで、みどりの草の上に置くと、かさの紅緒が、草のうえに、花のように、あざやかに咲いた。夜目、遠目、かさのうち……ということばがあるが、この女は、かさをとったほうが、ずっとわかく見え、色気もあふれてみえた。

「すこし、はなれていてくれ」

左膳は、お蝶へ、じゃけんに言った。そばにいられると、女のにおいのほうが強すぎて、スミレの花の、そこはかとなき、うましかおりが消されてしまうというのである。

「はい、はい。そんなにおじゃまなら五間でも、十間でもはなれていますよ」

お蝶は、もう目的のひと仕事を、まんまとすませてしまったあとだから、左膳になにをいわれても腹をたてない。いいなりに、うしろへさがろうとすると、

「三尺ばかり、さがればよい。五間も、十間も、さがる必要はないぞ」

左膳は、真顔でお蝶の返事を、訂正した。

「三尺では、わたしのにおいがそっちへ流れてゆきますよ。十間もさがったら、においがしなくて、よいでしょう」

お蝶は、意地になって、はなれようとする

と、

「三尺以上さがられると、スミレの花がかわいそうだ。おまえの、その、サルカニ合戦の、大うすのようなしりが、スミレの花の上へ、どっかと乗っては、スミレが五、六百本も押しつぶされてしまうからな」

「憎らしいひと！」

お蝶は、この人には、とてもかなわないと思うのである。本気でいっているのか、冗談にいっているのか、さっぱりわからないのだ。旅の女よりも、スミレの花をたいせつにするあたり、情のある人間にちがいない。が、つかみどころのないのが、少々うすっ気味がわるい。善人にちがいないのだが、いうことが、いちいちしゃくにさわる。悪意でいっているのでないだけに、よけいに憎らしい。

「はいはい。三尺だけさがりますよ」

しゃくにさわったから、お蝶はてのひらで寸をはかって——ひとてのひら五寸の計算で、尺取り虫みたいに、六回……つまり、五六の三尺という割り出しで、草の上をはかり、そこへ正確にしりをおろした。

「おまえのてのひらは、ひとはかり五寸か。ずいぶん大きな手だな」

左膳は、感心したように、首をふったので、また憎らしくなった。ええ、どうせ大きいですよ、とお蝶はくやしがって、

「わたしの先祖は、石川五右衛門ですもの、手の大きいのは、先祖ゆずりですよ」

ざまアみろ、どんなものだい、と、お蝶は相手が、どんな顔をするかと、皮肉な微笑を用意して見かえしてやると、

「五右衛門を先祖にもっているからには、手癖のほうも、よくないのであろう」

左膳は、すかさず言ったので、お蝶はドキリと、心臓に高波をひとつ打たせてしまった。いますったばかりの左膳の紙入れが、心臓の上に押し入れられてあったので、高鳴りした心臓が、



その紙入れにさわって——お蝶は、二重にドキリンとし、ごまかすように、言い返した。

「手癖のほうはだいじょうぶよ。左手には三味線のさお、右手にはバチ。それで両手はいつも、ふさいでいますからね」

「しかし、今は、おまえの、両手はあいている。ねがわくば、鳥追い女は、鳥追い女らしく、三味線をかかえていて、もらいたいものだ」

左膳は、なかなかに、しんらつである。

「石川五右衛門の末孫が、そばに両手をあけて、すわっていてくれては、安らかに眠ることができない。拙者これから、ひと眠りしようと思うのだが、物騒なのが、そばにいては気になっていかん」

「三味線をもっておれば、いいんでしょう」

「そうあってもらいたいと、今いったところだ」

「とってくるわ」

お蝶は、やっ……と飛んで、しゃみせんのあるところへゆき、三味線のさおをつかみ、やっ……と、もとへもどり、左膳から三尺はなれた草の上にすわると、三味線を袋の中からとり出し、ななめに構え、右手にバチを持って、

「これでいいンでしょう。これで両方の手がふさがっていますから、石川五右衛門の子孫といえども何もできませんよ」

意地になって、そう言ってやった。左膳はその姿をみると、

「よしよし、それで安心だ。鳥追い女の三味線のないのは、不動明王の、降魔の利剣となわのないようなもので、形にならん」

「不動様みたいな、こわい顔をしたかたにたとえなくっても、もっと優しいものに、たとえることできなくって」

お蝶は、抗弁めいて言った。

「優しいものというと？」

「弁財天よ」

お蝶は、あでやかに笑ってみせて、

「琵琶を、こう斜めにかまえてすわった、江の

島の弁天様という見たては、どう？」
「江の島の弁財天は、人膚弁天ともいわれて、裸形だ。そして、かの弁財天は、女性のくせに行儀がわるくて、すわりかたがよくないために、その奥に、サンゴの宝庫をのぞかせているそうじゃが、なるほど、さっきのおまえも、それをチラリとさせたから、江の島の弁財天なみというところか」
「……？」
「では、江の島のサンゴ弁財天どのよ。拙者はこれにて、一ねむりするゆえ、ゆっくりそこで、弁財天ぶりを発揮しているがよかろう」
左膳は、それだけいうと、刀をまくらにし、ごろり、お蝶へ背をむけ寝てしまった。
「……？」
お蝶には、江の島の弁財天のサンゴの意味がわからなかった。この白い浪人ふうの侍が、どういう意味で、自分を江の島の弁財天さまに似ているといったのか、

（わたしが、江の島の弁財天のように美しいから、あんなふうにほめたのであろう）
お蝶は、そう解釈をした。サンゴの宝庫というのは、わたしを上玉だとほめてくれた意味であろう……と、お蝶は、どこまでも、善意にそのことを解釈する。
そのうち、左膳は、ほんとうにぐうぐう、いびきをかいて寝入ってしまった。ゆうべの大立ちまわりのつかれが、いちじに出てきたのであろう。
「のんきな、おさむらいさん」
お蝶は、そこで、三味線の三筋の糸の調子をととのえると、つまびきに、ひくい声でうたいはじめた。

ぬれて色よき雨のフジ
そのあだ咲きも君ゆえと
姿つくろう水鏡
ゆかりの色もなかなかに



うれし縁じゃないかいな……

顔もきれいだが、声もなかなかに美しい。うたごえは、広いスミレの花の敷き物のうえをすべって、ずっとかなたへきえてゆく。左膳は、刀のさやをまくらに、あおむけにねたまま、いいきもちで寝息をたて、そのような美しい歌ごえにも、起きようとはしない。起きようとしないどころか、かえって、ぐうぐう高いびきだ。
「まあ、ひどい。ひとが、こんなにしてあげているのに……起きなくってもいいから、せめて、いい気持ちになって、きいていてくれても、よさそうなもの」
お蝶は、おこって、三すじの糸を、邪険にたかく、かきならし、

ぬしに会う夜のたのしみは
つらい勤めもなんのその
親方さんの目をしのぶ

人がそしろがどう言おが……

糸の音と、歌ごえが、高くなればなるほど、左膳のいびきも、それにつれて、高くなってゆく。まるで、糸と歌といびきの、三重奏である。まア腹のたつ、と、お蝶は、くやしがって、さらに、糸も切れよとかきならし、ありったけの声をしぼって、

ほれたが無理か恋しらず
やかましいアレあれ見さんせ
花にチョウチョウのみょうと連れ

だが、左膳のいびきは、その三味の音と、歌ごえに挑戦するかのように、ますます高く、はげしくなるばかり。さすがに、お蝶も、つかれて、まけてしまった形であった。三味線を袋のなかへしまって、ばちを帯のあいだへさしこむと、スミレの花を、ひとくき摘んで、

「なさけ知らずの、白いおさむらいさん。あんたには、歌は、馬の耳に風、ネコに小判なのね。こんないい声で聞かせてあげて、わたし、そんをしたというもの」

たちあがって、左膳の髪のうえへ、つんだスミレの花を落とすと、

「おさむらいさんも江戸でしょう、行き先は」

「……」

左膳は、相変わらず、高いびきである。いびきが、お蝶への返事なのらしい。

「わたしは、おんな足だから、あるくのがおそい。だから、おさきに失礼しますよ。あとで追いついてね」

お蝶は、相手のふところから、とるものはとってしまってあるのだから、もう心のこりはない。なんのかんのと言って、三味線をかかえ、

「寝ているのだから、見えっこはない。判官さまみたいに、飛ぶのはへただから、スミレの花を踏んで、花の外へ出よっと」

おうちゃくをかまえて、花のもうせんをふんで、向こうへゆこうとすると、左膳がいきなりどなった。

「こらっ、花を踏んではならんというのに、なぜ踏むかっ」

お蝶は、とび上がるほどびっくりして、いっさんに花敷き物の外へ駆けだしていった。

## だんご代

お蝶が、首尾よく、花の野から、逃げさってしもうと、左膳は、牛のように、のっそり起きあがり、すわりなおし、上半身をY字型に、大きなあくびを、一つして、

「おかしな女だな、あいつ」

と、お蝶のさっていったほうを見やり、

「たのみもしないのに、スミレの花を、むりをしてとび越え、拙者のそばへ来て、三味線をかきならしたり、歌をどなったり……一文にもならぬのに、ものずきな女だ。そのうえ、花をとび越え、しりもちをついたとき、とんだ花の院まで披露するのだから、ことによると、あの女は、仏のように慈悲心をもち合わしている、いいやつかもしれないぞ」

どっちがいいやつかと、左膳にきいてみたくなろうというものだ。おのれの紙入れをすられていながら、慈悲心のありそうな女だと感心する左膳である。ほとけごころは、むしろ左膳のほうにあろうに。スミレの花びらが二枚、いきなり左膳のすわっている目の前から、舞いあがった……とみえたのは、それは一ぴきのチョウで。チョウは、すぐ近くの、スミレの花にとまって、シベのおくへ、クダをのばし、みつをすいはじめた。

「ほほう……このような小さなスミレの花にも、みつがあるのかな。この小さな花の一つに、どれくらいのみつがあるのだろう」

左膳は、チョウのとまっている時間を、じっと観察する。チョウは、だいたい、一つの花に一分くらいとまって、次の花へうつる。

「蚊の涙ということばがあるが、一つの花の中に、だいたい、蚊の涙三てきぶんぐらいのみつがあるらしい」

左膳の観察は、いたってこまかい。スミレの一花の中に、蚊の涙ほどのみつが、三滴分はあるだろう、と計算したのは、なかなかの学者である。

「一つの花に、蚊のなみだ三滴ぶんのみつがあるとみて、この野いっぱいに咲いている、花からみつをとったら、おそらく二斗以上の量に達するであろう」

ふところの紙入れを盗まれても気のつかない左膳だが、スミレの花のみつの計算にかけては、すみにおけない目をもっている。

「ここで、ミツバチでも飼ったら、相当いい収入になるだろうに、惜しいことだ」

左膳は、立ちあがると、刀を腰にさして、

「チョウが、みつを吸っているのを見たら、急に空腹であることに気がついた。考えてみると、けさはめしを食っていないのだったな。チョウは花のみつを吸う、便利なクダを持っているが、人間には、それがない。不自由にできているものだ」

左膳は、何千万とさいている、スミレの花々を、目でみやりながら、そんなことをつぶやく。チョウのように、人間にもみつを吸うクダがそなわっていたら、左膳はすき腹を満たすために、腹ばいになって、一つ一つの花の、蚊のなみだ三滴ぶんのみつを吸う気でいるらしい。

「歩こう。あるいておれば、空腹も忘れるものだ。あるきながら、日輪でもかじるか。日輪の光を吸うのは、案外に腹のたしになるものだ」

左膳は、白い往来を、あおむきながら、あるいてゆく。大きな口をあけて、太陽の光を、腹いっぱいに吸って、吐き出すときには、すこしずつ、小刻みに吐く。そうすると、いかにも、太陽のなかのエネルギーが、腹のなかにたまって、いくらか空腹がみたされてゆくように思われる。左膳は、太陽の光を、口から吸って、小刻みに吐き出すと、こんどは、太陽をかじるように、あごをまえへつき出し、ガリガリとかむ。まるい太陽のふちを、かじり取るように。太陽に、なんとなく、一つの味があるようにも感じられる。

「日輪の色は、七いろだというから、味も七とおり宿っているのに違いない。七味とうがらしのように、あれほど強烈ではないが、よくかみわけ、かみしめてみると、なるほど、七つの味が感じられる」

左膳は、太陽の光を吸っておれば、十日や半月は生きていられると信じている。

「カメが、それを人間に教えてから、近来、人間が、太陽の光を吸い、かじりとることを覚え、やたらに、かじりたがる」

左膳は、世の中の人たちが、太陽をあまりかじりすぎて、太陽がへりはしまいかと、心配でも、しているようであった。カメが、人間におしえた話というのは、こうであった。ある旅人が、山道をあるいていて、大きな古井戸のような、穴へ落ちこんだ。上がろうとしたが、足がかりがなくて、どうにもならなかった。

ふつかめになると、さすがに腹がへって、がまんがならなかった。三日めには、ついに動くことさえ、たいぎであった。旅人は、そのとき、一びきのカメが、自分と同じ運命にいることに気がついた。カメも穴から出られず、食べ物もなく、ここへ落ちてから、相当の日数もたっているらしいのに、元気に動いているのが、不思議におもえた。すると、一日のうちに、ある時間だけ、この穴の底へ、太陽の光がさしこむことに気がついた。カメは、その時間をとらえて、しきりに首をのばし、太陽の光を吸っているのである。

「妙なことをする」

と、思った旅人は、カメのまねをして、腹いっぱいに太陽の光を吸い、それをかなりの回数つづけた。すると、不思議と、空腹が忘れられてきた。旅人は、カメに教えられて、それで命をつないで、八日めに、穴の上を通った狩人（かりゅうど）によってたすけ出されたという。左膳は、その話をきいて、なるほどとおもった。それ以来、腹がへると、かれは太陽の光を吸い太陽をかじることにしているのだった。雨の日や、くもりの日は、こまったが、天気のいい日は、太陽の光のありがたさを、しみじみと知らされた。

道ゆく人々は、左膳の様子をみてくすくす笑った。そして、すこし、ここが変かもしれないと、頭をゆびで、さししめしあった。太陽の光をすい、太陽の光をかじりながら、一里ばかりゆくと、橋のたもとに、くしだんごをひさぐ茶店があった。頭髪の白いばあさんが、

「だんごは、どうけ？　お茶をあがって、ゆきなされ」

と、まがった腰を、もうひとまげして、左膳へ勧誘した。太陽の光を、腹いっぱいにたくわえ、空腹をわすれていた左膳は、老婆の頭上に、あさぎ色の地にくしだんごを白抜きにした、小旗のゆれているのを見ると、トタンに腹の虫が目をさましてしまった。腹の虫という妙な虫はしまつにおえないやつで、腹のなかで目をさますと、油っけのきれた車軸のように、キュウ、キュウ鳴きだし、五体をうごかそうともしないものだ。こういう場合、車ならば、二、三滴の油をさしてやれば、車軸はきしまないし、人間は、二、三本のくしざしだんごで、腹の虫を、なだめることができる。

左膳は、だまって、茶店のしょうぎに腰をかけた。しょうぎの上に敷かれてある、花むしろの、花の模様は日にやけて、なんの花を模様に織ってあるのか、けんとうがつかない。が、左膳は、そんなことは、どうでもよかった。いまは二、三杯の番茶に、五、六本のくしだんごを食えばよいのである。

「お待ちどおさンで」

老婆は、一くしに、五つの、まるいだんごをさしたのを、十くしもさらに盛り、それをぬりのはげた盆にのせて運んできた。五くしは、あんころだんごで、五くしはきなこだんごである。左膳は、左党のほうだったから、甘いものは、どちらかといえば、好まなかったので、きなこのかかっただんごから、食べはじめた。空腹だったので、五くしのきなこだんごは、すぐくしだけになってしまった。五本のくしを、さらのすみにならべて、番茶をすすっていると、老婆が茶のお代わりをすすめるつもりで、口の欠けたどびんをさげて来て、

「ここの名物は、あんころだんごだど、おさむらいさん、このあんころのあんは、みつでつくってありますで、格別とびきりだべ」

きなこだんごを平らげて、かんじんの、あんころのほうを残しているのを、老婆はとがめるように言った。

「みつでつくった、あんか」

左膳は、さっき、スミレの原で計算した、みつのことを思い出して、

「みつはなんのみつか」

と、きいた。

「ハチミツでがす」

老婆は、ハチミツということばに、ひどく自慢のひびきをこめて、答えた。

「ハチミツはわかっているが、なんの花からとったみつか」

「なんの花からとって来たのか、ハチにきいてくられ——わしにはわからねえだよ」

「ゲンゲの花のみつとか、ほおの花のみつとか、タンポポの花のみつとか、いろいろと区別があるだろう」

「ハチは、いろんな花のみつをとって来るので、なんの花かは、いえねえでがす」

「ハチを飼っているのか、ここの家で？」

「三万びきぐらい、おるがな、かわいいもんでがす」

あんころだんごは、老婆のじまんを裏切らず、なかなか風味があって、うまかった。

「なるほど」

何がなるほどなのか、とにかく左膳はそういいながら、次々と平らげていった。

「ミツバチが三万びきか……」

だんごを食べながら、左膳はつぶやく。つぶやきながら、左膳は、さっきの、スミレの原をおもいだす。そして、あの紫の花の、大敷き物の上へ、三万びきのミツバチを放ったならば、さぞ壮観であろう……などとかんがえた。三万びきのミツバチが、豆をいるように、ぴょんぴょん飛びかい、スミレの花から、みつをあつめる。たちまちのうちに、二斗のみつがたまってゆく。二斗のみつといったら、たいしたものである。それだけのみつをあのままにしておけば、そのうち消えうせてしまうわけである。

「もったいない」
と、左膳はかんがえる。あたら天然資源を、毎年あのままにして、花をしおらせているのかとおもうと、あの花の原で、毎年、二斗のみつがむだになっているのに気づき、
「ばあさん……」
と、呼んで、左膳はそのことを教えてやろうとし、ふっと別のことが頭にうかんだので、まてよ、と老婆をよぶのをやめた。
（チョウチョウが、かわいそうだ）
左膳は、そのことに思いをいたらせたのである。三万のミツバチの大群がおしよせていったなら、あの花野を宿としている、たくさんのチョウチョウは、さぞびっくりするであろう。そして、ミツバチの大群が、花のみつを採取してしまえば、チョウチョウの吸うべきみつがなくなって、チョウチョウたちは、生活にこまるのにちがいない。中には、ミツバチの針のためにさされて、殺されるチョウチョウもいるであろう。
（それでは、チョウチョウにきのどくだ。これは、やっぱり秘密にしておくほうがよい）
左膳は、もうすこしで、チョウチョウの生活をおびやかすところだった、と、その名案を、老婆へおしえなかったことについて、きょうはたいへん、いいことをしたとおもった。
「ばあさん。だんご代は……？」
左膳は、ふところの中へ、手をさし入れ、紙入れをさぐりながら、老婆を呼んだ。
「ありがとうさまで……一くし四文でがす」
「四掛ける十くしの……四十文じゃな」
「みつをつかって、一くし四文では、もうけは、ほとんどございましねえだが、これも旅人さんへのご奉公でして」
「よい心がけじゃ。そのかわり、茶代を、よけいにはずもう」
「ありがとうございます」
「ハテ？」



「なんで、ごぜえますけ？」
「ない」
「なにか、うせものでも？」
「不思議だ」
「……？」
「おかしい。ここにないときまると、さっきの、スミレの花のところで、おとしたかな」
「スミレの花がどうかしましたンけ？」
「スミレの花からみつが二斗……いや、これは秘密事項だ。とにかく、あそこで寝ころんだからな」
左膳は、お蝶のことを、けろりと忘れている。こういう場合に、だれでも、あのあやしい鳥追い女お蝶を、一おうは、うたがってみるものだが、左膳は、うたがうということを知らない人間にできているのらしい。スミレの原で、いい気持ちになって寝ころんだ、あのとき、ふところから紙入れがすべりおちて、草の上に残してきたものだと、きめている。
「困った」
と、左膳が、いかにも、こまった顔になると、老婆は、
「ぜにないのけ？」
「おとして来たものらしい」
ひとりごとのように、言って、
「どうしたらよいかの、こういう場合には」
と、老婆へ、相談口調でたずねた。老婆のひとみは、憎しみの色に変わった。
「やいっ。白ずくめの、化けものめ！」
老婆は、まがった腰を、ぴんと伸ばし、いたけだかになって、左膳をどなりつけた。左膳は、不思議そうに、老婆をながめて、
「白ずくめの化け物……とは、拙者のことをさしていわれたのでござるか」
「あきれた、おとこ女郎めが！　おまえさまは、はじめから、無一文のくせに、でっかい顔をしくさってくしだんごを食ったのじゃろ」
「けっして、さような……」

「ばあさんひとりじゃと思うて、なめくさって、だんごの食い逃げをするつもりじゃったのやろ。このどぬすとの化け物め」

老婆はありったけの悪態を、左膳へ投げつけた。左膳は、おのれの悪いことを、じゅうぶんに悟っているから、どんなに悪態をつかれても、おころうとしない。

「すまぬ。まったく、すまぬことを、し申した」

ただ、あやまるばかりである。しかし、茶店の老婆は、左膳の、そのあやまりを、きき入れようとは、しなかった。ますます怒りをはげしくして、

「すまぬすまぬでは、そっちがようても、こっちがすまぬわい」

「いかにも、そのとおりでござる。そなたの申すことは、まったく正しゅうござる」

「あれ、このひと、感心してござっしゃる。ばあさんから、次はそなたときたね。やい。その手には乗らぬわい。だんごのお代がなければ、それにかわるものをもらいましょうかい。さ、なにをくれる」

ばあさんは、左膳から、だんご代にあたいする、何かをとらねば、承知しないという、強硬態度だった。左膳は、こまりきった顔で、しばらく考えこんでいたが、ふっと思いついたのは、スミレの花からみつをとる名案であった。

「そこで、モノは相談じゃが、拙者これより、みつを二斗とってくるが、それで勘弁してはくれぬか」

「みつを二斗？」

「ついては、そなたのミツバチ三万びきを、きょういちにち貸してもらいたい」

「ミツバチをかりて、どうするつもりじゃ」

「ここから、一里ばかりもどったところに、一面のスミレの花咲く原がある。そこへハチをつれてゆき、スミレの花からみつをとらそうという計画じゃ。二斗はとれるみこみじゃが」

「おいてくれ！　この山師め！　そんなことでごまかそうたって、ごまかされンぞ」

「ダメか」

「ダメかも、ハチの頭もあるもンけ。うちのハチには羽があるわい」

「ハチに羽がなかったら、アリとまちがえられる。もっとも、羽アリには、チャンと羽がはえてはいるが」

「うちのハチには羽があるから、一里でも、一里半でも、遠いところへとんで行くわい」

「なるほど」

「あの、スミレの原は、うちのハチのかせぎ場じゃ。毎日、朝から晩まで、あの花野まで出かけていってみつをとってきてるのじゃ。おまえさまに、わざわざハチを貸さなくても、ハチのほうから、出かけてござるわい！」

「それは、知らなかった」

左膳は、名案だと思って、ひそかに秘密にしていた、二斗のみつのある花野へは、ここのミツバチが、チャンとかせぎ場として、とうのむかしにかれらのなわ張りのなかにおさめているのを知って、いささか拍子ぬけの形で、

「ミツバチというものは、案外に利口なものでござるな。当家のミツバチは、とりわけ利口なものでござるて」

「ハチをほめたって、だんご代はただにはしませんぞ。いま、おまえさまが食った、あんころの中のみつも、あのスミレの原からとって来たもンじゃ」

「蚊のなみだ三滴ぶんずつの、みつのあつまりでつくったあんころと知っていたら、もっと、ゆっくり賞味して食するのであった」

「なにを寝ごといいくさるだ。おまえさまには、その蚊のなみだほどの銭もないのじゃろ」

「無一文！」

と、左膳は、両手をひろげ、大げさなゼスチュアをしてみせて

「まったくの、文なしでござる。この着物には、一文銭が五つ、前とうしろについているが、こ

れは定紋ゆえ、切りとるわけにも参らぬし」
「四十文がとこ、働いてもらいましょ！」
老婆は、最後の判決をいいわたす、判官さまのような口調で、いい放った。
「働く？」
左膳は、きき返した。働くということに異存はなかったのだが、どんなふうに働くのか、それがわからなかった。
「四十文がとこ、ここで、マキ割りをしてもらいましょう」
「マキ割りでござるか」
「おまえさまは、すこしくらい、剣術ができるじゃろ。その剣術のうでで、マキを割ってもらいましょうかい」
「承知つかまつった」
左膳は、しょうぎから、腰をうかした。くしだんご十個分のお代として、マキを割る。それで無銭飲食の汚名がそそげるなら、いと安いことだと、老婆の判決を、こころよく引きうけることにした。老婆は、茶店の横手へ、左膳をつれてゆくと、マキ割りのオノを左膳へわたし、
「この大きな木の輪切りを、十個だけ、マキに割ってけろ」
と、命じた。左膳は、木の輪切りを見おろしながら、
「一個、四文の労銀でござるな。しからば、茶代の分もふくめて、十五個、割り申そう」
左膳には、まだ、うまれて一度も、マキ割りというものの、経験はなかった。オノという武器は、人間を切るために作られたものでない——ということが、そもそも左膳に、かってのちがうものを覚えさせた。正眼にかまえて、えい！　と打ちおろしてみたが、オノは輪切りの木へくい込むばかりで、おあつらえむきに、パリンと二つに割れては、くれない。大上段にふりかぶって、えいっと打ちこんでみたら、パリッという音とともに、輪切りの木が、瞬間にして、消えてしまった。



「はて？」
左膳は、そのへんを、ウの目のように、いそがしく動かして、さがすのである。そして、やっと、数間はなれたところに、西と東にわかれて飛んでいる、二つに割れたマキを見つけて、もとの位置にすえるまでには、なみなみならぬ苦労をしなければ、ならなかった。
「大上段は、勢いがありすぎて、マキ割りには、うまくない」
左膳は、武術つかいだから、さすがに悟ることも早い。そこで、半分に割れた、その片方のマキを、タテにすえながら、
「これはすえ物斬りの方法でやるのが、もっともよさそうである。マキは一種のすえ物であるからな」
マキはすえ物である——という発見は、いかにも左膳らしい卓見である。そこで、オノを中上段にかまえ、えい！　と、マキの途中で、オノの勢いがとまるようにかげんをして、打ちおろすと、マキは気持ちのよいほど、パリッと二つに割れ、左右へ将棋をたおすようにたおれる。
「この調子だな。マキ割りは、つば鳴り無刀流というわけにはいかん」
さすがに武芸者である。経験はなくても、そのもののコツをのみこむのは、早い。そこで左膳は、すえ物斬りのコツで、輪切りの木を次々と割っていった。空には、雲ひとつ、浮いてはいなかった。セミが暑さを強調するように、ジイジイここかしこに、やかましく鳴く。
「あつい。マキ割りというものは暑いものである」
左膳は、額の汗をぬぐいながらつぶやく。だんご代の弁償として働くにしては、いささか暑すぎる。からだじゅうが、べっとり汗をかいて、膚着が膚にくっついて、どうにも気持ちがわるい。
「じゅばんを干そう」
左膳は、オノを輪切りの木へ、かるく打ちこ

んでおくと、大小を抜いて、それへ、もたせかけ、それから帯を解きはじめた。裸になるつもりらしい。しかし、左膳の解釈によれば、裸になるのではなくて、じゅばんをかわかす行為をなす……と、いうのであった。そのためには、じゅばんを脱がなくてはならない。裸になったのは結果であって、けっして目的ではない、と、いうのが左膳の解釈なのだ。

だから、裸になっても、けっしてあたりに対して無礼だとは思わない。左膳は、ふんどしへ、大小をさすと、ふたたびマキ割りをはじめた。

## 花賊来襲

ふんどしへ、大小の刀をさした左膳は、(治にいて乱をわすれず。武士は、いつどこから、敵襲をうけるかわからない。そのときになって、刀をさがしていては、不覚をとる。刀さえ腰にあれば、どのような不意の襲撃にたいしても、これをふせぐことができる)

という、まことにゲンシュクな、武道に生きるものの、心得をあらわしていて、さすがにりっぱであった。

(裸でいても、やはり、屋外にいるときは、刀をさしていないと、心におちつきがない。それに無腰というのは、腰がさびしくて、しゃんとしない。ふんどしの上からとはいえ、こうして二本たばさんでいると、腰がおさまるのだから、妙なものだ。江戸では、むかし銭湯へはいるのに、刀をさしてはいったやつがいたそうだが、その仁の気持ちは、わかるような気がする)

左膳という人物は、なんにでも感心するようにできているようである。いま、ふんどしへ大小をさしてみて、むかしフロのなかへ、刀をさしてはいった武士の心境がわかった、といって感心する。

(幡随院長兵衛も、水野十郎左衛門の屋敷で、刀をさして入浴していたら、あるいは、水野十



郎左衛門のために、ヤリで刺されずに、すんだかもしれない。その点、長兵衛は、うかつであった。かれは武士でなかったがゆえに、失敗したのであろう)

そうかんがえたが、また別の意味で、感心もするのだ。

(しかし、あのときの長兵衛は、死を覚悟のうえで、水野の屋敷へのり込んでいったのだと俗説にあるゆえ、そうだとすれば、フロへはいるのに、刀をさす必要はないわけで、無腰でフロをちょうだいにおよんだ長兵衛は、えらい人間だ。市井人であるがゆえに、さらにえらい。その点、感心な男だ)

やっぱり、感心してしまう左膳であった。左膳という人物は、相手の、どこかよいところを、無理してでも発見し、そのよいところにたいして、感心の首を振らなければ、気のすまない人物であるらしい。そんな感心をしているうちに、輪切りの木のころを、十本ばかり、マキに割ってしまった。だんだん、慣れてきて、オノのつかいかたもじょうずになり、マキの割れぐあいも、調子づいてくる。

「マキ割りというものは、おもしろいものだ。すくなくとも、剣術の道場にいて、竹刀をふるって、相手のお面、胴、小手、突き——などと、人間の急所を打ち込むけいこをしているよりは、有益である。竹刀で相手の頭をたたいたとて、なんにもならぬが、マキは割れば、それだけ実益になるから、意義がある」

左膳は、マキ割りに、いたく興味をおぼえ、オノをふるって、マキを割るということは、竹刀をふりまわして、相手をたたきつけることよりも、実益的であることを発見すると、だんご代のつぐないとして、こうして汗をながして働いていることに、この上もない生きがいすらおぼえるのだった。

「人生すべからく、生きることの喜びを発見して、日々を生きていかねばならぬ」

事をし、フタをするのを忘れたものらしい。

巣オケのフタをしてなければ、中のハチの巣はまる見えである。その、丸みえのハチの巣へ、一本のマキが飛んで、つき刺さったのであるから、ことはたいへんである。わッ……と、数千びきのミツバチがなかからとび出してきて、またたくうちに、この不法侵入のマキにとまり、マキは見ているうちに、ミツバチでくろくなってしまった。

「これは失敗をいたした。せっかくのハチの城へ、思わざる巨砲を打ちこんで、城の石がきへ穴をあけたことは、ハチにたいして申しわけがない。ハチよゆるせ……なんじたちの平和の夢をやぶったことをおわび申す」

左膳は、巣オケをつってある、カキの木の下へあるいてゆくと、ブンブン怒りにもえて騒いでいる、無数のミツバチへ、こころから陳謝の腰を折った。それから手をさしのばし、

「ゆるせよ。マキは撤去いたすゆえ、あとはよろしく、石がきのくずれを補修いたしておいてくれ」

と、いいながら、つきささったマキをつかんで、引っこ抜いた。とたん……、わう……ン……。まるで、小さなたつまきでも起きたかのように、巣にあけられた大穴の中から、おびただしい数のミツバチがとび出して来て、左膳の裸を急襲した。

「やっ……これは、ひどい」

左膳は、引き抜いたマキを投げすてると、ひきょうに似たれど、裸でミツバチとはたたかえぬと、いっさんに逃げだした。が、相手には羽がある。それにミツバチの飛ぶ速さは、ツバメよりも速い。左膳が、いくら剣客——いや、健脚であるといっても、ツバメよりも速いミツバチの襲撃からはのがれられるものではない。

「ひどい！　これは、ひどい！　拙者は、ミツバチの巣を、わざわざ破ろうとして、マキをとばしたのではない」

そう叫んでみたが、しかし残念ながら、ミツバチには、左膳のことばは、わからなかった。左膳は、茶店の横手から表へとび出していった。茶店の老婆が、左膳のこの異様なかっこうにびっくりして、

「ど、どうしたンけの」

と、声をかけると、左膳は往来へ走りながら、どうも、こうもない、と、手を振り、

「マキの大砲をあやまって撃ったら、地元のハチが騒ぎだしたのだ……いたッ……これは無法な」

左膳は、うしろから追いついて来た、四、五ひきのハチに、背中を刺され、おもわず、そう声をあげた。が、すぐに、くるりとふりかえって、追ってくるハチの集団へ、大声でさけんだ。

「武士の背中へ刺すとはなにごとであるか！　昔から、武士には、向こう傷はとうとい傷とされているが、背中の傷は、武士の恥とされているのを知らんか」

知らんね……ともこたえず、ハチの群れは、わ……ンと、左膳へ殺到した。

「向こう傷……向こう刺しならば、拙者とて武士じゃ、幾千針、幾万針なりとて、うけてやろうぞ……いたッ」

左膳は、胸のあたりを、チク、チク、チクと、つづけさまに刺され、もうがまんがならぬと、腰の小剣を抜きはなった。

「来い、花賊め！」

左膳は、小剣をふるって、またたくうちに、二、三十ぴきのミツバチを斬りおとしてしまった。左膳という人間は、大敵とみても、おそれないかわりに、小敵とみても、けっしてあなどらなかった。ミツバチの一ぴき一ぴきは、とるにたらない、小敵どころか、水の一滴くらいのものなのに違いなかった。しかし、無量のかたまりとなれば、これはあなどってはいられない。異国には、象をたおし、トラをもころすという、アリの群れがいるときく……われ、なんぞ、本朝のミツバチをあなどろう。

（あなどっておれば、このハチどものために刺し殺されてしまう）

そこで、左膳は、小剣で、ミツバチの群れと対決することになったのだが、相手は数かぎりのない、小まわりのきくハチであったし、こちらは、小剣いっぽんである。一ぴきを斬りおとしているうちに、別の五、六ぴきが、いっせいに左膳の膚を刺してしまうのである。

「いたッ！　この花賊め、ひとのすきへとびこんで来て刺すとは、けしからん」

一剣では、とても防ぎきれないとみて、左膳は、大刀も抜いた。二本立てである。左膳は、その二剣を、刃のほうを横にし、刀の平ったいところで、むらがって来るハチを払った。このほうが、よくハチが落ちた。顔も、十カ所ばかり刺された。胸、腕、腹、双脚……ほとんど敵襲をうけて、はれ上がっている。

「ミツバチのことを花賊ともいうそうだが、花賊とは、よくつけた名だ――えやッ」

左膳は、二剣をふりまわしながら、妙なところで、感心をする。

「花賊とは、花の中のみつをぬすみ出すハチゆえに、つけられた名であろうが……しかし、このやさしい豆蔵（まめぞう）どもは、賊としてもなかなかに強敵ではある。名まえに似あわぬ恐るべき花の賊だ」

左膳は、しかし、ミツバチの圧倒的な数には、とてもたち打ちがならぬと、断念し、

「孫子の兵法にも、退くをしらざるものは、勝ちをも知らず――とある。かくなるうえは、孫子に従うよりほかに手段はない」

左膳は、くるりと身を翻すと、ふたたび白い街道を駆け出しはじめた。ワ……ン、と、うなりごえをあげて追っかけてくる、ミツバチの大群。両刀をふりまわしながら、左膳は急飛脚のように、逃げる。この両者の、追いつ追われつの、疾風のような進行が、暑い炎天下の往還に、しばらく続いて……その間にも、左膳は、ミツバチ特攻機の針を、しばしば、からだのあちこちに受けて、もう、これ以上は、ミツバチも針を刺す場所がない、というところまで、完全に左膳へトドメを刺してしまった。

「おそるべき花賊……多勢にはかなわぬわい」

さすがに左膳は観念した。剣をふるって、たち向かっても、とうてい勝てぬ相手。また、駆けっこにしても、羽のあるミツバチの速さでは、問題にならない。

左膳は、これまでに、なにごとにおいても、負けを喫した記録は、ただの一つもなかった。が、このミツバチとの対決には、完全に敗北を喫した。小敵とみてあなどらなかった左膳であるが、このたびは惨敗だった。逃げるほどに、清い流れの川があった。碓氷川である。青い深淵（ふち）が、静まりかえって、水中から頭を出している岩の上に、セキレイが一羽、ピョン、ピョンと、尾で岩膚をたたいている。左膳は、その深

淵をみると、岸をかけおりていった。ミツバチの大群も、ワ……ンと、いっしょについておりてゆく。よほどおこっているのであろう。ミツバチが、こんなに遠くまで、人を追ってくるというのは珍しい。

左膳は、岸をかけおりながら、ちょっと、ためらった。セキレイが、せっかく岩の上であそんでいるのに、いきなり、裸の人間がとびこんでいって、セキレイをびっくりさせるのは、悪いと思ったからである。が、立ちどまって、セキレイがどこかへ、飛びたってゆくまで待っておれば、左膳のからだは、またたくうちに、ミツバチの大群につつまれてしまうであろう。いかに豪勇の左膳でも、ミツバチにからだじゅうつつまれれば、たちどころに刺しころされてしまうことは、いうまでもない。それでなくとも、左膳はもう何百針の攻撃をうけ、満身創痍である。これ以上、ミツバチの大群につつまれては、ひとたまりもあるまい。

「ゆるせ！」

と、左膳は、セキレイにむかって、大声で仁義を切った。セキレイは、その声に、おどろいて、青いふちの上を、水面すれすれに飛んで、向こうの岸の、ネコヤナギの株の中へ、消えていった。

「すまぬ」

左膳は、岩の上へとびうつり、それから、大小をすばやく、腰のさやへさすと、さかさに深いふちの中へとびこんだ。ミツバチの群れは、それを追って、水面まで舞いさがったが、白い水煙のひまつにさえぎられ、ばあっと四方へ散った。左膳は、ふちの底の石につかまって、呼吸のつづくかぎりがまんしていたが——やがて、流れのほうへ泳いで、そっと顔を上げた。ふちの水の上を、まだ、ミツバチの哨戒機が十数機、水中へもぐった浮草左膳という、けしからぬ潜水艦のうかんでくるのを、待っていた。

「いかん。まだ、あぶない」



左膳は、もう一度、水の中へ潜航した。こんどは、ネコヤナギの株のしげっている下へ泳いでいって、そこから、そっと顔をあげた。もうミツバチはいなかった。哨戒機は、あきらめて、基地へ引き返してしまったのらしい。

「やれやれ……とんだ災難であった」

左膳は、ようやく、岩の上へはいあがった。岩の上は、火のように、炎天のために熱していた。顔も、胸も、腹も、足も、ズキン、ズキンと、うずく。ハチに刺されたあとの、痛さである。左膳のからだは、坂田の金時のように、全身がまっかにはれあがり、横綱の、谷風梶之助くらいに、肥大に変わっている。

「いたい。ちくちくと痛い。ハチの針、一本一本は、それほどでもないが、何百針となると、さすがに痛い。ちりもつもれば山となり、一文銭もたまれば、万両の金となる……ミツバチの針も、数が多くなれば人を倒すか」

左膳は、悟ったように、つぶやく。この悟りも、ハチにさされたおかげであると思うと、ハチに感謝したい気持ちになる、左膳だった。

「いたい。なかなか上等に痛む。しかし、からだの手当よりも、刀の手当がだいじだ」

左膳は、ふんどしへ差した、大小のさやをぬいて、刀身を抜き出す。さやの中へ、水がはいっていては、刀身をさびさせるおそれがある。そこで、さやをさかさに振ると、水が出てくる。それから、ふんどしの、前のたれさがっている部分を、両手でしぼって、水気をとる。それで、刀身をぬぐう。刀身に水がついたままにしておくと、刀身にくもりがくる。さやも、ふんどしのたれで、きれいにふく。

「これでよし。さて、茶店の老婆が心配しているといけぬから、帰ろう。マキ割りの仕事が、あとすこし残っているはずだ」

左膳は、ハチにさされて、からだが横綱のようにはれあがっても、老婆との約束ははたす気である。だんご代のつぐないは、あくまで果た

さなくては、だんごの食い逃げの汚名を背負わされる。武士として、それはたえられぬ恥辱であると思う。大小を、ふたたび、ふんどしへ差すと、左膳は、ほこりっぽい往還へあがった。ハチにさされないところは、足の裏だけである。だから、あるくのには、それほど苦痛ではなかった。すると、向こうから、深編みがさの武士が八人、こちらへ急いでくるのと、左膳は出あった。深編みがさの武士たちは、ゆうべ、妙義山ろくの、クヌギ林の中の、左膳を、人違いで夜襲をかけた連中である。

が、左膳は、夜襲の武士たちの顔は、おぼえてはいない。夜明けまえに、八人を、クヌギにくくりつけて、そこを出発してしまったのであるから、ひとりの顔も見知ってはいないのだ。

「もし」

八人の中のひとりが、左膳へ声をかけた。左膳の顔も、からだもひどくはれあがって、すっかり人相が変わっているので、八人は、この人物がゆうべの、せいかんなつば鳴り無刀流のヒョウだとは、だれひとりとして気づかなかった。

「なんぞ、用でござるか」

左膳は、たちどまって、聞いた。八人の武士は、裸の、この大兵肥満の左膳を、まぶしそうにながめながら、

「ご貴殿は、ずっと、向こうからまいられたのでござるか」

「さよう」

左膳は、いま、水の中から上がって来たのだと、答えるのが、めんどうくさかったから、さようと答えて、すましている。

「しからば、白い衣装に、一文銭の紋をつけた武士に、お会いでは？」

八人の中の、かしらしいのが聞く。左膳は、しばらく考えていたが、

「一文銭にも、いろいろとござるでな。永楽通宝、寛永通宝、元和通宝、慶長通宝、文久永宝、それから、ただの一文銭……と、数えあげていたら、まいきょにいとまがござらんが、おのおのがたおたずねの一文銭は、そのいずれで？」

「寛永通宝を一枚、紋につけた、白ずくめの武士でござる」

「はて？　その服装ならば、どこかで見たおぼえがあるが」

「ど、どこで？」

「どこかは、はっきり覚えていない。が、たしかに、どこかで、ときどき会うように記憶いたしておる」

「ときどき？」

「さよう。しかし、どこで会ったのかは、しかと覚えていない」

左膳は、おもい出そうとして、首をかしげてみるのだが、その寛永通宝の定紋の武士と、どこで会ったかは、思い出せない。のんきな人物である。左膳は、その寛永通宝の武士が、自分であることには、いささかも気がつかないのだ。

「寛永通宝の武士については、しかとしたことはわからぬが、ただの一文銭を六枚ならべた紋どころの武士ならば……」

「なにッ。六連銭の武士？」

八人の群れに、動揺がおきた。かれらは、あきらかに、六文銭の武士をねらっているのである。寛永通宝の武士は、六連銭の武士とまちがえただけのことで、ほんとうは、六連銭の武士のことが知りたかったのであろう。

「その、六連銭の武士とは、どこで会われたか」

「三日前のことだ」

「場所は？」

「妙義山のふもとの、クヌギ林のなかだ」

「はて？」

八人は、ぽかァんとなる。三日まえに、妙義山のふもとで、六連銭の武士と会った、というこの武士が、いま妙義山のほうにむかって歩いてくる……というのが、ふにおちなかった。

「それにしては、妙では、ござらんか」

八人の中の、ひとりが言った。

「なにが妙だ」
「ご貴殿は、いま、向こうから来られた。三日まえに、妙義山ろくで、六連銭の武士にあわれたのなら……いま、ここを向こうから来られるのは、道理にあわぬが？」
「拙者は、いま、水中から出て来て、あちらの茶店までもどるところだ——つまり、もとの道を引きかえしつつあるところだ。それをきけば道理に合うことでござろう」

## 二　分　銀

八人の武士は、左膳のいうことが、さっぱりわからず、とにかく、左膳の口ぶりから、六連銭の武士が、江戸のほうへむかって、この道をとおっていった——という手がかりを得て、急に活気をみせ、
「失礼もうした」
「ごめん」
と、腰を折って、道をいそごうとすると、左膳は、わざわざ、一行の前を立ちふさいで、
「いや、こちらこそ、裸で、しつれい申した」
と、ていねいに返礼をし、そのまま、茶店のほうへ、
「いたい、いたい……ずきん、ずきんといたい。花賊あなどるべからず」
そんなことをつぶやきながら、去っていった。そのうしろ姿を見送って、深編みがさの八人は、
「なんだろう、ありゃあ」
「すこし、ここが変なのではないのか」
「とにかく、妙なやつだ」
しばらく、あきれにあきれ——それから、南へさして、足をはやめた。
左膳も左膳なら、八人の武士も、八八の武士である。ゆうべは、クヌギ林のなかで、たがいに、あれほどシノギをけずってたたかった両者なのに……。



一方は夜だったので、八人の顔はわからず、一方は、昼のあいだに、クヌギ林のなかで、相手の顔を見届けていながら、いまはハチにさされて、顔がはれあがっていたため、それとわからず、たがいに、とんちんかんな、妙な会話のやりとりだけで、なにごともなく、北と南へわかれてしもうとは……皮肉な、一種のすれちがいの人生。
一方、茶店へもどった左膳、ちょっとてれくさいおもいで、
「ばあさん……茶をくれぬか、孤軍奮闘というものは、のどのかわくものだ」
と、表から声をかけると、その声をききつけて、老婆が、まがった腰を、チョコ、チョコ揺れさせ、左膳のそばへ駆けてくるなり、
「このど気違いめ！　なんてことをしくさるンじゃ。さ、罰金、二分出せ！」
右手をまえへさし出し、どなりつけるように言うのだった。左膳は、けろりとした顔で、
「罰金とはなにか？」
「なにか、とは、なンじゃ。二分銀一枚でかんべんしてやるというのは、このばばが、ほとけを信心しているから、そのみほとけのお慈悲にあやかって、二分銀一枚に負けているのじゃ。さ、出してもらおう」
左膳のはれた顔のすぐまえで、しわだらけの、ヤツデの黄葉のような手をふった。
「拙者には、さっぱりわからぬ。いったい、なにが罰金で、なにが二分銀一枚なのか……慈悲があるのなら、わかるように、説明をねがいたい」
左膳は、すこしも動じない。老婆のいうことが、のみこめないのである。
「ぬすっとたけだけしいとは、おまえさまのことじゃ」
老婆は、おこって、そんな毒口を投げつけた。
「拙者が、泥棒でも働いたと申すのか」
「泥棒以上の悪いことじゃ。人殺し——いや、ハチころしをするとは、なにごとじゃい」

「ハチころし、とは、なにか？　そのまえに、茶をくれい」
左膳は、ハチに刺され、からだがほくほくとほめいて、熱でもあるように熱さを感じ、そのために、のどがかわいて、どうにもこまった。
「茶だと？」
「のどが、からからだ」
「おいてくれ！」
老婆は、手をふった。
「ハチころしの重罪人に、茶なんかやれるかいな。おまえさまは、うちのミツバチの巣へ、マキを突っこんでせっかくの巣をこわし、そのうえ、だいじなミツバチを何十ピキも斬りころしたのじゃ。ほんとうなら、弁償として一両くらいはもらわねばならんのじゃが、み仏のお慈悲によって、銀二分でがまんしてやろうというのじゃ。茶どころかいな、はよう、二分銀おいて、とっとと消えてなくなれ！」
「銀二分くれというのは、そのことか」
「いま、やっとわかったのか。このぼんくら侍め」
「すまぬ」
「すまぬだけではすまぬわい」
「すまぬだけでは、すまぬことは、よくわかっているが……いまの拙者として、すまぬ、とこうして頭をさげるよりほかに、術はないのじゃ」
「二分の銀粒を一つ出せば、それですむのじゃわい」
老婆は、まがった腰を、にぎりこぶしで、トントンとたたきながら、言った。
「ない」
「ないではすまんわい。さ、出してもらいたい。ハチをころした罰じゃ」
「拙者は、いま、裸一貫じゃ。銭と名のつくものは、一つも持っていない。二分銀どころか、だんご代の払いのマキすら、完全に割っていないしまつじゃ」
「おまえさまが、そこに差している短いほうの刀を、二分のかわりに、預かっておきましょうかい。だんごは、タダで食われ、ミツバチの巣はこわされ、働きざかりのハチを、何十ぴきも斬られたのじゃから、それくらいは預からせてもらわなくては……」
「これはいかん。小刀は母親にあたいするといものじゃ」
「それなら、長いほうを」
「大刀は、父親じゃ。これも預けるわけにはいかん」
「おまえさまに、父親だの、母親だの、そんな気のきいた人がいるのな」
「拙者は、木のまたから生まれた清い子ではないから、ひとなみに両親はいた。いまはいないが」
「いまはいなければ、父親じゃ、母親じゃと言って、刀をだいじにすることはなかろうに」
「いまはこの世にないゆえに、それの象徴たる、大小を父母としてだいじにするのじゃ」
左膳は、ふんどしにさした大小を、左の手でおさえて、老婆にとられまいと警戒する。
「もし……」
そのとき、さっきから、ここを通りあわして、ふと足をとめ、左膳の難儀を、いぶかしそうにながめていた、ひとりの旅の娘が、思いきって、老婆へ声をかけた。妙義村、松兵衛のむすめ、お紋であった。声をかけられてふりむいた老婆へ、お紋は言った。
「そのお金、わたしに払わさせては、いただけぬでしょうか」
「おおう。そなたは、家主どのの娘御ではないか」
左膳は、地獄で、ほとけにでもあったように、さすがに、うれしそうな顔をしてみせた。が、そのうれしそうな表情も、顔がひどくはれていたので、お紋へは通じなかった。
「やっぱり左膳さまでございましたか。さっきから、どうもおききしたようなお声だとおも

い、そこで立ちぎいておりました」
お紋は、左膳を追って来たかいがあったと、よろこんで、
「二分が、どうのこうのとききましたが、わたくしに払わせてくださいませ」
いそいで、ふところへ手をさしいれるのへ、左膳はあわてて、
「それはならん」
と、手を振った。
「すべてが、拙者のおかせる罪ゆえ、二分は拙者が」
「でも、左膳さまには、その二分が、おてもとにないご様子」
「なくても、払う」
左膳が答えると、老婆が、
「マキを二分がとこ割って、その代金としよう腹なのじゃろ」
「そのとおりだ。ばあさんは勘がよいな」
「二分がとこ、マキを割ろうと思えば、三日くらい、オノを振りずめじゃぞい」
「三日？」
「そのうえ、めしを食わさにゃならんから、めし代をふくめると、四日は働いてもらわにゃならん」
「拙者は、めしのほかに、日に酒を一、二升あてほしいが……」
「あつかましいお人じゃ。酒どころか、茶だって、上等は出せんぞい」
老婆はあきれながらも、お紋のほうへ、もう手を出している。
「おまいさんが、立てかえてくださるというのなら、お願いしましょうかね。マキを二分銀一枚がとこ割ってもらうよりも、ほんものの銀粒をひとつもらったほうがどんなにありがたいことか、しれないからね」
「ねえ、左膳さま」
と、お紋は、やさしく、左膳へいった。
「わたしに、出させてくださいな。わけは、あとでおきかせいたします。とりあえず……」
と、すばやく、銀一枚をとり出し、老婆ののひらの上に置くと、
「すまないね」
にやり笑って、老婆は頭をひとつさげ、それから、お紋へ、さらに言った。
「このおかたのあがられた、だんご代が、あとまだ、七文がとこ、残っているのじゃが」
「七文と違う」
と、左膳は、真顔で、老婆の計算を訂正した。すると、老婆も、むきになって、
「七文じゃ。七文がとこ、マキ割り仕事がのこっとるわい。違うというなら、おまえさま、残りの七文ぶんのマキを割りなされ」
と、左膳の訂正へ、すかさずはんばくをした。
「七文ではない。茶代をいれて、まだ十七文の不払いだ」
左膳は、子どものように、むきになって、老婆のはんばくを、さらに訂正した。お紋に、二分銀いちまいと、一文銭を十七枚だしてもらったおかげで、左膳は、茶店の労役から、釈放される身となった。いわば、お紋のだしてくれた、二分十七文は、左膳の身のしろ金であり、保釈金となったわけである。
「かたじけない」
左膳は、こころから、お紋へ腰を折った。これで、父たる大刀と母なる小刀のいずれかを、この茶店の老婆に、とり上げられずにすむというわけである。
「ご恩は、終生忘却いたさぬ」
よほどうれしかったのであろう、左膳は、かさねて礼を言いたした。
「ご恩だなんて、左膳さまは、ずいぶんとおもしろいことをおっしゃるのね」
お紋は、てれながら、二分銀一枚と、一文銭十七枚くらいのことで、大の男が、このように腰を折るのは、おかしいと言った。
「いや、おもしろいことを言っているのではな

い。これは正真にありがたく感じ、正銘に礼をのべているのでござる」

左膳は、ダテや冗談で、お紋へ腰を折っているのではないことをいい足し、それから、茶店の横手へまわると、さっきの、ミツバチの巣のまえにゆき、

「すまぬ。ゆるせ……マキは、はずみによって、巣を破ったのである。けっして拙者の悪意ではない」

ミツバチたちは、大穴のあいた巣のまわりを、いそがしくはいまわっていた。まだおこっているとみえて、羽音がけわしく鳴っている。左膳は、そのミツバチの群れへ、ていねいにわびの一礼をすると、マキ割り場へもどって、さっき脱ぎすてた衣服をとって、からだへひっかけた。が、ハチの針のためにはれあがった全身は、その衣服をうけつけなかった。

「いたい。これは、とても着られぬ」

左膳は、いったんひっかけた衣服を、すぐに脱いでしまった。はれあがったからだは、そよ風に吹きつけられても、痛みを覚えるくらいである。まして着物、その上へ帯をしめるなどということは、とてもできない。

「裸道中というのは、いささか世間に相すまぬ姿だが、これも災難とあきらめて……」

そこで、左膳は、着物を小さくたたんで、大刀のつかのところにくくりつけ、小刀はふんどしへ、つきさし、着物をくくりつけた大刀は肩にかついで、茶店の表へ出ると、待っているお紋へ、

「二分十七文は、いずれご返却もうすゆえ、暫時のあいだ、お貸しおき願いたい。調達できしだい、妙義の山ろくへ、飛脚をもって、おとどけ申す」

それだけ言うと、さっさっと往来へでてしまった。お紋は、あっけにとられ、しばらくの間、そのうしろ姿を見送っていたが、これもあとを追って、左膳においつき、



「わたくしは、江戸へゆくのですが、左膳さまは、これからどちらへ？」

と、きいた。道中をいっしょにしたい、お紋の腹らしい。

「どこへゆくか、拙者にはわからない」

左膳は、ひとりごとのように、答えた。お紋は、ますますあきれて、

「わからないなんて……いまは、どこに向かってあるいていなさるので？」

「どこ……といって、はっきりとしたあてはない。とにかく、足の向いているほうへ、からだを託している拙者だ」

左膳は、お紋の問いへ、明確な答えをあたえない。いや、あたえられないのである。東西南北というものを持たない左膳だ。みずから、浮草左膳といっている身には、どこから、どこへゆくという、あてなどあろうはずはないのだった。

「その足は、どちらへ向いているのですか」

お紋は、なかなかに、ひきさがらない。あくまでも、食いさがってくる。

「拙者の足の向いているほうを聞いて、なんになる？」

左膳もなかなか、ウナギのように、ぬらり、くらり、と受ける。

「わたくしと、おなじ方向でしたら、ごいっしょにおともさせていただきたいと思いまして」

「前だ」

左膳は、ぼそりと答えた。

「まえ？」

「拙者の足の向いている方角は前のほうだ、と答えたのだ」

お紋は、しかし、このわかりきった、あたりまえの返事を、うまくとらえて、

「まえでしたら、この道は中仙道ですから、このまま、ずっとゆけば、江戸にはいります。だから、左膳さまも、江戸へおゆきになられる——ということになりますのね」

「それは、わからん」
左膳は、首を振った。
「なるほど、この道は中仙道で、これをたどってゆけば江戸に達する。しかし、道は江戸に通じていても、拙者の足は、かならずしも江戸に通じはしない。これから向こう、一丁いって、あるいは右へそれるかもしれないからな……くわしいことは、拙者の足のつまさきにきいてくれ。拙者は、つま先のむく方向に従っているにすぎない」
日は、中天から、やや西のほうにかがやいて、じりじりと髪がこげるほど暑い。左膳とお紋の、こんにゃく問答は、暑さのために、クラゲのように、とけてしまって、しばらくの間は、無言の旅がつづく。五丁ばかり無言が続いてから、左膳は、ぽつんと言った。いかにも、困った顔で、
「お紋どのが江戸へゆかれると、二分十七文の返済さきも、江戸ということに相なるが、江戸は、どこへ送りとどければよいので？」
「よろしゅうございますよ。左膳さまからは二両の大金を、家賃として、いただいているのですから」
お紋はちょっとすねているふうに答えた。
「あの二両は、拙者が六連銭から預かった金だから、拙者の金ではない。支払いは支払い、借金は借金……ぜひ江戸への送金先を教えてもらいたい」
「江戸のどこに落ちつくか、いまのところわからないのです」
お紋は、わざと、すッとぼけて答えると、左膳は、いよいよ困り顔になって、
「それでは、拙者もいっしょに江戸へゆき、二分十七文の送金先を見とどけなくては相ならぬが……」
と、お紋の思うつぼにはまってきたとき、道ばたの地蔵さまの前に腰をおろして休んでいたお蝶が、



「ちょいと、裸虫のさむらいさんと、きれいなお嬢さん」

## 飛剣娘

左膳の、顔やからだが、ハチ毒のために、ひどくはれあがっていたので、お蝶には、この裸の武士がさっきの、スミレの原であった、白ずくめの意地のわるい武士だとは、すこしも気づかなかった。お蝶は、地蔵様のまえからたち上がると、左膳とお紋の立っているそばへ寄って来て、花のようなあいきょうのある顔をみせて、
「お暑いことね」
と、あいさつとも、きっかけともつかない、ごくあたりまえのことを言った。左膳は、着物をむすびつけてある大刀を、右の肩から、左の肩へうつしながら、
「暑いのは、日がかがやいているからだ。暑いのは、拙者の責任ではない」
まじめに、答えた。お蝶は出ばなをくじかれたかたちで、ちょっとの間まごついたが、そこは旅なれ人なれしている女のつよみで、ほっほほほ、と笑いにごまかして、
「おさむらいさんの責任だから、暑いのを涼しくしてくださいとお願いしているのではありませんわ」
「用事のないのに、むやみに通行人を呼びとめるものではない。拙者たち、呼びとめられずに歩いていたなら、七、八間は、もう前にむかってすすんでいるはず。つまり、そのほうに呼びとめられたおかげで、七、八間……いや、こうして話しているうちにも、十間、十一間と、そんをしてゆく」
左膳が、ふたたび歩きはじめると、お紋もそれにつれて、足をはこばす。
「ずいぶん勘定だかいおさむらいさんね。まるで、わたくしのために、たいへんなそんでもしたようにおっしゃる」

お蝶も、左膳を追って、左膳のよこにならんで、

「どこまでいらっしゃいますの」

と、聞いた。お紋と左膳の、いずれかの懐中をねらって、一仕事しようという、お蝶の腹である。地蔵さまの前で、網をはっていたら、ちょうど、いいあんばいに、この妙なはだかの武士と、ちょっとあかぬけのした娘とが通りあわせたものだから、いいカモだとばかり、なんのかんの言って、道づれになろう魂胆なのである。

「そのほうは斑猫か」

左膳は、お蝶の問いにはこたえず、そんなことをきく。

「はんみょう？」

お蝶は、また、すかされた形になって、左膳のことばをおうむにかえした。

「はんみょう……って、なあに」

「斑猫というのは、いまごろの暑い街道を、人間が歩いてゆくと、その前方を四、五間ずつ飛んで、人間が近づくと、また向こうへとんで、人間の来るのを待つ虫のことだ——それそれ、いま一ぴき飛んでいったであろう、あれだ」

左膳は、前方をゆびさし、その斑猫をお蝶へ教えてやった。斑猫は、源氏ボタルをすこし大きくしたほどの大きさの虫で、形もホタルに似ていて、とびたつと、赤、紫、緑、黄の色がとりどりに、羽の間からみえて、いかにも毒々しい感じのする虫で、事実その体内には、人をもころすという猛毒をたくわえているので、旅人はこの虫を恐れ、この虫に道案内をされると、そでおのれの鼻腔をおさえたものである。お蝶も、街道すじをうろついている女だから、この虫のことはよく知っているとみえて、いま、三人の前をとびたっていった、いっぴきの斑猫を見送ると、いそいで自分の鼻と口をそでおおいながら、

「あれは、道おしえという虫じゃありませんか」

「斑猫のことを、俗名みちおしえという」



「わたしのことを、斑猫だとおっしゃったね、おさむらいさんは」

お蝶は、すこし不服そうに、左膳をみあげた。左膳の顔ははれて、その目は象の目のように、はれた顔の奥にほそく一ノ字に描かれているので、なんとなくかわゆかった。

「斑猫——と、聞いただけだ。斑猫だと断定はしてはおらぬ」

左膳は、お蝶のことばを訂正しながら、

「斑猫でなければ、気にしなくてもよい」

「妙に、からんだことをおっしゃるのね。このおさむらいさんは」

お蝶は、すこし、むッとしてきたから、左膳へ抗議でもするような口調で、

「はんみょうでなければ……とはどういう訳ですか。わたしは、ごらんのとおり、りっぱな鳥追いですよ。はんみょうであるはずは、ないじゃありませんか。それとも、はんみょうという虫は、昔から鳥追い女に化ける術でも知っているとでもおっしゃるンですか」

「斑猫が、鳥追い女に化ける——ということはきいたことはない。しかし、鳥追い女が、はんみょうに化けることは、よくあるからな」

「さあ、しょうちできません」

お蝶は、四、五歩いそいで前へかけ出し、くるりとふり返って、左膳のゆく手を立ちふさいだ。

「鳥追い女が、はんみょうに化けた例が、どこかにあったンですか。そういうことをおっしゃるのは、あきらかに、わたしを侮辱していることになります」

これにたいして、納得のいく、明快な返答をしてくれなければ、わたしは、ここを一歩ものきませんよ——とばかりに、お蝶は左膳の前進をこばんだ。それで、しかたなく、左膳もそこに立ちどまらざるをえなくなった。お紋も、しかたなく、左膳にならんで、立ちどまった。二対一の対立が、かんかん照りの、大道のまんな

かで、おこなわれる仕儀と相なったわけである。
「鳥追い女が、はんみょうに化ける——ということは、どういうことですの」
お蝶は、三味線のさおで、左膳の胸を押しかえさんばかりにしながら、さらにもういちど聞きかえした。
「人間は、だれでも、自分のこととなると、めくらになって、わからぬものだが、そのほうも、やはりそのめくらになっているとみえる」
「なんのことです、それは……。はんみょうと、めくらと、どんなかかわりがあるンです」
「そのほうは、さっき、スミレの原で、拙者の横で三味線をひいていた」
「えっ……？」
「それから、拙者よりも先に、この道を出発したのだが、あすこの地蔵のまえで、拙者を待ちうけていた——とすれば、これすなわち斑猫的行為でなくてなんであろう」
お蝶は、さすがにあきれて、左膳のはれあがった顔や、横綱のようなからだを、みあげみおろした。そう言われて見直してみれば、なるほど、さっきの、スミレの原で、ごろんと寝ころんで、自分の歌を、高いびきで消してしまった、あのふらちな武士に、ちがいないことがわかった。
「まあ……あのときの」
「だから、そのほうは、めくらになっている、と申したのだ」
左膳は、めくらのような、ほそい目で、お蝶をみおろしながら言った。
「そのほうが斑猫だという訳は、ひとのさきに道を出発しておきながら、途中でそいつを待っているということと、斑猫には毒があるように、そのほうにも毒がある、これが斑猫に似ているところだ」
「わたしに、どんな毒があるンですか」
お蝶は、くやしがって、三味線のさおで、左膳の胸をぐいと押した。



「いたいッ」
左膳は、三尺ばかりとびさがった。ハチの針のために、すっかりはれあがっているからだは、ちょっとさわられただけでも、とび上がるほどいたいのだった。左膳は、お蝶の、第二の三味線ざおの攻撃にそなえながら、用心しいしい、
「斑猫は、飛ぶときに、いろいろの色を、そのかくされた羽の間からチラッカすが——そのほうも斑猫とおなじく、スミレの花の上を飛ぶとき、いろいろな色彩をチラッカせて拙者をなやました」
「……？」
「そして、拙者のまえで、ドスンとしりもちをついて、ひっくり返ったとき、毒けのある風を、あたりへ巻きおこし、そのさいに、チラリと花の奥をみせた。これすなわち、斑猫のとぶときの色彩と同じことで、そのうえ」
「……？」
「そのほうは、石川五右衛門の子孫だから、手癖がわるい。手癖のわるいということは、毒すべきことで、盗癖という猛毒をもっていることを意味する。これすなわち、そのほうが斑猫たるゆえんである」
左膳は、それだけ言うと、お紋をふりかえって、
「お紋どの、この女には気をつけぬといかぬぞ。なにしろ、五右衛門だからな。拙者など、このとおりの裸だから、とられるものはないが、お紋どのはやられる可能性があろうというものだ」
と、注意をあたえた。スミレの原で、お蝶から紙入れをすられたことには、すこしも気づいていない、人のいい左膳だ。
お蝶は、手癖のことをいわれたとき、すこしギクンとしたが、左膳が紙入れをすられたことを、気づいていないとみてとると、安心し、おのれの胸中の弱さをごまかすように、

「女五右衛門だなんて、ずいぶんひどいことをおっしゃるのね。あれは、ゆきがかり上、女の意地で、ちょっと、ああ言ってみただけなんですよ」

「それはよいが」

と、左膳は言った。

「みだりに、花の奥を人に開帳するものではないぞ。拙者あれをチラリと見たおかげで、縁起が悪く、かくのごときからだになってしまったぞ。あれを見た目のけがれによるバチをうけたのだ」

「わたし、おさむらいさんに、何もお見せしては、いませんわ」

お蝶は、左膳とならんであるきながら、言った。スミレの花の野で、女板額をきめこんで、花のもうせんの上をとんだとき、左膳に、なにも見せた覚えはない、お蝶だった。

「見せようと思って、開帳におよんだとすれば、そのほうは夜鷹同様だが、見せようという意志はなかったのに、もののハズミで、不覚にも開帳と相なったところに、そのほうに女らしさが、まだ残っているというものだ。そのほうは、まだまだ救われる余地のある女だ」

「そのほう、そのほう……とおっしゃらずに、あのスミレの花の敷き物の上で呼んでくださったように〝おまえ〟と、やさしい呼びかたをしてくださらない？」

お蝶は、すこし甘ったるい声になって言った。そういいながら、お紋のほうを、チラリと盗み見るお蝶だ。お蝶には、お紋が、左膳と、どういうかかわりのある女だかわからなかったから、それをさぐるためにも、甘い声になってみたのである。甘い声で、心やすそうに話せば、お紋の態度に、なんらかの変化がみえるだろう——と、お蝶は、どこまでも、ずうずうしくできている女であった。

「そうか、さっきは、おまえと呼んだかな。それでは、おまえと呼ぶことにしよう」



左膳にとっては、そのほうであろうと、おまえであろうと、この鳥追い女を呼ぶのに、どっちでもよかったのである。

「うれしい……やっぱり、おまえとよんでくださったほうが、身にしみるわ」

お蝶はそういっておいて、すばやくお紋の横顔へ視線をやった。

お紋の横顔が、びりッと、おとめらしい潔癖の線をはしらせた。はは……んと、お蝶は早くも、この娘はやいているなとみてとり、とてもゆかいになってくる。そして、もっとやかせてやれと、意地のわるい会話を、考えだす。

「さっきは、あんなところを開帳して、すンませんでした」

お蝶には、左膳のいう〝開帳〟の意味はよくわかってはいなかったのだが、わざとわかっているような顔をして、そんな相づちを打ってみたのである。

「災難とおもって、あきらめてはいるが——しかし、ああいう花の奥をチラリながめることの罪が、かくも早く罰となって、むくいきたるとは……天罰てきめんとは、古人はよく言ったものだ」

左膳は、お蝶のあのようなところを、不覚にもながめたことを、まだ悔いている様子であった。

「それで、どうして、こんなにお肥えになられたの？　さっきは、すらりとした、いいおからだだったのに」

お蝶は、左膳と、こういうふうに親しそうな話をかわすことに、お紋にたいして、ひどく優越感をおぼえるのだった。

お紋が、くちびるをかんで、うつむきながらいっしょにあるいているのが、お蝶にはたまらない楽しさであった。

「ミツバチとすもうを取ったら、こてんこてんにやられてしまったのだ。それで、こんなふうにからだがこえた」

左膳は、こたえた。
「まるで、おすもうの横綱みたいね。よくふとって」
「負けて、横綱になるなどということは、前代未聞だ」
左膳は、ひとごとのように言った。お蝶は、不審そうに、首をかしげて、
「なぜ、ミツバチと、すもうを取られたんです」
「金がなかったからだ」
「金がないと、どうしてすもうをとらなくては、ならないのですか」
お蝶は、そう反問しながら、内心、ドキリとした。左膳の、金がないのは、自分があのスミレの花野で、左膳のふところから、すばやく紙入れを抜いてしまったからだ。なんだか、そのことをあてつけて、いわれているようで、お蝶は気が気でなかった。
「金がなければ、だんご代が払えない」
左膳は、すました顔で答えた。金がなければ、だんご代は払えない、ということは、あたりまえのことを、あたりまえに答えるのは、あたりまえだ——といった顔の左膳だ。
「だんご代？」
お蝶には、さっぱり要領を得ない、左膳の答えであった。
「拙者は、茶店で、だんごを食った。だんごを食ったのは、腹がへっていたからだ。だんごは十くしくった。十くしの代金が四十文だ。その四十文を払おうとして、紙入れをさぐったが、紙入れはなかった」
「まあ……どうしたのでしょう」
お蝶は、同情の相づちを打った。せめて、そんなふうに、同情の相づちでもうたなければ、左膳に悪いみたいに思ったからである。
「紙入れがないところをみると、あの花野でおとしたものらしい。そこで拙者は、金がないというとその老婆は親切もので、それではだんご代ぶんとして、マキ割りをしてくれといった」



「ちっとも、親切じゃないと思うわ、そのばあさん」
お蝶は、お蝶らしい見解をのべた。すると左膳は、いや、さにあらず、と首をふって、
「マキ割りをすることによって、拙者のだんご代が払えるということは、まことに願ってもないありがたいことだ。マキ割りをしなければ、拙者は、だんごの食い逃げをなすことと相なる」
「ときと場合によっては、それもしかたのないことではありませんか」
お蝶は、これも、自分の責任だから、左膳を弁護してやった。しかし、左膳は、その弁護には、あまんじなかった。
「それは、いかん。武士たるものが、だんご十くしを食い逃げしたとあっては、末代までの恥だからな」
「まあ、お堅いことで。でも、そのことと、ミツバチとすもうをとる——ということと、どんなかかわりがあるのですか」
「そこで」
と、左膳は、話を続けて、
「だんご代の弁償として、マキを割っているうちに、マキが飛んで、ハチの巣をこわしてしまった。そこでハチがおこって、拙者を攻撃したので、拙者も応戦したが、けっきょくは負けて、このとおりの横綱となった」
左膳は、はれたおのれのからだを見まわしながら、続けていった。
「横綱のようにからだが肥えるのはよいが、そのために、銀二分の罰をとられた」
「二分の罰って……？」
「ハチの巣をこわした代償と、ハチを数十ひき斬り殺された損害だという。しかし無一文で、だんご代も払えぬ拙者に、その銀二分の、持ち合わせのあろうはずはない」
「どうしましょう」
お蝶は、おもわずつぶやいてしまった。自分が左膳のふところから、紙入れをすりとったた

めに、とんだことになってしまった、悔いのことばと、申しわけのないことをした、わびのつぶやきとであった。

しかし、左膳には、そういうお蝶の後悔のつぶやきは、すこしも通じない。

「なにが、どうしたというのか」

「いえ。こっちのことで」

「自分のことなら、だまっておるがよい」

「すンません」

「そこで……」

左膳は、すこし考えてから、

「銀二分の金がないために、拙者あやうく、父、母をとられようとしているところへ」

「ちち、はは」

お蝶は、いぶかしそうに、

「ちち、はは、といわれますと、おさむらいさんには、ご両親がおありなので？」

「ちち、ははというのは、この大小のことだ——あの、スミレの原で、大は父、小は母といむらいさんが、おひとり救えるのなら、わたくし毎日でも仏になりたいわ」

「毎日ほとけになられては、かなわぬ」

左膳は、まじめに答えた。

「お紋どのに、毎日ほとけになられるために、拙者が毎日、ミツバチにさされるとは、チトつらいから」

「これは、たとえていったことですわ」

「たとえならよいが、ほんとうに毎日ほとけになられては、それこそ拙者のからだがハチにさしころされて、拙者のほうが本物のホトケになってしまう」

「ほッほッほほほ……左膳さまには、冗談もいえませんのね」

お紋もつられて笑いだしてしまった。そして心の中で、このひとって、なんて、まじめ一筋のひとであろうと思った。

「そこで」

と、左膳は、おもい出したように、お蝶へ言った。

「矢立てをもっていないか」

「矢立て？」

左膳は、指のさきで、空へ字をかくまねをしてみせて、

「字をかく筆がなかにはいっている矢立てを、かしてもらいたいのだが」

「矢立ては、もっていませんが、筆なら持っています」

「拙者のかしてほしいものは、矢立てではなく、筆だ」

「なんの字をおかきになられるんですか」

「日本の字だ。外国文字は、拙者は知らぬからな」

「日本の字は、わかっていますが、どんなことにおつかいになられるンですか、その筆を」

「借用証文をかく」

「借用証文をおかきになるんでしたら、わたしの持っている筆では、ちょっとまずいンではな



う、武士の心がけについて話さなかったかな」

「きいたようでもあり、きかなかったようでもあり……」

「それはともかく」

と、左膳は、次をいそいだ。

「とにかく、この大小を二分銀のカタに押えられようとしているところへ、このお紋どのが通りあわせて、二分銀一枚と、だんご代の残り十七文とを出してくれたのだ」

左膳は、そう言って、お紋をふりかえった。お紋は、はじめて話題のなかのひととなることができたので、ちょっときげんをなおして、顔の色をあかるくした。

「いうなれば、このお紋どのこそ拙者にとっては、地獄で仏にあったような、ありがたいすくいぬしだ」

「まあ、左膳さまって、ほとけだなんて」

お紋は、あかるく笑って、

「二分銀一枚と十七文のことで、りっぱなおさ

いでしょうか」
「つべこべ申さず、あるのなら出して、かしてもらいたい」
左膳は、問答をすることをめんどうくさがる。持っているものなら、早くかしてくれればよい。なんに使おうと、どんな文字をつづろうと、こちらのかってではないか——といったふうにせっかちであった。お蝶は、もうすっかり、左膳のへんくつぶりに慣れてしまっているから、あえて逆らおうとはしない。
「はいはい、いま出しますよ」
帯の中をさぐると、小さな、長方形のつつみものをとり出し、そのつつみをあけ、ながさ二寸ばかりの筆を一本とり出して、
「どうぞ」
と、いって、左膳のまえへ、さし出した。筆のさきは、いささかまるくなっていて、いわゆる豆筆というやつで、穂先には、赤い色がついている。
「この筆は、赤い墨をつかうのであるか」
左膳は、その短い、ほそい筆をうけとりながら、お蝶へきいた。
「赤い墨なんてものは、ありませんわ。墨はむかしから黒いものと相場がきまっています」
「だから、拙者は不審をいだいて聞いているのだ」
「それは、紅ですよ」
「べに？」
お蝶は、自分のくちびるを指さきでしめして、
「ここへぬる口紅ですの。女はくちびるへべにをぬるときには、その筆にべにをつけ、それからくちびるへぬるのですよ」
「ついでに、紙を一枚くれぬか」
「借用証文をかくような紙は、もっていませんが」
「紙でさえあればなんでもよい」
「なんでも……とおっしゃられても困りますよ、どうせそんな上等は持っていないのですから」



「鼻紙でも、なんでもよい」
「気楽な、さ様」
お蝶は、笑いながら、ふところから、折りたたんだ、何枚かの紙をとり出した。
お蝶から、ふところ紙をうけとると、
「べにも出してくれ」
と、左膳は言った。
お蝶は、あきれて、
「紅で借用証文を、おかきになるんですか」
「紅であろうと、青であろうと、証文は墨でなければならぬ、というさだめはない、要は書かれてあることが、相手に通じ、それが証拠となれば、それで用が達するのだ」
物ごとにこだわらない左膳にとっては、文字は、どんな色でかいても、文字に変わりはないと考えている。赤だろうと黄だろうと、文字が読めて、それが相手へ通じさえすれば、それでよいではないかというのである。
「紅文字の借用証文なんて、おかしいと思うけど」
「拙者には、すこしも、おかしくないから、それでよい——早く出してくれ」
お蝶は、そこで、また、はいはいといって、小さな貝がらをとり出し、左膳へ手渡した。貝がらの中に、あざやかな紅が、あつく塗られてあった。左膳は、それをのぞきこみながら、
「これは、水でとかして使うのか？」
「つばでとかすんです」
「つばで？」
「筆の先につばをつけ、そのぬれた筆のさきを、貝の中の紅へつければ、紅は筆の先についてきます」
「なるほど、便利なものだな」
左膳は、教えられたとおりに、筆のさきに紅をつけ、紙へ文字をかいた。

借用証

一金　弐分拾七文也

右たしかに借用つかまつりそうろう。

無姓左膳

お紋どの

左膳は、達筆にさらさらと書きおわると、その証文を、お紋のまえへさし出して、

「お紋どの。とりあえず、さっきの借金についての証文をしたため申したゆえ、お受け取り願いたい。後日のために」

しかし、お紋はそれを受け取ろうとはしなかった。うらめしそうな表情を、左膳へみせて、

「どうして、そのようなことをあそばすのですか」

声は、ふるえていた。

「借金をして、借用証文をかくのは、当然のこととおもうが」

左膳は、不思議そうな顔をし、そういうお紋のことばへ、かえって了解しにくい様子をしてみせた。

「わたくしは、左膳さまに、お金なんか、お貸しした覚えは、ございません」

「これは異なことをうけたまわるものかな」

左膳は、ムキになって、お紋の否定をあらためさせようとした。

「さっきの茶店で、拙者が困っているとき、お紋どのが、二分銀一枚と、十七文とを、老婆へ出してくだされたのではないか。あれを、よも知らぬとは……」

「あれは、お貸ししたのとはちがいます。わたくしが、かってに出させてもらったのです。借り貸しなんて、そんなこと……」

みずくさい——と、お紋は、すねたように、首を左右へふった。

「いずれにいたしても、拙者に、あの二分十七文は、返済いたさなくてはならぬ義務がござるゆえ、とりあえず借用証文だけ、したためたしだいで」

「いりません」

お紋はおこって、左膳のさし出している証文を、手でおしかえした。それから、美しい涼しいひとみで左膳をにらんで、

「そのようにおっしゃるのでしたら、二分十七文は、いますぐ、お返し願います」

「返せと申されるか？」

左膳は、こういう話になると、すぐに武士ことばになってしまうのである。それが、お紋にはかたくるしくきこえ、しいては、みずくさいものに、とれてくるのだった。

「借用証文などおかきになられる、みずくさい左膳さまなのでしたら、あのお金は、お立て替えしておきとうは、ございません」

「これは無態な」

と、左膳は、証文を持った手を左右にふりながら、

「返せといわれても、二分十七文どころか、拙者には、ただいまは、一文の金も、持ちあわせてはい申さぬ。ないそでは振れぬが道理……ことに、いまは裸の身ゆえ、そでどころかすそをも、ひるがえすわけにはまいらぬ」

「それでしたら、証文など、お書きにならないでくださいませ」

「どうも、話のつじつまが合い申さぬ。借りた金が、すぐには返済できぬゆえ、後日の証拠に、証文をお渡しいたそうと申しているのでござる」

「証文をかかれるようなみずくさい左膳さまなら、お立て替えできません、と言っているのです」

お紋も、まけずに言いかえす。左膳はサジを投げた形で、

「さてさて、話のわからぬ娘御でござるな。いったい、どうすれば、お気にめすのでござるかな」

「あのままにうちすてておいてくだされば、それでよいのでございます。返すの返さぬの、証文のなんのとおっしゃらずに、なにごともなかったように、うちすてておいてくだされば、そ

れでよいのでございます」
「しかし、それでは、拙者の気がすまぬというものでござる」
「それが、わたしには腹がたつのでございます。わずか二分十七文のことで、りっぱなお武家さまが、気がすむもすまないも、ないではございませんか」
お紋が、そう言って、左膳をうらめしく見上げたとき、お蝶がふところから、すばやく二分銀二枚をとり出して、
「ね、左膳のさ様、その借金、わたしがお払いしておきますわ。二分十七文の借金に、四分の返済は利子にしては多すぎるけれど、こまかいのがありませんから……お紋さんとやらこれとっといてちょうだいな」
手のひらの上の、銀色にひかる小粒二つを、お紋のまえへさし出した。お紋は、くやしそうに、その二分銀二枚をしばらくの間、じっとみつめていたが、なんと思ったか、お蝶の手のひらを、下からパシッと打ちあげた。
「なにをするンです」
お蝶は、驚いて叫んだ。二分銀二枚は、下から打ち上げられて、威勢よく数間のたかさへなめにはね上がって、斑猫のように、道のかなたへ飛んだ。
「わたくし、あなたから、二分銀二枚をいただく訳はありません」
お紋は、きっぱりと言った。左膳と、たのしい道中をしている横あいからとびこんで来て、よけいなおせっかいをする、この鳥追い女に、腹がたってならない、お紋だった。
「ふン……」
お蝶は、鼻のさきであざわらって言った。
「わたしゃ、おまえさんに、二分銀二枚をあげたンじゃありませんよ」
「いま、わたくしに……といって、二分銀を二枚さし出されたじゃ、ありませんか」
「さし出しましたよ」



お蝶は、つっけんどんに、相手を小バカにしているような、口調で、
「さし出したことは、さし出したがね。それは左膳さまの、代理として、さし出したンですよ。つまりですよ。わたしが、左膳さまに二分銀二枚をお立て替えもうしあげ、それを左膳さまが、おまえさんへ、お返しする……という段どりにするのを、そんなことはめんどうくさいから、わたしから、いきなりおまえさんへ、手渡ししようとしたまでだよ。だから、あの二分銀二枚は、左膳さまから、おまえさんへお返しになる金であって、わたしが、おまえさんに上げた金ではありませんよ。考えちがいをなさっては、こまります」
お蝶は理屈っぽく、そんないいまわしをしたすえ、左膳をふりかえって、
「左膳さまの、さ様……これで借金は、きれいに、利子までつけて、お返しした勘定ですよ。ただ、このお紋さんが、強情はって受け取らなかっただけなんです。それでその借用証文は、わたしがもらっときますわ」
お蝶は、左膳のもてあましている、二分十七文の証文を、左膳の手からひきとると、それを四つにたたんで、ふところへ入れようとした。と、お紋は、パッと手をのばして、その証文をひったくり、両手で、くしゃくしゃッと丸め、
「あれ、何をするンです。その証文は、わたしのものですよ」
と、抗議するお蝶にかまわず、お紋は、丸めた証文を、
「えいっ……」
空たかく投げあげ、投げあげたかと思うと、ふところに忍ばせていた、数本の手裏剣のうちから、一本を抜き出し、
「や……っ」
気合いとともに、宙へ投げやった。手裏剣は似我蜂のように、ひゅっと飛んで、放物線をえがいて、向こうへ落ちてゆく、紙のつぶてを追

っかけ、ぷつり……とそれを刺しつらね、道のまん中へ落ちて刺さった。

「みごと！」

左膳はおもわず、ほめことばを送った。お紋に、まさか、あのような飛剣の術があるとは知らなかったから、左膳はすっかり感心してしまって、

「あっぱれの腕まえだ。どこの、なにがしについて、手裏剣をならわれた？」

と、お紋へたずねた。お紋は、別の一本を手のひらの上でもてあそび、お蝶へけん制の横目をくれながら答えた。

「わたくしは、両国のカラクリ座で、毎日これを投げていますが、百本投げて百本とも、はずれたことはありません」

お蝶は、それをきいて、思わずぶるるッと身をふるわせた。

「かるわざ師なのか、お紋どのの本業は？」

左膳は、お紋の秘芸に、まだ感心の首をふっている。いままで攻勢だったお蝶は、お紋の一本の手裏剣で、すっかり身ぶるいしてしまって、いやみなことは、かけらほども、口の端にださない。

こんどは、お紋のほうが、優勢になってきた。お紋は、道のまん中に突きささっている手裏剣を抜きとり、借用証文の紙つぶてを、道ばたへすてると、左膳へ自信のあふれる口調でこたえた。

「かるわざでも、この手裏剣投げがいちばんむずかしいとされております。一つ手もとがくるえば、相手の胸へ、短剣がささらないともかぎりませんから」

そう言って、じろりと、お蝶の視線と、こちらの視線をあわすと、お蝶は、あわてて、かち合った視線をそらした。

「これまでに、手もとがくるって、人を刺したことがあるか」

左膳は、興味がって、たずねると、お紋は首をふって、

「いいえ。ただの一度も、まちがったことはありません。でも、憎たらしい相手のばあいには、まちがったふりをして、相手の胸へ打ちこんでやりたいと思うことがあります」

「なるほど……手もとがくるったふりをして打ちこめば、罪にならずに、人が殺せるわけだな」

左膳は、いよいよ、感心して、

「それだけの腕になるには、修業が並みたいていでなかったであろうな」

「苦労しました」

「どのような修業のしかたをするのか」

「ワラ人形を、三間はなれたへいの前に立たせておいて、それにむかって、人形すれすれのところへ打ちこむのです。一年くらいやっていますと、人形に当たらず、手裏剣がきれいに人形のかたちに打ち込めるようになります——こんなふうにやるのです」

お紋は、いきなり、お蝶にむかって、えい！と気合いをいれて、一本打ちこんだ。

「あれ……っ」

お蝶は肝をつぶして、おのれの目を両手でおおい、立ちすくんだ。お紋は、それにかまわず、続けて、

「えい！　えい！　えい！」

何本でも、ふところから、手裏剣をとり出して、続けさまに、お蝶めがけて投げつけた。

お蝶は、もう泣きださんばかりにして、しゃがむこともできず、逃げることもできず、まったくのくぎづけにされて、往来のまん中で、立ち往生をしてしまった。

お紋は、十本の手裏剣を、お蝶へ投げつけると、お蝶のそばへ寄って、

「からだのどこにも、手裏剣がささらなかったでしょうね」

わざとしとやかに尋ねた。お蝶は、すっかり肝をつぶし、青ざめた顔は、よういに口がきけなかった。が、やっと、声をふるわせて、

「一本でも刺さったら、わたしおしまいになってしまいます」
「だいじょうぶ。このとおり、からだをはずれて刺さっていますから」
お紋は、ざまアみろ——とばかりに、いい気持ちになりながら、お蝶のたもとやすそやかさにささっている手裏剣を、一本一本ぬいていった。どうせ、世間しらずの小むすめだから、ひとつなぶってやれ——くらいの、いたずらっぽい、軽いきもちで、からかいにかかったお蝶なのだが、すっかり、そのあてははずれてしまった。どうして、どうして、このお紋という小娘は、したたかの術をこころえているではないか。剣をもたせれば、つば鳴り無刀流の左膳は、そこの知れない強さだが——投げ剣の術となると、左膳といえども、とてもお紋のあしもとへは寄れない。
そんなすばらしい術を心得ているお紋をあいてに、ねえさんぶりを発揮しようとして、いいところを見せにかかったのが、お蝶の失敗だった。お紋は、お蝶の衣服にささった、数本の手裏剣をぬきとると、ふところから、あさぎいろのぬのをとり出し、それに、くるくるッと、むぞうさにまいて、ふところへ、ねじこんだ。そして、なにごともなかったかのように、けろりとした顔で、
「左膳さま……参りましょう」
と、左膳をうながした。お紋のこういう人をくった態度は、ちょっと、左膳に似ている。お蝶は手裏剣のために、小穴をあけられた、たもとやすそを、うらめしそうになが めて、そこに立ったままでいた。左膳とお紋が、肩をならべて、白い街道を去ってゆくと、そのうしろ姿を見おくるだけで、あとを追おうとはしないのである。
（あんなこわい小娘って、これまでに、見たことない）
お蝶は、胸をなぜおろしながら、舌を巻く。



そして、でも、ほんとうに、からだのどこにも、あの剣がささらなくって、よかった、と思う。
（一本でも、へたにつきささったら、それでおしまいだもの）
それをおもえば、たもとやすそに穴のあいたことを喜ばなくてはならない。たもとやすそに穴があかずに、からだにあいたとしたら、一本でお陀仏だからである。
「はっはっはははは」
そのとき、お蝶のすぐ近くで、傍若無人なわらいかたをした者があった。お蝶は、その笑いは、自分のいまの、だらしなさをわらっている、あざけりの笑いであることに、すぐ気がついた。
「だれだい？」
お蝶は、すぐにあねごにもどり、笑ったやつへそう声をかけ、ふりかえった。青いムギばたけの、ムギのうねりの中から、ひとりの若い男がとび出して来て、
「だらしがねえな……いまのざまは、なんだねえ」
横びんのはげたおでこひたいの、目のギョロリとした、いかにも道中師らしいタイプの男だった。年は二十七、八というところだろう。
「なんだ、地獄虫じゃないの」
お蝶は、すこしてれながら、穴のあいたたもとを、うしろへかくすふうにした。
「地獄虫の三太に、とんだあねごのドジっぷりを見られて……これじゃ、江戸へかえっても、三太、三太って、おいらのことを、安く扱えねえというものだね」
地獄虫の三太は、そういいながら、お蝶へちかづいて来て、
「おいら、あるお侍の家来になったンだぜ」

## 紅梅染め

江戸は、駒形堂のちかくに、藤波屋敷とい

う、広い、フジの木ばかり植えられてある、古屋敷があった。首夏の候ともなれば、この四千坪の屋敷には、うすむらさきのフジの花波がゆらいで、その美しさは目を奪うばかり。藤波屋敷というのは、そこから生まれた名称だが——フジの花の季節以外は、ここは閑静で、訪れる人もない。この屋敷は、もとは、室町あたりの、さる大金もちの別荘だったのであるが、七年まえに、ここで痴情の果ての、いまわしい惨劇がおこなわれて以来、建物は無人となって、ながいあいだ、住む人影はみえなかった。

「あすこに住むと、まえの人の怨霊がたたって、やがて殺される運命へひきこまれてゆく」

江戸の人たちは、そういって、建物へはだれも寄りつかない。フジの花のきせつに、花見にやってきて、こわれかかった、フジダナの下でむしろを敷いても、けっして建物のなかへは、はいってゆかない。たたりを恐れるからだ。だから、このすきをこらした建物のなかも、いまは荒れほうだいである。まったく、もったいない話であった。これが、草深いいなかのことであれば、さっそく、狐狸妖怪の住み家——ということになるのだが、さすがは江戸のうちともなれば、狐狸妖怪だけは、住みつかなかった。そのかわり、ちかごろ、妙な武士が、このすきづくりの一室に住みついて、朝から、ひとりで、酒ばかり飲んでいる。着ている衣服は、かなり、くたびれてはいるが、品物がよいから、破れたりはしていない。

衣服についている紋は、六連銭である。一文銭を六つ、横に二列にならべた……と、こう書いてくれば、この武士が、だれであるかは、すぐに気がつくことであろう。去年の夏、妙義山のふもとの、クヌギ林のなかに、仮づくりの小屋をかけて、四、五日すんでいた、例の金払いのよかった武士であることは、いうまでもない。

真田鶴太郎……というのが、この武士の名である。六連銭の紋どころをつけていて、真田姓



をもっている——とすれば、こいつはただものでないくらいのことは、これまたすぐに悟れることであった。信州は松代、十万石、真田信濃守の若殿、真田鶴太郎……これが、この武士の肩書きであった。

——光陰は、矢のごとし。この武士が、妙義山の、クヌギ林を去って、江戸へ来てから、季節は秋にうつり、冬をこし、そして、いまは早春であった。庭には、紅梅が、ふくいくと咲きにおうている。庭の向こうは、隅田川の岸であったから、座敷にすわっていて、大川の青いちりめん波をながめることができた。川もには、しろい都鳥が、とびかっている。紅梅の花の背景に、その青い川もがあったから、まるで、紅梅の模様を散らした、青い大幅の帯をみているようである。

「もう紅梅か……早いものだ」

鶴太郎は、チビリチビリ飲みながら、松代の城内に残して来た、妻子のことを思った。

(扇子は、どうしているであろうか。友之丞は……)

鶴太郎は、松代城にのこして来た、妻の扇子と、子の友之丞の身を案じた。扇子は、ことし二十二歳であった。十七歳の春に、鶴太郎へこし入れし、十八歳の秋に友之丞を生んだのであるから、友之丞は、ことし、数えどし四つである。

(あれたちのへやのまえにも、美しい花をつける紅梅の木があった)

信州は雪がふかい。そして雪解けもおそかった。だから、春にさきがけて咲く梅の花は、一年じゅうで、いちばん印象につよくのこる花であった。遠く、吾妻山や、白根ガ岳、それに烏帽子岳の、まだ、まっしろに山をおおっている雪を背景にして、赤く色どり咲く梅の花は、信州の雪国に住むものの目に、どれほど、あたたかい思いをよみがえらせてくれることか。

(扇子も、友之丞も、あの紅梅をながめなが

ら、自分のことを思っているであろうか）

鶴太郎は、そんなことを考えると、矢もたてもたまらなく、城へ帰りたくなるのだった。が、帰心は帰心……また、別の心が、

（いま帰ってはあぶない。もうしばらく、この江戸の地に身をひそませていることだ。灯台もと暗し、真田鶴太郎の身を安全に置いてくれるところは、この藤波屋敷をおいて、ほかにはない）

松代城は、別の呼び名を「夕霧城」といった。むかし、敵の包囲をうけたこの城に、夕方になると霧が四囲よりわき出て、城をつつみかくしてくれて、作戦を有利にし、ついに敵の敗北となった——ところから、つけられた名だが……。

その夕霧城に、霧ならぬ暗雲が、ここ数年まえから漂いだしているのだった。次席家老、鳥坂源左衛門の娘お千賀が、信濃守の愛妾となって、一子をあげた——というよりは、娘のお千賀が、信濃守の子をあげたことによって、鳥坂源左衛門は、とんとん拍子に出世して、ついに次席家老の席にすわってしまった、というのが本筋。源左衛門は、娘が生んだ亀松を推し立てて、夕霧城のあとつぎとし、おのれは、それによって権力をふるおうというむほん心をおこし、信濃守のお千賀にたいする覚えのめでたいのにつけ込んで、現在のお世継ぎ、鶴太郎をおしのける、運動荷担の一味をふやしていった。

首席家老の、朽名大和は、ひとり鶴太郎を支持し、これを守ったが、鳥坂派の勢力は、すでに夕霧城の中に、クモの糸のように張りめぐらされ、へたに動こうものなら、その悪の糸にひっかかり、大和もまた、悪計のいけにえにされてしまうおそれさえあった。鶴太郎は、目にみえない、のろいの矢と、魔の弾丸と、白刃とにつけねらわれ、いくたび、危ういところで、命をとりおとすめにあったかしれなかった。

（このまま城にいたなら、自分のからだどころか、扇子や友之丞の身にも危険がおよぶ）



鶴太郎は、それを考えたから、去年の夏、夕霧城を抜け出てしまったのである。

（当分のあいだ身を隠していよう。夕霧城のゆくすえのために……）

脱城した鶴太郎には、そういう深謀があったのだった。夕霧城を脱出した鶴太郎は、鳥坂派の追跡を予測し、途中で、鳥坂派の刺客を、さきにやりすごすことを考えた。刺客に追っかけられて、不安な気持ちで旅をするよりも、その刺客を先に追いこさせ、自分は、そのあとからゆうゆうと旅をする。この方法は、あだ討ちに、つけねらわれているよりも、おのれをねらっているあだ討ちの人間の、つねにあとから、くっついてゆけば、安心して寝られる……という、あの方法に似ているわけである。そこで鶴太郎は、妙義山ろくのクヌギ林のなかに、仮の住まいをつくり、そこでしばらくくらす計画をたてた。五、六日もここに住んでおれば、鳥坂派の刺客は、ここを通りすぎて、必ず江戸のほうへゆくに違いないと、そろばんをはじいたのだ。が、五日めになって、妙な浪人が、クヌギ林のなかへはいりこんで、小用をたした。それが、左膳だった。無精ひげをはやしているが、どこからながめても、鶴太郎によく似ている……ことが、鶴太郎自身にもわかった。

そこで、鶴太郎は、考えた。

（あいつ、よきカモである）

あの浪人者に、ここの留守番をたのんでおく手がある。浪人者は、何も知らぬから、この小屋の外をうろつくに違いない——そこを、うまいぐあいに刺客たちが通りあわして、自分とまちがえてくれれば、こちらはもうけものである……と。鶴太郎という人物は、十万石の若殿に似合わぬ、たちの悪いところがあった。そのような恐ろしい事情があるとは知らず、気軽に留守番をひきうけた左膳こそいいつらの皮であった。

おかげで、左膳は、人違いの攻撃をかけら

れ、とんだ目にあったわけだが……それは、さておき。鶴太郎は、クヌギ林の小屋を左膳にあずけると、いそいで、江戸にむかって出発してしまったのである。自分の影武者に、鳥坂派の刺客が、かかりあっている間に、遁走してしまおうという戦法だ。途中で、道中師の、地獄虫の三太に、懐中の紙入れをすられようとしたが、鶴太郎は、左膳ほどのぼんくらではなかったから、反対に三太の腕をねじあげ、

「予の家来になれ」

と、言ったのである。三太は手証をおさえられているから、家来になるよりほかに、わびの手もなかったが、

「あっしは、ある女を捜しているから、その女に出あったら、江戸へ引き返します。それでお先にどうぞ江戸へおゆきください」

と、言った。三太のさがしていたのは、お蝶だった。かれらは同類で、中仙道へ出張して、道中かせぎをやっていたわけだ。三太は江戸へ帰ると、さっそく、鶴太郎を駒形の藤波屋敷へ案内した。ここなら、家賃もいらないし、だれの目にもつかないくっきょうのところだと、三太は家来になったてまえ鶴太郎の世話をはじめたのである。鶴太郎が、三太を家来にしたのも、三太に、こういう役割をさせよう腹だったのだ。

松代の城を出るとき、金はじゅうぶんに用意して来たから、鶴太郎は生活には困らなかった。三太へ、小判を預けておくと、毎日二升の酒と、食事は運んでくれる。十万石の若殿様に似ず、鶴太郎は毎日、二升酒を平らげた。飲まないときは、若殿様らしくおとなしい人物だが、飲むとやたらにリキむ癖があった。柱にぶつかっていって、えいえい、と柱とすもうをとったり、刀を抜いて、柱へ斬りつけたりする、妙な癖だ。そういう癖のわるい人物が住むには、この藤波屋敷は、まさにおあつらえむきの家であった。柱とすもうをとろうと、柱へ白刃



をくいこまそうと、だれも文句をいうものがいないからだ。三太は、鶴太郎が酔いだすと、いつの間にか姿を消してしまう、という要領を心得ていて、柱の身代わりにされるような、へまはけっしていたさなかった。

「若様」

鶴太郎は、きょうは、紅梅の花をみて、故郷の松代の城内を連想し、すこしセンチになっていたから、酒はかなり飲んでいるのだが、いっこうに酔わないでいる。三太は、そういう酔わない鶴太郎の状態をたしかめると、そっとはいって来て声をかけるのだ。若様とは呼んだものの、どこの若様なのかは、もちろん知らない。ただ、若様、若様と呼んでさえおれば、おこづかい銭には不足しないから、そう呼んでいるのにすぎない。どこの若様であろうと、そんなせんさくはどうでもよい三太だった。

「三太」

鶴太郎は、いやに、しんみりとしている。里心がつくということは、人間を、こうもしんみりさせるものなのだろうか。鶴太郎は、杯を片手に、庭の紅梅の花をみつめながら、

「紅梅が咲いたな……」

と、あたりまえのことをいう。へい……と、三太は、ぺこんと、おでこの顔を一つさげて、

「咲きましたな。それで、もうまもなく春ですね」

これも、至極あたりまえのことを答える。

「紅梅は、なぜあかいか、三太そちは知っているか」

杯をほしながら、鶴太郎は、なぞ問答みたいなことをきく。

「紅梅は、なぜあかいか——とおっしゃるんですか、若様」

「申してみよ」

「さようでございますな……紅梅は、なぜあかいか、といいますと……わかりません」

「それでよし。名答だ」

「えっ」
三太は、きょとんとした顔になる。わかりませんと答えたら、それが名答である、というなぞは、これまでにきいたことはない。
「紅梅は、名酒、白雪をのんだから、それであかくなった——などと答えたら、たたッ斬ってしまおうと考えていたのだが、すなおに、わからないと答えたから、ゆるしてつかわす」
「若様は、だいぶお酔いのようでございますな」
「紅梅はなぜあかいか……それはなんぴとにもわからぬことだ。だからわからぬと答えるのが正解というわけだ」
きょうの鶴太郎の酔いは、内攻性の酔いらしく、あばれる代わりに、妙に理くつっぽい。
「三太」
「へい」
三太は、思わず、首をカメの子のように、ちぢめる。紅梅はなぜあかいか？　の問いに、わかりませんと答えたので、無礼討ちにされるのではなかろうかと思ったからである。
「紅梅は、あのような土の中からはえて、美しい花を咲かすが——人間は、白い、きれいな顔で澄ましていても、心のなかに、黒いものを蔵しているのもいる」
「へい」
三太は、どう答えてよいかわからないから、なんでも、へいへいと頭をさげることにした。
「紅梅は、幹を切っても、幹のなかに、正しい年輪をえがいて美しいが——人間は、顔は行ないすましていても、胴を切って、その中をのぞけば、顔ほど美しくない場合もある。これを悪党とか、悪人とかいう」
「へい」
「しかし」
と、鶴太郎は、杯へついで、一口のんでから、また続ける。
「紅梅は、幹を切って、樹心をさぐることができるが、人間は、むやみに、その腹の中を切り裂いて、さぐるわけにはゆかぬから、不便だ」
「ごもっともで」
三太は、ことばを吐いた。この説には、大いに賛成しておく必要があったからだ。人間のからだを、そうむやみやたらにきり裂かれては、たまらない。
「そこで、人の心をさぐるには、刀でもってするのは適当でない——という結論に相なるのう」
「そのとおりでございますな」
「そこで、人の心をさぐるには、どういう方法が、いちばんよいか、ということになるのだが、そちは、どう考える」
「これは、むつかしい問題でございますな」
「が、わかりません、では、名答とはならんぞ」
「その人間の身辺をうかがい、つねに探査の目を光らすよりほかに……つまりですね。隠密（おんみつ）かなんかを放って、さぐらせるよりほかに手はないようで」
「名答」
「これで、名答になるんですか、なぞって、あん外に楽に解けるもンですね」
「解くのはやすいが、それを実行にうつすのは、なかなかむつかしい」
「……？」
「三太」
「へい」
「そちに頼みがある。きょうからそちは、その隠密となって、予の手先をつとめてくれ」
「どういう隠密でしょうか。これでも、ネズミのまねごとなら、すこしはできる自信があるんですが」
「そちを信じて、隠密を頼むのだが、実は……もっと近う寄れ」
「だいじょうぶですか、若様。そばへ寄ったところを、いきなり刀を抜いて、胴斬りにして、あっしの腹ん中をお調べになるんじゃ？」
三太は用心をして、すぐには近寄っていかな

い。

「そちの胴を輪切りにして、中を調べてみたところではじまらない。それよりも、生かしておいて、有効に使うほうが……」

## にわか隠密

――外桜田。このあたり、お大名の上屋敷ばかり。信州松代、真田信濃守の上屋敷は、新シ橋のそばにあって、北どなりに、亀井隠岐守やしき、南どなりに、三浦志摩守やしき、西どなりには、石川若狭守やしきがあり――静かなことといったら、まるで林のなかにいる感じだった。

「なんだか、気持ちがわるいな。こう静かでは、隠密はやりにくい。隠密というものは、雨の夜とか、風の夜がやりよいと、昔から相場がきまっているのに、これじゃ、針一ぽんおとしても、音がしそうで……」

地獄虫の三太は、黒い忍びずきんに、しのびの衣装に身をかため、あっぱれにわか隠密となって、この真田信濃守やしきへ忍びこんできたのだが――やしきのうちが、あまり静かなので、どうにも働きにくいと、こぼしている。いうまでもなく、藤波屋敷の、のんべえ若様、真田鶴太郎の依頼で、ここをさぐろうというのだ。

「ここのお殿様は、いまは、このお屋敷にはいられない。信州松代の城にいられるとのこと……しからば、いったい、ここへ忍びこんで、何をさぐるのか？　と聞いたら、ここにいる江戸家老、剣持源太夫の動静をさぐれという。するてェと……」

三太は、植えこみのなかに、身をひそめ、あたりをみまわして、

「ご家老の動静をさぐるのなら、御殿へしのび込んでもダメということに相なる。そこでご家老の屋敷は……どこか？」

三太は、植え込みのなかからはいだして、そ



こらをさがしまわる。もう、夜も十一時をすぎていたから、この屋敷を出はいりするものはいない。したがって、屋敷のうちは、ネコかなんかでないかぎり、だれも通らない。夜まわりの者が、拍子木をたたいてとおるが、これは時刻をきめてくるから、そのときだけ気をつければ、もうあとは心配いらない。

「江戸家老というのは、いちばんえらいやつだから、住まいもいちばん上等にちがいない。いちばん上等の住まいをみつけて、そこをさぐればまちがいはあるまい」

三太らしい思案である。

「ここだな、ここらしい。りっぱな構えだ。家老でなくては、これだけの住まいには、すめまい」

一軒、りっぱな構えの家をみつけて、三太は、さっそく、門わきのくぐり戸を押してみた。音もなくくぐり戸があいた。

「この時刻に、くぐり戸があくということは、来客のある証拠だ。いまどき客があるということは、客は、ここの屋敷ないの者であるということを意味する……すなわち、松代藩の家中のものが、剣持家老をたずねてきている、と考えてまちがいはない」

道中師に似合わず、三太は理づめに、ものを考える男である。江戸に在勤の、大名の家来は、かならず、その藩邸の長屋にすむことになっていたから、三太の考えは正しいのである。そのうえ、この時刻に、ほかからの来客など絶対といっていいほど、なかったから――

三太は、くぐり戸からはいると、裏手へまわった。裏手へまわり、庭へ出る。枯れたコケの上をあるくと、その下に、春の用意の、草もえのいぶきのあるのが、あしのうらにつたって感じる。ここにも、ぷう……んと、梅のにおい。夜目にも、てきれきとして白い花のみえるのは、どこかから、あかりがもれているからなのであろう。

（おおう……）

三太は、足をとどめた。家老、剣持源太夫の居間らしく、そこの障子が、あかりに白く浮きでている。

梅の花は、その障子のあかりをうけて、ほのかに、暗いなかにういてみえるのだった。

話し声がしている。低いから、梅の木のそばに立っていては、きき とることはできない。三太は、コケをふんで、縁さきへ近づいていって、すばやく、ヤモリのように、暗い影をつくっている御影石の手洗いばちのかげへ隠れた。黒ずくめの装束だから、暗いところへ隠れてしまえば、絶対に発見されることはない。耳をすます。林のように静かな中なので、耳をすませば、障子のむこうのひくい話し声は、どうにか、ききとれた。

「浅草から、駒形、蔵前、あの辺に、鶴太郎どのらしい姿を、みかけた者がいた、と申すのだな」

声にも、口調にも、貫禄があったから、これは剣持源太夫のことばにちがいない。

「あのあたりで、鶴太郎君らしいものの姿を見かけた……というものが、これで五人おりますゆえ、鶴太郎君は、すでに江戸へ来ていられて、あのあたりに隠れていられるものと考えられます」

答えているのは、家中のだれかであろう。

「世の中には、ぐうぜんということもあるが、鶴太郎どのらしいのを、五人も目撃したものがいるとすれば、これは、ぐうぜんではかたづけられまい。おそらく鶴太郎どのにちがいあるまい」

剣持源太夫の声は、はずんで、

「鶴太郎どの探査の範囲を、あすから浅草から駒形、蔵前……あのあたりに極限して、極力みつけ出すことに力をいたさなくてはならぬ」

「見つけ出したなら、お上屋敷へおつれして参るので？」



「それは困る」

と、剣持の声。

「上屋敷へつれてくるくらいならば、去年の夏いらい、われわれは心こんをかたむけて、このように捜しまわりはせぬ。発見して、つれて来ることは、かえってヤブヘビとなる」

「では？」

「斬る」

「だいじょうぶで」

「それより、道はない。つれてくれば、いやでも、鶴太郎どのは、松代十万石の跡目相続人として、われわれは、それを守らなくてはならぬ」

「……」

「斬ってしまえば、跡目ご相続人は、われわれの思うつぼのところへ持ってゆける」

「しかし、鶴太郎君には、友之丞というお子がいられますから、相続人は……」

「鶴太郎どのを斬れば、友之丞の始末など、なにほどの苦労もいらぬこと」

やろうたち、とんでもねえインボウをたくらんでいやがる。藤波屋敷の若様が、剣持源太夫の動静をさぐってこい——といったのは、こういう疑いがあったからだな……。

くらい手洗いばちのかげで、三太は胸をドキドキさせて、障子のむこうの話し声へ、耳をすませた。話しごえが、まだ続いた。

「鶴太郎どのは、しかし、なかなかの使い手ゆえ、よくよく気をつけないと、かえってやられてしまうぞ。去年の夏妙義山のふもとで失敗を喫したような、へたをくり返さぬようにしなくては」

「あれは、全くの人違いによる失策でした。相手の浪人は、つば鳴り無刀流とかいう、えたいの知れない刀術をつかいまして……あれからみれば、鶴太郎君の刀術は、たいしたことはありません」

「たいしたことはなくとも、人知れず、これを葬るということは、なかなかの仕事じゃ。鶴太

郎どのは、バカではないからな」

剣持源太夫の声は、すこし低くなった。三太は地獄耳だから、普通の人より耳はいいので、その低い声も、どうにかききとれた。

「それに、江戸づめの家中のなかにも、鶴太郎どのびいきの者も、かなりいる。それらの連中も、鶴太郎どのの失踪を知って、そのゆくさきを当地と見当をつけて、内々さがしているようだから、これまた油断はならぬ」

「もっともなことで」

「この連中の目をくらまして、鶴太郎どのをやみに葬るのは、よういならぬわざじゃ。そのうえ、国元の朽名大和が、鶴太郎どのを、じきじきにさがされるために、ちかぢか江戸に出て来られる、という知らせが、鳥坂源左衛門どのからとどいている」

「首席家老、朽名大和どのに出府されては、チト事がめんどうでございますな」

「大和に出て来られては、われわれの行動は、かなり封じられることになろう」

「そのかわり、国元において、鶴太郎君のおん子、友之丞さまを、朽名どのの留守中に、刺してしまうという手がありますな」

「まずい。それは」

「はあ」

「友之丞を刺せば、朽名大和はいよいよ用心をするし、鶴太郎どのをして、すぐにお上へ願い出て信濃守の隠居、鶴太郎どのの相続という手続きをとってしまうに違いない。だから、友之丞の始末は最後のこととして、そっとしておき、むしろ触れないでおくことだな」

「お意向よくわかりましてございます。要は、明日から、浅草、駒形、蔵前あたりを捜査範囲とさだめ、極力、鶴太郎君のお姿をもとめる…そして、その住まいをつきとめ、機会を見て襲う、ということでございますな」

「浅見十兵衛」

「はっ」



「こんどの計画の首尾さえよければ、お身は千石はまちがいあるまいぜ」

「千石……」

「不足らしい顔をいたすではないか」

「二千石はちょうだいできると、そろばんをはじいて、松代からはるばる上って参ったのですが」

「欲ばるなよ。お手並みさえよければ、一、二年のうちに、また千石の加増という手がある。いっときに二千石になっては、かえってなにか露見させることになって不利だ」

「――というような訳で、剣持源太夫という江戸家老……ありゃア、たいへんわるいやつですぜ、若様」

地獄虫の三太は、藤波屋敷へもどってくると、剣持源太夫と、浅見十兵衛との話を、鶴太郎へそのままつたえたすえ、こうつけ加えた。

「わかっている」

と、鶴太郎は、うなずいてみせて、

「わかっていればこそ、地獄虫の三太を、隠密に採用したのではないか」

「あっしの隠密ぶりも、まんざらではないでしょう、若様」

「第一回の収穫にしては、できすぎる、とほめておこう」

「若様は、信州松代の城主、真田信濃守さまの、お世継ぎだってことを知ったとき、正直のところ、あっしは驚きましたよ」

と、三太は、おでこを、ほうかんのように、ぽんとたたいて、

「六連銭の紋どころを着て、若様ということになれば、真田さまの若様ってことはだれでも考えるところなんですが……いくらなんでも、まさか、真田様のお世継ぎとは……」

「ニセ若様とでも、思っていたのであろう」

「そんなところで……」

「もっとも、本物の若様が、こんなところにご

ろごろしている——ということが、おかしいのだからな」
「さすがは、軍師、真田の系統だけあって、若様は、たいした兵法者ですね」
三太は、おせじでなく、ほんとうに感心しているようすであった。
「なにが、兵法者だ」
「若様が、松代のお城におられれば、いまごろは、刺客の手にかかって、おだぶつになっていられたかもしれませんな」
「その危険があったから、城を抜け出してきたのだ」
「脱城のことをお考えになられたところが、兵法者だとほめているんですよ。若様が城にいられないかぎり、若様のおん子の、友之丞さまですか——その友之丞さまもご安泰ですし、奥方さまも、もちろんご安泰ということになります。ここが作戦のうまさですね」
「ほめたって、扶持はやらぬぞ。しかし、予が松代にかえり、松代城を継いだあかつきには、そのほうに百石つかわそう」
「百石ですか。たった」
「百石といえば相当の武士だ。松代藩には、道中奉行というのはあるが、道中師、つまりきんちゃく切りという役めはないから、そのほうは無役だ。無役に百石はもったいないくらいだ」
「しかたがありませんね。百石にまけておきましょう。百石だって、りっぱな二本棒の武士だ。鳥追いお蝶など、そばへ寄れない、ご身分だからな」
と、いってから、三太は、たずさえてきたふろしきづつみをあけ、着物と羽織をとり出して、若様の前へ押しやった。
「あしたから、これを着て外へおいでください。六連銭の衣装であるくのは、あぶない。こいつァ兵法者らしくねえことですからね」
「なかなか、よく気のつくやつだ、隠密にもすぐれた腕をもっているが、軍師としてもりっぱ



だの、そのほうは」
「軍学の本家、真田さまの軍師ですかい、あっしが？　さすがは、若様だ。お目が高い」
地獄虫の三太は、松代城の若様鶴太郎君の隠密役から、一役軍師に昇格したので、大よろこびで、
「十万石の若様の軍師なら、あっしもたいした出世ですね。そこで若様」
と、三太は、さっそく、軍師ぶりを発揮することにした。
「なんだ」
と、若様。
三太は、ふんべつくさい顔をつくってみせて、若様へ言った。
「軍師として、一ごん、ご忠告申しあげておきたく存じます」
「意見か？」
「さようで」
「軍師に採用はしたが、ご意見番には、採用した覚えはないぞ」
「軍師というものは、ときにはご意見番になることがあります。軍師の権限は、昔からなかなかひろいものです」
三太は、しっかりしゃべる男だ。若様はわらって、
「きんちゃく切りにしては、頭がいいな、そのほう」
「きんちゃく切りは、もう廃業したのですから、そうおやすく、きんちゃく切りだの道中師だのと、呼ばないでくださいよ。いまは、十万石の軍師なんですからね」
三太は、三太なりに、軍師顔をしてみせるのだ。
「わかった。軍師として迎えたからには、軍師のいうことを、一応きくことにしよう。むかし、文王というシナの大王が、大公望を軍師にむかえるとき、おまえのいうことは、なんでもきく、といって交渉したそうだから、予もそれ

にならうことにしよう」
「大公望ってのは、つりの名人でしょう。若様……が、あっしには、つりはできません」
「そのほうのつりは、大公望はだしだ」
「はて？」
「大公望は、川へ糸をたれて、たまに魚をつり上げるのだが、三太のつりは、あッという瞬間につり上げてしまう。しかも、一度に、十両でも、二十両でもつり上げる。大公望の比ではない」
「あっしは、そんなに、つりはじょうずではありませんよ」
「そのほうのつりは、さおも糸もいらぬ。コレ一つあればよい」
若様は、右手の人さし指を折り曲げてみせた。三太はくさって、
「そいつは、廃業したンですから、もう言いっこなしですよ、若様……十万石の若様の軍師が、そのむかし、コレ（指をまげてみせて）だったとわかっては、うまくありませんからね。若様の恥になりますから、コレの話は以後、禁句にねがいます」
「そのほうは、蜂須賀小六の心境のわかる人間だ。小六もまた大名になってから、往年の野盗がしらであったことを悔いたというからな。ところで、どんな意見をするつもりだ」
「今後、若様には、酒をおつつしみくださいと申し上げたいのです。すこしぐらいの酒はよいが、大酒、深酒はおやめください。そうでないと、十万石を棒にふるような事態がおきますからね」

## からくり座

両国広小路には、いろんな見せ物小屋が、軒をならべている。そのなかでも、からくり座というのが、もっとも人気をあつめていた。からくり座というのは、いろんな、からくりをならべたうえ、ぼうけん軽わざを最後にみせてくれるので、どこの小屋よりも、見物人を満足させた。

ここには、七化け鏡というのがあった。ほんとうの呼び名は、七面鏡というのであって、七ツ並べられた鏡に、見物人が、それぞれ自分の顔をうつしてみる……というだけの、きわめてたあいのないものであるが、それが意外の人気を博したというのは、一つ一つの鏡の面がちがっていて、それへ映る人間の顔は——第一面は、物すごい巨人の顔に映れば、第二面は、これまた、豆粒ほどの小ささに映る。かと思うと、第三面は、顔がさかさにうつり、第四面はひし形に、第五面は四角で、六面は長面王も三舎をさけるかと思うばかりに、顔がながく伸び、第七面は、反対に、三日月に目鼻をつけたように、平たい顔にうつる。おのれの顔の変化に、抱腹絶倒して笑いこけ、この七化け鏡の魔術に、さんざんほんろうされ、

——バカなこと、もうこのうえは七鏡、おのが姿を銭だしてみる。とさえ諷しられても、見物人は終日、鏡のまえから絶えなかった。七化け鏡に、さんざん腹をかかえた見物人は、そこで笑いの総じまいをすると、つぎにスリルを味わいに、からくり仕掛けの、幽霊人形、化け物人形、妖怪人形の恐怖をあじわいにゆく。

これにも、いろんなくふうと仕かけがあって、見物人はけっこうたのしんだが、なんといっても、この小屋の人気の中心は、

——お紋、道化左太郎の、コンビになる、投げ剣の軽わざであった。

これは、たいへんなぼうけんで、お紋という娘が、綱に乗って、大きくゆれながら、舞台へブランコが近づいたとき、投げ剣をするのだが、舞台の板の前に立っている、道化姿の左太郎のからだすれすれにとんで、それがうまく人間の形にささって、一本もあやまらないというから、見物人は、ヒヤヒヤしながら、そのスリルをよろこぶのであった。

お紋は、以前から投げ剣術は名人の域を出ていた。去年の夏、相棒の左太郎という道化をひっぱって来てから、道化左太郎とコンビでなくては、秘芸はできないまでになっている。左太郎は、お紋のために、道化師になっているが、べつだん、芸人というわけのものではなかった。左太郎は、りっぱな武士だ。このからくり座へ、お紋につれられてくるまでは、

「拙者の名は左膳という」

と、人にこたえていたのである。そのりっぱな左膳が、なぜ道化師になったのか——というと、そのわけは、こうである。いつか、左膳は、お紋に二分十七文の借金をした。その借金をかえすために、からくり座で、お紋の芸の手だすけを申し出て、みずから、道化師の役を買って出たのだった。

お紋の相手役たる、道化師を買って出た左膳は、名を、

——左太郎、

と改めた。

左膳の左を一字とって、いかにも道化師らしい、かるい名にしたのである。はじめは、お紋にたてかえてもらった、二分十七文の借金を支払うかわりに、二分十七文がとこ、働くつもりで、道化師になった左膳だったが、一、二回、道化師として舞台へ出ているうちに、この道化師という仕事に、すっかり興味をおぼえ、

「武士よりも、このほうが、はるかに生きがいをおぼえる。道化師という仕事は、どうやら拙者の性にあいそうだから、当分はこれをやってくらしてゆく」

左膳の左太郎は、そう言って、道化師としてくらすことに、この上もない喜びを見いだし、道化師として生きてゆくことに、いささかの恥ずかしさをも感じなかった。

「顔を、お道化にぬりかえて舞台へでていると、世界がべつのものに見えるからおもしろい。武士としての左膳の目でみるのではなく、道化師としての、左太郎の目でみるから、これまでに感じなかった、いろいろな新しい感じが味わえてたのしい」

と、左膳の左太郎は、述懐をもらすのである。まず、道化師は、見物人のごきげんをとらなくてはならない。ごきげんをとるために、みずから道化なければいけない。武士というものは、人に頭をさげることを知らない人間の慣らいだから、肩をいからし、そりかえっている。肩をいからし、そり返っておるから、目の位置は、つねに高所にある。だから、人を見くだしてばかりいる。しかし、道化師は、見物人のごきげんをとるのが仕事だから、いつでも身をかがめ、おじぎばかりしている。したがって、目は低いところについている。高きに目をつけて、世間を見るのと、低きに目をおいて、世間をみるのと、

「かくも、このように、同じものが違ってみえるとは、この年になるまで知らなかった」

左膳は、道化師の化粧を、いつでもお紋に、やってもらっている。無器用な左膳には、自分で化粧をする、というような、そんな器用なことは、幾日たってもできなかった。おしろいを、顔にぬってもらいながら、左膳が、しみじみとした口調で、そんなことをいうと、お紋は、軽わざ師の姿で、左膳へメーキャップをほどこしながら、

「左膳さまって、ずいぶん、むずかしい理屈ばかりおっしゃるのですね。道化というものは、りくつなんかいうものではありません。ただ、お客さまを笑わせておれば、それでいいのですよ。こんなに、りくつっぽい道化師って、これまでに、やとったことありません」

と、笑う。すると、左膳は、卵に目鼻をつけたような、お道化顔をかしげて、

「道化師は、りくつを言っては、いけないかの」

「道化師は、おどけてだけおればいいンですよ」

「それでは、ただいまかぎり、りくつはやめよ

う。そして、お道化に専念するとしよう」

自分でない、自分――という自分が、この世にある。一つは、鏡にうつる、おのれの姿だ。鏡の中にうつる、自分のすがたに接して、人は自分でない、自分が、そこにあるのを知る。いいかえれば、鏡にうつる自分の姿は、第二の自分である。自分である他人――といってもよい。鏡の中の姿は、実体ではない。第二の自分だ。

もう一つの、自分でないところの自分は、舞台における、俳優としての姿である。これまた、実体は自分であって、俳優としての姿は、他人なのだ。別の自分である。つまりは、第二の自分である。道化師もまた、俳優の一つであるから、左膳の左太郎は、第二の自分の姿と、ほんとうの自分とを、毎日、数回くりかえして、

「拙者は、いったい、どっちなのであろうか」

と、ときおり、考えることがある。武士としての左膳が本領なのか、道化師としての左太郎が本姿なのか。

「どうにも、わからない」

ときがある。舞台へ出て、道化師として、べこべこおじぎを百万べんもくりかえし、さて、楽屋へひきあげてくると、舞台のくせがついて、つい、だれにでも、べこべこおじぎをしてしまう。すると、お紋に、

「左膳さま。おじぎの安うりは、あまりみっともよくありませんから、おやめくださいな」

と、たしなめられる。武士のくせに、楽屋のつまらないやつらにまで、おじぎするのは、あまり、いい図のものでない――という、お紋の意見なのだ。

「おじぎの安うりは、いけぬかのう。それでは、以後、気をつけるであろう」

左膳は、お紋の意見を、すなおにきき入れ、武士本来のありかたにもどって、おじぎはあまりしないように気をつけ、道化師のおしろいや、墨をおとしたときは、腰に小刀をチャンと差し、大刀はかたわらに置いて、武士らしく、



威厳をたもつ。ところが、次の日に、舞台へ出ると、武士の威厳くせが出て、肩を張った、腰のしっかりした道化師になって、

「さむらいじゃあるめえし、なんだッ、そのいばった、お道化役者は？」

と、客席から声がかかり、左膳はあわてて、道化師の左太郎にもどり、いそいで、ぺこぺこおじぎをし、こっけいな動作をし、お客さまのきげんをとるのである。とあとで、楽屋へひっこんでから、お紋に、またしかられる。

「左膳さま。あんなお道化ってありませんわ。あれでは、おさむらいさんです。お道化は、もっとおじぎをしなくては」

「むずかしい」

と、左膳は、人生をふたとおりにつかいわけてくらすことの、むずかしさを、しみじみと悟るのだった。そして、最後に到達した、さとりの境地は、

（一つの人生ですら、なかなかに生かしてくらせないのに、二つの人生を生きようなどということは、とうていできるわざではない。ゆえに、今後は、一つの人生にのみ生きることに専念すべきである）

――一つの人生。それは、道化師として生きることであった。

――道化師として生きん。

かく悟った左膳の左太郎は、それ以後は、舞台であろうと楽屋であろうと、小屋の外であろうと、徹底した道化ぶりを発揮した。

まず、腰にさすべき、大小二本をすててしまった。大小をすてるということは、武士をすてることであった。

――道化ひとすじに生きん。

左膳の左太郎は、まるで悲願でもたてるように、道化になることに、専念した。

（この小屋の中でくらす以上は、遊んでいることは、ゆるされない。働いてこそ、この小屋でくらすことを、ゆるされるのだ。ここで働くと

すれば、拙者は、お紋の相手をして、道化をつとめるよりほかに、道はない。道化をつとめる以上は、道化に徹するよりほかに生きる道なし）

わかりきったことではあるが、これを悟り、これに徹するのは、なかなかに、むつかしいことであった。たいていのものなら、武士という農工商の上に立つ階級に慣れると大小をすてて、芸人になりさがるということは、できないものである。まして、芸人のなかでも、最下級の、いつも、見物人に笑われ、軽視されていなければならぬ、道化師に徹するなどということは、できるものではなかった。東も西も南も北もない、浮き草の身の、風のふくがままに、身を流浪の旅にまかせ、そこに、なんの欲心も、野望もない左膳なればこそ、

——道化に生くべきとき。

と、さとれば、それになりきれるのであって、禄高をのぞみ加増を夢みる、俗世の武士には、とうていまねられうることではなかった。

もっとも、左膳という人物は、もともとから、いくらか道化じみたところのある人物であったから、からくり座へはいってからでも、すぐに道化師としての悟りが、ひらけたのかもしれない。六連銭の武士に、クヌギ林の小屋のるす番をたのまれれば、平気でひきうけもするし、だんご代がなければ、裸になって、なんの恥ずかしさも覚えず、マキ割りをするのだから……。

……さて、作者が、左膳の道化師としての心のありかたを、ながながと述べているうちに、舞台では、チョンチョンチョンと柝が鳴って、お紋の軽わざが、はじまったようであるから、筆をお紋と、左膳の左太郎の名演技のほうへ、うつさなくてはならない。客席の上空に、ながいブランコが、つりさげられてあって、お紋が軽わざ師の姿で、そのブランコに乗って、大きくゆれている。職業美——というものは、たしかにある。百姓の娘は、田の中で早苗をうえている姿が、なによりも美しいし、鳥追い女は、



三味線をかかえて、門づけをしている時が、いちばんうつくしいように、軽わざ娘はブランコに乗って、冒険をしている時が、もっとも魅力的である。お紋もまた、空中でブランコを動かしている時が、なによりも美しい存在であった。そして、ブランコが舞台へ、ひゅ……ッと近づいたとき、

「えいっ、えいっ、えいっ」

と、続けさまに、短剣を投げる時のスタイルは圧巻で、このときほど、観客が、わ……ッと騒ぐのは、ほかになかった。左膳の道化師すがたは、西洋式で、いわゆるピエロというやつであった。左膳の生きた安政のこのごろでは、西洋式のこういうふん装が、江戸の人たちの間へ、かなり迎えいれられた。

西洋式の、いわゆるピエロの姿は、こっけいをあらわすふん装としては、なかなかよく考えられたもので、道化師が、この姿で舞台へあらわれただけで、客はもう、おかしがって、腹をかかえて、わらいにこけてしもう。

左膳は、剣の達人であり、北辰一刀流の奥義をきわめたうえに、つば鳴り無刀流という、私流の剣法まで創作している——という器用人だが、道化役となると、まるッきりへたくそである。

客を笑わそうとして、教えられたこっけいな演技をするのだが、どうにも、それはへたくそで、おかしくてたまらない。ところが、そのへたくそで、おかしいこと、それ自体がまた、客に大受けに受けるのであったから物ごとというのは、よくできたもので、

「左太郎のお道化は、いかにもお道化らしくて、これまでにない、上できのお道化だ」

と、見物人は、ほめそやした。つまり、左膳の左太郎の道化師ぶりは、天衣無縫だというのである。道化師は、だいたいにおいて、おかしなものなのである。そのおかしい道化師を、ぎこちなく、へたくそにやるから、さらにおかし

さが倍加するのだ。いうなれば、左膳は道化師という天与の芸人になったことによって、大成功をおさめたのであって、これが、役者になったとしたら、一挙手、一投足ごとに、「大根ッ」という声が投げられていたであろう。が、さいわいなことに、道化師という役めは、その、「大根」であることが、——つまり、失敗することが、とうといのであったから、演技を失敗すればするほど、役が光るのだ。左膳はうまくそのツボにはまったわけである。

さて、左膳の道化師は、舞台に立って、身ぶり、手ぶりよろしく、いや、よろしからず、客にむかって、お紋という軽わざ娘が、いかに投げ剣の名人であるかを、武士ことばと、道化た口調とのちゃんぽんにした調子でしゃべると、いよいよ、ブランコのお紋にむかって、おどけたしぐさをはじめるのである。まず、お紋が、ブランコに乗って、舞台の上までとんでくると、道化の左膳は、下からそれを見上げて、のぞくようなかっこうをしてみせる。娘のお紋は、

——いやな、道化さん。

と、いったぜスチュアをし、ブランコは向こうへ飛んでもどる。道化の左膳は、それをおもしろがって、手をたたく。ブランコが、またとんでくる。道化が下からのぞきこむ。お紋がおこって、

「えいっ」

と、手裏剣を投げつける。道化がびっくりして、うしろへとびさがる。ブランコが再びもどって来て、手裏剣がとぶ。道化が、びっくりして、またうしろへとびさがる。

「えいっ、えいっ、えいっ」

お紋が続けさまに、手裏剣をとばして——道化を、ついに舞台の正面に立てかけてある、はば七尺高さ二間の大だてへ押しつけてしまい、そのまわりへ、数十本の手裏剣を打ちこんで、道化をして、悲鳴を上げさせる。手裏剣なげの場合は、板のまえに立つ人物は、たいていは、



大の字になるのだが、左膳の道化は、大の字にはならず、両手も、両足も、ゆがんだ姿勢をとるので、それがまた、おかしい、とあって、見物には受けるのだった。大の字に、正しい姿勢で板の前に立っておれば、手裏剣をうちこむお紋も、打ちこみやすいことはいうまでもなかった。左膳のように、一回一回その姿勢が、だらしなく違っていては、したがって、打ちこむ調子もくるってくるから、やりにくいこと、おびただしい。

が、そこを、さすがはお紋、一度も手もとをくるわすことなく、みごとに打ちこんでゆくので、お紋の評判は、いよいよ高くなるばかりだった。

「どうです若様」

地獄虫の三太は、真田鶴太郎をつれて、きょうは軽わざ見物と出掛け、ふたりは、客席の最後部に立って見物していた。鶴太郎は、軍師三太の忠告によって、白ずきんをかむっている。衣服も、きょうは六連銭の紋のついたのを、着てはいない。みんな、軍師三太の配慮によるところであった。

「いい女でしょう、あの軽わざの娘は……名をお紋といって、いま両国では、いちばんの人気をもっている娘ですよ」

三太は、鶴太郎へ、お紋の人気をふいちょうするのだが、鶴太郎には、ひとあしお先に、お紋を知っているので、三太のふいちょうも、いささか拍子ぬけの形であった。

「女というものは、変わるものだ」

鶴太郎は、ブランコの上のお紋をみあげながら、しみじみとした口調でいう。三太は、きょとんとした顔で、

「なにが、かわるンですか」

「いなかにいるときと、都へ出て半年もくらしたあとでは、ああも変わるものかと、予は感心しているのだ」

「知っていなさるンですか」

「あれは、かつての、予の大家の娘だ」
「若様も、借家にすんだ経験が、おありになるんですかい。こいつァおどろ木、桃の木、さんしょの木だ」
「妙義山のふもとの、クヌギ林のなかに、家をたててもらって、予はそこでくらしたことがあるが、そのおり、あの娘が、予のもとへ三度の食事をはこンでくれた」
「知ってるンですか。若様も、まったくすみにはおけませんね」
「だから、日本の中央、江戸へ出てきたのだ」
この若様、なかなかユーモアを解するご仁である。三太は、それで、すっかり、うれしくなってしまって、
「知ってるンでしたら、これがすんだら、楽屋へいってみましょうよ」
「行って、なんになる」
「両国一の人気娘を知りあいに持っていながら、楽屋訪問をしないなんて、男として、礼儀をかくことですよ」
「知り合いの娘の楽屋をたずねないと、礼にもとるというのか」
「どうも、若様は、女の子に気がないから、話になりませんよ。このごろの江戸の男ときたら、ちょっとしたとばッちり程度の知りあいでも、ずうずうしく押しかけてゆくのに……まったく、もったいないことですよ」
ブランコのお紋が、つぎつぎに手裏剣をなげ、全部の剣をなげおわると、——ブランコから、舞台へひらりと飛びおり、道化師に近づいて、その手をとって、舞台の中央へ引き出してやる。道化師は、剣のために、自分のからだがくぎづけにされているものだと思っていたのに、なんのこともなく、すぼりとからだが板のまえから抜け出たので、びっくりし、自分のからだをあらためて見、狂喜する。そのよろこぶ様がおかしいので、客席から、やんやの拍手が起きる。お紋と道化師は、その拍手に満足の礼



をかえして、舞台の下手へ消えてゆく。
「若様、ゆきましょう」
軍師の三太は、鶴太郎をさそって、人ごみのなかを縫って、小屋の裏手へまわった。舞台の裏には、いろんな道具がころがっている。小暗いから、うっかりすると、それらの道具につまずいて、こけそうである。
「お紋さん。お客さんだぜ」
三太が、アイ染めのノレンをかきわけ、首だけその間から出して、へやのなかの、いまもどって来たばかりのお紋へ言った。
「おまえさんは、だれだえ」
お紋は、軽わざ衣装を解きにかかった手をやすめ、ふりかえるといった。左膳は道化姿のまま、木箱に腰をかけ、ぼかンとして、へやの出入り口をながめている。
「こいつァごあいさつだね。あっしァ地獄虫の三太って、両国では、すこしは売れた顔ですぜ」
「そんな顔は、いっこうに知りませんね」
お紋は、相手になる気がないらしく、それっきりにして、衣装を解こうとすると、
「若様」
と、三太は、鶴太郎を、ノレンの内へひっぱりこんで、
「大家さんの娘ですよ」
と、へやのうちへ、押しやり、自分もはいっていって、お紋へ、
「どうだねお紋さん。なつかしい人だろう」
と、鶴太郎を、ひきあわせた。お紋は、衣装の手を、またやすめて、鶴太郎をふりかえったが、鶴太郎が、白ずきんをしているので顔がわからず、
「どなた？」
けげんそうにすると、
「わからぬかな」
と、鶴太郎。
そのあとへ、三太が、
「妙義山のふもとの、クヌギ林を、まずおもい

## 道化ずきん

「あのときの、六……六……六レンセンの若様には、ちがいないが、その、六……六……六レンセンはかたく禁句にねがいます」

三太は、ノレンのそとを、ちょっとのぞいてみて、お紋が吐いた、六連銭ということばをだれかが立ちぎいていなかったかを、たしかめた。小道具係のおやじがひとり、胸にいっぱい何枚かの色どりも美しい花がさをかかえて、通りすぎただけで、このへやの外には、ほかに、だれの姿もなかった。

「それで」

と、お紋は、迷惑そうな表情をみせて、三太へ聞いた。

「このおかたが、あのときの店子さんの、六連……いえ、おさむらいさんであったとしても、わたしに、なんのご用がおありなのですか？」

だしてくださいよ」

と、お紋にいった。第一のヒントというわけである。お紋には、それだけのヒントでは、この白ずきんのクイズは解けないとみえて、

「クヌギ林？」

「あのときの店子さんよ」

と、三太は、第二のヒントをあたえる。しかし、お紋には、店子ということばがピンとこなかったとみえて、

「たなこ？」

「感の悪い娘だな。そんな鈍感なことで、よく、あんなに、すばらしい剣が投げられるもンだ。それ、一日一両の大尽たなこ様よ」

「ああ、わかった。六連銭の」

「しっ！」

と、三太は、両手をさし出して、お紋の口を押えるかっこうをした。



「これはきつい、ごあいさつですね」

軍師三太は、おでこの額を、ぽんとたたいてみせて、

「店子と大家とは、師とでし、主人と家来の仲のようなものですぜ。それで、かつての大家さまのお嬢さまが、花のお江戸で、有名になっていられるときけば、家来すじにあたる店子たるもの、ごあいさつかたがた、敬意を表しにくるのは、あたりまえのことではありませんか」

「ごあいさつだの敬意だの……もうけっこうですわ」

「芸人は、あいきょうがたいせつですぜ、お紋さん」

三太は、ちょっと、すごみをきかせて、お紋のぶあいそうをたしなめた。お紋は、かまわずに衣装をときにかかりながら、

「ご自分の家を、通りがかりの他人にあずけたまま、どこかへ消えてしまうなんて……そんなお侍さまになら、お話ししたくありません」

「これは、相すまぬ」

鶴太郎は、白ずきんの奥から、わびのことばをおくった。

「あれには、いささか、わけがあってな。あのまま、予があすこにいたら、この身を危険にさらさなくてはならなかったかもしれない」

「おかげで、このおかたが」

と、お紋は、道化姿の左膳を示して、

「お身代わりとなって、ひどいめにおあいになられましたわ」

「この道化が」

鶴太郎は、道化の左膳を見やった。左膳は道化師そのままの、ぼかァんとした顔で、鶴太郎を見上げている。

「そうですよ。六連……いえ、お侍さまが留守番をたのまれたかたですよ、このかた」

「予は」

と、鶴太郎は、ずきんの奥から、道化姿の左膳を見くだして言った。

「このような、お道化ものに、あの、クヌギ林の小屋を預けた覚えはないぞ。いくら予がすきょうものでも、こんな道化に家を預けるほど、バカにできてはいない」

すると、それまで黙っていた左膳が、はじめて口をきいた。

「そのとおりでござる」

「……？」

「拙者とても、このようなバカ者の家は、預かりはせぬ」

「バカ者とは、なんだ」

地獄虫の三太は、白い歯をサルのようにひんむいて、左膳をとがめた。左膳には、そんな、三太のいかくなど、目にはいらないとみえて、三太をふりかえろうともしないで、白ずきんの鶴太郎を見上げたまま言った。

「拙者たちの世界では、人に物をいうとき、ずきんをかむったままでいるのを、バカあるいは、うつけ者あるいは、無礼者といって、事と次第によっては、斬りすててよいことになっている」

「これは、おもしろい」

と、三太が、また横から口をはさんだ。

「お道化のぶんざいで、おさむらいさんを斬りすてるとはおもしろい。さ、斬ってもらおうか」

「これこれ」

鶴太郎が、三太をたしなめた。

「心やすく、斬ってもらおうかなどと申すではないぞ。斬られるのは、予だからな」

「これは、恐れ入り……」

三太は恐縮した。鶴太郎は、左膳へ、丁重な口調でいった。

「面体をかくしたまま、物を言って、はなはだ申しわけがない。ゆえあってのことじゃ、ゆるされよ。されど、お身が、あのときの留守番を引き受けてくだされたご仁であるなら、りっぱな武士であるはず。それが、道化に顔をよそおったまま人に対するのは——これ、ずきんをかむったままと同じことになるが、この無礼は、それでよいのかな」

「そうだ。そこだ。うまいところを突かれたもンだ。さすがは、十万石の若様だ。学があるというもンだ」

三太が、また口を入れた。

「いや、これは、これでよいのでござる」

と、左膳は、おのれの道化の顔をゆびでさし示して言った。

「拙者は、目下、武士をすて、道化ひとすじに生きている身なれば、この顔のままで、人に対するのに、なんの無礼かあらん」

「予も浮き世をすて、身分もすてている身なれば、覆面の無礼は、あえてとがめられとうはない」

鶴太郎は、ずきんのなかで、侮るような笑いかたをした。

「それでは、五分と五分、前言は取り消すとして……」

左膳は、けろりとした顔で、あっさりと前言をとり消して、

「そこで、拙者は、あらためて、かの、クヌギ林の小屋を、貴殿へお返し申す」

「かえす？」

「拙者は、あの小屋の留守番をたのまれた。頼まれたのは、ふつか間だ。拙者はふつか間だけ留守番をして、三日めの朝あすこを出てしまったわけだが、頼まれぬしに、返さぬうちに出て来たことについて、今でも責任をおぼえている。よって、ここにて、あらためて、お返しつかまつる——はい。たしかに、お返し申したぞ」

左膳は、木箱から腰をうかし、鶴太郎へ、ぺこんと腰を折った。

「これは、ごていねいな」

鶴太郎も、つられて、腰を折りながら、

「いま、このお紋の話によれば、予の身代わりとなって、危難にあわれたとか？」

「身代わりか、どうかは知らぬが、七、八人の

不逞のやからに斬りつけられ、眠りをさまたげられ、いささか迷惑をいたした」
「して、その斬りつけた七、八人は、いかなる人物であった？」
鶴太郎は、気になるとみえて、左膳へたずねた。
「武士でござった」
左膳は、道化の顔を、ゆがめながら、まじめに答えた。
「武士は、わかっている」
「わかっていたら、聞かれるな」
左膳は、ふたたび木箱へ腰をおろし、ぼそっとした顔に、もどる。
「どのような武士かと、聞いているのじゃ」
「武士は武士。武士に幾とおりもの種類はないはずでござる」
「いや」
と、鶴太郎は、ちょっと困ったように、
「どこかの家中か、または、浪人であったかと尋ねているのだ」
「そのようなせんさく、拙者に興味がなかったゆえ、きかなかった」
「どこかの、藩の者らしい様子であったか」
「そういう目印が、どこにもついていなかったから、拙者にはわからん。赤穂浪士の討ち入りなれば、胸に、なんのなにがしと、氏名がかかれてあるから、それとわかるのだが」
「浪人のようでもなかったか」
「わからんと言ったら、わからん」
左膳は、受けつけない。過ぎ去ったことをくり返してしゃべってみて、それがなんになるかと、左膳はそういう、ぐちにひとしいことをしゃべるのが、大きらいだった。
「おっそろしくいばったお道化だな。こんな芸人、みたことない」
三太は、あきれかえり、目をフクロウのようにまん丸くして、左膳のおどけた顔を、ながめなおした。主人にあたる十万石の若様を、まるで下人のように扱う、この道化師に、三太は腹がたってならない。が、道化は道化でも、この道化には、どこにもすきがなかった。一発、横ッつらをはり倒してくれようと考えたが、なぐれそうにもなかった。ぼかんとしているようでも、道化衣装の中身には、りっぱな剣客北辰一刀流とつば鳴り無刀流がそなわっているのだ。
――まずい。三太は、左膳をぶんなぐることを思いとどまって、お紋へ言った。
「それはともかく」
「なにが、ともかくなんですか」
お紋は、つっけんどんである。三太なぞ、相手にせず、向こうをむいて衣装を解いている。
「若様がね。妙義村の借家ずまいのお礼に、きょうは、どこかへごちそうしたいとおっしゃるンですがね」
「けっこうです」
「そういったもンじゃありませんよ。店子が、大家のお嬢さんにごちそうするのは、当然の道ですよ」
「……」
「きけば、若様は、クヌギ林の小屋に、一日一両の店賃を出されたというではありませんか。そんな気まえのいい店子って、日本国じゅう、金のわらじをはいて捜したって、いませんや。そのことにメンじても、一度くらい、つきあっても、いいじゃありませんか。芸人は、人気がだいじですよ。ね、ね、お紋さんえ」
三太に、そういわれてみると、お紋にも、いささかの義理を感じないでもなかった。
この、お侍さんが、あの、クヌギ林のなかに住むようになってから、父の松兵衛が、まいにちを、どんなに喜んだか。
――福の神のご入来だ。と、まで言って、このお侍さんが店子であることに、感謝をしたし、お紋自身も、世の中に、これほどりっぱなお侍さんってあるものか、とまで思ったものである。おかげで、父の松兵衛は、一生かかっても

拝めない小判を、何枚か財産にもつことができたのだ。母の病気が、タケノコの皮をはぐように、たちまちに直ってしまったのも、小判のおかげだったようだ。してみれば、父を富ませ、母の病気をよくしてくれたのは、この六連銭のお侍さんであるというわけである。感謝しなければ、いけない。感謝しなければ、忘恩の犬となる。お紋は、これまでに、いく度も、お客につれられて、ごちそうの席へいったことがあるから、さそわれて、その席へゆくことに、別だん恥ずかしさを覚えることもなかった。

「いいだろう、ね、お紋さん。若様は、駒形のどじょうを食べにゆこうと言ってらっしゃるンだ。こんな寒い季節には、熱いどじょう汁が、一等だね」

三太は、しきりに誘った。すでに、お紋の気がうごいているのを、みぬいての誘いかけであった。

「六連……いえ、このお侍さんなら、知らないこともないのだから、行ってもいいけど」

「ほかに、注文があるのなら、なんでもきいてくださいますよ。ね、若様」

三太は、鶴太郎をみあげた。鶴太郎は、ずきんの頭を、たてにうごかした。よろしいという合い図である。

「若様は、なんでも、話のわかりがはええや。さ、言ってみな、注文を……」

三太は、お紋のきげんをとるように、お紋の返事をせかした。

「この左太郎さんもいっしょなら」

お紋は、左膳のほうをふりかえって、言った。

「ちえ、この高慢ちきお道化とかい？」

三太は、いまいましそうに舌打ちしながら、左膳をみやった。

「いやなら、あたしもやめるわ」

「いいよ、いいよ。いっしょに来てもらって、けっこうですよ」

三太は、ふんい気をみてとるのに敏な男であった。左膳がついて来ることを断われば、お紋も、いっしょにくることを断わるにちがいないと、早くもみてとって、それに同意した。

「さ、いっしょにゆきやしょう、お道化の左太郎さん」

三太は、左膳へいった。左膳はぽかンとした顔で、三太のうしろのノレンをみつめていたが、気づいたように、

「どこへゆくのか？」

「あれ。いまの話をきいては、いなかったンですかい」

「いまの話とはなんだ」

「あきれましたね、どうも。この人は長いきしますぜ。駒形のどじょうナベをくいにゆこうというンですよ」

「ナベを食うのか。あのような堅いものを」

「ナベは食えませんよ、ナベは……あんな熱くて、堅いものを食ったら、やけどをし、おまけに、歯が、一本のこらず、折れてしまいますよ」

三太は、道化役者とみて、左膳をひやかすように言う。

「拙者も、そう考えた。鉄のナベはかたいからの」

左膳は、火に熱しられた、熱いナベをかじったら、やけどをし、歯が折れてしまうと、それを心配したのだ。

「どじょうナベを食う……ということは、ナベのなかの、どじょうを食う、という意味なンですよ、お道化さん」

「ナベの中の、どじょうを食う、という意味か。それならわかる。ことばというものは、みだりに省略をするものではないぞ。はじめから、駒形の、どじょうナベの中の、どじょうを食いにゆこう……と、こう言えばよいのだ」

「さいですかね」

三太は、あほらしがって、左膳を相手に話すことを、めんどくさそうにする。しかし、左膳は、どじょうナベの中の、どじょうを食うこと

について、真剣に考えている。
「どじょうは、拙者の好物ゆえありがたいが、わざわざ出かけていって、それを腹中へいれるのは……」
「ふくちゅう、ときましたね」
「食えば、すべてのものは、腹中へおさまるのだ」
「そんなもんですかね」
「わざわざ出かけていって、腹中へいれるのはめんどうゆえ、ここまで運んではもらえぬか」
「あきれたね。このお道化さんのゼイタクぶりには」
三太は、おおぎょうにあきれて、
「駒形のどじょうは、駒形へ行って食うところに、味わいがあるンで、駒形から両国まで、どじょうの出前をした例は、これまでにありませんよ」
「そうか、運んでは、くれぬか」
それで、左膳も、しかたなく腰をあげる気になって、
「では、参るとしよう。拙者がゆかねば、このお紋も行かぬとあれば、お紋にたいして相すまん」
「あれ、チャンと、さっきからの話を、きいていたんですね」
三太は、左膳のとぼけかたに、すっかりあきれてしまう。左膳は立ち上がる。そして、お紋をふりかえって、
「お供つかまつる」
「お供だなんて……堂々と、いっしょにおいでくださいな」
お紋は、帯をしめながら、
「早く顔をおとして」
「顔をおとす？　顔をおとすと、あるけなくなるが」
「すみません。ことばの省略がすぎましたかしら。顔のおしろいを落として、着ている衣装をきかえて……それからいっしょにまいりましょう、といっているのですよ」



「おしろいは落とさぬ。衣装もきかえぬ。このままでゆく」
「それではおかしいわ、左さん」
「この六連銭が、ずきんをかむっているかぎり、拙者もおしろいは落とさぬ。拙者もこのおしろいは、覆面しているのと同じだからな」
からくり座を出ると、四人は柳橋にさしかかった。若様の、真田鶴太郎は、いぜんとして、白ずきんのままである。これは、軍師三太の忠言によって、藤波屋敷のほかは、いずこの場所といえども、ずきんをとってはいけない——ということから、かむったままで、押しとおしているのだ。左膳も、からくり座の舞台へでたままのふん装で、三人につれだっている。道をゆく人々は、若様の白ずきんには、それほどの関心をしめさなかったが、左膳の道化姿には、すっかりめんくらった形で、
「なんでしょう、あれ」
「両国の芸人でしょうが、舞台のままの姿で外出をするなんて、ずいぶん変わった芸人ですね」
と、わらい合うのだった。お紋も、さすがに困って、
「ね、さ様」
「なんだ」
「やっぱり、小屋へかえって、顔をおとし、衣装をきかえて来たら？」
「顔は、おとせん」
「がんこね」
「衣装も着かえられん」
「でも、みんな笑っているわ」
「笑うのは、人さまのかってというものだ。この六連銭が……」
「ちょっと待った」
と、三太が、
「六連銭は、禁句にねがいます。いまは、六連銭の紋どころのついた衣服も着ていないンですからね」
と、左膳へ抗議をすると、左膳は、すなお

に、六連銭を撒回して、
「それでは」
と、真田鶴太郎をふりかえり、
「この若様なるものが、人のまえでずきんをとらぬかぎり、拙者も顔をおとさぬゆえ、拙者に顔をおとさせようと思ったら、この若様のずきんを、まず脱がすことだ」
「それはできませんや」
三太が、手を振って、
「ゆえあって、若様にはずきんをつけられるのだから……」
「それなら、拙者も、ゆえあって顔をおとさずにいる、と答えよう。侍のずきん、道化の厚化粧……いずれも、顔をかくすことにおいては、変わりはない」
「どうもがんこの上なしのお道化ですね。まあいいですよ。笑われるのは、あっしたちじゃないンだから」
三太は、とうとうまけて、お紋へ、
「お紋さん。この卵に目鼻をつけたような化粧は、このお道化のずきんだってことだから、あんまりやかましく、言いっこなしにしましょうぜ」
「左さまは、いいだしたら、きかないおひとですから」
お紋もあきらめて、このお道化といっしょに、恥をかきながら、あるいてゆくことにした。柳橋をわたると、平右衛門町の自身番。それをつき当たって、左へまがると、第六天様の門前へ出る。その横手をまっすぐゆけば、お蔵前通りを経て、駒形町であった。

## どじょうナベ

駒形のどじょうナベは、かなり古いのれんをほこっている、江戸の食名物の一つで、ここほど、大衆的にできている店は、ほかにはない。たいていの食べ物屋は、小意気なへやをほこったり、豪華なつくりの座敷をうりものにして、そこで自慢の料理をくわすのだが——ここは、いなかの庄屋の家かと思われる、板敷きの大きな広間に、あちこちに座ぶとんをほうり出してあって、そこに、めいめいがかってに陣取って、どじょうナベをつつく仕掛けになっている。こういうザックバランな、開放的なやりかたが、江戸っ子の気風にうけて、春夏秋冬のべつなく、ここは、いつでもにぎわっているのだった。
だから、たいていの場合は、三十分や四十分は、すわる場所がなくてうしろに立って、席のあくのを待たなくてはならない。江戸ッ子は、気が短いのだが、不思議と、ここでは、気短にならずに、どこかに席のあくのを、おとなしく待つ……というのも、一つの珍風景で、これがかえって、人気をまさせるもとをつくってもいるのだから、妙なものだ。
柱は、すすけて黒光りである。その角柱のまわりは相当のもので、人間ひとり、楽々とかくれることができるふとさだが——それが、座敷のまんなかに、なんぼんも立っている。ちょっと見ると、なんというへたな建てかたの家であろうと思う。座敷のまんなかに、幅一尺七、八寸もあろう太柱をたてておくなんて……と、そのへたなやりかたをバカバカしいと考えるものもあろう。
ところが、そこが、このどじょう屋のねらいで、これがチャンと計算にはいっているのだ。つまり、この何本かの太柱が、それぞれツイタテの役めを果たしているわけで——どこにすわっていても、全体の客を見わたすことのできないように、くふうされているのだ。
約三分の二の客の姿は、たがいに見えないように、太柱と太柱によって、くふうがこらされている……と、ここの主人の自慢だ。京都は、金閣寺の庭泉の中にある飛び石の配置からヒントを得て、こういう柱のツイタテ式大広間を考

えついたのだそうな。が、ま、そんなことは、どうでもよい。とにかく、若様、左膳の一行は、しばらくたちンぼうのすえ、ようやく空席ができたので、そこへすわることになった。

「ナベは、なんにいたします」

小女が、あかあかと炭火のはいったしちりんをもって来て、四人のまえにおくと聞いた。

「なにナベにしますか」

軍師の三太が、真田鶴太郎の若様にきいた。

「よきに……」

若様は十万石の身だから、おうようであった。事実また、若様には、どじょうナベの種類なんか、わかろうはずがない。

「承知しやした。道化さんは？　なにナベがいいですか」

左膳に聞く。左膳も、あまりこの道は通でないらしい。

「何ナベでもよい……腹中に入れて毒でないものならば」

「腹中で、どじょうがあばれないかぎり、何ナベでも中毒する心配はありませんよ」

三太は、それぞれの好みを考えて、注文をした。若様と、お紋には、無難な柳川鍋。左膳と自分は、地獄鍋。地獄鍋というのは、ナベのなかへ、とうふを一ちょう入れ、それへ生きたどじょうをたくさんほうりこんで、火にかける。ナベの中の水が熱してくると、どじょうは苦しがって、とうふの中へもぐりこむ。やがて、とうふも熱くなって、そのまま煮えてしまう。それを、小さな刃物で切って食うのである。これは、多少の残酷さが伴うが、なかなか風味があって、通にとっては、オツなナベであった。

「生きているな」

左膳は、とうふのまわりを、逃げまわっている、おびただしい数のどじょうをのぞきこみながら、珍しそうにすると、三太は、いたずらしい顔で、

「お道化さん。手品を一つやってみましょう



か？」

「どんな手品だ」

「あっしが、九字を切ると、このどじょうが、一ぴきもいなくなる」

「ほう」

「やってみましょう」

三太は、ナベの中の水が、熱してくるころを見計らって、ナベへふたをし、

「なむ。くしゃ、くしゃ、どじょう地獄の亡者（もうじゃ）ども、成仏したまえ、かつ！」

と、じゅ文をとなえ、もっともらしく、九字を切ってから、おもむろに、ナベのふたをとってみせた。

ナベのなかには、一ぴきのどじょうもいなかった。これには、左膳だけではなく、若様も感心して、

「うまい」

と、若様がほめれば、お紋も、

「こんなすばらしい手品を知っているのなら、あんたさん、からくり座へ出て、おもしろい手品をやってみませんか」

と、誘う。

「あっしの手品は、これだけしかないので……はい、このとおり、どじょうは、とうふの中に避難しております」

と、三太が、とうふの中へハシをつっこみ、一ぴきのどじょうをつまみ出して、皆にみせると、若様もお紋も、さらに感心をする。

「ああ、そうか、物の道理とは、かようなものかな」

左膳も、感心し、とうふの中へ、ハシをつっこんで、いっぴきのどじょうを、つまみ出す。

どじょうは、ハシのさきで、さかんに、もがいている。

「三太」

「へい」

三太は、道化の左膳によばれ、おもわず返事をしたが、自分は十万石の若様の軍師であるこ

とを意識すると、急に肩をいからせて、
「なンですかい」
「きさまは、残酷なやつだな。水が湯になって、とうふの中へ避難したどじょうが、こんどは、とうふが熱くなったら、どこへ避難すればよいのか。避難さきを考えてやらぬとは、きさまは鬼のようなやつだ」
「そこが地獄鍋の、地獄鍋たるところですよ、お道化さん」
三太は、左膳ににらまれて、困った顔になった。左膳は、ハシにつまんでいたどじょうを、てのひらにのせると、立ちあがった。
「ごめん」
すわって、どじょうナベをかこんでいる、幾組かの客のあいだを通って、料理場へゆくと、
「女」
と、ひとりの女を呼んで、
「水をくれぬか」
「お飲みでございますか」
「拙者が飲むのではない」
「……？」
女は、けげんそうな顔をし、このおどけたふん装の左膳をみあげた。
「これに、飲ませてやるのだ」
「どじょうに？」
女は、あきれたように、左膳のさしだす、手のひらの上の一ぴきのどじょうを、のぞきこんだ。
「水をやらぬと、死ぬ」
左膳は、まじめにいう。地獄鍋から、せっかく救いだしてやっても、水に入れてやらねば、どじょうは死ぬであろう。それでは、救い出してやったかいがない、といった左膳の顔であった。女は、どうにも理解できない首をかしげて、左膳のてのひらを、しばらくのぞいていたが、
「それを、水のなかへお入れになるのでしたら、あたしいただいて、あの中へ入れておきますが」
ゆびさす向こうのすみに、鏡をぬいた四斗ダルがあって、そのなかに、何十ぴき、何万ぴきともしれないどじょうが、うずをまいている。
「たのむ……あれたちの仲間へ、入れてやってくれ」
左膳は、どじょうを、女のさしだす手のひらの上におきながらいった。女は、どじょうを受け取ると、四斗ダルのなかへ、むぞうさになげこんだ。投げこまれたどじょうは、どじょうのうずのなかへ、たちまちにして巻きこまれて、見えなくなった。左膳の顔に微笑がうかんだ。地獄鍋の、とうふのなかから、一ぴきのどじょうを救い出したところで、とうふの中には、まだ何十ぴきかの同類がいる。いまごろは、沸騰したナベのなかで、ほかの同類たちは、もうすっかり煮えてしまっているだろう。左膳のハシにかかった、この一ぴきのどじょうは、運がよかったわけである。一ぴきのどじょうを、とうふの中から助けだした左膳の心境は、いつかのスミレの野で、一本のスミレの花を摘もうとしてふと「チョウに悪い」と気づいて、摘むのをやめた、あの思いやりに通じるところがあった。
とにかく、どじょうといえども、その命をたすけたということは、左膳にとってはいい気持ちに違いなかった。どじょうナベを食いにきて、どじょうを助ける。左膳という人間のどこかに、仏心がやどっているらしい。左膳は、それで、安心をして、もとの席へ引きかえしていった。と、四人組の武士の、ひとりの腰のものを、あやまって足にかけてしまった。刀のさやに、左膳のつまさきが、ほんのちょっとさわっただけだったが、その武士は、ひどくおこった。
「待てッ」
声と同時に、左膳のはいている、たぶたぶの西洋はかまをひっつかんで、
「無礼であろう」
この四人組の武士は、真田信濃守の家来——

浅見十兵衛を筆頭とする、例の、鶴太郎追跡のめんめんで、ほかの三人は、井戸弦三郎、花村剛之丞、吉野義八郎といい、腕はいずれも免許に達している剣客ぞろいだった。

江戸家老、剣持源太夫の命で、先日から、鶴太郎君をもとめて、駒形から、浅草、蔵前ふきんを、毎日のようにうろついていたのだが、——きょうは、名にしおう駒形のどじょうナベに、熱かんの酒でもひっかけて、からだをぬくめようと、こうして、人ごみのなかで、輪をつくっているそばを、左膳がとおりあわせたというわけであった。

西洋ばかまをつかまれ、無礼よばわりをされて、左膳は、はじめて四人の存在に気づいたのである。いずれも、クヌギ林のなかで、かつての日、つば鳴り無刀流にものをいわせ、クヌギへ、うしろ手にしばって、その前へ、おのおの刀をつきさしておいた覚えのある、相手ばかりだった。が、相手は、あのときの左膳であることは、もとよりわかろうはずはなかった。あのときの、白ずくめの武士が、まさか、こんな道化姿でいようとは……。

「うけたまわれば」

と、左膳はたちどまり、四人の姿をみおろすといった。

「ただいま、無礼といわれたが、無礼とは、拙者の足が、この刀のさやにふれたことを申されるのかな」

ずいぶんと、念の入った問いかただった。浅見十兵衛は、かッ！　となって左膳をにらみつけた。

「武士の魂を足げりにし、あやまるどころか、無礼のありかたを質問し直すとは、なんという不届き者かッ、きさまは」

「無礼よばわりをしたいのは、拙者のほうでござる。人の通るところへ、刀を置くというのは困る。それに、武士の魂といわれたが、魂を人の通るところへ出しておくとは、ずいぶんと、



魂をそまつにされるご仁じゃ」

左膳は、それだけ言って、お紋のいるところへ帰ろうとすると、浅見十兵衛が、

「待てッ、逃げるか」

と、声をかけた。左膳は、またたちどまって、

「逃げはせぬ。席にもどるだけのこと」

「きさまッ」

と、井戸弦三郎がたち上がって、

「道化のくせに、武士にむかって雑言のかずかず、許しておけん。来いッ」

と、そのそでをつかんでひいた。左膳はそでをつかまれたまま、

「どこへ来いといわれるのか」

「こっちだ」

井戸弦三郎は、左膳をひったてるようにして、大広間から、横手のあき地へ出ていった。ほかの三人も、それについてゆく。お紋たちのすわっているところからは、太柱でさえぎられていたから、このことはわからなかったし……こんなやぼな光景は、どじょうナベへくるような江戸ッ子には、興味のないことだったから、これらのことは至極しずかにおこなわれたのである。

あき地では、もう、刀を抜いている武士もいて、左膳は四人に、ぐるりと取りまかれていた。

「察するところ」

と、浅見十兵衛が、左膳へ、いった。

「きさまは、われわれに、因縁をつけようとして、わざわざ、武士の魂を足にかけたのであろう」

「いや」

と、左膳は、卵に目鼻をつけたような、道化の首を横にふった。

「そのようなつもりは、もうとうござらん。拙者は、幼少のころから、足にかけるものは、はき物だけと心得ていて、それ以外のものは、足にかけぬようにいたしている」

「無礼なッ」

吉野義八郎が、抜いた刃を、左膳の鼻ッさきへ、つきつけて、

「それでは、さいぜん、足げりにいたした、あの刀は、はき物だというのか。はき物ならば緒がついていなければならぬが」

「あの刀が、はき物であるか、ないかは、拙者にはわからん。しかし、緒はついていた」

「なんといわれる」

「さげ緒がついていた」

左膳は、すずしい顔で答える。人のあるくところに、ほうり出しておくような刀は、どうせ、ろくな刀ではあるまい。だからはき物にあつかわれても、しかたなかろう……というのが、左膳の考えかたであった。

「いよいよ、ゆるしてはおけぬ。道化のぶんざいで、武士の魂を、はき物にたとえるとは、つまりは、われわれの魂を、はき物だとするにひとしい」

浅見十兵衛は、刀のつかに手をかけ、抜き打ちにするつもりなのであろう。からだを、ややななめに、ひねった。

剣持源太夫の指揮下にあって、毎日のように、このあたりを、鶴太郎君をもとめて、むなしい日を費やしているかれらは、いささか、あせりぎみのかたちであった。いらいらして、一杯あつい酒を腹へいれ、そのあせりを和らげようとしているところへ、この刀の一件だった。ただ、わけもなく腹だちまぎれに左膳へ無礼よばわりしたのだが、相手が手をついてあやまれば、それですんだものを、左膳はあやまるどころか、妙に理屈をいったので、いよいよ腹の虫がおさまらなくなった、四人である。

たかが、芸人の道化ひとり、無礼うちということにしてしまえば、犬ネコを斬ったも同様のことですむ……とたかをくくって、

「えい……っ」

まず浅見十兵衛が、抜く手もみせず、刃を下から上へハネ上げた。つづいて、ほかの三人も、それに、つられるように、斬りこんでいった。

「下品ッ」

即座に、声があった。間一髪のすきに、左膳が、うしろへとびさがるなり叫んだ、声であった。

刃を空にながされたうえ、下品なッと、場ちがいの声をかけられ、四人は、一瞬きょとんとし、左膳をみやった。

「おもとたちの所業は、げすな町人どものけんかのようでは、ござらんか」

左膳は、恐れるふうもなく、四人へいった。

浅見十兵衛は、拍子抜けの顔で、

「げすのけんかのよう……とは、なにごとだ」

「げすな町人どもは、けんかをするのに、ゲタをつかんで、ふり上げるではござらんか。おもとたちもはき物を抜いて振り上げられたゆえ、かく申したのでござる」

「いよいよ、ゆるすことは相ならん」

浅見十兵衛は、もう烈火のように、おこっている。

「武士の魂をはき物にしてしもうとは、われわれのみならず、武士のすべてを侮辱いたしたことになる」

「武士のすべてのために、きさまをたたっきってくれる」

花村剛之丞は、浅見十兵衛のあとを受けて、そういうなり、必殺の剣を見舞った。左膳はその、するどいやいばを、肩さき三寸のところで、かるくかわし、かわすがはやいか、剛之丞のきき腕をつかみ、その小手を、手のひらをたてにして、バッッと打った。

まるで鉄ツチで打たれたような、きびしい衝撃をおぼえ、剛之丞はおもわず、握っていた刀のつかをはなした。そこを、すかさず、左膳の手がのびて、その刀のつかをつかんで……同時に、剛之丞の腰にのこっている、刀のさやを、さやじりのほうから、すぼり！　と抜きとって、

ぱちん！

すばやく、刃をさやにおさめ、左膳は四尺のうしろへさがって、

「はき物を半足あずかり申したのは、おもとたちに、拙者の秘芸をごらんに入れようがためでござる」

と、おちついて言った。この間の時間は、一秒たらずのものであった。

「はき物半足とは、なんのことかッ」

十兵衛が、斬りつけるすきをうかがいながら言った。

「武士の帯刀……いや、はき物は大小二本をもって一足とする。されば、大刀一本は、半足ということに相なる」

「無礼なッ」

義八郎が、左膳の横にとんで、叫んだ。左膳は、さやごと、刀をななめに持ち、それへからだをかまえながら、

「拙者の秘芸は、なづけて、つば鳴り無刀流という」

「つば鳴り無刀流」

四人の顔に、さっと、ある記憶をもどした、驚きの色が浮かんだ。

「ばちん、と、つば鳴りの音……それとともに、相手が斬られている。けっして、刃は見せないというのが、つば鳴りの特長でござる」

四人は、いまさらのように、左膳の顔をのぞきこんだ。このお道化の芸人が、つば鳴り無刀流を使うとは？

「だれでもよい、斬りかかってこられるがよい。妙義山麓は、かの、クヌギ林のなかで披露もうした、つば鳴りの秘芸を、再度ごらんに入れよう」

左膳は、つかがしらをさきにし、刀をずいとまえへさし出した。四人はおもわず、タジタジとなってうしろへさがった。妙義山麓クヌギ林のなかで……ときけば、あのときの白ずくめの武士が、この道化である、ということになる。大刀をとられた剛之丞は、わき差しをぬいて、



そなえた。

「ゆけッ」

十兵衛は、そう左右へ声をかけておいて、みずから突貫の勢いで、わ……ッと叫んで斬りこんでいった。が、左膳のからだが、くるり！とねじれただけで、間髪をいれず、

——パチン！

つば鳴りの音。

つづいて十兵衛のうめき声とともに、うつぶせに地に倒れる影が……。

## 化け物問答

それから、三十分ののち、左膳は、ひとり、ひょうぜんとして、蔵前から、両国のほうにむかって、あるいていた。浅見十兵衛はじめ、四人の武士たちは、左膳のつば鳴り無刀流というふしぎな剣法のまえに、あっ、という間に、あおむけに倒されてしまったのだが、いたずらなるせっしょうをこのまぬ左膳は、いうまでもなく、四人とも、刀の峰で打ちすえていたので、四人は、ただ気を失って倒れただけで、命には、別条はなかったのである。

どじょう屋の横手で、このことは、至極かんたんに行なわれたので人だかりもすくなく、この場のありさまを目撃していたのは、ほんの四、五人だけだったが、まるで魔術のような、左膳の剣法に、いずれも驚きの舌をまいて、

「なんて剣法でしょうな、あれは……一度も刀を抜かないで、それでいて、一、二の三で、四人とも仲よく、ひっくり返してしまうんですからね」

「まるで、しばいの捕手みたいじゃありませんか。それにしても、なんて強いお道化でしょう」

そんな、ささやき声をきき捨てて、左膳がどじょうナベの席へもどってゆくと、そこには、お紋たちの姿は、すでになかった。

「はて？」

左膳は、席をまちがえたのかとおもい、そのあたりを見まわしていると、どじょう屋の女が、
「おつれのかたでしたら、たったいま、お帰りになりましたが」
と、おしえてくれた。
「帰った？　まるで、どじょうのように逃げ足の速いやつらだな」
左膳は、けっきょく、どじょうを一ぴき、たすけただけで、一ぴきのどじょうも食わず、そこを出なければならぬ、仕儀となってしまった。外へ出て、三人の姿をもとめたが、鶴太郎や、三太や、お紋のすがたは、どこにも見えない。左膳は、しかたなく、ぶらぶらとあるいて、両国の、からくり座へかえることにした。まるで、骨おりぞんの、くたびれもうけを、地でいったようなものだった。
道をゆくものは、お道化すがたの左膳の様子をみて、くすくすと笑った。左膳は平気であった。何をおかしがって、皆が笑うのであろう…

…と、いった顔で、蔵前のとおりをまっすぐあるいてゆくと、浅草御門の正面にでた。
「これ、これッ」
御門に詰めていた番人が、お道化すがたの左膳を怪しんで、そのゆく手をさえぎった。
「ここは、化け物の通るところではない。向こうを通れ」
と、第六天社のほうを、おしえた。左膳は首をかしげて、
「化け物とは、だれのことでござるかな」
「そのほうのことだ。顔に怪しげな白いものを塗り、怪しげな、とつくにふうの衣装をきておれば、だれの目にも化け物としか見えぬ」
「化け物とは、拙者のことでござるか」
「のんびりいたしているのう、そのほうは……ここは化け物の通る門ではないと、いっているではないか」
「拙者は、化け物では、ござらぬが」
左膳は、首をかしげながら、至極真顔でこた



えた。
「化け物でないとなれば、いったいなんだ。道化とは、文字にかいて、化けの道。そのほうは、その、化かされ街道からやって来た、化けギツネであろう」
門番は、相手を、たかが一介の道化芸人とおもったから、さんざんにからかうのだった。左膳は、おのれは、からくり座の道化である、と答えようとしたのだが、相手に、先をこされてしまって、道化だ、とは答えられなくなってしまった。道化だといえば、それみろ、化けの道、いわゆる化かされ街道のキツネであることを、自白した、といわれてしまう。そこで、左膳は余儀なく、いったんは、すててしまった、以前の身分を答えざるをえなかった。
「拙者は、化け物でもない。道化でもなければ、キツネでもない。まことのほどは、武士でござる」
「武士？」
門番は、左膳を小バカにしたように、その道化すがたの、上から下を、見上げ見おろして、
「武士である証拠が、どこにあるか。どこを見ても、化かされ街道から来た、キツネ……」
「そのキツネでない証拠を、ごらんに入れるといたそう」
左膳は、くるりときびすをかえすと、御門のまえを流れている、神田川にかかっている、浅草橋のたもとへ引っ返していった。欄干のネギぼうしに、正徳元年六月吉日、鋳物師矢部豊前重政と、銘が彫られてある。左膳は、その欄干のところから、下へとびおりた。すぐ下に、から舟が一そうつながれてあったのへ、左膳はとびおりたのだ。舟のなかへ降りたつと、左膳はまず、かむっていた、道化帽子をぬいだ。それから、かつらをとり、ハブタエをはがした。五分さかやきの、浮き草浪人、左膳のめんもくが、まず、その頭髪に、もどってきた。つぎに、左膳は、首の輪になっている、道化のかざりを、

むしりとる。それから、舟ばたへしゃがんで、両手で神田川の流れをくんで、顔をあらいはじめた。おしろいが水におちて、そこだけ、白い布をひいたように、流れがしろくなる。なんべんか、そうして、水をすくい、顔を洗っているうちに、左膳の素顔が、ようやくもどってきた。

左膳は、道化服のそでで、むそうさにぬれた顔をぬぐうと、さも、せいせいしたように、石がきをつたって、欄干のそばへ、はいあがった。頭髪も、つら構えも、いかにも、腕におぼえのありそうな武士のそれが——みなりだけは、やっぱり道化であった。左膳は、あきれてながめている門番のそばへ、もどってゆくと、

「これが、拙者の隠さざる顔でござる。これでも、まだ化け物だと申されるか。このうえにもまだ、武士である証拠をお見せするには、腕をふるうよりほかに、すべは、ござらんが」

門番は、ちょっと気味わるがって、あとずさりをした。この奇行の道化武士は、こちらの返事の次第によっては、いきなり、取ってさし上げて、前なる神田川へ、投げこまぬともかぎらぬ様子であったから、

「いや、お腕のほうは、もうけっこう。ご貴殿は、りっぱなお武家であることを確認しました」

門番は、無抵抗主義の左膳の、この変わった返答の方法に、すっかり肝をつぶし、いまの今まで、そのほう……と呼んでいたのを、急にご貴殿と、呼びかたを変えた。

「わかったで、ござるか」

左膳は、念をおした。

「たしかに、お武家であることがわかり申した」

門番は、こたえると、左膳は、

「されば、このところを、まかりとおる」

と、御門を通ろうとするのへ、門番は、あわてて、

「ここは、どなた様も、お通し申すわけにはまいりません」



と、ゆく手を、さえぎる。

「化け物のほかは、通れるのではなかったのか」

「ここは、お城の、外くるわの固めの御門で、一朝有事のための御門。太平のいまは、一つの飾りの門となっていますが、しかし、一般の者は通すわけにはまいりません」

「化け物だけは通さぬ——というふうにきいたゆえ、拙者は顔をおとしたのでござる」

「顔をおとされれば、お通しするとは、いいませなんだが」

「うむ」

——この問答は、けっきょくは、左膳の負けであった。通してくれないものなら、わざわざ神田川の水でおしろいを落とすような手数のかかることを、しなくてもよかった。

「では、ごめん」

と、左膳は、門番へ腰を折った。天下のおきてをおしきってまで、この門を通ろうとは思わない左膳だ。すこし、まわり道になるが、引きかえして、浅草橋をわたり、右にまがって、神田川にそってくだれば、三丁そこそこで、柳橋だ。

左膳はすなおに引きかえし、浅草橋をわたり、右にまがろうとしたとき、

「あッ、もしッ、若君様ッ」

不意に、横あいからとび出してきて、こう左膳を呼びとめたものがあった。いなかから出てきたらしい、老武士だった。若党がひとり、そのうしろについている。左膳は、たちどまり、ふりかえったが、このような老武士をみるのが、はじめてであったから、

(呼ばれたのは、自分ではあるまい)

と、そのままにあるきだそうとすると、その老武士は、飛びこむように、左膳のそばへ駆けつけ、その衣装の腰のあたりをつかんで、

「若君様には、このような、変わられたお姿になられて、もったいない」

おろおろ声で、もう泣かんばかりの様子をみせ、

「江戸は、駒形から、浅草、蔵前のあたりに隠れていられると、風のたよりにきき、この大和は、おさがしにまいりました」

松代城の首席家老、朽名大和（くちなやまと）であった。去年の夏、脱城した真田鶴太郎のすがたを、駒形あたりに見うけた、という風のたよりに、こうして捜しに来たのだ。が、もとより、左膳は、真田鶴太郎ではなかったから、そのようなことは知るべくもなかった。ただ鶴太郎にとてもよく似ている……というにすぎない左膳だ。左膳は、朽名大和にすがられ、すっかり困ってしまった。

「人違いでござろう。拙者はおみを知らないが」

左膳は、ほんとうに知らない、といった顔でこたえると、大和は、

「朽名大和をお見わすれでございますか。若君様のご幼少のころより、お守り役をつとめ申しあげた、大和のじいめにございます」

必死になって、つかんだその手を放そうとはしない。

「困ったぞ。拙者は、両国の芸人で、左太郎と申すものだ。放せ」

「まだ、お逃げあそばす、お心でございますか。芸人が、なぜ、そのような武士ことばをおつかいになるのです。余人の目は、それでくらますことができましょうが、このじいの目には、まだ、くろいところが残っておりますぞ。若君様ッ……なにとぞ、ご帰城なされてくださりませ」

「拙者は、若君様ではないから、ご帰城はかなわぬ」

左膳が、大和の手をふり放って、柳橋のほうへゆこうとすると、大和は、左膳のまえへまわり、それをさえぎり、

「なにとぞ……なにとぞ」

と、からくり人形のように、いく度も頭をさげつづけ、

「大殿様には、あすともしれぬご重態……もし、万一のことがございましたなら、それこそ、それこそ松代城の一大事にございます」

「拙者は、一介の道化。城が、どうの、こうのときかされたところで、どうにもできるものではない」

左膳には、そう答えるより、返事のしようがなかった。しかし、大和は、ますます左膳へくいさがって、一歩も退こうとはしない。

「若君様が、脱城あそばされたお気持ちは、この大和にも、よくわかりまする」

「拙者、脱城など、いたした覚えはない」

「脱城なされたればこそ、若君様には、このようなところにおられるのではござりませぬか。が、大殿様ご重態のいまとなりましては、若君様を、一刻も江戸の地におきまいらせるわけにはゆきませぬ。松代城は、いまや破滅の一歩てまえにござりまする。るいらんの危うきとは、いまのわがお城のことにございます。若君様ッ……鶴太郎君さま……なにとぞ、なにとぞ、ご帰城のほどを！」

「大和どのとやら」

と、左膳は、もてあましたように言った。

「それは無理というものでござるぞ。若君様でもない一介の浮き草浪人の拙者に、帰城せよとは、やぶにすむスズメに、クジャクの小屋へもどれというのと、同じことでござる」

「若君様には、これほどお願い申しましても、まだお城をお見すてあそばすお心……もう、こうなれば、ぜひもない——それ常平」

「はいっ」

と、若党の常平が、駆けよって左膳のうしろから組みつくのを、

「困る！」

左膳は、はらりと、それを振りとばし、いきなり浅草御門のほうへ、すっとんだ。この珍妙なあらそいを、御門の下で、ぼんやりとながめていた門番は、左膳が、いきなり御門のうちへ逃げこんできたので、

「あ、もしッ、ここを通っては」

と、とがめているうちに、左膳は、はやくも御門のマス形を右に左にくぐりぬけ、向こう側へすっとんでしまった。それは、ほんの、あっという間のことであった。つづいて、大和と若党が、

「あ、もしッ、若君様ッ」

と、追っかけて、これも御門を抜けようとするのへ、

「待て、待て……ここは、通ること相ならんぞ！」

四人の門番も、控えからとび出してき、大手をひろげ、大和と若党をさえぎった。

「お通しくだされ、あのおかたをぜひおつかまえしなければ……」

「ならんと申したら、ならん。あれは気違いじゃ」

「いえ若君様でございます」

「こやつも気違いらしい。あのような道化を若君じゃなどと……ならん、ならん。たって通ろうと申すなら、からめとるぞ」

「お通しくだされ。かの君をさがして、きょうで幾日、どんなに苦労しましたことやら」

大和が、必死に頼みこむのへ、門番のひとりが、

「やつは両国の見せ物小屋へでている、芸人じゃ。会いたくば、向こうの」

と、川下の柳橋をゆびさし、

「柳橋をわたって、その小屋をたずねてまいられい」

「その見せ物小屋は、なんという小屋で、ございましょう」

門番は、ちょっと首をかしげてから、答えた。

「当今、あのような、異国まがいの芸人のいるのは、おらんだ座か、からくり座かの、いずれかじゃ」

「かたじけない」

大和は、老いの腰を一つぺこんと折った。いかに信州のいなかから出てきたとはいえ、かりにも二千五百石をちょうだいにおよんでいる、家老筆頭である。このような門番ふぜいに、気違いあつかいされて、すごすごとひきさがることはなかったのだが、いまは松代十万石のために、また、脱城して、身をかくしている若君鶴太郎のために、なにごともたえ忍ばねばならぬ、大和だった。神田川にそって、とぼとぼとあるきながら、大和はなさけなさそうな顔をし、若党の常平に言った。

「若君様も、ずいぶんと、お変わりになられたものじゃ。松代十万石のお世継ぎの君が、あのような服装に身をかえられ、芸人のまねごとをしていられるとは」

「しかし、ご家老さま」

と、常平は、いった。

「若君様は、なみなみならぬご苦労をなされていられるご様子で、ございます。が、あのご苦労こそ、この上もないとうといものなのでは、ないでしょうか。なぜなら、ああして、市井にあって身につけられたご苦労は、やがて、松代十万石のおん主となられたあかつきにおいて、日輪さまのように、生き生きと光ってくるからでございます」

## 見越しの松

浅草御門から、筋違御門のあいだを、柳原どおりという。神田川にそって、緑の土手がつづき、柳の木が配置よく植えられているので、柳原土手どおり、とも、世人はよんでいる。夜は、つじ斬り、追いはぎがあらわれたり、夜鷹のかせぎ場になったりするので、普通の人間は、ここを通ることを、あまりこのまないから、昼にくらべて、夜のさびしさはひとしおである。

が、日中は、ここは人通りがなかなかおおい。土手と柳と、神田川の美しい水と……それらの良きながめを賞して、ぶらぶらあるいていても、けっこうたのしいのに、浅草橋から神田

のほうへゆくにはうんと近道となるので、いそぎの者は、ことに便利がって、ここを利用する。いまは冬枯れの季節だから、土手の柳も、土手の草も、まだ緑の葉はつけていない。すべてのながめは、荒涼としているが、神田川にうつる、白壁の土蔵の倒影は、さすがに江戸情緒をうかべて絵のように美しい。

「あ、もし、さ様」

左膳は、声をかけられて、ふっと立ちどまった。土手の枯れ柳の下である。浅草御門を、柳原どおりへ抜けた左膳は、いつか、この土手どおりを歩いていたのだった。首から上は、五分さかやきの、従来の浮草左膳だが、着ている衣装は、道化であることは、そのままであった。

そんな左膳をみつけて、さ様などと呼びかけるのは、だれであろう。女の声だ。左膳には、そんな心やすい、知りあいの女はいない。ふりかえって、だれやらん、と左膳は、おのれをよんだ女をながめた。お蝶だった。鳥追いのお蝶が、土手の下に立って、えんぜんと笑いかけている。きょうは三味線を、横にかかえてはいない。

「お蝶か」

左膳は、女の顔をすぐに忘れてしまう人間なのだが、お蝶だけは覚えているとみえて、お蝶をみとめると同時に、お蝶の名をよんだ。

「うれしいわね、さ様」

と、お蝶は、左膳へちか寄ってきて、ほんとうにうれしそうに、

「久しぶりなのに、わたしの名まえをすぐに呼んでくださるなんて」

「名まえをよばれると、うれしいのか」

左膳は、相変わらず、浮き草みたいに、のそっとした、いいかたをする。

「そりゃうれしいわ。顔をみて、ハテナ？　だれだったかしら？　てな顔をされたら、寂しからね」

「犬のようなやつだな、おまえという女は」



「犬ですって？　あたしが」

「犬は、人間に名まえを呼ばれると、うれしがって尾を振り、そして呼んだ人間のそばへ寄ってくる」

「ひどいことをおっしゃる、さ様ですことね。相変わらず、お口がわるい」

「三味線は、すてたのか」

お蝶は、すっかり鳥追いの姿から足を洗って、なかなかいきなふうをしていた。

「もう三味線はやめてしまった。ね、さ様、あたし、さ様にあやまらなくてはならぬことがあるのよ」

「拙者には、おまえのような女にあやまられる、悪いことをいたした覚えはない」

「あやまるというのは、あやまるほうに、悪いことをした覚えがあるからなんですよ。つまりですよ、あたしが、さ様にたいして、とても悪いことをしているので、それについてのおわびをしたいンです」

「拙者には、いっこうに覚えはないが」

「さ様に覚えはなくても、あたしに覚えがあるんですから」

お蝶は、のうえんな双眸を、左膳へそそいで、

「とにかく、あたしの家へ、おいでくださいまし。いまは、すっかり堅気に立ちかえっている、あたしなんだから」

「いまは堅気、というと、以前は柔らかだったとでもいうのか」

「クラゲじゃあるまいし、柔らかいからだなんてありませんよ。むかしは、曲がっていたが、いまは、まっすぐに、おてんとさまの下を歩けるからだだといってるンですよ」

お蝶は、左膳の懐中から、紙入れをすりとったことについて、いまでも、左膳に、すまない、とおもっている。左膳の懐中から紙入れをすりとったがために、左膳はついに道化師にまでおちてしまったのである。左膳を、道化師においおとしてしまったのは、自分である……

と、お蝶は左膳にたいして、たいへんな罪をおかした気持ちでいる。からくり座へ出かけていって、左膳のまえに手をついて、そのことを打ちあけ、あやまろうと考えたことも、幾度かあった。が、それは、おもいとどまった。

「あたしは女スリで、さ様の紙入れをすったのは、あたしです」

そんなことは、お蝶は自分の口から、とても言えなかった。それを言えば、いくらのんきな左膳でも、自分にあいそをつかすに、ちがいない。それがこわかった。お蝶は左膳の懐中から、紙入れをすりとってしまってから、左膳を好きになってしまったのだ。因果な話だが、好きになってしまったものは、しかたがない。そこで、お蝶は堅気になる決心をし、地獄虫の三太とも決別し、両国かいわいも、うろつかず、いまは、あるりっぱな武家のかこわれ者となって、見越しの松の奥におさまっているのだった。

これも、お蝶らしい考えかたであった。左膳に好いてもらうには、堅気になる必要がある。堅気になるといっても、手に職のない女の身では、生活してゆく必要上、どうしても妻という職業につかなくてはならない。

（人さまの女房になってしまえば、さ様を好きになっているわけにはいかない）

そこで妻という名の席にすわることをやめて、囲われ者……いま流にいえば、二号さんになることにしたのだった。おめかけさんなら、うわきしても、さしつかえはなかろう、というのが、お蝶の解釈だった。

郡代屋敷の白壁が、ながく、ながく、道にそって続いている。お蝶は、左膳といっしょにあるきながら、

「あたし、いま、見越しの松の奥におさまっているのよ」

と、こう言ったら、左膳がどんな顔をするかと、そっと左膳をみあげた。しかし、左膳には、見越しの松というものの、意味がわからなかった。

「見越しの松の奥……というと、植木屋の奥にでもいるのか」

「見越しの松をごそんじでは、ないンですか、さ様は？」

「そんな松、どこにはえているのか」

「さ様は、切られ与三郎を見られたことがおありの？」

「ない」

「お富さんの住んでいる家の表べいのうちに、松がはえているの。そういう松のことを、見越しの松というのよ」

「表べいのむこうに見えるのを、見越しの松というのか」

「さ様は、案外に世事にうといのね」

「すると、裏べいのうちに見える松は、見返りの松か？」

「裏べいからは、たいていの家は、松の木は見えませんよ」

お蝶は、左膳の、俗事にうといのをあきれながら、

「あたし、レコを持っているンですよ。悪くおもわないでね」

と、右手をこぶしにしてさし出し、親指を一本だけ、たててみせた。

「レコとは、なんだ」

「レコって、これのことよ」

お蝶は、立てた親指をうごかしてみせた。

「おやゆびなら、拙者も持っている。親指をもっていて、悪いというわけはない」

左膳も、お蝶をまねて、おやゆびを立ててみせた。

「どういったら、さ様にわかるのかしら」

お蝶は、なかなかに通じない、左膳の天衣無縫ぶりに業をにやして、

「とにかく、その、見越しの松のある家へ、おいでくださいましな。来てくだされば、なにもかもわかります。そのうえで、あたし、さ様に

あやまるものは、あやまりますわ」

和泉橋を近くにみて、ふたりは左へまがり、富田帯刀の屋敷を右にして、しばらくゆくと、松枝町に出る。

「ここは松枝町……この裏手にお玉ガ池があるのよ」

お蝶は教えた。お玉ガ池ときくと、左膳は師の千葉周作のことをおもいだした。千葉道場は、お玉ガ池の近くにあったからだ。

「おまえの家から、撃剣の音がきこえるか」

「あら、どうして、それをご存じで？」

お蝶は、びっくりしたような顔をし、左膳をふりかえった。

「千葉周作先生は、先年なくなられて、いまは、成政どのが、道場を……いや、北辰一刀流を継いでいられるはずだ」

世事にはうとくても、こと武道の話となると、左膳はなかなかにくわしい。もっとも、左膳は、そのむかし、千葉道場の四天王のひとりだったのであるから、千葉道場のことに、くわしいのは、あたりまえだった。

お蝶は、ますます、左膳をたのもしそうに仰いで、

「さ様は、なんにも知らないふりをしていて、なんでも知ってらっしゃるのね。あ、ここですよ。ほらこれが見越しの松よ」

「ただの松だな……枝ぶりも、たいしたことはない」

「見越しの松に、けちをつけるもンじゃありませんよ、さ様。見越しの松というものは、その家のあるじを表わしているものだから……この家のあるじは、あたしですからね。あたしに、けちをつけていることになりますよ」

お蝶は、冗談まじりに、そんなことをいって、

「さ、どうぞ、ご遠慮なく、おはいりくださいませ。家には、ばあやがひとりいるだけよ」

「はいって、どうする」

左膳は、まだ、見越しの松を見上げている。



お蝶は、わらって、

「どうせ枝ぶりのわるい松なんですから、いくらごらんになっても、急に良い枝ぶりにはなりっこありませんよ。さ、はいりましょう。一献あついところを、さし上げたいの」

「おまえが、見越しの松の本尊だとすれば、本尊のほうが、ずっと枝ぶりがよい」

「あたしの枝ぶりをほめていただいてありがとう」

おせじなんてものを、薬にしたくても言ってくれない左膳が、お蝶のほうが、ずっと枝ぶりがよろしい、とほめてくれたので、お蝶はとてもいい気持ちである。左膳を招じいれると、さっそくばあやにいいつけて、酒さかなの用意をさせる。見越しの松があるだけに、なかなか、しゃれた構えの家であった。

「ね、さ様」

と、お蝶は、小娘のように、甘えた声をだして、

「そのお道化の衣装、お着替えになってはどお？」

「着替えは持っていない」

「お出ししますわ」

お蝶は、次の間へいって、たんすを、かたことと音させていたが、やがて絹物の衣服を、一そろい両手にささげて、もどってきて、

「そんな妙なもの、お脱ぎなさいませ。これを召して、きょうはゆっくり、おくつろぎくださいな」

かいがいしく……と、いうよりは、まるで、タケノコの皮でもはぐように、左膳の道化衣装をばりばりはぎとり、やわらかずくめの衣装に着かえさせてしまった。

「やっぱり、さ様は、こういうふうに、ちゃんとしたお召し物を着ていられないと、いけませんわ」

左膳を、長火ばちのまえにすわらせ、お蝶はいかにもうれしそうに、また、幸福そうな顔を

してみせた。
熱い酒が出て、手作りながら、ばあやの心をこめたさかなが、二、三さらならべられる。
「良い酒だ」
二、三杯つづけて飲んでから、左膳は酒をほめた。お蝶はうれしそうに、
「酒の枝ぶりと、あたしの枝ぶりと、どちらが良くって？」
と、聞く。
「酒だ」
「もう、ついであげないから！」
「ひとりでつぐ。そのほうがうまい」
「あら。女手がないわけじゃあるまいし、殿方が独酌をなさるなんて……」
やっぱりお蝶の負け。お蝶はあわてて、ちょうしをとりあげる。
「あたし、ほんとに、さ様にあやまらなければならないことがあるのよ」
杯がすすんだころ、お蝶は、酒の酔いを、おのあたりに赤くうかべながら、ふたたび例のことを言いだした。
「さっきから、あやまるあやまると、まったくうるさい女だ。あやまることがあったら、さっさとあやまってしまえ」
左膳には、そんなことは、どうでもよかったのである。うまい酒をのんでいる横で、口さきばかりで、あやまるあやまる、とそればかりを、くりかえされることが、うるさかったのだ。
「でも、ちょっと、いいにくいのよ。あやまるのは、わけのないことだけど、そのわけをいうのは、ちょっと……」
左膳の懐中から、紙入れをすりました、ということは、お蝶のような女といえども、ちょっと口にしにくかった。
「言うのがいやなら、言わずにおくがよい。別にききたくない」
「でも、言わなければ、なにがゆえにあやまるのか、さ様にはわからないでしょう」



「では、言うがよい」
「恥ずかしい。そのために、あたし、さ様を道化にしてしまったのだもの」
「拙者が道化になったのは、お紋どのから、二分十七文の借金をしたからだ」
「その借金をなされる原因を、あたしが作ったのですもの」
「借金した原因は、だんご代とハチを多数斬った、その弁償金がなかったからだ」
「そうなる、もとを作ったのが、あたしなのよ」
「はて？」
左膳は、しばらく首をかしげていたが、やがて、ははンと思い当たることがあって、
「なるほど、わかった」
「おわかりになって……あんな恥ずかしいことをしまして、すみません」
「恥ずかしがることもあるまい。小娘じゃあるまいし」
「え？」
「スミレの花の上をとんだとき、花の奥を、チラリと見せたことであろう。あれを見たために、ばちがあたって、拙者は紙入れをおとし、そのうえハチに追われ、さんざんな目にあったわけだが、それならば、むしろ、それを不覚にも、チラリと見た拙者のほうが、あやまらなくてはならぬわけだ」
「なんのこと、それ？」
お蝶は、スミレの花の上をとんで、しりもちをついたとき、不覚にも花の奥をチラリと披露してしまったことについて、あのとき、気がついていなかったのだ。だから、いまごろ、それをいわれても、ピンとこないのである。
「そのようなことを、くわしく説明するわけにはいかん」
左膳は、ひとりでついで、杯を干しながら、顔をすこし、しかめた。
「真相を打ち明けることなしに、とにかく、すみません——と、こうあやまってゆるしていた

だくことにして、そのかわり、あたし、さ様によろこんでもらえることを考えたのよ」
「よろこぶか、よろこばぬかは、聞いてみなければ、わからん」
「さ様に仕官していただこうと考えているのよ。さ様なら、きっと千石くらいはもらえるわ」
「千石が五千石でも、拙者はよろこばぬ」
左膳は、お蝶の好意へ、あっさりとこたえた。
「拙者は、浮き草の、気ままなる身を愛するからだ。たとえ、千石でも……」
と、大きく出て、
「……たとえ千石でも、禄をちょうだいにおよべば、浮き草はどこかの岸にしばりつけられてしまう。そのような窮屈な浮き草なら、拙者はごめんだ」
それよりも、こうして、なんの気がねもいらない、浮き草の身で、すきな酒をのんでいるほうが、自分の性に合う——とばかりに、左膳は、ひとりでつぎ、ひとりで飲む。

「さ様って、ほんとに欲のないおかたね。あたし、さ様にたいして、罪をつくっているので、その罪ほろぼしのために、旦那様にお願いして、りっぱに仕官の道を開いてあげようと思っていたのに」
お蝶は、左膳の無欲てんたんにたいして、不満そうな顔をみせて、
「両国の小屋で、お道化をしているより、千石とりのお家来さんになっているほうが、どれほどりっぱか、わからないわ……。千石とりになれば、酒なんか、毎日一斗でも飲んでいられるのに」
「一斗はいらん。一日二升あれば、拙者それで満足」
左膳は、酒にも、欲がないのらしい。
「お道化さんでは、毎日二升は飲めないでしょう」
「日に二升飲ます、という約束で道化をやっている拙者だ。そのかわり、金は一文もない」



文なしであることを、自慢にしているらしい様子である。
「見物人の笑いものになって、それで二升あて毎日のませてもらうより、千石とりのお家来になって、自分の力で二升酒を毎日のむほうが、どんなにりっぱで、男らしいことかわかりませんわ」
「そんなに、千石に執着するのなら」
と、左膳は、お蝶へ言った。
「おまえが千石をもらって、そのうちから、毎日二升ずつ、酒を拙者のところへ運んできてくれ。それでも罪ほろぼしにはなる」
「あたしでは、千石はもらうことできないわ」
「旦那とかいうものに頼めば、くれるのではないか」
「旦那様は、江戸家老だから、相当の権力はあるけど、女のあたしを、千石に引き立てるということはすこし無理よ」
「無理なら、やめるさ」

左膳は、どこまでも、どじょうのように、つかまえどころのない人間で、およそ、ものごとに逆らうということは、左膳のとらざるところであった。
「さ様って、ほんとに、こんにゃくみたいなおかたね。力を入れようと思っても、入れようのないかただから、たよりないわ」
お蝶が、そう言いながら、たよりないおもいで、左膳へ酒をつぎにかかったとき、玄関に、だれかがやって来たらしい物音がし——お蝶が、おや？　と首をかしげると同時に、すっと、ふすまがあいた。長火ばちにすわっていた左膳と、ふすまをあけて姿をみせた、不意の来訪者とは、期せずして顔をむかいあわす仕儀となった。四十七、八。どっしりとした、いかにも貫禄をかんじさせる、重々しい態度をそなえた人物であった。それが、左膳の顔をみるなり、なんと思ったか、あわてて一歩ひきさがり、ふすまの向こうに、ぺたりとすわると、

「こ、これは……わ、若君様には……いつ、か、かようのところへ？」
何べんも、頭をたたみへつけて、恐縮のあいさつ。左膳には、なんのことか、さっぱり、訳がわからなかった。訳がわからなかったから、宙にうかした杯を、宙においたまま、
（あれは、だれか？）
と、目で、お蝶へきいた。それで、お蝶もはじめてふりかえって、
「あら、父様は、きょうはいらっしゃる日ではなかったはずなのに……どうして、こんなに突然おいでになったの？」
「いや、その、それがし……」
ふすまの外で、不意の来訪者は、ひどく、しどろもどろであった。しきりに、左膳へ、カラクリ人形のように、腰を折っている。お蝶は、そこで、来訪者を、左膳へ紹介することにした。
「さ様。このかた、あたしの父様なの」
「とう様、というと、おまえの父親か」
「とう様というのは、父親という意味のとう様とは違います。なんといったらいいか……とにかく、見越しの松のあるじは、こういうかたのことを、みんな父様と呼ぶのよ。近ごろの流行なんですの。早くいえば旦那様」
「他人だが、とう様――それが旦那様か」
左膳は、そういいながら、来訪者にむかって、
「拙者は……」
と、名のりかけると、来訪者はあわてて、それを押しとどめるように、手でさえぎった。
「お名のりあそばされるのは、もったいない儀に存じます。この剣持源太夫めには、存じあげておりますれば……」
来訪者は、松代藩の江戸家老、剣持源太夫だった。
「しかし拙者には、そこもとは、はじめて会う顔だから、一応名のらずばなるまい」
「いえ、めっそうもない。若君様には、拙者めを、よくごぞんじのはず……それを、おからかいに……」



「けっして、からかったりはいたさぬ。それにしても、きょうは妙な日じゃ。朽名大和と名のる老体につかまえられ……」
「や、大和どのにも、お会いでござりますか」
「つかまえられたが、うるさいので逃げてきた」
「大和どのだけでは、ござりませぬ。この剣持も、数カ月まえから、人をつかわし、駒形、浅草あたりをお捜し申しておりまして、ございます」
どうやら、真田の江戸家老、剣持源太夫も、左膳を、真田鶴太郎とまちがえているのらしい。かれはおのれの妾宅に、その若君様が、でんとすわっているので、すっかり恐縮しているのだった。
「とうさま」
と、左膳はお蝶のことばをまね、ふすまのむこうの源太夫をよんだ。
「そこでは話もしにくいゆえ、こちらへ」
「かたじけのう存じまする」
剣持源太夫は、ますます恐縮して、冷や汗をながし、お蝶をうらめしげに、見やった。左膳には、しかし源太夫の、そういう苦衷はわからなかったから、
「いま、このお蝶から、仕官をすすめられていたところじゃ。このお蝶の旦那というのが、江戸家老ゆえ、それに頼めば、千石でも、二千石でもくれるであろう……というのだ」
「さ、さようの儀、もったいのう存じます」
「しかし、拙者は仕官はきらいゆえ、こうして浮き草の身でいるのじゃ」
「しかし若君様」
と、剣持源太夫ますます肝をひやして、
「それでは、家臣一同の苦衷がいつまでも解けませぬ。なにとぞご帰城のほどを……」
「大和と同じことを申すではないか。まるで口を合わせているようだな」
「家臣としては、だれしも、心は同じでござりまいに……」

ます。したがって、申し上げることも」
「だが、源太夫」
「はっ」
「拙者は、一万石が十万石でもいやじゃ。十万石よりも、浮き草の身が拙者にはとうといのだ」
左膳は、ますます大きくでるのだった。それがまた、剣持源太夫の腹のそこへ、ぴしりぴしりとひびくのである。はじめは、千石が五千石でも、仕官などというものはいやだ、と言っていた左膳だが、そのうち、だんだん気が大きくなってきて、五万石が十万石でも、いやだという。これはことばのハズミというもので、左膳といえども、まさか自分に、五万石の十万石のと、そのような知行をくれるやつがいようとは思っていないのだが……酒をのんでいるので、つい数字を一けたまちがえてしまったのである。
しかし、真田藩の江戸家老、剣持源太夫にしてみれば、左膳のそういう大ボラが、ホラや冗談とはきこえなかったのは、無理からぬことであった。若君、鶴太郎とそっくりの人間が、自分の着物を着て、自分の妾宅へ来て、どっかとあぐらをかいて、長火ばちのまえで酒をのんでおれば、これは驚かないわけにはいかない。しかも、その人物が、五万石が十万石でもいやだという。若君鶴太郎には、十万石の跡目をつぐ資格があるのだから、話があいすぎる。
源太夫は、鶴太郎君に、皮肉られているのだとおもった。鶴太郎君が松代城を脱けだして、江戸へ潜入し、自分たちの行動をさぐっているのだとおもった。腹心の者たちをひそかに派遣して、鶴太郎君をさがさせ、見つけしだい、やみに葬ってしもうようにいいつけている源太夫だが——こうして、おのれの妾宅に、でんとしりをすえられてしまえば、もう、手も足も出ない。そこには、十万石の跡目相続人と、江戸家老のひらきがある。ただ、恐れ入るよりほかに手はなかった。しかしお蝶は、そんなことは知らないから、しどろもどろの源太夫へ言った。



「ねえ、とうさま。このかたを五千石くらいで、殿様のお家来にご推挙なさったら？」
「これ、何を申すか、若君様に対して、もったいない」
源太夫は、お蝶を、あわててしかりつけ、左膳へ、もう一度、頭をさげると、
「むさくるしいところにござりますが、若君様には、どうぞ、ごゆるりと」
と、言上し、それから、お蝶へ目で合い図をし、玄関のほうへ、逃げるように退いていった。
「ごめんなさいね、とうさま」
源太夫のあとを追って、玄関まで出てきたお蝶が、甘えた口調で源太夫へ、留守中に、源太夫以外の男をつれこんで、酒をのませていたことをあやまると、源太夫は、落ちつかぬ口調で、
「お蝶。そなたは、あのおかたを知っているのか」
と、聞いた。お蝶は、得意げにこたえた。
「ええ。前々から存じ上げておりますわ、とうさま」
「とうさまとうさまと、あまり言うな。で、いつからだ」
「すくなくとも、とうさまにかわいがっていただくよりも前から……去年の夏から、存じ上げておりますのよ」
「どこで知った」
「中仙道……くわしくは、妙義山と安中のあいだで。あのおかたが、江戸へいらっしゃる道中でした」
「やっぱりそうだ」
真田鶴太郎が、松代城を脱け出たのは、去年の夏だ。中仙道で知りあったといえば、まちがいなくそれに違いない。江戸家老、剣持源太夫の顔をみても、忘れたような顔をしているところが憎い。それから、五万石だろうが、十万石だろうが、そんなものはほしくない、浮き草の身がありがたい——というあのことばも、皮肉のかたまりだ。自分へあてつけて言っているの

だ。そう思うと、源太夫はからだじゅうが、ぶるぶるとふるえるのを覚えた。

「とにかく、そなたは、たいへんな人を知っている。それを、とんでもないところへ連れこんだものだ」

「ほんとに、ごめんなさいね、とうさま。お久しぶりにお会いしたものですから、ついお誘いして、お酒をさしあげてしまったの」

お蝶は、源太夫へ、けんめいに甘え、しなだれかかった。

「あのおかたは、酒は相当いけるはずだ」

「二升は平気なの」

「やっぱりそうだ。毎日二升酒をあがるということはきいている」

鶴太郎は、日に二升飲まなければ納まらないことは、剣持源太夫も、よく知っている。酒の量まで、ぴたりと合うのである。いよいよ真田鶴太郎に、まちがいなしだ。

「そなたは知っているのか。あのかたは、真田十万石の若君様だぞ」

「えっ。あのおかたが？」

「そなたに、身分を明かしてはいないのか？」

「一度だって、そんなことはおっしゃいませんでした。ああ、それで、五万石が十万石だろうが、そんなものはいらん、とおっしゃったのですわ。すてきッ」

「これこれ、喜んでいないで……うんと酒を飲ましてここから出ていかれないように、もてなすのだぞ」

源太夫は、何か考えるところがあるのか、お蝶へ、そういいのこすと、そそくさと、見越しの松の下を出ていった。

## やみの目

日は、いつか、とっぷりと暮れて、ばあやがはこんできた、朱塗りの丸あんどんに、早春のあかりが、ゆらいでいる。左膳は、もう、すっかりいい気持ちに酔っていた。くちびるへはこぶ杯の速度も、かなり緩慢である。

「うちの旦那様って、物わかりのいいおかたでしょう」

お蝶は、酒をつぎながら、

「さ様が来ていられるので、気をきかして、なんにもいわずに、すぐに帰ってしまうンだからね。ほんとに、いい、とうさまですわ」

「拙者を呼ぶのに、若君などといったが、きょうはどうした天候のかげんか、二度も若君よばわりをされた。どうも気持ちが悪い」

左膳は、気もちのわるくなった胸を洗うように、ぐっと、杯をのみほす。

「いいじゃないの。若君様なんて呼ばれるのは……それが、たとえ冗談であっても」

「拙者は、若君だの、殿様だのと呼ばれるのは、あまり好きではない。西も東も、北も南もない、浮草左膳と呼ばれて、一生をくらしたい。さて、そろそろ帰るとしよう」

左膳は、杯を長火ばちのふちに置いて、腰を上げにかかる。

「あら、まだ早いじゃないの。うちの旦那様が、帰りがけに言い残してゆきましたわ。さ様を、ずいぶんともてなして、うんと飲ましておくようにと」

「いや。定量の二升を飲んでしまったから、もう帰る」

「お酒なら、まだたくさんありますのに。ねえ、ごゆっくりしてくださらない。こんなに早く帰られては、あたし、うちの旦那様にしかられますわ」

「剣持源太夫といったな」

「真田藩の、江戸家老さまよ」

江戸家老――というのを、お蝶は自慢なのらしい。

「源太夫に言っておけ。残りの酒は、あしたまた飲みにくると」

「まるで、若君様みたいな口をきくのね」

「胸の悪くなるようなことを、言うな」
左膳は、立ち上がった。
「つまんないのね。どうしてそんなに、お帰りをいそぐの……それじゃ、浮き草でなくッて飛脚だわ。浮き草は、こっちの岸へつけば、一日一夜くらいは、こっちの岸で泊まるものよ」
「こんど来たとき、泊まる」
「うまいことばかりいって、ほんとに、さ様って憎いひと」
「拙者の衣服を出してくれ」
「あんな道化の衣装、すててしまいなさいよ。これを着たままで、お帰りになって、よろしいのよ」
それから数分ののち、左膳は見越しの松の家を出て、帰路についた。お蝶は、酔った左膳を案じて、もつれるように、まといついてはなれない。
外は暗い。柳原の土手道は、あかりがないから、さらに暗く、
「気持ちの悪い道ね」
「気持ちが悪かったら帰れ。夜道は、ひとりあるきのほうが、こちらは気持ちがよい」
空には、星が澄んでいる。どこかで、フクロウが鳴く。あしたもよいお天気らしい。
「あたし、帰り道がこわい」
お蝶は、左膳へからだをすりよせて、そんなことをいう。
「帰り道を、拙者に送ってもらいたい、というなぞか」
「さ様って、ときどき、物わかりのいいことをおっしゃるのね」
「だが、送ってはやらんぞ」
「あら。それじゃ、なんにもならないわ。いくら物わかりのいいことをおっしゃっても」
「帰り道がこわかったら、ここから帰れ」
「はくじょうな、さ様」
お蝶は、とうとうたち止まってしまった。これ以上おくっていっても、帰りを送りかえしてくれそうもない左膳、とみてとったからだ。
「お酒のこしておきますから、あしたまた来てくださる？　そして、あたしに会ってくださる」
「おまえには、べつだん会いたくはないが、酒になら、会ってもよい」
「あんなことばっかり言って」
お蝶は、あきらめて、左膳から身をひくと、
「お願いだから、あすこの常夜灯のところを曲がるまで、ここで見ていてくださらない？」
ずっと向こうの、いま通って来た道の、まがりかどに、常夜灯が一つ、淡い光をやみのなかにうかべている。
「ここに立っておれば、よいのだな」
「みていてくださると思うと、心じょうぶなの、じっとみていてね」
お蝶は、まるで小娘のようにこわがって、くらい中を走っていった。左膳は、じっと立って、それを見守っていたが、ちょうど、お蝶の姿が、向こうの常夜灯の灯に、浮き出されたとき、突然、
「わッ――!」
と、大きな声を、一つ発した。お蝶はその声をきくと、こわいこわいとおもって走っていたものだから――すっかり肝をつぶし、
きゃッ！　と、さけび、
「いやっ！　さ様っ」
石を投げつけられた小犬のように、足もとを乱して、町家通りへ逃げこんでいった。左膳は、お蝶の肝をつぶさせようとして、大声をだしたのではなかった。お蝶のたのみに応じて、くらい中に立っていると、いきなり、
ヒュ……ン！
と、何かが飛んで来たので、それをかわした拍子に、つい大声がでてしまったのであった。
やみを突いて飛来したのは、どうやら、手裏剣らしい。左膳がかわすと同時に、うしろの柳の木へ、ブスッ！　と刺さった音がしたので、それとわかった。左膳は、すばやく身をかがめ、

手裏剣のとんで来たほうをすかしてみた。くらいから、何も見えない。が、しばらく、じっとひとみをすえていると、どうやら、道の向こうに数人の人間がひそんでいるらしい様子が、感じとれた。

（殺気がある）

左膳は、剣の修業から学びとった、夜の襲撃から受ける、異様な殺気につつまれているのを、ハッキリと酔いの頭に意識した。酒をのめば、酔う。もっとも、酒は、酔わんがために、飲むのだそうだから、酔うのは目的を達したことになるわけだが、人によっては、酒にのまれてしまって、まったく訳がわからなくなるのがいる。が、左膳は、酒はのんでも、酒にはのまれない。

定量の二升をのむと、いささか足もとが狂うが、しかし、これは酒にのまれてのくるいではなく、左膳は、そういう足もとの狂いをたのしんでいるわけで、足もとがすこしふらつくと、やっと、酒をのんだかいを覚えるのである。だが、左膳は、剣士である。いくらおぼつかない足もとをみせて歩いていても、身辺に危険がせまれば瞬間にして、その足もとがしまってしまう。酒にのまれていない証拠だ。つまり、ふらふらした足もとを、たのしんでいるゆうちょうさが、ゆるされないことを、瞬間にさとるわけである。左膳は、暗いなかを、じっとうかがった。修業をつんだひとみには、うすぼんやりと、なにやらうごめくものが、かなたに見える。

ひとり、ふたり……と、影のような黒いものを数えていって、おおよそ、十五、六人とかぞえとった。

殺気が、これまでにない、きびしさをもって、左膳のからだをつつんでくる。

（相当の決意をもって、むかっているものとみえる）

左膳は、身に寸鉄もおびていないから、敵の出かたによって、それに対抗し、りんき応変の処置をとらなければならない。こちらから、敵をむかえ討つ、などという策は絶対にとれない。左膳は、たよりない、無腰の腰へ左手をあてて、なおもやみをすかしてみた。刀を帯していない場合は手を腰へあてているだけで、なんとなく、腰にしまりの出ることを、左膳は長の経験で知っている。

（これほどの殺意をもって、迫って来られたことは、かつて覚えのないことだが——こやつらは、いったいなに者であろう。おれは、人に恨みを受けることをした覚えはないが）

人違いだとすれば、双方とも、つまらないめにあわなくてはならない。

（まちがえたものも、まちがえられたものも、あとで、バカをみなくてはならない。よし、これも兵法の一つ……ここで、ためしに、とん走の術をつかってやれ）

左膳の兵法は、逃げることであった。両刀をさしていなければ、武士として堂々と戦うことはいるまい。おれはいま道化として生きているのだから、三十六計、しりに帆を上げて逃げ出して笑われたところで、恥ではあるまい。元来、道化とは笑われるものだ。左膳は、こよいは妙に逆らいたくない気持ちのほうが強かった。

「えいっ……やあ——ッ」

ありったけの声をしぼって、やみの中に光る目にむかって駆けだした……とみせかけ、左膳はくるりと身を翻すと、浅草橋のほうへ疾風のように逃げ出した。その身の翻しかたのすばやかったこと——、

すると、くらい中から、

「逃げたぞ——投げい」

そういう叫び声が、起こったかと思うと、追ってくる足音とともに、

ひゅう……ン。風をきって、何かが飛んで来、左膳のすぐうしろへ、そいつが落ち、落ちたかとおもうと、地上をはね上がって、左膳の足もとへ、からんできた。何がとんで来たのか

は、左膳はもちろんわからなかったが、そいつが、地に落ちたときの音が、金属的だったので、とっさに、左膳は走りながら、

「えいっ」

と、一間ばかり向こうへ跳躍をした。地上をはねた、その飛んで来た物は、跳躍している左膳のすぐ下を、びゅん！　と向こうへ風をきって消えた。そのとき、地上の流星かとおもうほど、その物品は白く光って、光の尾を引いた。

「刀だ」

左膳には、すぐに、それが刀であることがわかった。すると、続いて、えい、えい、えいっ、と気合いが、うしろのほうに起きて、白刃が左膳のあしもとをねらって、とんできた。左膳は、また、走りながら、跳躍をした。跳躍しなければ、白刃が足にあたるからだ。いくら左膳の足でも、白刃にからまれては、たまらない。

「やっ」

と、飛び上がったり、

「えい」

と、横へすッ飛んだりしながら左膳は、なおも走り続けた。

走る左膳の足もと近く、また、前後左右を、白刃が、浜辺へ投げだされたサンマのように、白くはねた。

「脇差しを投げている」

左膳は、そうみてとると、

「脇差しの刃で、おれの足をとっておいて、追いついてから、大刀でやるつもりだな。しかし不思議な戦法だ」

左膳は、あきれながら走った。人を襲うのに、脇差しを抜いて、うしろから投げつけるという戦法はこれまでに、きいたことはない。すくなくとも、刀は武士のたましいであり、脇差しは母にあたる。そのだいじな刃を抜いて、相手の足もとをねらうというのには、敵はよくよくの決意で、のぞんでいるのに相違ない。

一本の刃でも、相手の足にふれれば、相手は



傷ついて倒れるであろう。そこを追いせまって、斬ってしまう。十五、六本に一本くらいは、逃げる相手の足を払うに違いない——と、敵は計算しているのだ。必死ぶりが、うかがえるというものだ。

左膳は、右へはねたかと思うと、左へすッ飛んで逃げる。敵は脇差しをすっかり犠牲にしてでもという物量でくるのなら、左膳は逃げるのに、ジグザグ戦法を取らなくてはならない。右に左に……その幅は三間くらいにとって、左膳はたくみにとん走を続けた。とん走をつづけているうちに、白刃の追跡がとだえてしまった。敵は、投げつけるべき脇差しを、すっかり投げつくしてしまったものとみえる。しかし、追跡の足音はへらず、ぐんぐんと左膳のうしろへ、迫ってくるのがわかった。

（あいつらは、脇差しの刃を収拾せずに、おれを追ってくる気だな。刀をそまつにする者に、ろくなやつはいない）

走りながら、左膳はそんなことをおもった。一本も左膳の足にふれなかったのだから、けっきょくは刀のすてぞんというわけだ。白刃投げの戦法は、図にあたれば、効果的だが、紙一重の差ではずれては、効果は皆無である。脇差し投げの戦法に、失敗した敵は、さらに必死となって、おのおの大刀を抜いて、追いせまった。

大刀をかざして走ってゆくと、大刀が風をきるので、それが、十五、六本も、いっしょになってすすむと、不思議なうなり声を生じるから、左膳は走りながらでも、

（抜いたな）

と、それがわかった。新シ橋を左に見、右に郡代屋敷のながいへいをみて、その下を駆け抜けると、そこから浅草御門との中間のところにある番小屋の灯が近づいて来た。番小屋は、土手のすぐ下に、一軒ぽつんと建っていた。夜のつじ斬り、夜の女などを見まわるためにある小屋だ。表に番小屋の標識たる大ちょうちんがつ

るされてあって、そのそばに、三人の人影が立って、何か話しあっていたが、左膳が駆けて来たので、ひょいと、三人ともふりかえった。

ひとりは、この小屋の番人で、ふたりは、例の朽名大和と、若党の常平であった。若君、鶴太郎をさがしもとめて、ここを通りかかり、番小屋で何かたずねているところなのであろう。

「やっ。若君様だ」

常平が、灯の光のおよぶ範囲ないを、左膳が駆けぬけようとしたとき、驚いたような声をあげた。

朽名大和も、左膳の姿をみとめると、おなじように、

「若君様っ」

と、呼んで、そう呼ぶと同時にまろぶようにちょうちんのそばから飛びはなれ、左膳と平行で走った。

「お捜し申しました。若君様っ。からくり座へも参りましたが、お帰りではないとのことゆえ、このあたりを……」

「大和」

と、左膳は、大和を呼んだ。きょうの昼、浅草御門のまえで会っているので、左膳は大和の顔も、名まえも覚えている。

「なにごとにござります。若君様」

大和は、こんどこそ逃がしませぬぞとばかりに、左膳の横にくっついた。

「追われている。敵は大ぜい」

「なに者に追われまして、ございます」

「わからん。刀を抜いて追ってくるらしい」

「それは、一大事！」

大和がふりかえったとき、追っ手の組が、ちょうど番小屋のちょうちんの光の中へはいっていた。ちょうちんの光のなかに浮きだされた追っ手は、いずれも黒覆面をしていたから、その顔はわからなかった。大刀を抜いていることは、いずれも同じであったし、腰には、中身のない刀のさやを、二本ずつ差していることも、



同じであった。

「若君様をねらうくせものとは、いったいなに者ッ」

朽名大和は、すばやく、刀のつかに手をかけて、追っ手へ構えた。

すると、追って来た一群の中のひとりが、大和と、若党常平の姿をみとめて、

「やっ！　ご家老だッ」

不覚にも——まったく、不覚にも、そう叫んでしまった。信州松代城家老、朽名大和をみて、ご家老だということは、おのれたちの身分をばくろすることと同じであった。

「なに、ご家老だと……おう、朽名大和どのだ」

ほかの連中も、たたらを踏んでたちどまると、大和の姿をみて、口々に驚きの声を発した。大和には、すぐにわかった。若君鶴太郎追跡の一群の、何者であることが——。

「無礼であろう」

大和は、刀のつかに手をかけたまま、黒覆面の一群へ、どなりつけるように叫んだ。

「若君様にたいして、なんたる所業ッ」

「……」

一群の人たちは、口をかんして、こたえなかった。うっかり口をひらいて、大和に、おのれの何者であるかを知られるのは、まずかったからである。——が、大和には、さっきの声から推しはかって、相手の、二、三の名まえはわかっていた。

「浅見十兵衛であろう」

その人間へあごをしゃくって、言った。

「……」

「その横のは、花村剛之丞であろう」

「……」

「その次に立っているのは、井戸弦三郎であろうが」

「……」

答えなかった。そのかわり、名を呼ばれた三人は互いにめくばせをし、

「おのれたちの暗躍のおかげで、若君様には、お城を出られ、このようなご苦労をなされているのじゃ。えい、この朽名大和、天に代わって、誅をくわえてくれるぞ」

大和は、左膳を、あくまで真田鶴太郎だとおもいこんでいるから、君のご馬前で討ち死にをする覚悟で、一群のなかへ斬りこんでゆき、むやみやたらに、刀を振りまわした。若党常平は、左膳のすぐそばに立って、左膳の身をまもった。かれは、若君のそばへは、ひとりたりとも近づけまいとする、決死のおもてを、覆面群へみせて、おおしいかぎりであった。

一群の中へ斬りこんでいった大和は、しかし老いの身では、これだけの大ぜいの刺客は、どうさばくべくもなかった。相手にとっては、もっけの幸いだった。じゃま者の大和を倒し、続いて若君をも倒せば、一石二鳥の好機にめぐまれたことになる。まさに、とんで火に入る夏の虫であった。



「斬りすててしまえ」

と、いう合い図のうなずきを、瞬時にかわしあった。名まえをいいあてられた以上は、斬りすてるよりほかに手段はなかった。毒をくわば、さらまでも、というつもりであろう。もちろん、大和を斬り、鶴太郎も斬るつもりである。近くに番小屋のあるのは、すこしつごうが悪かったが、ここはおあつらえむきの、柳原の土手道である。

「やあ……ッ」

ひとりが、とびこんでいって、大和の肩さきへ、必殺の一刀をうちおろした。が、大和も老いてはいても、この道はなかなかの巧者とみえて、ひらり、と、寸前にかわして、

「若君様に向ける刃があらば、この大和に向けよ……若君様になりかわって、かたっぱしから手討ちにいたしてくれるわ」

言い終わったときと、抜いたときと、いっしょだった。

「それッ。この機ぞ」

「おおう」

ことばかずのすくないのは、相手に、声をきかせたくなかったからのことであろう。

「えいッ」

大和の斬りつけてくるのをはずして、逆に突っこんでゆく。それを、大和がかわして、

「誅ッ」

と、斬りかえす。しかし、そのすきに、大和のうしろへ迫ったのが、

「くたばれッ、老いぼれッ」

と、その肩さきへ、太刀をうちおろす。

「いかん」

そう叫んだ左膳は、とっさに弾丸のように飛び出していって、太刀をうちおろしていった侍の手もとへとびこみ、その腕を手のひらでパシッと打った。

太刀の筋が狂って、空を斬り、よろめくのを、

「貸せッ」

左膳は、すばやく、そいつの太刀をうばいとって、

「大和どの、ご助勢もうす」

そのあいさつの終わるか、終わらないかのうちに、二、三人は、もう峰打ちで、その場へたたき伏せていた。

「若様おあぶのうございます。これしきのやつらは、この老人ひとりでかたづけられまするゆえ」

大和が恐縮して、こう遠慮するのへ、

「義によって、助太刀するのだ。まかせておけ」

左膳は、かたっぱしから、覆面群を、刀の峰でたたき伏せていった。こうなると覆面群のほうがあわてないわけにはいかなかった。朽名大和は、左膳をかばって覆面群を敵にまわしているのに、左膳はそれを見て、助太刀もうす、と、いうのである。話がまさに逆であった。

「まずい、引き上げい」

剣持源太夫の声らしかった。その声に、一群

は、あっという間にやみの中へ逃げ出してしまった。左膳は、それを追って、どこまでも刀を振り上げて、走ってゆく……とどまるところを、知らない奔馬のように。ほんの短いあいだのできごとだった。番小屋の番人があっけにとられているうちに、洪水のひくように、覆面群は、ひとりのこらず逃げ去ってしまって、あとには、朽名大和と、常平のふたりきり。

「ハテ」

大和は、やっと気づいたように首をかしげた。

「若君様は、もどっては来られぬぞ」

「いかがなされたので、ございましょう」

と、常平。

「また、逃げられたのでは？」

「助太刀などと申されて、あのまま、どこかへ姿を消されたのかもしれない」

大和はキツネにつままれたように、ぽかんとして立っていた。

くせものを追っかけていったきり、左膳は、どこへすッとんでしまったのか、いくら待っていても、もどっては来ないのだ。

「なんでした、今のは？」

番小屋の番人が、大和のそばへ寄って来て、けげんそうにたずねた。大和は、とぼけて、

「わからぬ。なにがなにやらわからぬ。めんような人間どもにおそわれたものじゃ」

「しかし」

と、番人が、

「さっきのお話しぶりでは、お互いに知っていなさるらしいご様子でしたが」

「いや知らぬ。まったくの不知のやからじゃ」

「はて？」

こんどは、番人が首をかしげるのだった。大和は松代城の暗雲問題を、このような番人に知らせたくはなかったのである。いまの覆面群の正体を話して、それが評判となって、世間へひろがるのを恐れたのである。

「申しかねますが、ちょうちんをかしてはくだ



さらぬか」

大和は、番人へいった。ちょうちんをかりて、左膳の走っていった方角を、捜してみるつもりである。

番人は、小田原ちょうちんに灯をいれて、大和へさし出し、

「お気をつけて……この通りは、とにかく物騒なところですから」

「かたじけない。ちょうちんは、のちほど必ずお返しに参じます」

お礼に、大和は、小粒をひねって番人のたもとのうちへひそかにおとし……常平をつれて、柳原の土手道をいそいだ。

追っていった左膳——いや、若君様に、万一にもまちがいがあっては、一大事であったからである。

「あ、こんなところに、脇差しがなん本もおちてございます」

常平は、ちょうちんの光に、ぴかぴかと光っている、十数本の脇差しを発見し、びっくりしたように、大和へ告げた。

「いまの連中のものに違いない。いずれも、脇差しのさやだけしか帯していなかったゆえ」

大和は、道の上を見まわして、

「常平。これを、のこらずあつめておくがよい。後日の証拠になろう、くっきょうの品じゃ」

「はい」

常平は、浜辺でサンマでも拾うように、脇差しを、一本一本あつめていった。

## 脇差し売り

ゆうべは、あれから、どこをどう江戸の町をうろついていたのか、もとより、浮草左膳のことゆえ足のおもむくままに、どこかを歩いていたのだろうから、そのことの、せんさくはしないことにして——とにかく、夜があけると、両国のからくり座だけは忘れなかったとみえて、

チャンと戻ってくるには、もどって来たが、道化服はすててしまって、帯刀なしの、着流し姿。つまり、ゆうべ、覆面の一群とたたかったままの姿で、ぶらりともどって来た。

「左太郎さん、おはよう」

道具係が、楽屋のそばで、左太郎の左膳をみとめると、こうあいさつをし、

「左太郎さん。お紋さんが、これですから、気をつけないと、あぶないですよ」

と、両手の人さし指をさしだし、額の両わきへたててみせた。

「なんだ、これとは？」

左膳も、同じく額の両わきへ、人さし指を立ててきかえした。

「鬼でさあ」

道具係は、笑いながら答える。

「お紋が、鬼になったのか」

「やっているンですよ。左太郎さんは、きのう、駒形屋のどじょうを食べにいったでしょう」

「しかし、どじょうは一匹もくわなかった」

「それは、ともかく、左太郎さんが、お紋さんをまいて、どこかへ行ってしまった——といって、夕方近くになって、お紋さんがひとりで帰って来て、ひどくおこっていましたよ」

「まかれたのは拙者だ。拙者のほうが、ずいぶん捜した」

「あれ、同じこと言ってるね」

「捜したが、お紋の姿がみえぬので、駒形から帰ってしまったのだ」

「お紋さんも、そう言ってましたよ。とにかく、大プンプンの、プリプリですよ。左太郎さん」

と、にやっと笑うと、

「お紋さんを、あんまりおこらせるとまずいですよ。なにしろ、お紋さんは、投げ剣の名人ですからね。いつなんどき、ヒュン！　ブスリとんで来ないともかぎらないからね」

道具係は、心臓の上をてのひらでたたいてみせ、ご用心、ご用心と冗談をいいながら去って



ゆくと、左膳は、お紋のおこっているということの理由がわからず、首をかしげながら楽屋ののれんを割ってなかへはいっていった。すると、いきなり、ひゅン！　とさっそく一発手裏剣がとんできて、うしろの板壁へ、ブスッと刺さって、

「だれです。いまごろ、ガマみたいに、のこのこと帰ってきた人は！」

お紋の、かん高い声に続いて、ヒュン、ヒュンと手裏剣のあいさつである。左膳は、しかしすこしもあわてず、板壁のまえに平然とたったまま、

「ガマではござらん。拙者でござる。けっして怪しいものではない」

そのまわりを、十数本の手裏剣がとんできて、板壁につきささるのだが、左膳には一本も当たらない。お紋は、もう舞台姿に着かえ、左手には、まだ十数本、手裏剣を握っている。

「なぜ、わたしの投げるのを避けないンです。避けられないンですか」

お紋は、矢つぎばやに、手裏剣を投げながら、左膳へ、おこったように言った。

「避けている。はじめから——」

左膳は無表情に答えた。

「そこに立ったままではありませんか。避けられないンでしょう。あんまり、早すぎて」

お紋は、気持ちよさそうに、左膳をおのれの飛剣でもって、くぎづけにしたことを誇った。

「へたに動くと、ほんとうにあたるからあぶない。が、こうして立っておれば、当たる心配がない。だから、こうして立っていることが、すなわち、避けていることになるのだ」

「憎たらしい、左膳さま」

お紋は、あきらめて、手裏剣を投げるのをやめた。舞台で投げつけている癖で、いくら本気になって投げても、手裏剣は必ず、人間の形を描いて刺さることを、左膳はチャンと知っているのだから、避けようとしないのだ。避けれ

ば、刺されてしまう。だから、こうして立っているのは、避けていることに相当する——と、いう、左膳のいいぐさも、お紋には憎らしかった。

「きのうは、なぜ、わたしを置いてけぼりにしましたの」

お紋は、ありったけの恨みのことばを、左膳へ投げつけた。

「あの軍師の三太と、白ずきんの若様とが、わたしを、変なところへ連れて行こうとするから、わたしは、苦労して、振りきって帰って来たのよ」

「拙者も、ずいぶんと捜した。いくら捜しても、お紋どのがいないので、あきらめて、帰ってきた」

「うそッ」

と、お紋は、きょうは、きげんがひどく、なめである。

「きのうは、ついにお帰りにならなかったくせに——どこへ行ってらしたの」

疑うような目で、左膳をにらむ、お紋だ。

「柳原の土手道で、久しぶりにお蝶と会った」

「あの、いけ好かない、鳥追いの女と？」

「見越しの松のある家へ連れてゆかれ、酒をちそうされた」

「ゆうべは、そこでお泊まりになったのね」

お紋は、くやしそうに、くちびるをかんだ。

左膳は首を振って、

「いや。見越しの松の家からは、宵の口に出た。すると、またちそうにあった」

「よく、ごちそうされるのね、いいわねえ」

皮肉のつもりだが、左膳には通じなかった。

「もっとも、このちそう、うっかり口にすると命にかかわる」

「毒のはいった、おまんじゅ？」

「脇差しだ」

「脇差し？」

「脇差しを、十数本、足もとへちそうされ、あやふく足を斬られるところだった」



「……？」

お紋には、左膳のいうちそうの意味が、どうしても、のみこめなかった。そのとき、のれんを割って、朽名大和の若党常平が、顔をのぞかせた。そして、左膳の姿を認めると、

「これは、若様……ご無事で？」

「きのうの、若党か」

左膳は、常平をふりかえり、

「朽名大和は、無事であったか」

と、たずねた。

「へえ、恐れ入ります」

常平は、左膳から、直接にことばをうけると、あわてて背中に負っていた物品を、足もとへおろすと平伏し、おそれ入った。左膳を、真田鶴太郎だとおもっているからだった。

「わが君さまには、ごきげんうるわしき……」

と、朝のごあいさつを申しあげようとするのへ、左膳は、手を振って、

「おう。さっそく、朝のちそうをはこんでくれたのか」

常平の、足もとにおろされた品物をみると、言った。ゆうべの、脇差しの束を、常平がかつぎこんできたのである。十五、六本のやいばを、つばを外側にし、半分ずつ向かい合わせにたばね、三カ所しばりつけてある。

「……？」

常平には、左膳のいう意味がわからず、ぽかんとしていると、左膳はお紋をふりかえって、

「ゆうべのごちそうというのは、この刃の束だ。これを、いきなり、暗いなかから、つぎつぎと投げられ、とんだちそうになったが、さいわい一本も食わされずにすんだ」

「まあ、こんな物騒なものを」

お紋は、ひとみをみはって、脇差しの束を見おろした。左膳は、常平へ答えた。

「ゆうべの食い残しは、朝の食ぜんへはのぼしかねる。せっかく運んでくれた山海の珍味じゃが、ちょうだいしかねるゆえ、もって帰れ」

常平は、忠誠をおもてにあらわして、左膳へ、手をつき直した。
「なにとぞ、ご帰城のほどを」
「拙者には、帰るべき城などないぞ。拙者の城は、この小屋で、天守は舞台というべきであろう」
そのとき、若い者がノレンをわけて顔を出し、
「お紋さん、出番ですよ。あ、左太郎さんも、早く衣装をつけてください」
「衣装はない」
左膳は、涼しい顔で、若い者へこたえた。そんなものは、知らない、といったふうだ。
「ないって……」
「ゆうべ、見越しの松の家で、すててしまったから、ここにはない」
「困りましたな」
若い者は、ちょっとのあいだ思案したが、すぐに、
「あれと同じものはありませんが……代用品なら、いつにもないことを、左膳は言った。若い者は、けげんそうに、
「だいじょうぶなんですか」
「子どもでも、着物は、ひとりで着るではないか。道化衣装は、へたに着るほうが、よけいにおかしいかもしれん」
「へえ……ン。ずいぶん、おとなになったもんですね」
若い者は、あきれながら、
「出番までに、たのみますよ」
と、いい残して、あたふたと出て行くと、左膳は、お蝶から借りた衣装を脱ぎすて、赤い道化服にきかえながら、常平へ、
「朽名大和は、どうした」
「外桜田の、真田藩上屋敷へまいられました。昨夜の、若君様襲撃事件について、糾明にゆかれたのでございます」
「ゆうべのことで？」
「主人大和は、ゆうべのことを、たいへん激怒



「いえ若君様」
と、常平は恐縮して、
「これは、主人大和のいいつけで持参したのでございます」
「大和が、むりにでも、これを食えというのであるか」
「大和の申しますには、ゆうべ、若君様を襲いましたくせものの残したこれは唯一無二の証拠の品ゆえ、若君様へ、とくとご披見(ひけん)におよびもって、若君様のご決心のほどをお促し申し上げよと……」
「決心とは？　いったい何を決心するのか？」
「若君様のご身辺を、かくも危険なるものを帯した人間が、多勢つきまとっている……ということの証拠を、ごらんに入れ、ご決心のうえ、一日も早くご帰城のほどをお促し申したく」
「そうほうの申すことは、どうものみこみにくいが」
「若君様」
「なんでもよい。赤だろうが、白だろうが、色にこうでいしない」
左膳には、衣装の色が、何色であろうと、そんなことは、どうでもよかった。どうせ、道化として舞台へ出て、客にわらわれる役である以上、白よりも、赤のほうが、笑われるのには、より役だつくらいにしか、考えなかった。
「じゃ、赤い衣装をもって来ますから……お紋さん、すぐ出てください」
若い者は、のれんの中から顔をひっこめると、すぐに赤い衣装をかかえて、もどって来た。
お紋は、それと入れ違いに、
「左さま、すぐに出てね」
と、いい残して、いそがしく楽屋を出てゆく。
「お着つけ、お手つだいいたしましょう」
若い者が、左膳のうしろへまわって、衣装をかまえるのを、
「拙者ひとりで着るから、置いてゆけ」
らあります。赤い衣装ですが」

され、上屋敷へ乗りこんで、剣持さまはじめ、上屋敷を預かる、おもな人々へ、強硬にひざづめ談判をしてくると申されて……」

「剣持源太夫のところへ参ったのか」

左膳は、見越しの松の家で出あった、剣持源太夫の顔をおもい出しながら言った。

剣持源太夫を呼びすてにする以上は、いよいよ若君様にまちがいなし——と、常平はうれしさを顔にいっぱいうかべて、

「それで大和には、わたくしめを、若君様のおそばへ伺候させ、若君様のお動きに、つき添いたてまつれと……」

「外桜田の真田の家中か？　昨夜、この脇差しを投げつけた、バカ者どもは」

「さようにございます」

「おもしろいことを考えたぞ。これから上屋敷へ参ろう」

それから、二時間ののち。左膳は、赤い道化服に、道化の化粧をしたまま、背中に、脇差しの束を背負って、外桜田の、真田信濃守上屋敷の門前へたどりついていた。からくり座では、道化の出番になっても、左太郎の左膳があらわれないので、大騒ぎをしているころには、左膳は道化役のことなど、すっかり忘れて、若党常平のはこんで来た、脇差しの束を背負うと、江戸の町へ、ぶらりと出てしまっていたのである。

なんのために？　左膳が、脇差しを背負って、江戸の町へとび出していったのか？　それは、左膳に聞いてみなければわからない。ちょっとみると、左膳の行動には、ひどく気まぐれなところがあるようだが、あれで、結果から判断すると、いつも、チャンと、計算をはじいていることがわかる。だから、舞台へ出るつもりで、赤い道化服を着た左膳が、なにを考えたのか、急に脇差しの束を背負うと、からくり座の裏から、ひょうぜんと外へ出てしまったのには、何かの考えがあるのに違いない——と、ただ、黙って、左膳のすることをながめているよりほかはないのである。

「ここが、真田信濃守の上屋敷だな。よしよし」

左膳は、六連銭の定紋を、門前にみつけると、門のわきへ、どっこいしょと、脇差しの束をおろした。それから、束のひもを解くと、脇差しの銘を、一本一本しらべていった。

「法城寺正弘……うむ、これはたいしたできではないな、まず一両かな」

左膳は、そんなことをつぶやいて、懐紙をとりだし、それをたんざくに切り、先をコヨリにして、法城寺正弘金壱両也と記入して、つばの穴へくくりつけ、地上へならべる。さやはないから、この売り物、なかなか物騒である。

「次は、吉岡一文字助光……さすがは助光だけあって、良いできだが、惜しいことに、二カ所の刃こぼれがある。ゆうべ拙者の足もとへ投げつけたときの刃こぼれだな。完全無欠なら五両というところだが、三両二分にまけておこう」

左膳は、その脇差しへ、三両二分の売価をつけて、地面へつき刺し、次のを調べてみる。

「濃州住兼則……これは、二両、いや一両二分かな」

左膳は、なんでも、端数は二分にきめているようだ。十五、六本の脇差しに、すっかり売価がつくころには、左膳のすわっている前には、数十人の人だかり。地につき刺してあるのもあれば、さかな屋のように、並べてあるのもある。赤い道化服と、道化の化粧をした、妙なやつが、白刃に定価をつけて、大名屋敷の門前へすわりこんでいるのだから、だれしも驚かないわけには、いかない。

「妙な刀売りだな」

「あいつ、正気なのかな？」

そんなことを、ささやき合うのもいる。左膳は、人がきを仰いで、うるさそうに言った。

「刀に用のないものは、あちらへいってくれ、また、刀に用はあっても、ここの、真田家の家中でない者には、刀は売れん」

「おッそろしく、いばった、道化じゃな」
だれかが、舌打ちしながら、言うと、左膳はそいつを、じろりと、道化づらで見やって、
「拙者は、道化の姿はいたしてはいるが、きょうは刀売りじゃ。刀売りというものは、権式をもったものじゃ。だから、このようにいばるのじゃ」
「なるほど、刀売りじゃから、いばっているのか。しかし、江戸ひろしといえども、道化の刀売りというのは、見たことないな」
そんなことを、ささやきあいながら、刀に用のないものは、ひとり去り、ふたりへり、そのうち、だれもいなくなってしまった。するとそれと入れ代わるように、真田家のうちから、五、六人の武士が、どやどやと出て来て、左膳のまえにならべられてある刀をながめ、
「あっ、こ、これは、拙者の」
と、いおうとして、いずれも口をつぐんでしまった。
拙者の脇差しだ——といえば、前夜の、自分たちの失敗を相手へ知らすようなものである。
うっかりしたことは言えない。たがいに口をつぐんで、左膳の前へ、しゃがみ直すと、
「これは、売り物か」
と、聞いた。左膳は、ぼそっとした口調で、答えた。
「売り値がついている以上、売り物であることは、昔から、わかっていることじゃ」
「これは、おまえの脇差しか？」
武士は聞いた。これも、わかりきったことだが、てれくさいので、そう聞くよりほかに、ことばのつぎ穂がなかったのだ。
「拙者には、目下のところ刀類には用事がない。だから、これだけの刀が、拙者のものであるはずはない」
「すると、だれかに頼まれて……」
「ここで売ることになったのか？」
と、聞きながら、武士たちは、何かを、しきりに探りにかかる。
「いや」
と、左膳は首をふって、
「頼まれたのではない」
「と、いうと？」
「ひろったのだ」
「拾った？」
武士たちは、顔を見合わせた。ひろったということばは、まさにほんとうのことであったからである。安心した顔になって、
「売り値は、このとおりか」
「うそはかかん」
「すこし高いが、まけられぬか」
「まけられん。武士の魂を、値切るやつは、おのれの魂を値引きすることと同じだ。そんなやつには、刀は売れん」
左膳は、小さな帳面をとり出して、
「買う者は、氏名を言ってもらいたい。氏名をきいたうえでなければ、売れん」
おそろしく、理屈の達者な、道化であった。が、いうことは、ほんとうである。武士の差し料にするものを値切るのは、まさに、武士の魂を、安く評価することに違いなかったから、真田の家中たちは、それ以上、売り値をさげろ、とは、言わなかった。だが、問題は、この怪しげな道化が、わざわざ、皮肉にも、この脇差しを、真田藩の上屋敷門前で売りに出している、ということであった。昨夜の、柳原土手通りのくせもの群を、真田藩のもの——と知っていなければ、わざわざ、このようなところへ、店を出すはずがない。名まえを言って買えば、ゆうべのくせものは、真田藩の何某である——ということを、白状するようなものであったし、名まえをいわなければ、刀を売ってはくれない。と、いって、買わずにおけば、自分たちの投げた脇差しを、一日じゅう、門前で日の下にさらされるであろう。
「いたしかたがない。正札どおり買おう。しか

し、聞きたいことがある」
武士のひとりが、左膳へ、てれくさそうに尋ねた。
「おんみは、この脇差しを、ひろったというが、ひろったのは、いつか」
「昨夜おそくだ」
「くらいのに、よくわかったな」
さぐりを入れてみる。夜おそく柳原の土手通りをとおっただけで、刀のおちているのがわかるはずはない。きっと、これには、なにかのカラクリがあるのに違いない。
「夜空には星がある」
左膳は、青い早春の空をみあげて、言った。
「星が？」
「星があれば、その星が刀身に宿る。刀身に星が宿れば、地上に星座ができる。されば、足もとに光るものあり、何ならんとうかがえば、数本の脇差しなり。われおもえらく、これぞ天の与えなりと。すなわち、ことごとくこれをひろいあつめて、この門前にてひさぐ。心ある者は、気まえよく買うべしと……あなかしこ」
この道化、とんでもない講釈師ぶりを発揮する。ここまで、人をくった態度をとれば、かえって怪しまれないですむ。人は、こいつ、気違いかと思うからだ。
「なるほど、ひろった場所と、ひろったわけはわかったが、なぜ当藩の門前をえらんだのか」
「銭のありそうな屋敷を選んだだけだ」
「真田の家中は、それほど裕福ではないぞ」
「当藩の定紋は、六連銭だ。銭を紋にしているくらいだから、さぞ、家中の者たちにも、銭があるだろうと思って、かくは、無断にて、この門前に店をひらいた。問答はこれにて打ち切る。買った買った。買わぬものは、向こうへ行かれたい。ひなたのじゃまになる」
左膳は、夜店のたたき売りのように、威勢よく、帳面をたたいた。邸内から、また四、五人どやどやと、出て来て、左膳の前に立った。駒



形のどじょう屋で斬りあったことのある、浅見十兵衛、井戸弦三郎、花村剛之丞たちであった。
「やっ……きのうの」
と、いいかけて、浅見は口をつぐんだ。
が、左膳のほうから、浅見のことばのあとを続けてしまった。
「きのうの？　さよう——拙者は、きのうの拙者で、ご貴殿がたは、きのうのどじょうのおれきれきでござるな。脇差しの御用はいかが。知己のよしみで、おのおのがたには、一本につき、二分ずつおまけ申そう」
左膳は、気まえが、いたってよろしい。二分がとこ、まけるというのである。浅見たちは、顔を見合わせて、
（どうする？）
と、目と目で、無言の相談をかわした。すなおに、金を出して、脇差しを買いとるか、それとも、何かの、いいがかりをつけて、この道化を斬りすて、脇差しを全部うばい返してしまうか。
（しかし、こいつは、手ごわいぞ）
と、花村は、目で返事をする。きのうの、駒形のどじょう屋で、試験ずみである。うかつには、手出しはできない。
（邸内へつれ込め）
井戸弦三郎が、あごをしゃくって門内を示した。なるほど、と、浅見は気づいて、
（邸内へつれ込んでしまえば、なんとかなるだろう）
と、うなずいて、それから、左膳へ言った。
「なかなか、いい脇差しがそろっているゆえ、全部ひとまとめに買いとるゆえ、ここでは取り引きしにくい。門内へはいってはくれぬか」
「どこへでもゆく。買ってさえくれるならば」
左膳は、脇差しをあつめると、一まとめにし、なわでくくって立ち上がった。
「これへ……」

と、浅見が、案内をする。正面の大門はかたくしまっているから、左膳を中にして、一同は、ぞろぞろ、わき門からはいってゆく。

「こちらへ……」

こんどは、花村が門内から右へ折れて、長屋のほうへ左膳をいざなった。左膳は脇差しの束をかかえたまま、のそのそと、ついてゆく。十万石の上屋敷ともなると、その広さは相当なもので——左膳は、あちらへ引きまわされ、こちらへ連れてゆかれて、ひとりで戻れといわれても、とてももどれそうにない、迷路へはいり込んでしまった。一同が左膳をつれて、あるへいの外で立ちどまった——そのへいのうちには、朽名大和と、剣持源太夫が、一室に向かいあって、さかんに、言いあっていたのも、皮肉だった。そして、その、話の内容も、鶴太郎君（実は左膳）襲撃にかんする、責任問題であったのも、皮肉であった。

「昨夜、鶴太郎君襲撃事件は、あきらかに、当屋敷を預かる、剣持どのの責任であるとおもうがいかが」

と、大和が、扇子で、畳をたたいて詰問をすれば、剣持は剣持で、

「異なことを承る。柳原の土手道は、それがしの警戒区域でも、なんでもござらん。あそこは、天下の公道。その公道で、いかなる事件が起きようと、それがしの責任とされるのは、いささか心得ぬこと」

「剣持どのは、江戸を預かっていられる重職のお身、拙者は、国元を預かる身。こと若君様に関するかぎり、江戸で事が起きれば、ご貴殿の責任、国元でおきれば、拙者の責任」

「……」

「昨夜若君様が柳原の土手道でおそわれなされたのは、江戸方の責任でなくて、だれが責任をとるのか、しかも、信州くんだりから出て参った拙者が、若君様をおすくい申すなどということは、責任のありようが逆というべきでござる」

朽名大和は、剣持源太夫の弱点をつかんでいるから、ぐんぐんと突っこんでゆく。ゆうべの柳原土手道のくせものを、あきらかに、剣持源太夫の配下だとにらんでの、大和のいやがらせであった。大和は腹の中で、

（昨夜のくせもの群が、貴殿の配下である、ということを、こちらが口にしないのは、武士の情けによるものだ。それを悟ったならば、すこしは責任を感じ、謹慎の意を表すべきである）

そう思っている。だから、いくら、そのことを口にしなくても、自然に、態度や、口調のなかに、それがあらわれる。剣持源太夫は、なかなかの悪党だから、大和のそういう口調の中に、

（こやつ、悟っているな？　ことによると、鶴太郎君と、連絡をとっているのかしれない）

と、みてとって、

（それなら、逆襲してやろう。場合によっては、こいつもかたづけ、続いて鶴太郎君もやみに消してしまおう）

と、腹がまえがきまると、

「責任責任と仰せられるが、江戸は広い。この外桜田の屋敷から、柳原の土手道までは、目はとどき申さぬ。それにひきかえ、松代は狭い」

「——？」

「しかるに、その狭い松代を預かる朽名どのが、去年の夏、若君様をして脱城させ申したことこそ、責任重大と申さなくてはなりますまい。昔から、ネコを追うよりもさらをひけと申すことわざがござる。江戸へ出て来られ、市井をさまようていられる、若君様を守護することに騒ぎまわるよりも、国元から、若君様をお出し申さぬ用心をなされたほうが、どのように安心なことかしれ申さぬ」

「ううむ」

「朽名どのは、若君様を脱城させ申した過失をおかしていられながら、その責任を、江戸を預かる、それがしに帰せしめなさるとは、これは

左膳をみちびき入れたのは、脇差しを買い上げるためではなく、左膳のからだをしまつしてしまおうという魂胆だったので、まず、それには、左膳から、武器をとり上げてしまわなくてはならなかった。それで、脇差しの数だけ、人間が出てきて、買いとるとみせかけ、めいめい一本ずつの脇差しを手にとり、ながめるふうをよそおう。

地上には、一本の脇差しもなかった。まず、これでよし——というわけである。

これで、道化の左膳は、身に寸鉄も帯びていないことになる。脇差しを、全部とり上げてしまえば、もう、こっちのものだ。あとは、左膳を前後左右から打ちこんで、めったやたらに、斬りきざんでしまえば、それで、万事おわりである。が、左膳は、道化という、まの抜けた姿でいても、さすがは剣士だ。皆の、そういう殺意を、はやくも察して、油断はしない。どこから打ち込んで来ても、すぐにかわして応じられ



理にはずれたことかと存ずるが」

朽名大和は、いたいところを突かれ、ヤブへビの形で、それに答えるべき、適当なことばがみいだせず、

「うう……む」

と、しばらくの間、うなり続けた。まさに剣持のいうことは正しかった。——そのとき、庭の向こうのへいの外で、急に騒がしい声がきこえてきた。左膳が、大ぜいの家中になにやらどなっているのである。

「脇差しがほしかったら、中身に合うさやを持って来い。おのおのが、かってに刀を取ってはならん！」

その声に、剣持は、いそいで縁側へ立っていって、外をのぞいた。

へいの外では、道化の左膳をとり巻いて、浅見十兵衛ほか、十四、五人の家中のものが、めいめいに、脇差しを、一本ずつ持って、なんの、かんのと言いあっていた。真田の邸内へ、

「しかし」

と、左膳が、

「さやがなければ、刀身だけを、腰にさすというわけには、ゆくまい。それぞれに合うさやをもっているから、買いとろうというのでは、ないのかな」

意地のわるい、いいかたをし、

「さやを持って来たものには、タダで売って進ぜることにしよう」

と、にやり笑って、

「それでも、さやは持って来たくないか」

と、一同を、じろりとながめた。道化の顔で笑われると、相手は、ひどくぶべつをかんずるものである。

「ないものを持って来いなどと、無理はいうものではない。それとも、われわれが、この刀に合うさやを持っている——とでも、いうのか」

花村剛之丞が、そろそろ、左膳へ、いいがかりを、つけはじめた。



る構えをつけておいて、

「拙者は聖徳太子ではないから、そう一度に言われても、答えることはできない。脇差しを買いたいものは、その脇差しに合うさやを持って来てもらいたい。中身に合うさやをもって来た者に、それを売る」

昨夜は、柳原の土手道で、こいつらは、脇差しの中身を投げつけて、さやは腰にさしたまま帰ったことを、左膳はよく知っている。だからさやを持って来い——と難題をもち出したのである。さやをもって来て、姓名を告げて買いとれば、みずから、昨夜のくせものにたいする、動かぬ証拠を提供するようなものである。そんな術策には、乗れない。うっかり乗れば身の破滅だ。

「さやなど、あろうはずはない」

浅見が、一同を代表してこたえた。

「ただ、この刀身が、おのおの気に入ったゆえ、買いとろうというまでだ」

「いいがかりなどもうとうつける意志はない。入れものなしに、酒やしょうゆをかいにくるバカはいないように、さやなしで、刀の中身を買うのはおかしいから——さやは持っているのであろう、ときいたまでだ」

左膳は、理屈にならない、理屈をいって、油断なく構えている。

「すると……」

井戸弦三郎が、

「さやなしに、刀を買う者は、バカである、というわけか」

と、聞いた。

「バカかどうかは知らぬが、そういうことになる勘定だな」

左膳は、すこしも、逆らわないで、相手のいんねんつけるのを、そのまま受け取るのである。井戸はおこった顔をつくって、

「われわれは、さやなしに、買うのであるから、その論でゆけば、われわれは、バカである、ということになる」

「そうらしい」

左膳は、相手のことばにたいして至極、従順である。

「バカであることに、決まったのだな？　われわれが」

吉野義八郎は、きめつけるように、左膳へいった。

「おてまえたちが、そう決めたのなら、拙者もそういうことにしておく」

左膳が、答えると、

「ゆるしがたき雑言っ。えい、それへ直れッ」

浅見十兵衛が、手に持っていた脇差しを、五、六間むこうへ投げやって、すばやく、腰の刀に手をやった。

「道化のぶんざいで生意気なッ」

「武士にむかって、雑言のかずかず、もう、かんべんならん」

ほかの連中も、めいめいの手に持っていた脇差しを、向こうへ投げやって、刀のつかへ手をやった。これで、完全に、左膳は孤立無援、しかも防備するのに、一片の武器もないわけだ。駒形のどじょう屋で、左膳と立ち回った、浅見、井戸、花村、吉野たちは、左膳の手ごわさを経験ずみだから、なるべく、うしろへ身をひくようにしているのだが——ほかの十人ばかりは、左膳を、一介の道化師くらいにしか思っていないから、自分ひとりでも、こいつをたたッ斬れる気でいる。左膳は、いよいよ相手方の魂胆を悟ると、一歩身をひいて、

「おのおのがたは、実に、まったくよく、武士の魂をそまつになされる性と見えるな」

「なにっ！」

「昨夜は、柳原の土手道で、ぴかぴか光る脇差しを、惜しげもなく投げすて、いままた、あれへ投げられたが——真田藩では、手裏剣の代わりに、脇差しを投げる剣法が流行していると見えるな。脇差しを投げる流儀は何流でござるか、参考のために、ご教示たまわりたい」

「えやーッ」

道化のくせに、至極生意気な——と、二、三人が、抜き打ちに、はげしく斬りこんできたのを、左膳はすばやく流して、ひとりの腕をひっつかンだ。——と。もう、白刃を一本、その手から、もぎとっている。

左膳は、もぎとった刀の、刃のほうを上に向けて、ぐい、と、前へさし出した。左膳の癖である。こういう構えのときは、左膳は人を斬りたくないときである。しかたなく防備するときは、左膳は必ず、こういう構えをする。峰打ちにして、相手をかたづけようとするには、この構えが、もっともよかったからである。

「斬れッ。こやつ、ただの道化ではなさそうだ。当邸の表へ、わざわざ脇差しを売りにくる皮肉は、断じてゆるすことはならん」

浅見は、皆のうしろで、そうどなって、

「おそらく、こやつは、若の手先か、まわし者

にちがいない」

ここに集まってきている抜刀の連中は、昨夜、柳原の土手道で、鶴太郎（左膳）をおそった連中ばかりだから、浅見がそんなふうにどなったところで、いっこうにさしつかえはなかったのである。いずれも、剣持源太夫の腹心ばかりだ。

「やあ……ッ」

右手のふたりが、いっときに斬りつけてくるのを、左膳は、わずかに身をひいて流し、

「しまった」

と、泳ぐふたりの腰のつがいへ、刀の峰を打ちつける。力と技で打つのだから、打たれたふたりは、泳いでいる勢いへ、さらに追いうちを加えられて——まるで、水へとびこむカエルのようなかっこうですッとび、へいへ頭をうちつけてしまった。そのとき、朽名大和と、剣持源太夫のふたりが、へいを迂回して、とび出して来、

「待て待て、何をいたしておる」

源太夫は、まさか、昨夜うちとりそこなった若様（たぶん）に関係のある人物を、自分の配下がとりまいていようとは思わなかったから、駆けつけてくると、いきなりこう声をかけた。左膳へ、刀を向けていたひとりが、

「こやつ、昨夜の——」

と、いいかけて、朽名大和の姿に気づくと、急にことばじりを変えた。

「いや、実はわれわれを侮辱いたしたにつき、すこしばかり、成敗をくわえておりますところで——」

すると、朽名大和が、一同のまえへ、とび出して、

「あっ……これは」

と、左膳へ腰を折った。

「若君様では」

「大和か」

「昨夜は、あれより、どのようにお捜し申し上げましたことやら……けさほどは常平を参上いたさせましたが」

「来た。脇差しの束を背負って来たゆえ、真田の家来どもに売りつけようと、参ったところ、かくのごとき始末」

と、左膳は、道化た顔を、まじめに、こんどは、源太夫へむけて、

「見越しの松の源太夫。きのうは失礼いたした。お蝶がほめていたぞ、うちのとうさま、気がきいてやさしいと……」

「はっ、そ、それは……いえ、けっして、その」

剣持源太夫は、この道化が、鶴太郎君であることがわかると（まちがって）あわてて恐縮の腰を折った。きのうお蝶のところで、見られているので、源太夫は大あわての体だった。

## 若君とん走

道化の、この奇ッ怪人物が、若君様である、とわかれば、源太夫の腹心たちは、これ以上、攻撃をくわえるわけには、いかない。ここは真田藩上屋敷だから、藩邸のものすべてが、源太夫の腹心というわけのものではない。いや、その数においては、本流派のほうが、はるかに多い。ここで、へたに道化の鶴太郎（左膳）を斬って本流派に取りかこまれるようなことがあっては、それこそ源太夫派の破滅である。朽名大和から、若君様であるぞ——といわれて、源太夫の腹心たちは、いっせいに刀をうしろへ押しかくし、

「これは、若君様にござりましたか。けしからぬ道化とのみ存じ、いささか成敗をくわえようといたしましたる不届き……ひらにおゆるしのほどを……」

「まったくもって、道化とのみ存じまして……」

口々に、道化左膳へ、陳謝の礼をとった。若君様だと知って、刃をくわえようとしたのな

ら、罪にとわれるが、道化だと思って——と、いえば、とがめられることはない。

「拙者は、正真正銘の道化じゃ。もっとも、きょうは、特別に、刀うりに商売がえはいたしているが」

左膳はしかし、朽名大和や、源太夫一派の〝若君様あつかい〟に、けろりとして、そう答え、

「若君でもなければ、道化でもない。きょうは刀うりじゃ。刀さえ売り切れれば帰る。ところで、刀は買ってくれるのか？」

「はっ、そ、それは……」

源太夫一派は、若君、鶴太郎から、そういう皮肉をいわれているのだと思うから、答えようがなかった。若君を殺そうとして投げた、脇差し——その脇差しを、当の本人が、ここへかつぎこんで来て、買えという。買う、とも、買わぬ、とも答えられぬ、源太夫一派だった。

「買ってくれぬのなら、せっかく背負って来た刀じゃが、また、背負って帰るとしよう」

左膳は、源太夫派のめんめんをかきわけて、かなたへ投げられた脇差しを、ひろいにゆこうとするから、朽名大和はあわてて、

「もし、若君様」

と、そのそでをつかんで、

「刀は、この大和めが、全部買いとりますれば、とにとぞ……」

「そなたが買うというのか」

「国元への、よきみやげにいたしたく存じますれば、それがしめへ、ご売却のほどを願い奉ります」

「そなたが買うとあれば、一振りあて一両にまけて、全部で十五両にしておく」

左膳は、気まえがよい。一振り一両均一の十五両で、全部わたすという。

「代金は後刻……といたしまして若君様には、とりあえず、お居間へ」

大和は、今度こそは逃がさない決心で、左膳



の鶴太郎君を、なんとかして、お居間へ連れこんでしまおうと図るのだが、

「お居間などはいる要はない。刀が売れてしまえば、拙者、からくり座へ帰らなくてはならぬ」

「あ、これ、皆の者、若君様を早く、お居間へ、ご案内もうせ」

大和は、源太夫一派のもの四、五人に手つだわせ、道化左膳を、御殿のほうへ、むりやりにひっぱっていった。一国一城の若君様が、こともあろうに、道化の姿で、刀を売りに——しかも、おのれの藩邸へやってくる。正気のさたとは、おもわれなかった。大和も、源太夫も、それから、源太夫の腹心たちも、若君、鶴太郎は哀れ発狂したのに違いないと受けとり、なにはともあれ、お居間へつれこんでしまわなくてはならぬと考えた。手とり、足とりの形であった。源太夫と、その腹心たちは、腹の中では、

（これが鶴太郎君であるとすれば、もう、こっちのものである。気違い若様は、当然のこと、真田家の跡目相続人として、不適任である）

だから、これは、生けるしかばねとして、生かしておくほうがよい。今後は、若君様せんぎに、血まなこになって、駒形あたりを捜しまわる必要はない。そんなことを考えていたし、大和は大和で、

（若君様は、松代城での、重なるご心労のために、ついに発狂なされたのに違いない。お痛ましいことである。このうえは、この事実をひた隠しに公儀へかくし、つくせるだけのお手当をして、正気にもどさねばならない）

そんなふうに思案をしながら、御殿のなかへ左膳をつれこんでしまった。すぐに、美しい腰元が、二十人ばかり呼ばれて、左膳のからだは、あずけられた。気が狂っていても、男であるから、美しい腰元どもに取りまかれれば、気持ちがやわらぐであろう。

まず、第一番に、気持ちをやわらげなくてはならない。腰元たちは、左膳の着ている、道化

の衣装を、寄ってたかって、脱がし、それから、化粧をおとし、暖かい絞り手ぬぐいで、左膳の顔、首筋、手足を、ことごとく清め、真田家の定紋のついた衣服に着かえさせた。腰元のなかには、若様鶴太郎を知っている者がいたから、

「ほんに、若君様に違いありません。お痛ましや、このように、おなりあそばして」

顔をそむけ、たもとをつまんで、そっと目がしらをおさえる始末で、左膳は、すっかり鶴太郎君にされてしまった。刀を売りに来た左膳は、その刀が金十五両なりにて売れてしまえば、至極おとなしい。腰元たちの、するがままに、身をまかせている。そして、お居間にすわらされても、

「十五両は、まだか。大和が十五両を持ってくるはずじゃが」

と、この若君様は、いやに、金のことをいうのを、腰元たちは、気が狂っているせいにして、おきのどくにと、鼻をすする。そして、あまり十五両を口にするので、そのことを大和へつたえると、大和は、こころみに、小判十五両をつつんで、左膳のまえへ、うやうやしくさしだすと、左膳は、その金包みを受け取ると、そばにひかえている、腰元のひとりへ、

「すずりを」

と、命じた。

「かしこまりまして、ござります」

気違いのくせに、すずりを何にするのであろう、と、いった顔で、腰元は立ち上がると、すぐに、赤間関の丸型のすずりをささげて来た。別の腰元が、墨をする。左膳は、筆をとり上げると、金包みの上へ、

——脇差(わきざし)し、とぎ料、金十五両。

と、達筆にしたため、ただし、一振りにつき、一両のこと。と、書き添えた。左膳は、それをたもとの口から、懐中へねじこむと、すっと立ち上がる。



「若君様、いずれへ参られあそばします」

腰元たちには、若君監視という責任があるので、あわてて左右から、左膳のたもとを、かるくとるのへ、

「庭をあるく。源太夫に、用があるゆえ、まいれと伝えよ」

すこし若様口調になって、

「そちたちも、くるがよい」

もう、縁先へ足をはこんで、はき物を待つ左膳であった。その態度には、いささかの、気違いらしいところは、みえなかった。腰元のひとりが、大いそぎで、庭ぞうりをもって来て、くつ脱ぎ石の上に並べると、左膳は、ゆっくり、それに足をとおして、庭に降りたった。

剣持源太夫が、庭の向こうから駆けて来て、左膳のうしろに、従った。飛び石をつたってゆくと、池があった。二間ばかりの、御影石の、ほそい橋がかかっている。左膳は、その石橋の途中でたちどまると、

「源太夫」

と、呼んだ。びくびくしながら、うしろについて来ていた源太夫は、

「はっ……これに」

と、答えた。きのうの昼、見越しの松の家で、お蝶を尋ねて、顔をみられているので、源太夫は、おもはゆくてならない。それに、ゆうべは、討ちとりそこなっている若様だ。その若様が、非常手段として、配下の者が投げた脇差しを、束にしてかついで来ているのである。

源太夫は、穴でもあったらはいりたい気持ち以上に、どうにも、身の、置きどころのない、窮極の座にすわらされている思いでいたから、名まえを呼ばれると、身が縮み、背筋をつめたいものが走る。

「そちに、とらすものがある」

左膳は、ふところから手を出して、源太夫のまえへ、さし出した。

「な、なんで、ございましょう」

源太夫は、左膳の、サザエのような、握りこぶしを見おろしながら、聞いた。

「これじゃ」

こぶしをあおむけにし、ぱっと手のひらをひらくと、小判の金包みが、手のひらの上に載っている。脇差しとぎ料、十五両。ただし一振りにつき一両のこと——と、達筆にかかれてある、金包みの上の文字。源太夫は、ドキリとした。脇差しのとぎ料として十五両。それが十五本分ということは、昨夜の刺客の数が十五人いて、おのおの、一本ずつの脇差しを、非常手段として、投げたことを、この若君は、チャンと知っていることを物語っている。

しかも、昨夜、若君様をおそったのは、源太夫自身であってみれば、この皮肉にたいして、身の縮まるおもいをしないわけには、いかなかった。

「こ、これは、いかなる次第のものに、ございますや」

源太夫は、しかし、とぼけて聞いた。左膳は、金づつみを、源太夫の手へ渡すと、

「きょう、皆の者が買いもとめた十五本の脇差しには、刃こぼれ、その他のいたみがあるようじゃ。よって、この十五両にて、それぞれ修理をいたすように」

「して、これは、いかなる次第にて、それがしめに」

源太夫は、さぐりを入れるように、聞きかえした。昨夜の刺客の親玉が、自分であることを、この若君様が知っていて、このとぎ料を自分にくれる——としたら、これは、もはや絶体絶命である。

とぎ料を渡しておいてから、手討ちにいたす——と、いいだすかもしれない。なんにしても、うすッ気味のわるい、金包みであった。が、左膳は、けろりとした顔で答えるのだった。

「そちは、江戸家老であろうが」

「はっ」



源太夫は、あきれたふうに、左膳を見上げた。自分をつかまえて、江戸家老であろうが、と、いうあたり、この若様は、やっぱり気が変になっている——と、源太夫、ますます気味悪がっていると、

「江戸家老ならば、江戸における事がらは、すべて、そちがめんどうみなければならぬ。家中の者が、十五本の脇差しを買った。それが、おのおの、いくらかの、いたみを持っている——としたら、そちの手から、一両ずつのとぎ料を渡して、これを修理させるのは、当然のことではないか」

「はっ」

源太夫が、わかったようなわからないような、はなはだめんような顔になるのへ、

「刀を買うという精神は、武士として、はなはだりっぱである。よって、ほうびとして、皆の者に、とぎ料をつかわすというのじゃ」

「かたじけなき、しあわせに存じます」

源太夫は、ほっと安心して、頭を下げた。

「そちにつかわすのではない。十五人の者につかわすのじゃ……金づつみを解いて、金を改めてみよ」

「はっ」

ずいぶん、こまかい若君様であった。源太夫は金包みを手のひらの上にのせたまま、まごついていると、

「十五両、たしかにあるか、ないかを改めてみて、そのうえ、受け取るのが礼儀じゃ」

左膳の若君様は、なかなか下情に通じていられる。

源太夫が、金づつみをひらきヤマブキ色の小判を、一枚、二枚、三枚……と、入念にかぞえはじめると、左膳は、いきなり石橋の上を、駆けだしていった。

「あれ、若君様が」

と、石橋のたもとに立っていた腰元たちが、口々に騒いだので、源太夫は、やっと、それに

気がつき、あわてて、小判を包み、懐中へおしこみ、石橋を渡って、左膳を追ったときには、左膳は、築山のなかへ、逃げこんでいた。

「若君ッ……若君ッ……」

源太夫が、呼びながら、左膳を追って、築山へはいって来たころには、

「えいッ」

左膳は、大きな石の上から、頭上の松の枝へとびあがり、松の枝から、土べいの上へ移り、そのまま土べいの向こう側へとびおりていた。土べいの向こうも、まだ、真田の屋敷内だが、そこは長屋の広場になっていたから、左膳は、そのまま走って、長屋の出入り門から、完全に屋敷の外へ脱出してしまった。

「若君様が、お逃げになられた。おつかまえ申せ」

「長屋の出入り口から、おのがれあそばされたぞ。おとめ申せ」

そういう叫び声が、高い黒べいの内から、きこえてくる。左膳は、いっさんに走った。真田の屋敷へ、脇差しを、かついでいった目的は、完全に果たした以上は、もう、これ以上、若様あつかいをされて、腰元たちに、とりまかれている必要はなかった。

「若君様ッ……」

「鶴太郎君さまッ」

朽名大和の声もまじってきこえた。左膳はしかし、大和の呼び声にも、耳をかさなかった。

——どこを、どう走ったのか、左膳にも、その道順はわからなかった。一刻半のちには、左膳は、両国の、からくり座へ帰りついていた。

楽屋には、お紋はいなかった。

「おや、左太郎さんだね」

道具係の男が、左膳をみると、いぶかしそうに言った。

「あんたは、藤波屋敷におられるッてことだが」

「藤波屋敷とは、どこだ？」

左膳は、けろりとしている。道具係の男は、



けげんそうに、

「駒形の藤波屋敷にいるから、来てくれって、あんたから、お紋さんへ手紙がとどいたので、お紋さんは、ブリブリおこって、さっき出てゆきましたよ」

「何をおこっていたのか？」

左膳には、お紋のおこるわけがわからなかった。

「おこるのは、あたりまえですよ」

道具係の男は、自分がおこってでもいるような口調で、

「お紋さんが、舞台で困っていましたよ。道化の左太郎が、出になっても、ついに出て来ないので、投げ剣のわざができず、さんざんの大穴さ。プンプンおこっているところへ、藤波屋敷に待っている——という手紙では、これがおこらずにいられますかってンで……」

お紋の鏡台の上に、一通の手紙がおかれてあった。からくり座お紋どの。と表書きがしてあって、差し出し人は、駒形、藤波屋敷にて、左の字、とある。

封は切ってあったから、左膳は中の書状を抜き出して、読んだ。

——〝駒形の藤波屋敷に来ている。大川の都鳥がこのへやからよく見えて、良いながめである。お紋どのとふたりで、ゆっくり半日をここでおくりたい。すぐ来てくれるよう、待っている。左の字〟

書状には、あまりじょうずでない字で、そう書かれてあった。

「こりゃいかん」

左膳は、書状を投げ出すと、そのまま小屋をとび出していった。あきらかに、左膳の名をかたっての、お紋ゆうかいの手紙である。駒形は、どじょうを食いに行っているから、道はわかっていた。柳橋を渡って、第六天社のほうへ急ごうとすると、

「あら、左様」

不意に、横から、女の声。
「お紋か」
ふりかえりざまに、左膳がそう呼ぶと、
「おきのどくさま。あたしよ」
と、駆け寄って来たのは、お蝶であった。
「見越しの松か？」
左膳は、お蝶の顔をみると、そう言って、
「今夜も行くが、二升は用意してあるか」
「ダメダメ」
お蝶は、たもとを振って、
「見越しの松も、ダメになってしまえば、二升もダメ」
と、さすがに、しおれている。
「松が枯れたのか。松の枯れるのは、縁起がよくない」
「枯れたようなものさ」
「水をやれ」
「少々の水ではダメ。あたし、ゆうべのうちにお払い箱よ」
「お払い箱とは？」
「ゆうべの失敗によって、剣持源太夫さまから、おしかりを受けたの。なぜ、若様を家から出したのか——と、いってね。わたしが、左様を、見越しの松の外へ出したために、目的が果たせなかったというのよ。だから、二升の件もダメ。このお蝶さん、きょうから、不景気風にみまわれたのだから」
「そうか」
左膳は、そのまま行こうとするから、お蝶は、そのたもとをつかんで、
「薄情な、左様……あたしが、女浪人になったのは、左様のおかげよ」
「喜べ」
「浪人して喜べだなんて……」
「浪人のほうが気楽でよいのを悟らないのか。せっかく浪人になっていながら、なにを見越しの松を惜しがるか」
「左様のところに置いてくださる？　それなら、浪人したことを喜ぶけど。左様これからどこへ？」
「お紋を、たすけに行くんだ。おまえも来んか」
「あほらしい。だれがゆくもんですか」

## 凶の家

左膳から手紙が来たので、プリプリおこってはいたが、しかし、お紋はうれしくもあった。左膳から、会いたい——などという手紙をもらったのは、お紋としては、はじめてのことであったから——で、お紋は、プリプリ、いそいそとして、駒形の藤波屋敷へでかけていった。
広いフジの屋敷は、まだ荒涼として、春には遠いおもむきであった。いくつかのフジだなの下を通り、藤波屋敷の玄関に立つと、
「お待ちかねですよ、お紋大夫」
と、地獄虫の三太が、けはいをききつけて、玄関先へあらわれ、威勢よく、お紋をむかえた。
（いけ好かない人）
お紋は、きのうの、どじょう屋以後のことを思い出し、三太へ、いやな顔を返した。きのうは、どじょう屋を出ると、三太は、しきりに、お紋を、どこかへ誘った。若様のお相手をしろというのである。
「わたくし、ひと様のお相手をするのが商売ではありません。わたくしは、からくり座の大夫です。軽わざのお紋です」
お紋は、そういって、三太の強引な誘いを振りきり、両国へ逃げて帰ったものだが——その、三太が、きょうも、この藤波屋敷にいるのである。
（さ様って、なんだって、こんな三太みたいな、つまらない人間といっしょにいるのだろう）
お紋も、ちょっと疑問を覚えたが、しかし、この家の奥に、左膳がいるのだと思うと、やは

り、胸がはずんだ。
「左太郎さん、ほんとにいらして？」
お紋は、三太へきいた。三太はヘッヘッヘと、妙な笑いかたをして、
「お待ちかねの、こんこんちきですよ。きょうは、この藤波屋敷で、おもしろい遊びをしようってんで……もう待ちくたびれて、お紋大夫が来ないのなら、どこかへ遊びにゆこうかと、いまも話していたところで」
「のんきな、さ様。舞台をすっぽかして、こんな所へ来ているなんて」
「それも、これも、みんな、お紋大夫とあいびきがしたいためですよ。ヘッヘッヘ」
三太は、お紋を曲がり曲がった廊下をつたって、奥へいざなった。廊下の畳は、むれてケバ立っていて、あるくと、ほこりとカビのあとで、足の裏に、無気味な感触をおぼえるのだった。
「ここですよ。お紋大夫」
奥まった一室の前につき当たると三太はお紋をふりかえって言った。それから、へやのなかにむかって、
「お紋大夫さまの、お成りい」
と、ひょうきんに声をかけ、破れたふすまを、すう……っと、おごそかにひらいた。あかるいへやの縁側に、ひとりの道化がすわって、杯を口に運んでいた。道化の衣装は、白い衣装であった。左膳の左太郎が、いつも舞台へ着て出る衣装と同じであった。
「あれ、さ様は、きょうは赤い衣装を着ていられるはずじゃなかったの」
お紋は、へやへ一歩踏みいれるなり、不審そうに言った。道化の顔は、まちがいもなく、左膳であったが、道化の衣装の、白いのが、お紋にはふにおちなかった。
「赤い衣装だって？」
三太は、きょとんとした顔になった。道化は、いつも白いのを着ているのではないか——



といった顔だ。
お紋は、それには答えず、
「さ様」
と、縁側の道化へ言った。
「いつ、衣装をお着かえになったの？　きのうの、白い衣装は、あのいけすかない、お蝶の家に脱いで来たって、けさおっしゃったでしょう」
「うん」
と、道化はうなずいただけでそれ以上はいわず、また、杯を干した。
「きのうの衣装を着てらっしゃるところをみると、左様は、けさは、あれからまた、お蝶の家へ行ったんでしょう？」
「すまぬ」
道化は、また、杯を干した。かなり飲んでいるのらしく、道化の化粧の、おしろいの顔が、桜色に色どっている。おしろいが桜色に染まるくらいだから、相当の酒なのに、ちがいない。
「すまぬ——だけではわかりませんわ。なんのために、お蝶の家なんかへ行ったの」
「これ、着かえるため」
道化は、道化衣装の胸を、ちょっとひっぱってみせながら、こたえた。
「着かえる必要なんか、ないじゃありませんの……お蝶さんに会うために行ったんでしょう。お蝶に会ったら、そんな赤い衣装おかしいから、白いのにしなさい、といわれて、着かえたんでしょう？」
「うん」
道化は、うなずくだけで、弁解はしなかった。のみならず、杯をさし出して、
「ついで」
と、いった。
「いやです！」
と、お紋がおこって、ぷイと横を向くと、三太が、
「大夫。そんなに言わないで、つぎなさいよ。

せっかくの趣向が、不興に終わっちゃ、つまりません」
「趣向？」
お紋は、三太のことばを、オウムにかえした。趣向というのは、気になることばであった。
「さすがのお紋大夫にも見抜けないとあれば、若様のごふん装も、相当なものですね。それというのも、この軍師三太様がついているためのでして……」
「若様ですって」
お紋は、改めて、目前の道化をながめなおした。しかし、お紋には、この道化は、左膳だとしか思えなかった。
「そちにも、予のふん装は見破れなかったか？予も相当な役者になれるな。三太軍師の策略に従ったまでじゃが……予は左の字ではないぞ」
道化は愉快そうに笑って、立ち上がった。真田鶴太郎であった。三太の計画にしたがって、鶴太郎はおもしろ半分に、道化にふんしたのだった。
「なぜ、わたしをだましたんです。なぜ、このようないたずらをなさるんです」
お紋は、目前の道化が、左膳ではなく、きのうの、白ずきんの若様であると知ると、火のようにおこって、若様に毒づいた。
「失礼です。あんまりです。わたしを酌女あつかいするなんて！」
地獄虫の三太のほうをふりむいて、
「あんたが軍師になって、こんないたずらをしたのですね。あの手紙も、あんたの字だったのですね。道理でへたな字だと思った」
「こいつアとんだおしかりで恐れいりますね。だがお紋さん、このおかたは、ほんとうのことをいえば、信州松代、十万石、真田さまの若様だぜ。お紋さんが、若様にかわいがってもらえば、そのうち松代のお城へつれていってもらえるンだ。からくり座で、投げ剣のお紋大夫といわれているよりは、若様の……そのうち、お殿様だ。そのお殿様の側室として暮らしたほうが、どんなにしあわせなことか。あっしァ、お紋さんのためをおもって、こういうしばいを打ったんだ。ヘン。おこられるのはあべこべだ。礼を言ってもらいたいくらいよ」
三太は、お紋の抗議へ反対にこういうのだった。お紋は、よけいにくやしがって三太へ毒づいた。
「十万石がなんです。わたしは左様のように、欲のない、名誉もお金もいらない人が好きなんだよ。みそこなわないでおくれ」
「そのように申すものではない。これは座興だ。軍師三太の知恵のあるところを、ちょっと示したのにすぎない。手当はつかわすゆえ、しばらく遊んでゆけ」
鶴太郎は、お紋へ杯をさし出した。それからちょうしをとって、
「ついでくれ」
「お断わりします。左様と同じ姿でわたしをだますのはひきょうです。にせ者の道化には――」
お紋は、鶴太郎の手からちょうしをひったくると、いきなり、パッと酒を、鶴太郎の顔へ、ぶっかけた。いっぱいにはいっていた酒は、鶴太郎の、卵に目鼻をつけたような、道化の顔へ飛んで四散した。
「あッ。これは……」
鶴太郎のあわてた顔は、こっけいをとおりこして、むしろ哀れであった。十万石の若様も、地獄虫の三太という、浅知恵の軍師の書いた、にわかしばいの筋書きにのせられて、すっかり三枚目にされてしまったのである。
「お紋ッ、な、なンしやがるンだッ」
三太は、責任上、そうどならねば、ならなかった。ぱっと立ち上がると、いきなりお紋のほおを打った。
「あッ……何をするンです」

お紋は、打たれて、はげしい反抗を覚えた。横っとびに、ふすまをつき破って、次の間へさがると、すばやく懐中へ手をさし入れて、一本の手裏剣を抜きとった。

「投げるよッ。おまえさんのノドを刺しとおすよ……ノドがいやなら、目へ打ちこみましょうか。左の目でも、右の目でも、お好きなところへ、打ちこみますよ」

手裏剣を右手にもって、お紋は投げる構えをつけた。お紋の手裏剣のたしかさは、地獄虫の三太には、よくわかっていた。去年の夏、中仙道で、鳥追いのお蝶が、お紋の手裏剣にみまわれて、立ち往生をしたのを見ているし、からくり座での、あのすばらしい投げ剣は、すでに定評ものだ。

ノドもといえばノドもと。左の目といえば、左の目。お紋は、思うところへ手裏剣を投げることができるのだ。追っかけてゆこうとした三太は、さすがに、お紋の手裏剣にたち向かうだけの、自信はなかった。

「あぶねえッ」

おもわず、二、三尺とびさがって、手を振った。

「そ、そいつを投げられちゃかなわねえ。お紋さんの投げ剣は、似我蜂以上にすばしこくて、サソリ以上に、おっかねえ針をもっているから、いけねえ」

「あやまる？」

お紋は、手裏剣を、さし上げたまま、言った。あやまらないなら、投げる、という口調だ。

「すまん」

三太は、いまいましそうに、ぺこんと頭をさげた。とんだ軍師ぶりであった。

「みそこなったこと、わかって？」

お紋は、おっかぶせるように言った。こういう時には、すこしくらい、あくどくにらみをきかせないと、相手はほんとうに恐れいらないことを、お紋は江戸ぐらしのうちに、いつか覚えこんでいたのだった。

「おみそれしました。かんべんして、おくンなさい」

三太は、あわれに弱腰になって、腰を折った。お紋は、ふン！　と鼻で笑って、こんどは、若様の道化姿へ、

「わたしをだましたンだから、あやまりなさい」

と、謝罪を要求した。さすがは若様、あやまるなどということは、知らなかった。

「予は、三太という作者のいうとおりに、ふん装をし、動いたにすぎない。それを見る客がだまされたからといって、役者が、いちいち、客にあやまるのは、道ではない」

鶴太郎は、若様らしく、そこに突っ立ったまま、頭をさげるけぶりもみせなかった。

「ほんとうに、役者にだけなったのだね。わたしをだまそうとして、三太とぐるになったのと違うのだね」

「うむ」

若様は、うなずくだけである。お紋は、三太のほうをふりかえって、

「そのとおりに違いないのね？」

「すまん」

三太は、またあやまった。

「それなら、この剣を投げるのをかんにんしてあげましょう——さ、そこをおのきっ」

お紋は、三太を縁側へ追いやると、すばやく廊下へとび出し、くやしさのくちびるをかみしめて、藤波屋敷を、とび出していった。

と、それと、入れちがいに左膳が反対の入り口から、この藤波屋敷へ駆けこんで来た。お紋をすくい出しに来たのである。

「三太ッ」

鶴太郎は、道化の顔を三太へ向け、にらみつけるようにして、言った。

「おのれは、真田鶴太郎に、恥をかかせたな。予が、そのようないたずらの、よろしくないと申したのを、まかせておけ、などと言って、か

ってにあのような手紙をかき、お紋なるものを呼びよせた」

「へい」

「そのうえ、どこかから、怪しげなる、このような衣装をかりて来て、予に着せ、予の顔を道化にしてしまった。予を道化にしたのみならず、予に大恥をかかせてくれた。えい、それへ直れ」

久しぶりに、鶴太郎の酒乱癖が顔を出したらしい。三太は青くなってしまった。鶴太郎の酒乱は、たちが悪かった。刀を抜けば、ほんとうに斬りつけるからである。

「あ、あぶない」

三太は、鶴太郎の右手に、キラリと抜き身の光ったのをみて、横ッとびに、四、五尺とびのいた。

「け、けっして、若様に恥をかかそうなどと、そんなだいそれた……」

「恥をかかそうとして、やったことであるなら、そッ首はとんでしまうわ。しかし、結果において恥をかくことになってしまったのだから、その責任はまぬがれないぞ——片腕を斬りおとすだけで、ゆるしてやる」

鶴太郎は、抜き身を、ずいっと前へさし出し、よろめく足で、三太へ迫った。三太は、すっかり肝をつぶして、

「ひえ……ッ。お、おゆるしのほどを」

「ならん。それへ直れッ、右の腕がよいか、それとも、左の腕がよいか、返答をしろ。のぞみの腕を斬ってつかわす。右か？」

「右は、こ、こ、困ります。食事のとき、はしがもてません」

三太は、はしをもって、めしを食うまねをしてみせた。

「それでは、左の腕を斬る」

鶴太郎は、また、近よっていった。三太は拝むふうをして、

「左も困ります。左の腕を斬られると、若様のように、杯が持てません」

と、こんどは、左腕で、杯をもって、口もとへはこぶまねをしてみせた。

「酒をのむのに不自由とあれば、左の腕も斬るのはよそう。それでは、そッ首を斬ることにするぞ」

刀をななめに振り上げて、打ちおろそうとするから、三太はますますあわてて、

「く、首は大いに困ります。首を斬られると、物が食えませんし、だいいちあるくのに、見当がつきませんよ」

「どこがよいのか。つごうのよいところを言え。きさまのいうところを斬ってつかわす。武士のなさけによって……」

「お願いできることでしたら、どこも斬らないで、ご勘弁ねがいたいと存じます」

「ならん……あ、そうじゃ、鼻を切ってつかわす。鼻なら、困ることはないぞ」

鶴太郎は、酔眼を見すえて、えいっ！　と三太の鼻ッ先へ、一刀を振りおろした。三太の鼻がすっとび、白刃は空にながれて……そのとき、左膳がとび込んで来た。

左膳は、抜き身をふりまわしている。道化の鶴太郎をみると、一、二歩うしろへさがって、

「はて？」

と、首をかしげ、

「そこにいるのは、拙者では、ないか？」

と、聞いた。

「なに、拙者じゃと？」

鶴太郎は、いぶかしそうに、これも首をひねって、

「きさまが、予だというのか。たわけ者め。きさまはきさまで、予は予だ」

「拙者そっくりだ。拙者が、この藤波屋敷にいて、お紋へ手紙を出したので、お紋が、ここへ来たときいて、それは、まことか、どうかと、たしかめに参ったのだが、まさしく、まごうことなき拙者がそこにいる」

「なにを、迷いごとを申しておるか！」
「そこにいるのが、道化の拙者であるとしたら、この拙者は、いったいだれなのか？」
左膳は、キツネにつままれたかのように、しきりに首をかしげて、目前の道化が、自分と、寸分の相違もないのに驚きのひとみをみはっていると、鶴太郎は、
「きさまは、お紋を隠したのであろう。お紋をここへつれて参れ」
と、請求した。左膳は、ふにおちない顔で、
「お紋を手紙でよんだのは、拙者であるということになっているが、拙者には覚えはないこと。ハテ、すると、拙者の影の拙者が、お紋を呼んだのかな」
「何を申しているのか、さっぱりわからん。きさまは酔っているのであろう。だから、自分がふたりに見えるのじゃ。それとも、キツネかタヌキにつかれて、自分がふたりにみえるのであろう。一つ、予が、そのタヌキ、キツネを追い出してやる」
鶴太郎は、左膳の前へ、よろめきながら近寄ると、
「えいっ」
と、抜き身を振りおろした。左膳はそれをかわして、
「お紋を出せっ」
と、鶴太郎の右腕を、手のひらをたてにして打った。
鶴太郎は、右腕を打たれて、おもわず、刀のつかをはなした。抜き身は、つかのほうを下にして、さかさに畳の上へ落ちた。その瞬間である。鶴太郎は、
「こやつ、予にむかって無礼であろう」
と、泳ぐように、左膳へとびついていったが、さかさにおちた刀のつかにつまずき、
「あっ」
と、前のめりにのめって、うつぶせに倒れた——と見えた一瞬、



「うわ……っ」
なんとも、いいようのない声をしぼって畳の上へ、腹ばいになってしまった。ぱっ！と赤い血が、あたりへとんだ。鶴太郎は、おのれの刃で、おのれの腹をつきさしてしまったのである。
「やっ……若様っ。どう、どうしましたっ」
三太は、ろうばいの色をみせ、切られた鼻を押えて、鶴太郎へかけより、鶴太郎を片手でかかえおこした。鶴太郎の白い道化服が鮮血に染まって、鶴太郎は、もうコト切れていた。その腹には、真田家重代につたわる「雲切丸」の刃が、ぶきみに刺さって光っている。もう、医者も、なにも、必要でなかった。鶴太郎は、完全に絶命し、三太に抱かれながら、しだいにつめたくなってゆく。
「三太」
左膳は、三太を呼んだ。縁側にすわりこみながらである。
「死んだ者を、いつまで抱いていたところで、生きかえりはしない。それよりも、生きているやつの手当を、早くしろ」
「生きているやつの？」
三太は、きょとんとして、左膳をながめやった。なんのことか、意味がわからなかったのだ。
「おまえの鼻だ。血が出ている。鼻欠けにされたやつの死体をだいているよりも、おのれの生きた鼻の手当をしろ」
「へい」
いわれて、三太は、そで口で鼻をおさえた。べっとりと血がそでにつく。
「ひでえことに、なりやがった」
三太は、鶴太郎の死体を、そこに寝かすと、
「さ、酒を一杯ください」
と、左膳へ言った。左膳がちょうしをとって渡すと、三太は、てのひらへ酒をつぎ、それで切りそがれた鼻の切り口を洗いながら、

「この屋敷は、凶の家だから、ここに住むものは、必ずなにかのたたりがある、といわれていたが、まさか、こんなことになるとは、おもわなかった」

ぐちめいたことをつぶやき、

「どうします。この始末を？」

と、左膳へ相談口調で聞いた。左膳は杯に酒をつぎながら、

「おのれかってに、自分の刃で腹を刺して死んだものを、拙者に、どうしようもない。おまえの主人のことだから、おまえがかってにしまつすることだ。拙者には、かかわりのない人物だ。拙者は、お紋をつれて帰ればよい」

「お紋さんは、とうに逃げて帰りましたよ。なかなか気の強い女で、ちょうしの酒を、この若様にぶッかけて、逃げてゆきましたよ」

「お紋は帰ったのか。それでは拙者も帰るとしよう」

目の前に、ひとりの人間がみずからの失策で、腹を刺して死んでいるのを、まるで、人形でもころばしてあるくらいにしか感ぜず、左膳が腰を浮かすのへ、三太は、

「あ、もし、あっしひとりを残して行ってもらっては、はなはだ困りますよ」

鼻の切り口をおさえながら、左膳へ哀願するように、

「このおかたは若様ですぜ。十万石の跡目相続人ですよ。表向きになったら、あなたも、あっしもハリツケものですぜ」

「十万石であろうが、こじきであろうが、死んでしまえば平等だ。火にかけて灰にするなり、川へ流して水葬にするなり……いいようにしまつしておけ。死んだ人間のために騒ぐのは、いちばんバカなことだ」

「あ、もし、お待ちになって……あっしひとりでは心ぼそいから、逃げるのならいっしょに逃げましょう」

「逃げるのではない。帰るのだ。ここに用がなくなったから、帰るのだ」

左膳が、座敷を出てゆこうとすると、表のほうから、

「頼もう……頼もう……真田鶴太郎様お迎えに参りましてござります」

## 身がわりかご

「あ、だれか来たようですぜ。困った、まったく困りました。左の字のだんな」

三太は、うろうろして、

「人がはいって来ないうちに、とにかく、この死体をしまつしないことには……左の字のだんな。この若様の死んだのについては、だんなにも、いくらかの責任がありますから……」

「責任などない」

左膳は、けろりとしている。先方がかってに斬りつけてきて、かってに、おのれの刃で、おのれの腹を刺したのだから、責任など、あろうはずはない、といった顔だ。

「そんな無責任なことをおっしゃっては困りますよ、だんな……とにかく、なんでもいいから、あっしの手つだいをしてくださいよ」

「手つだいか」

なんの手つだいであるかは、左膳はきこうとはしない。頼まれれば、なんでも手つだう顔だけはする。

「しかたがありません。あっしの手で、なんとかケリをつけましょう」

と、三太は、道化の鶴太郎の両足をつかんで、

「すみません。頭のほうをもってくださいよ」

と、死体をどこかへ運ぶつもりらしい。

「頭をもって、どうするのだ」

「じれったいね、だんなは……頭をかかえるんですよ。押し入れの中へ、ひとまず、仏様にはいってもらうんです」

「押し入れの中へ、寝かすのか」

「とにかく、早く頭ンところをかかえてくださ

いよ。人が来たら大ごとこんりんですからね」
三太は、左膳に、死体の頭をかかえてもらうと、ふたりで死体を押し入れの中へほうりこんでしまった。それから、いそいで、たたみの上の血をふくと、その上へ座ぶとんを置いて、ごまかした。
「だんなは、この、座ぶとんの上にすわっていてくださいよ。あっしは、玄関へ出てみますから……」
三太は、いそがしげに、座敷を出ていった。雲切丸の刀身が、血のついたまま、ころがっている。左膳は、それをひろい上げ、懐紙で血ノリをぬぐって、刀身をながめながら、
「なかなかのわざものだな。差し料はりっぱだが、持ち主がバカだから、刀も光らぬ」
そんなことをつぶやき、さやへ刀身をおさめたとき、三太があわててもどって来て、
「左の字のだんな、えらいことになってきました。どうしますか」
と、もう顔の色をかえている。
「なにが、えらいことになってきたのか」
左膳は、すこしも、あわてようとしない。三太は、生きたここちもなく、
「信州松代、十万石、真田家の首席家老、朽名大和というのが、家来を十人ばかりつれて、仏様を迎えに来ましたンで」
「もう出棺か。手まわしのよい家来どもだな」
「出棺じゃありませんよ。生きている若様の、鶴太郎君を迎えに来られたんですよ。困った、困った。つめたくなってしまった若様なら、押し入れの中にござるが、あたたかい生きた若様は、この世にはもういないンですからね」
「若君様ッ」
逃げられては——と思ったのであろう、そこへ、朽名大和が、ふたりの家臣を従えて、案内も待たずにはいって来、左膳のうしろ姿へ、ぴたりと両手をついた。
「なにとぞ、ご帰城のほどを……朽名大和、こ



のたびこそは、命にかけても、若君様をおつれ申して、信州へ帰る決心にございます」
「こまったな、大和」
左膳は、雲切丸の刀をもてあそびながら、大和へうしろ姿をみせたまま言った。
「なにを、お困りにございます」
大和は、左膳の着ている、紋つき羽織の、六連銭を見つめ、いぶかしげに、きき かえした。
「若様は死んでしまった。だから帰城するわけには、ゆかぬ」
「そのようなわやくは、仰せられますな。なにとぞ、松代城のために、また、信濃守さまのために、ご帰城のほどを……」
大和は、左膳のいうことを、うけつけようとはしない。げんに、目の前に——上屋敷から抜け出してきたままの姿で、若君さまが、すわっていられるのではないかと、左膳のいうことを冗談としか受け取らないのである。三太は気が気ではなかった。いまここで、左膳に、鶴太郎の腹切りのことを打ちあけられては、おのれの命は、まっ先にとんでしまうので、なんとかして、この場をごまかさなくてはならぬと、
「若君様……ご家老様のお迎えにございます。ここのことは、あっしが始末をいたします。とにかくお帰りなさいますように」
と、目で合い図をし、とにも、かくにも、若様になりすませと、すすめるのだった。
「困った。困ったぞ……東西南北なく、浮き草の身の拙者に、帰るべき城のあろうはずはなく、また、拙者は若君でもない」
左膳は、いかにも困ったように、くるりとふりかえると、雲切丸の刀を、大和へさしだして、
「これは、死んだ若君の遺品だが、なかなかの名刀ゆえ、これを若君と思って、持ちかえってもらいたい」
そういうなり、むぞうさに、大和のひざのまえへ、ぽいとほうりだした。
「あ、これは……」

大和は、その刀をひと目で雲切丸とみてとって、

「若君様……このようなご冗談は仰せあられますな。これはまさしく、真田家重代につたわる、雲切丸の名刀。これをご所持のかたは、真田家の跡目ご相続人のほかは、ほかにおられません。その若君さまが、おなくなりあそばされたなどと……なにとぞ、なにとぞ、わやくはおやめくださいまして、ご帰城のほどを」

鶴太郎の刀を返したことが、かえって、若様であることの証明となってしまったのである。

「それっ」

大和は、ふたりの武士へ、目くばせすると、ふたりの武士は、すばやく左膳へ寄って、

「若君様」

「ご帰城のほどを」

と、左右から、左膳の手をとって、左膳をひっ立てるように、立ち上がらせてしまった。

「さ、若様、おかごへ――」

三太も、ここぞとばかりに、そう助言をし、左膳の腰のあたりを、うしろからすもうの押しの手で押し出した。

こと、ここにいたれば、左膳は無抵抗であった。これ以上の、自己弁明は、左膳のとらざるところである。浮き草は、西に東に、ながれて、風の吹きようで、どこへでもゆく。ときには、窮屈なほら穴のなかへも吹きこまれてゆくが、浮き草は、それも運命のひとつだとあきらめて、それに従って、不平をいわない。

左膳も朽名大和に、ここまで若君あつかいをされてしまえば、もう、何をかいわんやの心境であった。これもまた、浮草左膳の、浮き草浪人たるゆえんと、若君にされる運命にしたがい、身をゆだねるのだった。

ながい廊下を、曲がりまがって、玄関へゆくと、そこに、りっぱな乗り物が一丁すえられてあって、数人の武士が、ひざをついて控えていた。



「若君様のお帰りじゃ」

朽名大和が、お供の侍たちへいった。侍たちは、いちだんと、頭をひくくさげて、乗り物の戸をひらいた。

「若君様」

大和は、左膳へ、乗り物の人となるようにと、うながした。さすがに左膳は、気まずい思いであった。

ちょっと、三太のほうを、ふりかえってみた。三太は、切られた鼻のキズロを、白い布でおさえて、そこに立っている。

「それでは若様……あとのことはどうぞ、ご心配なく」

三太は、鼻を切られているのでしゃべりにくそうな、もののいいかたをした。

「さらばじゃ」

左膳は、しかたなさそうに、三太へ別れのことばをかえした。すると、朽名大和は、何をおもったか、小判を五枚、懐中からとりだし、それを懐紙につつむと、

「若君様のお世話、いろいろとご苦労でござった。これは、すくないが、これまでの世話料じゃ」

と、いって、三太の手へにぎらせた。三太は、すっかり目をまるくして、

「こ、このようなものを、とてもあっしがちょうだいできるわけのものでは――」

と、押しかえそうとするのを、大和は強く受けつけず、

「若君様を、返してくれた、これは礼じゃ。きょうかぎり、若君様のことは忘れてくれ」

と、むりに握らせて、玄関へ降り立った。三太は、くすぐったい思いで、五両の小判をふところへねじこんだ。お礼どころか、鶴太郎を、死に至らしめた原因をつくったのは、ほかならぬ三太自身であってみれば、お礼をされるどころか、さかさハリツケにされても、文句をいえないところだった。

「お立ちイ……」

声がかかって、左膳の乗った塗りかごは、地をはなれた。大和の顔に、生き生きとした色がよみがえっていた。まだ、芽もでていないフジだなの下を、お乗り物をかこんだ一団が通って——屋敷のそとへ出てゆくと、三太はホッとして、奥の座敷へ引っ返していった。

押し入れをあけると、道化姿の鶴太郎の死体は、もう氷のようにつめたくなって、硬直していた。三太は合掌し、それから仏の道化へ言った。

「すまねえが、仏様には、からくり座の左太郎になってもらわなくては……あの、ご家老さまは、なにも知らずににせ物をつれて帰られたが、五両のてまえ、本物をにせ物扱いにしなくては申しわけがねえ」

左膳を乗せたかごは、真田の上屋敷へはゆかず、そのまま、中仙道を、信州にむかって、いそいだ。上屋敷へかえって、剣持源太夫の一味と、どんな、いざこざを起こすまいともかぎらぬのを案じたのと、そこで、またぞろ若様に逃げられては……という、朽名大和の用心が、かごを中仙道へ走らせたのだった。しかし、藤波屋敷を出たのは、午後もおそかったので、かごをまもる一行は、江戸を、そう遠くはなれることはできなかった。

かごの両わきには、しっかりした腕ききの侍をつけた。これには、若様のとび出すのを防止する意味と、若様をねらう一味があるやもしれないのにそなえての、大和の配慮であった。

日がくれた。かごが、すこしでも、江戸を遠くはなれるために、戌の下刻（九時）まで、あるきつづけた。浦和の本陣で、宿をとった。藤波屋敷から、約六里である。かごは、本陣の玄関へおろさず、奥の間まで運びこんで、そこで左膳（若様）をおろしたのは、左膳の頭は五分さかやきであったから、それを本陣のひとたちにみられるのを、大和がきらって、そうしたのだった。



五分さかやきは、浪人ものを意味する。信州松代、真田十万石の若殿が、五分さかやきの浪人まげでは、きこえが悪いと、さすがに大和は年の功で、そういうわさのたつのを、ふせいだのだった。すぐに、この宿場の、優秀な髪結いを召し出して来て、大和は、特にたのみこんだ。

「若君様には、ゆえあって、さかやきを無精あそばされていられるが、このことは世間へはないしょにしてくれるように」

髪結いは、絶対に口外いたしません。と、大和へ誓った。

左膳は、大和のいうがままに、まるい鏡台のまえに、おとなしくすわった。もともと、五分さかやきがすきで、こんなふうにさかやきをのばしているわけのものではなかった。そるのが、またそってもらうのがめんどうくさいので、のばしていたさかやきである。

左膳といえども、頭のすっぱりして、気持ちのよくなるのは、悪いものではなかった。

「さかやきをそらせて、いただきます」

と、大和にいわれれば、

「あ、そうか」

と、すっぱりとした気持ちになることに、賛成の意を表するのだ。髪結いは、左膳のさかやきをそりながら、その頭に、ホコリやら、あかやらが、まるでシックイのように固まっているのに、一驚を喫したらしく、ぬるま湯を、やたらに、五分髪の間へすりこんで、そのあかをふやかし、そのあとでカミソリをあてていった。そしてそりおわると、むし手ぬぐいで、青いさかやきのあとを、ていねいに、幾度も、幾度も、ぬぐった。さて、すっかり髪が、若殿風に結い上がると、左膳は、ますます鶴太郎とそっくりであった。どこからながめても、鶴太郎にまちがいなかった。

「これで、やっと、この大和めも安心いたしま

した。長らく若君様を、おさがし申しあげたかいがございました」

大和は、ほれぼれと左膳をながめながら、しみじみとした口調で言った。

あくる日は、深谷どまり。三日めは、早だちで、道をいそぐ。左膳は、すっかり若殿姿で、乗り物の中から、移りゆく視界をたのしんでいた。足のおもむくままに、西に東に、天下をあるきまわるのも、いい気持ちなものだが、こうして、乗り物に打ち乗って、移りゆく街道の風物をながめるのも、悪いものではなかった。

(世の中は、皮肉にできている)

左膳は、そんなことをつぶやく。自由人として、天下をあるきまわっているときは、風景の変化をたのしむためには、あくまで、おのれの二本の足を、交替に動かさなくては、ならなかった。が、それを許されない、不自由人にされてしまうと、こちらは、小さなろう屋へ押しこめられていても、風景のほうで、かってにうつりかわってくれるから、けっこうたいくつもせず、その風景の変化をたのしんでゆける。

(さて、こうなると、どっちが良いのか、わからなくなってきたぞ)

左膳は、考える。みずから、おもむいて、旅の変化をたのしむのがよいのか、かごに身をまかせていて、かってに変わってゆく風景をたのしむほうが、よいのか……。

(拙者のような無精ものには、このほうがむいているのかもしれぬ)

そんな結論が出かかったとき、左膳の目に、ふと、なつかしいものが映った。

「かごを止めい」

左膳は、若殿口調で陸尺へ声をかけた。かごはとまった。おろされた。

「はき物を、これへ」

左膳の声に、つき添いが、新しいぞうりを、かごのわきへ、そろえて置いた。左膳は、それをはくと、つかつかと、道ばたの茶店へ立ち寄って、

「ばあや……ばあやはいるか」

と、呼んだ。かつての日、ミツバチに襲撃されて、すもうとりのように、全身をはれ上がらせたことのある、例の、だんごをひさぐ茶店であった。声に応じて、茶店のばあさんが、裏から出て来て、

「だんご、食わっしゃるか?」

と、左膳をみて言った。大和が駆け寄って来て、

「これこれ、何を申すか。若君様にたいして、そのような……」

「大和、すておけ」

と、左膳は、手を振った。

「このばあやとは、以前からの知り合いじゃ」

「はっ」

と、大和は、腰を折ったが、すぐに、

「しかし若君様……このようなところへお立ち寄りなされては」

「悪いというのか?」

「真田家の若君様ともあろう、だいじのお身で、だんご茶店にお寄りなされたと、世間へ知られては……」

「だんごを食って、それでキズつくような、安い家名なら、たいした家名ではあるまい。そのような真田の家なら、行くのをやめるぞ」

左膳の若君に逃げられては、大和のこれまでの苦心は、水のアワとなる。大和は、そこで、しぶしぶ、左膳のなすがままに、まかさないわけに、いかなかった。

「ばあや、皆の者に、だんごを配ってやれ」

左膳が、ばあやへ言った。すると大和が、しぶい顔をして、

「若君様、だんごをお召し上がりになられるので?」

十万石の若君様が、道ばたの茶店で、だんごを食ったと、世間へきこえては、いかにも、かんばしからぬことであった。

「だんごを食って悪いか」
「ご身分がら、いかがかと」
「日本一の桃太郎は、キビだんごを食った。しかし、人は笑わない」
「あれは、桃太郎の少年のときでございますから」
「少年のときなら、だんごを食ってもよいのか」
「はあ……」
「予は」
と、左膳は、自分のことを、予と呼んだ。この場合、予と、いわなければ、形にならなかったからである。
「予はへや住みの身じゃ。一人まえではない。つまり少年と同じ身じゃ。少年の桃太郎が、だんごを食って、おかしくないものなら、少年同様の予も、だんごを食ったとて、おかしくはなかろう」
「道理は、そのようでございまするが」
「道理はとおっているが、食うのはいかぬというのか。だんごはそのように、道理の次第によって、食ったり、食わなかったりするものではない——おい、ばあや。全部のものに、くばってやれ」
ばあやは、舟底に、いっぱいはいっている、くしだんごを持ち出して来て、
「どうぞ、かってにとっておくれ。これだけの大ぜいさまに、お出しするさらはありませんので、すまんけど」
と、いいながら、舟底をもってまわった。左膳がまず二くしとりあげた。
「大和。遠慮はいらぬ。十くしばかりやってみぬか。ここのだんごは、ハチミツで甘みをつけてあるから、うまいこと上州一だ」
「天下一ですよ。だんな様」
と、ばあやが大きく訂正する。大和は、若様にそういわれて、しかたなさそうに、一くしとりあげる。そして情けない顔をして、一口かじりとった。



皆の侍たちも、若君と大和が、くしを手にしたので、それにならった。
「うまい」
と、左膳は、だんごを食べながら、ばあやへきいた。
「ハチは、息災でいるか？」
「はい。まだじゅうぶんな暖かさでございませんので、箱の中に閉じこもっておりますが……だんな様は、よくご存じで」
ばあやは、左膳を忘れているのらしい。左膳は笑って、
「去年の夏、ここのハチのために刺されて、さんざんな目にあわされたぞ」
「ああ、あのときの二分銀さんですか。だんな様は」
ばあやは、やっとおもいだした。朽名大和は、若君様と心やすい口をきく、茶店のばあやに、にがにがしいひとみをおくっていたが、ここで何かをいえば、また若君に反撃され、逃げられる結果にならぬともかぎらぬと思ったから、文句もいわず黙視していると、左膳は、だんご代が払えず……トドのつまりは、ハチにさされて、水の中へもぐり込んだことなど、ばあやと、なんのへだたりもない会話を、さんざんにとりかわしたあげく、やっとかごの人となってくれた。
「やれやれ」
と、大和は、ようやくしゅうびをひらいて、かごの一行は、妙義の山ろくにむかって、すすんでいったのだが、かごが妙義村をすぎ、妙義山ろくの、例のクヌギ林にさしかかると、
「かごをとめい」
また、かごの中から、声がかかった。陸尺は声に応じて、かごを止めると、
「降りる。ぞうりを」
と、いう命令である。
大和が、また何かはじまるのかと、かごわき

へとんで来て、
「若君様。このようなところで、なんのご用でございましょう」
「なごりを惜しむのじゃ」
「なごり？」
「このクヌギ林の中に、小屋がある。予が建てた小屋じゃが」
と、左膳は、すっかり若君になってしまって、
「そこで三日の間、くらしたなつかしさを惜んでくる。いわば、この林の中の小屋は、予の第二の故郷である。期日はみじかいが、忘れえぬ、ふるさとじゃ」
大和も、それには、反対できなかった。だまってぞうりを、かごわきへならべさせ、
「それでは、すこしの間、おなごりを惜しまれるように」
左膳は、ぞうりをつっかけると、クヌギ林のなかへはいっていった。例の小屋は、もうかたづけられて、そこにはなかった。左膳は、小屋の掛けられてあった場所とおぼしいあたりへ立つと、静かに黙禱した。藤波屋敷で、みずからの腹を突いて死んでいった、真田鶴太郎の霊をとぶらったのである。
不思議な縁であった。去年の初夏、ここで知りあった真田の若殿と、自分の顔が、そっくりそのままだったので、いろいろとまちがえられて、迷惑もしたし、あぶないめにもあった。そして、本物よりも、自分のほうが本物あつかいをされて、ねらわれたり、もてなされたりし、けっきょくは、とうとう本物にされて、信州おくりとなったのだが、
（どうやら信州松代城に、ただならぬ黒雲がわいているのらしい。ことのついでだ。その黒雲を払ってやろう。それが、なき本物の若殿への供養ともなろう）
左膳は、そう決心をした。そういう決心をすると、不思議な武者ぶるいが起きた。同時に小便がしたくなった。左膳は、風景のいい所をえらぶと、いきなり前をまくって、立ち小便をした。これも思い出の小便である。
「あ、これは……」
驚いて、五人ばかりの侍が道ばたからとんで来て、若君様の無作法な立ち小便姿を、人がきでもってかくした。

## 帰城

信州松代城は、江戸より五十三里。城名を、世人は海津城とよんでいたが、伝説的には夕霧城。夕霧城とよぶほうを、土地の人々はよろこんでいた。海津を〝かいず〟とよんで、それが〝けえず〟の抜き荷買いに通じるのをきらうがためだった。
清野一族が、ここに居を構えたのが、この城のはじまりで、天文六年に武田晴信のさんかにぞくし、のち、高阪弾正、森重政、松平忠照などが住み、元和元年に、真田信幸が、近くの上田から移封されて以来、代々、その子孫が世襲して、いまの信濃守にいたっている。
若君、鶴太郎に、むりやりにさせられた左膳が、この夕霧城へついたのは、江戸をたってから、五日めの夕方であった。五十三里を五日で旅したのは、かごをまもる歩行としては、早いほうであった。
大和は、この旅のことを、厳重に秘密にし、まえもって城方へ、到着の時刻は知らさなかった。キバやツメをみがいて、鶴太郎の帰りを待っている、鳥坂源左衛門の一派に、知られるのを警戒しての用心であった。事前に知られて、途中でおそわれる危険があったからである。
大手門をとおったかごをまもる一行は、いきなり二の丸へ……大和はすこし先に、鶴太郎君のわかき妻、扇子のもとへ走って、
「奥方様。ただいま、若君様がご帰城あそばされました」
と、報告をした。扇子は、ひとり静かに、レ

ンギョウの花を、床の間にいけていたが、大和の、その報告をきくと、おもわず、銀いろに光る、花バサミを、たたみの上へとりおとし、

「えっ、わがつま様が……それはまことか、まことか、そ、それは」

立とうとして、立てなかった。腰のつがいが、瞬時のことではあったが、どうかなってしまったのである。たたみに手をつき、赤ン坊の立ち上がるようにして、ようやく立った扇子は、ながいヒノキの、よくみがかれて、光る廊下を、夢うつつで、すべるようにして、大玄関へ駆けてゆくと、かごはちょうど、そこへ着いたところであった。

かごの戸が、横にすう……っとひらかれると、中に、夢にも忘れたことのない若君鶴太郎さまが——

しかし、その若君は、中で、いい気持ちで、うつら、うつらと眠っていた。

「わがつま様、お帰りあそばされませ」

扇子は、かごわきに手をついて、静かにこう言った。左膳の、こころよい眠りは、しかし、まださめない。

「若君様」

大和が、やや大きな声で、左膳へ言った。それで、はじめて、左膳は目をさまして、

「ここは、どこじゃ」

と、きいた。

「お城にござります。奥方さまお迎えでございます」

大和は、寝ぼけている左膳へ言った。扇子は、もう一度、

「おかえりあそばされませ」

手をつき直した。左膳は妙な顔をして、扇子の顔をながめた。

かごからでると、左膳は、ながい廊下を、奥の間へあるいていった。扇子と大和が、それに従った。さすがは十万石の御殿である。その善美をつくした結構は、左膳のこれまでに味わった世界では、第一等のものであった。左膳は、天井を見上げたり、庭の結構をのぞいたり——どうも、若様そだちらしくなかった。

「こちらに、ございます」

左膳は廊下の曲がりかどがわからず、向こうのほうへ行こうとするのを、大和が注意をすると、左膳は引っかえして、

「あ、こちらへ引っ越したのか」

べつだんてれもせず、ゆうゆうと引きかえして、教えられるほうへあるいていった。座敷が引っ越すはずがないのに、妙なことを仰せられる若君だと、大和も、扇子も、ちょっと小首をかしげた。

(しばらく、お留守だったので、おわすれになられたのかも、しれない)

扇子は、それを、そんなふうにうけとった。

しばらく行くと、若君の間の前に出た。左膳は、その前を平気でゆきすぎようとすると、こんどは扇子が、

「わが君さま。こちらでございます」

と、廊下にすわり、ふすまをしずかにあけた。若君が留守でも、座敷はきれいにそうじがゆきとどき、香がたきこめられてあった。扇子の心づかいが、侍女たちに、毎日こうして、いつもなんどき、若君のお帰りがあっても、すぐにお迎えできる体制を、ととのえさせてあるのだった。

「よいにおいがする」

左膳は、へやへはいるなり、くんくんと、鼻を鳴らしながら言った。扇子は、おのれの心づくしが、夫に通じたものとおもい、

「毎日、このようにいたして、お待ち申しておりました」

と、改めて、入り口に、すわり直して、

「おかえりあそばしませ」

と、三ツ指をつき、夫をはじめて、心から迎えた。つられて、左膳も、たたみへ手をつき、

「はじめて、お目に……」

はじめて、お目にかかりますと言おうとして、自分が若君の身代わりであることに気がつき、とっさの機転、

「……かかるような気がいたす。わずかの月日であったのに」

と、なんだか、わかったような、わかっていないような返事をした。大和は、ふたりだけの時間をあたえるためであろう、へやにはいらずどこかへ消えていた。

扇子は、恋しい夫が、小一年ぶりに帰って来てくれたうれしさに、とびついて、夫に、きゅっと抱きしめてもらいたい衝動にかられたが、夫が案外に、かたくるしくすわっているので、そばへ寄るのも恥ずかしいやら、また恐ろしいやらで、寄ることもならず、

「ご苦労、ずいぶんあそばされたご様子にございますが、おからだはいかがにございます。あの子（友之丞）も大きくなりました。いま侍女たちと、築山のほうへ遊びにまいっております

が、ほどのう帰ってまいりますゆえ、どうぞ抱いて上げてくださいませ」

「だれを抱くのじゃ」

左膳は、きいた。

だれを抱くのじゃ——と、左膳にききかえされて、扇子は顔をまっかにした。夫が、子どもの友之丞を抱くよりもまえに、妻たる自分を抱くべき義務のあるのを、そんなふうな冗談にまぎらわせて言ったのだと、扇子は解釈をしたからであった。

「はい。あの……友之丞でございます。友之丞は、ずいぶん大きくなりましたゆえ、お抱きあそばして、くださいませと……」

扇子は、もじもじしながら、うつむいたまま答えた。

「友之丞か。そうか、大きくなったか」

左膳は、友之丞のことなど、すこしも知らないのである。友之丞が、死んだ鶴太郎の子である、ということすら知らないのだ。が、左膳



は、運命をあやつる神の命ずるままに、ここの若君として、遇されることに腹をきめているのだから、扇子がそういえば、そうかなア……と、返事をあわせて るのだ。

そこへ、五歳の友之丞が駆けこんで来て、

「お父上ッ」

と、さけぶなり、左膳のひざへどしんと飛び上がって、左膳の首へ抱きついた。おおかた大和あたりのさしがねで、友之丞へ、そういうことをさせたのであろう。まだ幼い友之丞に、はいってくるなり、お父上などと叫んで、抱きつくだけの知恵のあろうはずはない。左膳は、いきなり、子どもにとびつかれて、ちょっとのあいだまごついたが、これが友之丞という子どもであろうと悟ると、

「おう、友之丞か、なるほど大きくなった」

「お父上が帰って来てくだされたので、友之丞はうれしい」

友之丞は、ぴょんと飛んで、左膳のひざから

おりると、改めて、両手をついて、

「お父上様、お帰りなさいませ。友之丞は寂しかった」

と、あいさつをした。扇子は、うれしそうに、左膳へ言った。

「友之丞は、このように、利口な子になりました」

「うむ、利口になった」

左膳は、お父上などと呼ばれ、わがつま様とよばれたのは、生まれて、きょうがはじめてであった。なんだかしりこそばゆくて、じっとすわっているのが、いづらかった。扇子は、いそいそと立って、いつでも夫の帰城のときにと、心をこめて作らせた、衣装をささげてきて、左膳へ着かえさせた。

いつもなら、侍女たちが、着かえの世話をするのだが、きょうだけは、扇子は、だれにも手をふれさせたくなかった。

まもなく夜がおとずれた。大和が、それを

ましめているのか、若君へのお目通りを、だれも願ってくる者はいなかった。長の旅のつかれをいやさせるために、大和はだれも近づけさせなかったのであろう。久しぶりで帰城した若君のために、夫婦水入らずの時間を、あすの朝まで、たっぷりあたえてやろう、という、大和の計らいなのであろう。まだ、夜の時刻もすんではなかったが、扇子はふとんも自分の手でのべて、

「わがつま様、おやすみあそばされませ。おつかれにございましょうゆえ」

と、ぼんやりしている左膳へ言った。

「では、やすむとするか」

左膳は、ほっとし、扇子に、いわれるままに、寝巻きにきかえ、ふとんのなかへもぐり込んだ。

正直のところ、左膳は五日間の道中で、つかれていた。早く休みたかったのである。それに、妻ならぬ妻の扇子が、なにくれと身のまわりの世話をやいてくれるのが、かってのちがうことばかりなので、いささか困りものであった。あれや、これやと、いろいろ聞かれるのも、返事につまった。へたに答えられないから、

「ああ」

とか、

「そう」

とか、高貴のおかたがよく使う、それだけのことしか、口に出せないのも、苦痛だった。ふとんのなかは、左膳にとっては解放の広場であった。のびのびと自由に手足をのばせるのは、ふとんのなかだけである。

(あしたになれば、信濃守とも会わねばなるまい。それから大ぜいの家臣とも……)

左膳は、それを考えると、ちょっとゆううつだった。大ぜいの家臣のなかには、目のきく人物がいて、左膳の、身代わり若様であることを見抜く者がいないともかぎらない。



(とんだ天一坊にならなければよいが、にせ者だなどと騒がれるのは、迷惑というものだ)

左膳は、そんなことを、寝ながらかんがえていると、ふとんのすそで、人のうごくけはいがした。そっと、ほそ目をあけて、あんどんの灯のむこうをすかしてみると、妻の扇子が、まだそこにすわって、もじもじしている。

「ああ、つかれた」

左膳は、てれかくしに、そんなつぶやきをいった。べつだん、扇子へいったわけではないが、扇子は、そのつぶやきをきくと、

「おつかれ直しに、お腰をおもみいたしましょう」

と、いった。

他人の妻に、腰などをもまれては、くすぐったいこと、このうえなしである。左膳はあわてて、

「腰はもまいでよろし」

と、言おうとしたが、そのときには、もう扇子は、軽い絹ぶとんの中ほどへ両手をさし入れ、左膳の腰へ手をつけていた。

「困る……」

と、邪険に言おうとしたが、それはいえなかった。考えてみると、左膳はこの女の夫なのである。夫であるとしたら、そのような邪険なことを、言ってはならないわけだ。小一年ちかくも、夫婦がはなれてくらしていて、久しぶりに帰って来たその夜、妻が腰をもみましょう、というのへ、困る、などという夫はどこにもあるまい。そこで、左膳も、人情を解する人の子であった。だまって、扇子の手におのれの腰をまかすことにした。

扇子は、まごころの限りをつくして、左膳の腰を、そのしなやかな、やさしい手でもみはじめた。

くすぐったかった。なんともいえない妙な気持ち……左膳とても、男である。浮き草も、陽春の季を迎えれば、花が咲く。

このような柔らかい、軽いふとんのなかで、〝妻〟とよばれる女に、腰をもまれれば、なんともいえない気もちに、おそわれるのは、当然であった。おそわれないほうが、むしろ、どうかしている、というものだ。

「なんとなく、天外にあそぶような気もちがする」

と、左膳は、扇子の厚意にむくいて言った。扇子の、その手がふるえた。なんとも、いい気もちだと、夫からいわれると、気もそぞろになる扇子だった。

左膳は、必ずしも木石の身ではなかった。そういう、扇子の、気持ちのうごきくらい、わからないことはなかったが、しかし、どうにもなるものではない。

「扇子。腰をもむのは、もうよいぞ。久しぶりじゃ。そちも、ここへはいっていっしょに寝るがよい。今夜は、うんとかわいがってとらすぞ」

そういって、ふとんをめくってやれば、扇子はセキをきった水のように、うれしさにあふれて、左膳のそばへとび込んでくることはわかりきっている。

おそらく、そんなときの扇子のからだは、火のように熱いのに違いない。そして、

「お会いしとうございました。わがつまさま、扇子はうれしい……」

くらいの甘いことを言って、鼻をつまらせ、泣きながら、左膳の胸へ、その顔を押しあてるであろう……。

が、左膳には、それは、できないのだ。

妻ならぬ妻。

夫ならぬ夫。

これは、どうにもならないかきであった。左膳は、心の中で、

「すまぬ」

と、いったつもりだったが、それがついことばにでてしまった。扇子は、またもや、もむ指



さきをふるわせて、

「なにを仰せられます。そのように仰せられると、もったいのうて」

と、心をこめて、さらにもむ。

「いや。もったいないのは、こちらじゃ。なんと礼をいってよいか、わからぬ」

左膳は、本音を吐く。真田鶴太郎の妻に、腰をもますのは、もったいないことだと、左膳は、本心を吐露するのである。

「わがつまさまは、ほんとにお優しゅうなられました。以前は、このようにいたしましても、すまぬ、などと仰せでなかったのに」

やさしく、いたわりのことばをかけられるのは、女として、妻として、いちばんうれしいことであった。

「苦労をしたからの」

と、左膳は、扇子のことばにあわすようにこたえた。扇子はうれしく、

「お待ち申し上げていたかいがありました」

もむ手を休め、さしうつむき、ほろりと一しずく、双のひとみから、白い露の玉をおとした。

「つかれたであろう」

もむ手が休まったので、左膳は慰労の意味でそういうと、扇子は、

「いえ、つかれませぬ。ついうれしくて」

と、またもみはじめる……。

いまか、いまか、と、扇子は左膳の腰をもみながら、左膳が、

「ここへはいって、休むがよい」

と、言ってくれるのを期待し、胸をハズませていた。

が、いっこうに左膳（夫）は、それを言ってはくれない。のみならず、いい気持ちでもまれていた左膳は、そのうち、ぐうぐう、いびきをかいて寝てしまった。まことに、それは、勇壮なるいびきであった。扇子は、腰をもむ手をやすめ、しばらくのあいだ、左膳の寝顔をのぞきこんでいたが、ついに、たまらなくなって、ふ

とんの上へ顔を押しあて、すすり泣きに、泣き入ってしまった。

つれない夫だった。いかに旅のつかれがあったとはいえ……せめて、やさしい抱擁でもしてくれたら、扇子は、どのようにうれしいおもいをしたことであろうに。が、左膳のいびきは、この調子では、あすの朝までやみそうになかった。扇子はあきらめて、ふとんのすそへ身をひくと、あすの朝までこうして、すわっている決心をした。あすの朝になって、夫が目をさまし、自分がこうして、一ばんじゅうおきていたのを知れば、必ず、やさしいことばをかけてくれるであろう……と、甘えたような、すねたような気持ちであった。

夜がふけていった。さすがに、扇子も、睡魔におそわれて、いつか、うつうつと、舟をこぎはじめた。あんどんの灯は、ほそって、ほとんど消えかけている。

八ツ（午前三時）ころであろうか、とつぜん静まりかえった、このへやの空気を破って、

「えい……ッ」

はげしい気合いが起きた。と同時に、左膳のあおむけに寝ている、そのノドもとへ、一刀の光が白く落ちていった。左膳の首が、胴体からはなれてすッ飛んだ——とみえたのは、それは左膳の首ではなく、まくらであった。左膳は、よく眠っていても、気合いの下で目をさまし、瞬時にとるべき心得だけは、つねにもっていた。気合いがかかると同時に、スッポンのように、首をふとんのなかへもぐり込ませ、もぐりこませると同時に、まくらをつかんで、くせものの胸へ投げつけたのである。そして、次の瞬間には、もうふとんのすそから、すぼりと抜けて、

「なにやつだッ」

刀掛けの雲切丸をつかんで、相手をすいかしていた。その声に、扇子も目をさまし、なにか問題のおきているのに気づき左膳のうしろへ身を引いた。



「しまった」

くせものは失敗したのを悟ると、第二の太刀を左膳へ打ちこんでいったが、これは、かんたんにたたきおとされ、

「やっ」

と、左膳の峰打ちを、その首の根にうけて、そのまま、だらしなく、あおむけにのけぞって倒れてしまった。覆面の、あきらかに、若君殺害の意あって忍びこんだ刺客である。そのとき、朽名大和が、あわただしく駆けつけて来て、

「申し上げまする。大殿様には、ご臨終にござります。直ちにお越し賜わりますように」

## 巡視

鶴太郎が帰って来たことを、朽名大和からきかされると、病床の信濃守は、それまで、死ぬのを待っていた——かのように、急に容態を悪化させていった。

今夜は、ゆっくり休んでもらって、あすの朝、親子対面のはこびにもってゆこう、と考えていた大和は、信濃守の容態悪化に、あわてて、二の丸へとんで来て、若君（左膳）へそのことを知らせたのである。そして、若君を刺そうとしたくせものは、きびしく縛り上げて、番人をつけて、一室へ投げこむと、いそいで、左膳を伴って、信濃守の枕頭へ、はせ参じた。

信濃守は、ほとんど、左膳の顔がわからぬほど、目はもうかすんでいた。なにか、うわごとのようなことをいい、左膳の手を握ったまま、息を引きとっていった。つき添いの、ふたりの侍女も泣いたし、愛妾お千賀も泣いた。大和まで、折りたたんだ手ぬぐいを、まぶたにあてて、すすり泣いた。が、左膳には、いっこうに、悲しい気分がわからなかった。信濃守の死によって、おのれが、もう若殿ではなく、十万石の城主となったのであるが、それも、いっこうに、十万石を背負った気にはなれなかった。

左膳は、静かになった、信濃守の顔をみつめながら、

（死ぬということは静かなことだな）

と、思った。あかの他人の死ほど静かなものはなかった。左膳は、しわの多い信濃守の死に顔をみながら、しまめのうの石を、ひょっと連想した。静かにあおむけになっている、老人の死に顔は、しまめのうの石のように、つめたくて、そして静かであった。

（人が死ぬと、そのまわりの人間が、なぜ泣くのだろう。泣いたところで、生きかえってくるわけのものではなし）

左膳は、この信濃守の跡目を継ぐべき身であることを忘れて、そんな、とりとめもないことを、次から次へと考えていた。

――あくる朝。大和は、若君鶴太郎の帰城を正式に、まず発表し、それからあとで、信濃守の逝去を発表した。

この順序は、鳥坂源左衛門一派の策動をふせぐためになされたことであった。とにかく、大和派としては、大殿の死よりもまえに、若君を城へ迎えたということは、なによりもの成功であった。若君が、もし、大殿の死に目にもあえず、死去のあとで城へ帰っていたとしたら、鳥坂一派は、必ずや若君を、跡目相続人として、適任者でない――と、言いだしたに違いない。

それでなくても……大殿の葬式が、五日のちに行なわれたのだが、そのあとで、鳥坂源左衛門は、大和にむかって、こう言ったのである。

「鶴太郎君は、小一年の間、当城を見すてて、かえりみなかったおかたである。かように、城を愛されず、家臣をいつくしまれぬおかたを、当城のあるじに直されるのは、いかがなことかと……」

しかし大和は、それをうまく弁護した。

「若君には、下情視察のお心あって、諸国をめぐられ、政治のありかたを身をもって探られたのでござる。それこそ、まことの領主としていただくべき新しい殿かと……」

「よいか。機会は、この機をおいてはほかにはない。策戦はこうじゃ。みんな近う……」

鳥坂源左衛門は重々しい声で言った。ここは鳥坂源左衛門の屋敷の、奥まった一室――あつまるものは源左衛門の腹心、三瓶平九郎、掛川大次郎、下呂典膳、相老権之助、花輪逸平太の五人である。

「まず、千曲川の岸へ、行列がさしかかったとき、前方からあばれ馬を二頭ぶっ放す。馬は殿のお乗り物にむかって突進してくる。騒ぎがおきる。そのどさくさに乗じて、殿のお乗り物を警固するとみせかけて、お乗り物を、がけ下へつきおとす」

源左衛門が、低い声で言う。

「いかにも妙案至極のことかと存じます。あの千曲川のがけから転落せば、いかに堅固なお乗り物といえども、ばらばらになるのは必定。おそらく殿には即死かと……」

三瓶平九郎が、源左衛門の秘案に、さんせいの意を表した。

「そうこなくては、思うツボとは相ならぬ……せいぜい、がけ下に巨岩のある所をえらんで、お乗り物をつきとばすようにこころがけましょう」

掛川大次郎が、相づちをうつ。源左衛門は、にっこりとあやしい微笑をもらして、

「殿さえなきものにいたしてしまえば、跡目相続の儀は、亀松どのに決することは、論をまつまでもないことじゃ」

「友之丞さまは？」

と、下呂典膳がきく。

「これは、ひき続いて、すぐに毒を盛って、葬ってしまう」

源左衛門は、いとも、かんたんに答える。相老権之助が、もう、こと成就とばかりに、

「ご家老。そのあかつきは、われわれへの、ご

加増の儀は……」
「申すまでもないことじゃ。おのおのがたには、すくなくとも、五百石ずつの加増は、いまから約束しておく」
「かたじけのうござる。かならず」
「この儀……」
「成功いたして、ごらんにいれまする」
腹心たちは、口々に誓った。そこで、源左衛門は、当日の部署について、次のように指示をあたえた。
「馬を放つ役は、三瓶氏に、掛川氏がよかろう」
「はっ。心得まして……」
「お乗り物をつきおとす役は、下呂氏に相老、花輪氏の三氏と手はずをきめておこう」
「心得まして……」
五人の腹心たちは、かたく誓いのほどを示すために、小刀のつかのところを、人さしゆびと、中指とでたたいてみせた。
……左膳の新城主がさだまってから、十日めのことである。
あすは、新しい領主の、領内おん巡視であった。この機会をねらって、鳥坂一派は、殿をなきものにしてしまおうと、秘策をねっているのだ。
桜がチラホラと咲いて、夜の空気は、なまあたたかかった。新城主、信濃守となった左膳の乗り物は、大ぜいの家臣にまもられて、朝はやく夕霧城を出発した。先殿逝去による、領民たちの落胆へ、新しい領主の姿をみせて、領民にあらたなる希望を植えつけさせんがための、朽名大和の才覚だった。が、このゆく手に、おそろしい計画の魔手が、網をはっていようとは、左膳の新領主も、この巡視案出者、朽名大和も、知るよしのないところであった。
(殿様というものも、楽な仕事ではない)
左膳は、乗り物のなかで、そうつぶやく。うつり変わりゆく、四囲の風景は、すべて、信濃守たる自分のものである。が、これは、信濃守という名の人物のものであって、左膳である自分のものではない。だから、左膳は、心の中では他人の風景をながめている気である。左が千曲川で、断がいの下のほうに、青い水をたたえている。
がけの高さは、五十尺は優にあった。下が岩になっていて、青い美しいセキレイが一羽のどかに、ぴょんぴょんと、尾で岩をたたいている。
(もう、そろそろ殿様かぎょうから逃げ出さなくてはならない。が、朽名大和は、なかなか目をはなさぬから、そのすきがない。それに、困るのは……)
来る夜来る夜、妻の扇子が、まくらもとにすわったり、ふとんのすそにすわって、一晩じゅうすすり泣くことだ。
(あれには、なやまさせられる。扇子は妻であって妻ではないのだ。どんなに泣かれても、どうにもならない)
今夜も、扇子がふとんのなかへ手をさし入れて、おつかれでございましょうから、お腰をもみましょう——というに違いない。それを考えると、かわいそうになってくる左膳であった。
右手は、丘になっていて、左手は相変わらずの断がいである。乗り物は、ゆっくり、牛のような歩みをつづけている。
「おい……」
と、乗り物の右側についていた下呂典膳が、川岸のほうに従っている、花輪逸平太と、相老権之助のふたりへ、めくばせをした。ふたりは、うんと、うなずき返した。いつ、なんどきでも、乗り物をがけの下へたたっ込む態勢は、これでついたわけだ。あとは、前方から、あばれ馬が駆けて来さえすれば、よいわけだ——が、馬は来ず。そのかわりに、丘の上から、するどい気合いが、
「えいッ」
と、とんで来て、
「あッ……ううン」
下呂典膳が、不意に胸をそらし虚空をつかン

で、のけぞって倒れた。
「や、なんとなされた」
うしろからついて来た家中の二、三人が、下呂典膳のからだを抱きおこして、
「手裏剣だ」
と、叫んだ。典膳の胸に、一本の手裏剣がひかっているのだ。
つづいて、
「えい、えい、えい！」
と、気合い。
十数本の短剣が、一条の綱になって、乗り物めがけて、とんでくる。短剣は、乗り物の屋根に、みごとにささったが、さいわい、城主左膳のからだへは、あたらなかった。
丘の上から投げたので、剣は乗り物の屋根にささっても、その下の左膳のからだは、死角にあたっていたから、剣はおよばなかったのである。
「くせものッ！　ろうぜき者じゃッ！　殿のお身を守れ！」
乗り物の、前をまもっていた大和が、驚いてかけもどると、乗り物を警戒しながら、一同へさけんだ。丘の上には、女がひとりたっている。お紋だ。すげがさをかむって、手に、まだ、数本の短剣を、にぎっている。おどろいたのは、朽名大和よりも、むしろ、鳥坂源左衛門のほうだった。あばれ馬が駆けつけてくるかわりに、手裏剣がとんできたのである。そんな手はずは、してなかった。手裏剣は、まったくの飛び入りだ。あやまって、腹心のひとり、下呂典膳は刺されて倒れたが、あきらかに乗り物の中の、信濃守をねらっている飛剣であることには、まちがいない。
と、いうことは、自分たちと同じ目的の女であることにも、まちがいはない。どういう事情で、新城主をねらって、手裏剣を投げたのか、それはわからないが、目的の同じ女の出現は、興味もあり、たのもしいことであった。
「あやつを、ひっ捕えッ」



鳥坂源左衛門は、とっさに、部下へさけんだ。四、五人の部下が、ばらばらッと、丘へかけ上がり、お紋にせまった。源左衛門もかけ上がっていった。
「くせものッ、神妙にしろ」
かけ寄った侍たちは、お紋をとりまいて、刀のつかに手をかけた。抵抗したら切るつもりである。が、お紋は、
「くやしい」
と、一こと叫んだだけで、抵抗はしなかった。新城主の乗り物は、すでに方向転換をし、いそぎ、もと来た道を引っ返してゆくのが見えたからである。
侍たちは、お紋の肩、手をつかんで、かんたんに、ひっとらえてしまった。
「なに者じゃ。そのほうは」
源左衛門が、お紋へ、尋問するように、たずねた。
「わたしは、あだ討ちに来たものです。あの憎い殿様を打ちとりそこなったのは、わたしに運がなかったのです」
お紋は、手にもっていた手裏剣を投げだし、両手をそろえて、前へさしだした。しばってくれという、覚悟のしぐさだった。
「殿を打ちとろうと考えて来たというのは、まことか」
源左衛門の顔に、会心の微笑がうかんだ。これは、ものになると思ったのであろう。
「あの殿様は、わたしの左さまを殺したのです。わたしにとっては、憎いかたきです。この剣で打ちとめられなかったのが、残念です」
お紋は、おそれる色もなく、いい放った。
「このものを、牢へ引け。取り調べは、この鳥坂がじきじきにいたす」
源左衛門は、部下へ言った。本来ならば、殿の乗り物をねらって、手裏剣を投げるような、ふらち者はその場で斬ってすてても、さしつかえがないのだが——源左衛門には、腹に一物、

胸に二物。

この女を利用すれば、おもしろいしばいがうてると考えたので、取り調べはじきじき、自分の手でするといって、お紋をおのれの掌中におさめてしまったのである。大和の側へ、女を引き渡してしまえば、利用できないからだ。

丘の下の道を、はげしいひづめの音がした。見おろすと、二頭の奔馬が、たてがみを振りみだして、疾走してくるのである。

「まぬけめが」

源左衛門は、いまいましげに舌打ちをした。いまごろ、馬をとばして来て、なんになるというのだ。

この失敗も、不意の飛び入りの女に——と思うと、源左衛門はやはりお紋に腹がたった。それだけに、逆に、この女を利用してやらねば、腹の虫がおさまらない、源左衛門だった。

——お紋は、源左衛門の一派にまもられ、松代の城下へ連行されると、牢の中へ、投げこまれた。そのまま、ながい時間、なにものも与えられず、取り調べもなく、うちすてておかれた。月が出た。月は、牢獄の窓にも、同じように、白々とした光を、ななめにさしこんでいる。

「くやしい」

お紋は、窓の外の月を見上げながら、ひとり無念の涙をぬぐった。地獄虫の三太から、左膳が、信州松代城の若様に斬りころされ、その死体は、藤波屋敷の裏手から大川へ流されてしまった、ときいたときには、目がくらんで、倒れそうなほどの衝撃をおぼえた。

が、数日たってから、

「そうだ。左さまのあだを討とう。せめて、あの若様の胸へ短剣を投げつけ、あの若様を倒してしまえば、左さまの霊も浮かぶであろうし、この胸も晴れる」

お紋は、そういう決心をつけると、ひとり江戸をたって、はるばると、この松代へやって来たのだった。

城下へはいって、様子をさぐってみると、鶴太郎という若様は、すでに大殿のあとをおそって、新城主となり——しかも、あすは、領内ご巡視だという。

「天のあたえたもうた機会」

と、お紋は、きょうは朝早くからあの丘の上に待機していたのだった。が、捕えられて、こうして牢へ入れられてしまえば、もう左膳のあだを討つことはできない。あきらめるよりほかに、すべはなかった。

(いさぎよく、おしおきを受けよう。死ねば、左さまのいられる、ハスのうてなとやらへゆけるというもの……ああ、はやく左さまのところへゆきたい)

そんな悲しみに沈んでいるときであった。牢ごうしの錠をだれかがはずしている音がきこえた。

## 毒の花

こうしの、くぐり戸が、ぎいっとかすかな音をたてて、静かにあいて、

「お紋とやら、たすけてとらす、出られるがよい」

ひくい声で、ささやくように、だれかが呼んだ。お紋は、それを夢の中の声のようにきいた。

お紋のからだは、考えるひまもなく牢の外へ出ていた。うれしさが、その声とともに、ふらふらと、お紋のからだを外へ出してしまったのである。

黒装束の武士が三人、牢の外に立っていて、だまって、お紋を誘った。牢番とは、あらかじめ連絡がついていたのであろう、それをとがめる声は、どこにもきこえなかった。牢の裏手の木戸も、すうッとひらいて、お紋は、その三人

にまもられて、月の外へ楽々と出ることができた。

「まるで、うそのようだ」

お紋は、三人にまもられてあるきながら、そう思った。月にそっと感謝の手を合わせた。左膳の霊が、月に宿っていて、自分をこうして救いだしてくれたように思えたからである。

五丁ばかりゆくと、荒れた山寺へついた。三人の武士は、土足のまま、寺の廊下をふんで、奥へすすんでいった。お紋も、そのとおりにした。カビ臭い廊下をすすんで、奥の一室へ通されると、そこに、木箱やら、木の根株の腰掛けに腰をかけた、四、五人の武士がいた。これは普通の衣装である。鳥坂源左衛門と、その配下の連中だった。

「お紋」

と、源左衛門は、お紋を木箱の腰掛けへ、腰掛けさせると、いとも優しい口調で、

「そちは、ここの城の殿様を、かたきとしてつけねらっている、というが、そのわけを、くわしく、きかせてはくれぬか。話によっては、力になってとらすであろう」

百匁ろうそくが一本、そのまわりを明るくてらしている。

「はい。ここのお殿様は、憎い憎い、わたしのだいじな人のかたきです。わけは――」

と、お紋が、藤波屋敷でのできごとをくわしく話して、

「憎い憎い、そのかたきが討てますなら、わたしは、さかさハリツケにされても、悔いません。はるばる江戸から出て来て、打ちとりそこねたことは、くやしくてなりません」

「よくわかった。それはくやしいことであろうの」

と、源左衛門は、せいいっぱいの同情をしめし、それから次のようなことを聞いた。

「そちは、手裏剣の、名人じゃそうな、どれくらい、名人か」



「名人などと、それほどのものではございませんが、十間はなれた金的のまン中をねらって、九十九本までは打ちつけるだけの覚えはございます」

お紋は、自信ありげに答えた。

「百発百中じゃな、きょうの失敗は丘の上から投げたので、かごの屋根がじゃまをして、殿には当たらなかったのであろう……そこで」

と、源左衛門は、配下の者に、あたりを警戒させた。配下は、四方を、一応あらためてみた。だれもきいている者はいない……。

「そちに、あだを討たせてとらす。そちの、その、百発百中の手裏剣術を大いに活用すれば、討てぬことはあるまい」

源左衛門は、低いが、重々しい声で、お紋へこう言って、お紋の顔をじっとみまもった。

お紋が、どのような表情を示すかを、みているのである。

「それは……それは、まことでございますか？」

お紋は、急にひとみを輝かせ、興奮のために、ほおに紅潮さえしめした。

「そちは、あのままに、牢におれば、いずれハリツケはまぬがれぬところじゃ。一か八かの運だめし、みごとそちがあだを討つことができたら、その場から、そちを逃がしてとらそう」

「ありがとう存じます」

お紋は、からだじゅうが、小きざみに、ふるえるのを覚えた。

「自信はあるか？」

源左衛門が、念を押した。

「殿様の身辺、七、八間のところまで、わたくしを案内してくだされば、必ず三本の手裏剣は、うちこんでみせます。一本は心臓へ、一本はノド笛のところへ、一本はみけんへ……」

「たのもしい。一つ手並みを見せてもらおうか」

源左衛門は、配下の者へ、

「この、ろうそくを、次の間の向こうへ運べ」

と、命じた。配下の者が、しょく台を、次の間の、もう一つ次の間へ運んでゆき、座敷のまン中へ立てた。

「お紋、あれを、手裏剣で刺してみよ」

源左衛門は、お紋へ言った。お紋が立ち上がると、配下の者が、お紋へ一本の手裏剣をわたした。

「ただ、刺すだけでは、興がございませんから、この刃で、炎のところを切ってごらんに入れます」

お紋は、手裏剣の刃をしらべながら、源左衛門へ、答えた。

「ろうそくのしんを切るというのじゃな」

「しんの中ほどを切りすてます。しんの下のほうを切りますと、灯が消えてしまいますが、中ほどならば、火のついた半分のしんはとんでも、灯は消えることがありません」

「それがみごとにできれば、千発千中の腕じゃ。必ずあだは討てるぞ」

源左衛門は、お紋をあおりたてるように言った。お紋は、手裏剣を頭上へさしあげて、しばらくの間、しょく台をねらっていたが、やがて、

「えい」

気合いとともに、右手を前へふりおろした。手裏剣は、ひゅンと、うなりながら飛んで、しょく台の上の、百匁ろうそくの炎を、しゅッとなでて、向こうのふすまの骨へ、ばつッと刺さった。

同時に、ろうそくの灯が、星のように一つ、四、五尺の横へ飛んで、ろうそくの炎は、一瞬ほそくなって、消えるかに見えたが、すぐに、またあかるく光りだした。しんについていた炎は、たたみの上で、しばらく燃えていたが、まもなく消えた。

「名人どころの腕ではない、まさに神わざじゃ。感心いたした。まちがいなく、これなら、あだは討てるであろう」



源左衛門は、わが意を得たりと喜んだ。毒をもって毒を制する源左衛門の計画は、この一剣の秘芸で、はっきりと定まったのである。

かんがえてみると、左膳は、この城の人となってから、まだ、一度も、自発的に、一子友之丞をだいてやったことはなかった。

(ほんとうの子ではないから、情がうつらないのであろう)

左膳にも、それくらいのことは、気がつくのだが、どうも、子どもと女はニガ手だった。

自分とあらそって——それが、あやまっておのれの刃にかかったとはいえ、藤波屋敷のあのときもろい死にかたをしていった、鶴太郎の子だと思うと、どうにも抱き上げてやる気がしなかったのである。

友之丞から、

「お父上」

と、呼ばれるのも、つらかったし、扇子から、

「わが君さま」

と、三ッ指を、つかれるのも、つらかった。

扇子や友之丞にとっては、ある意味において、左膳はかたきであった。そのかたきを、かたきとも知らない——どころか、夫であり、父であると思いこんで、すこしでも、なつこうとつとめる友之丞、すこしでも愛されようと、朝に昼に夕べに、心からかしずく扇子であった。

(城主にされることよりも、このふたりにしたわれるほうが、つらい)

左膳は、どうせ近いうちに、自分は、ここを逃げ出さなくてはならぬ日がくるのを、なんとなく悟っている。

「それに……」

と、左膳は、寝ながら、つぶやくのだった。

「朽名大和は、自分に、政治むきのことは、なにひとつ相談に来ない。相談には来ないが、自分が新城主となってから、ずいぶんたくさんなおふれや、政策を発表している。いずれも、新

室において寝ていると、心は乱れる。

今夜で十二日めである——左膳が、この城の人となってから、あすは亡父の二逮夜(ふたたいや)だ。扇子は、さっきから寝つかれないらしく、てんてんとして床中で、寝がえりを打っている。扇子の胸中を察してやると、さすがに胸がしまる左膳だった。

そっと床をぬけ出して、庭へでていった。早春の、まれにある暖かい風が、ゆるくうごいている。左膳は、月をみあげながら、お紋はどうしているであろうと、久しぶりにお紋をおもいだした。

「お紋といえば……」

左膳は、おとといの、領内巡視のときの、できごとを、おもい出した。えい、えい、と、続けさまに、するどい気合いがかかって、それと同時に、手裏剣がとんで来、かごの屋根にささったのは、どういうわけであろう？

かごは、あのまま、城へ逃げかえるように引



城主の命であるようにみせて……」

大和は、左膳へ、政治むきのことも相談に来ないのみならず、家臣の者たちにも、なるべく会わさないようにしている。

「これでは、領主とは名のみで、体裁のよい押し込めである」

左膳は、すこし不服であった。城主として皆の前へ出してくれないのは、大和が、鳥坂派の害意を案じて、そうしているのだ、と考えれば、それも、そうかな——と納得するのだが、自分を、扇子と友之丞のそばへ押しつけておいて、大和自身も、なかなかに、左膳と会おうとしないのは、どういう訳であろう。大和は、まるで、新城主の代理のようにふるまっているのが、左膳にはげせないことであった。

（何かがあるのに違いない。大和には、考えがあって、何かをやっているのであろう）

左膳のような、のほうずな人間でも、にせの殿様となって、妻ならぬ妻、子ならぬ子を、隣

っ返されたが、それについてすら、大和はなんの報告もしない。かごをねらったくせものが、つかまったのか、つかまらないのか、それすらも、左膳にはわからないのである。狙撃(そげき)者が、手裏剣の名手だけに、左膳には気になった。お紋も、手裏剣を投げさせたら、名手であったのを、おもい出す。

ガア……。

夜ガラスが一羽、天守の上空を、ななめに鳴いて、よぎった。月光が、天守の壁を、白く浮き出している。左膳は、それを見上げながら、藤波屋敷で死んでいった鶴太郎の霊が、夜ガラスと化して、ああして、天守の上をとびまわっているような気がして、

（すまぬ）

天守のほうへ、頭をさげた。藤波屋敷で、鶴太郎が、自分と自分の刃で死んだことに対しては、左膳は、それほどの責任を感じてはいなかった。

が、身代わり殿様となって、こうして松代城の中にくらし、扇子の夫、友之丞の父としておさまっていることにたいして、鶴太郎の霊にすまないと思う左膳であった。

（霊というものは、この世のことが、よく見通しにわかるということだから、鶴太郎の霊も、ここのことがわかるであろう）

左膳が、扇子や友之丞と、いっしょにくらしていることを、鶴太郎の霊がみつけて、恨んでいる……その恨みが、いまの夜ガラスの声となって、あのような、哀々せつせつたる鳴きかたを示すのであろう、と解釈すると、

（夜ガラスよ。すまぬ。拙者はあすにも、この城を去りたいと考えているのだが、その機会がつかめないのだ。悪臣ばらを退治して、友之丞の、跡目相続のことが、しっかり定まったあかつきには、拙者は安心して、ここを去るであろう、どうやら、拙者にあたえられた義務はそのことにあるらしい）

左膳が、もう一度、天守の上空へ頭をさげたとき、

「えいッ」

夜の空気を裂いて、はげしい気合いがきこえて来、それと同時に、

ヒュン！　なにやら、白く、月に光るものが左膳のすぐ耳のそばを飛んでいった。

「手裏剣だ」

直感で、左膳には、その光る飛びものが、手裏剣であることがわかった。続いて、えい、えい、と、二本の手裏剣が、おなじく、左膳の両わきをとんだ。

「あの気合いは、お紋の気合いだ。お紋がしのびこんでいる」

左膳は、そう悟ると、とっさに両手を水平に上げて、十字の形をとった。からくり座で、道化をしていたときの姿勢である。

お紋は、鳥坂源左衛門の腹心の手びきによって、なんの苦もなく、城内へ忍びこむことができたのであった。そして、城主、信濃守の寝所のちかくまでつれてゆかれると、

「ここで、しばらく待っておれ、そのうち内部から雨戸をあけて、中へみちびいてやる」

腹心は、お紋を、庭の一隅にのこして、どこかへ消えていった。おそらく、御殿のなかへしのびこみ、中から、お紋の侵入口をつくって、お紋をさそいこむ段取りのために、身をかくしたのであろう。お紋は、黒ずくめの忍び装束に身をかため、ずきんは、黒のお高祖にしていた。そして、腰には、脇差しを一本さしている。これは、信濃守を手裏剣でしとめた瞬間に、とび出していって、一刀きりつけて、恨みをはらすための用意であった。しばらく待っていると、おあつらえ向きに、信濃守が、この夜中だというのに、庭へおりて来た。まるでお紋に狙撃されんがためのように。

お紋は、すぐに手裏剣をとりだした。彼我の距離は、六間。これは、手裏剣を投げるのに、



もっとも命中率のよい距離だった。

「左さまのかたきッ。覚悟ッ」

と、お紋は、胸のなかで、そうさけび、気合いとともに、まず、第一剣をなげつけた。

第一剣は、信濃守の耳のところを、すれすれにとんだ。

続いて、第二、第三の剣を投げたが、これは、先方の左右を、すれすれに通った。

「これではダメ」

と、お紋は、すこし手かげんをして、第四剣を投げつけようとしたら——先方は急に、弥次郎兵衛人形のように、両手を水平にあげて、立ったまま動かない。

（妙なことをする殿様）

と、お紋はおもったが、まさかその人が左膳だとは知らないから、

（動かないのをさいわい、いまのうちに、五、六本うち込んでやれ）

つづけさまに、えい、えい、えいと一本の棒のように、飛剣を送った。が、どうしたことか、手裏剣は一本も、先方のからだに命中しないのである。

どの剣も、どの剣も先方のからだすれすれのところを通って、向こうの泉水の中へ、水音たてて突きささってゆくのだ。しかも、先方は、両手をひろげたまま平気でたっているのである。手裏剣の二、三本は、たもとにささったが、先方はあわてない。

（どうしたことだ。なぜ当たらないのだろう）

お紋は、やっきとなって、なおも打ち込んでいったが、二十本の手裏剣は、ついに一本も当たらなかった。

（あ、わかった。舞台での癖がついてしまっているので、投げるとき、しらずしらずのうちに、剣がそれてしまうのだ）

お紋は、もうこうなれば、刀で斬りつけるよりほかに、恨みをはらす手段はないとおもった。腰の脇差しを抜くと、お紋はおどり出して

いった。そして、
「左さまのかたき、信濃守さま、おいのちちょうだいいたします。お覚悟ッ」
と、さけんで、斬りつけた。だが……それまで、弥次郎兵衛人形をきめこんで突っ立っていた、信濃守の左膳は、そのとき、くるりと、お紋の刃をかわし、
「これ、あぶないものを振りまわすではない。刃がからだにあたれば、ケガをするではないか」
至極あたりまえのことを言いながら、お紋のきき腕をつかんだ。
「はなして？　左さまのかたきッ」
お紋は、左膳の手をもぎ放そうとしたが、左膳は武術の手でつかんでいるので、万力にはさまれているように、その手はすこしもひらこうとしない。
「これ、お紋ッ、拙者じゃ。忘れたのか」
左膳は、お紋の耳もとへ、ささやくように言った。お紋は、はっ！　となって、左膳を見上げた。
「左膳じゃ。拙者は」
「えッ」
「藤波屋敷で死んだのは、当城の若君、鶴太郎じゃ。生きておれば、いまは、当城のあるじとなっているはずの鶴太郎じゃ」
「……？」
「拙者は、死んだ鶴太郎の身代わりとなって、ここへ連れて来られたのじゃ」
「左膳さまで？」
「幽霊でない証拠に、こうして足がある」
左膳は、お紋の腕をはなしてやった。お紋は夢でもみているように、左膳をみあげた。
「三太は、左さまが斬られて、城へ帰られたのは鶴太郎さまだといいました」
「そう言わないと……そういうことにしておかぬと、三太の首があぶないからだろう」
「うれしい」



と、お紋は、はじめて、われを忘れて、左膳の胸へしがみついて、
「そうとは知らず、お乗り物の中の左様を射殺そうとしたり、いままた、ここで手裏剣を投げたことを、おゆるしくださいませ」
うれしさと、犯した罪の二つに泣きだすお紋であった。
「それよりも、お紋どのの一念こそとうとい。浮草左膳のために、遠いこの松代まで出向いて来た、お紋どのの心に、左膳は感謝する」
左膳は、お紋の背中へ手をまわして、抱きしめてやった。おそらく、左膳が女の子を抱きしめてやったのは、これがはじめてのことかもしれない。
「左さまは、鶴太郎君の身代わりとなって、一生ここのお殿様として、くらされるおつもりですか」
お紋は、左膳の胸へ顔をおしつけながらきいた。殿様として左膳が、ここにいついてしまえば、もう自分などと縁のない人間になってしまうわけである。
「いや」
と、左膳は、首をふった。
「拙者は、今夜にでも、ここを逃げ出そうと思っている。殿様という業も楽なものではない」
「逃げてくださいますか。いっしょに逃げてくださいますか。うれしい……夜があければ、わたくしはつかまえられて、おしおきになります。いまから、すぐお逃げくださいませ」
お紋が、そう言って、左膳の胸から顔をはなしたとき、黒い人影が、一つ、つつつ……とふたりのそばへ近よって来た。
「お待ちください」
黒い人影は、左膳とお紋へ近づいてくると、
「大和でござる。朽名大和でござる。お逃げになられるのは、しばらくお待ち願いたい」
左膳のたもとをとらえんばかりにして言った。いつもならば、大和は、このようなことば

はつかわない。これは、信濃守にたいすることばづかいではない。

「逃げようか、と話していたところで、まだ逃げはせぬ」

左膳は、大和へ答えた。

すると、大和は、意外な返事をするのであった。

「当城を、逃げ出そうとお考えになられる、そのこと自体が、われわれの困るところでございます。いましばらく、真田信濃守として、ここにおとどまりのほどを、お願い申します」

朽名大和は、左膳の信濃守でないことを、よく知っているような口ぶりであった。

「……」

左膳は、さすがに、返事もできず、かれらしくもなく、口をつぐんだ。

「貴殿が、真田鶴太郎さま……当城の若君様ではないことを、ハッキリと知ったのは、江戸をたった、その日の泊まりの宿でござった。すぐに、人を走らせて、藤波屋敷をしらべたところ、まことの鶴太郎さまは、すでに、この世の人でないことが判明いたした」

「……」

「が、いま、それをあばいては、この松代城は一大事に相なるゆえ、それがしめは、貴殿をあくまで鶴太郎様とし、信濃守さまご他界のあとをうけさせ、当城主として推したてたものの、いつの日かは、貴殿が当城を逃げだされるのを覚悟いたしていました」

「……」

「しかし、お逃げになられるのは早すぎます。貴殿におねがいをし、貴殿になしてもらわねばならぬ、重大なことがござれば……」

大和は、そう言って、しばらくの間、月の空をじいっと見上げていた。左膳も、だまって、天守の白壁を見上げていた。この勝負は、どうやら左膳の負けらしい。松代城の人たちが、自分を鶴太郎だと信じきっている……と思っていた左膳のほうが、おめでたい存在だったのである。

いうなれば、左膳こそ、ほんとうの意味での道化であったわけだ。左膳の鶴太郎でないことを、早くも見抜いていて、なおかつ、それを利用して、混乱の松代城を、安泰にみちびいていた、朽名大和こそ、名執政といわなくてはならない。

「それをきいて、拙者は安心いたした。こよいをかぎり、拙者は真田信濃守というにせごろもを脱ぎすてて、もとの浮草左膳にもどろう」

しばらくしてから、左膳はすくわれたように言った。からだがすうッと、風船のように軽くなったように感じた。

「いましばらく」

と、大和は言った。

「大殿、信濃守さまのご急逝は、毒薬のせいでござった。それを奉ったのは、鳥坂源左衛門でござる。このお家のかたきを討ち平らげてくださるまでは、なにとぞ当城におとどまりのほどを、大和このとおりに、お願い申します」

大和は、二、三歩さがって、低く腰を折った。

## おどけ剣法

「お紋は、失敗したのらしい」

「もどっては、来ない」

「つかまったのだろうか？」

「それもわからぬ」

「きょうの昼になっても、殿の身辺に、昨夜、なにかの異変があったという発表がないのだから、お紋は、あるいは、ゆうべ殿をねらう機会を失ったのかもしれない」

「それなら、ここへ戻って来そうなものだが、戻って来ないところをみると、つかまったのかもしれない」

「つかまったものとすれば、これはまずいことになるぞ」

「鶴太郎君の帰って来た夜も、さし向けた刺客がつかまったまま、どこに監禁されているのか、いまだに帰って来ないし、いままたお紋がつかまったとすれば……」

「こうなれば、最後の手段をとるよりほかに、方法はない」

と、一同の話し声の最後を結んだのは、鳥坂源左衛門であった。

例の古寺の一室である。午後の三時といえば、まだまだ明るい時刻なのだが、寺のまわりには、千年の老杉がうっそうとして立ちならんでいたから、この室は、もうろうそくが必要であった。その、一本の百匁ろうそくをかこんで——さっき、江戸から、ひそかにやって来た、江戸家老の、剣持源太夫と、浅見十兵衛、井戸弦三郎、花村剛之丞、吉野義八郎……それに、鳥坂の腹心、三瓶平九郎、掛川大次郎、相老権之助、花輪逸平太の十人。

「きょうのくれ六ツ（六時）から、先殿の二逮（ふたたい）夜の法要がはじまる。それを機会に、法要の場を乱し、どさくさにまぎれて、信濃守はじめ、若殿友之丞を斬ってしまう。それよりほかに、手段はない」

源左衛門は一同を見渡しながら言った。

「大和は？」

剣持がきく、

「もちろん」

と、源左衛門は、刀のつかを人さしゆびでたたいて、

「斬らねばならぬ。やつを生かしておいては、なにかとふつごう、目の上のコブは切りとるにかぎる」

源左衛門は、堅い決意をみせると、腹心たちへ、

「今夜の法要には、衣服の下へ、くさりかたびらをつけ、じゅうぶんの用意してのぞむことを、忘れてはならぬぞ。一か八かの運だめし、目的どおりゆけば、十万石は、われわれの思うツボ。そのかわり、一つまちがえば、われわれ全員は、命をすてなくてはならぬ。ひとりで二十人は斬る覚悟でのぞまなくては、この成就はむつかしい」

腹心たちは、だまってうなずくと、おのおの刀のつかを人さし指と中指でたたいて、その決意を答えた。

「それでは、それがしは、これより登城して、殿にお目にかかり、江戸邸のことについて、報告をして参る」

剣持が立ち上がるのへ、鳥坂源左衛門が、

「貴殿は、殿が鶴太郎のとき、江戸で会っていられるゆえ、よくよくの注意をいたさねば……へたにしっぽをつかまれぬよう、くれぐれも心をいたされよ」

左膳の信濃守は、源太夫をまぢかに召すと、源太夫が、あいさつの言上をしないうちに、

「一別いらいじゃのう、剣持源太夫どの」

と、左膳のほうから、あいさつのことばをなげやった。これは、大名がその家老にむかって、するべきあいさつではなかった。

「はっ、恐れいりまする」

源太夫、さすがに、恐れ入って額をたたみへすりつけた。うしろ暗いところのある源太夫には、主君から、こんなふうに、頭からあいさつをされると、胸がドキリとして、隠そうとしても、胸の動揺は、かくすべくもなかった。

朽名大和が、左膳のちかくで、その様子をひややかにながめている。きょうの左膳ふんする信濃守は、いわば裁判官の立場で、剣持源太夫に接しているのであるから、ことばのすべてが、尋問調であった。

「江戸では、いろいろと世話に相なった。礼をいうぞ」

「そのように仰せくださりまするど、剣持源太夫、申し上げるべきことばも、ござりませぬ」

源太夫は、かたわらに、朽名大和がひかえて

いるので、どうにもひっこみのつかない恐縮ぶりを示すのであった。江戸では、剣持のほうが、幅をきかすことができたが、ここでは、国家老の朽名大和のほうがにらみがきくのだ。大和は、腹のなかで、にやにやしながら、源太夫の、しどろもどろの態度を傍観している。左膳は、じわり、じわりと、源太夫をつるし上げてゆく。

「予が、そちに渡した、脇差しのとぎ料は、皆の者に渡してくれたであろうのう」

「たしかに、それぞれへ渡しましてございます」

「脇差しの刃こぼれも、うまく直ったかな……各自が所持いたしていた、さやへ、あの中身が、うまくはまったかな？」

「さ、そ、それは……」

源太夫は困りきって、わきの下につめたい汗をながしている。

「柳原の夜道で、あの脇差しが予の足もとをねらって飛んで来たのじゃが、ああいう攻撃の法というのは、珍しい攻撃法じゃ。あれはだれの考えた戦法かのう」

「存じ上げておりませぬ。なんのことでございますか、それがしめには、いっこうに……」

源太夫には、苦しい答弁をするよりほかに、すべはなかった。例の脇差しの中身に合うさやを、江戸上屋敷の者が、それぞれ持っていた、と答えれば——あの夜、鶴太郎を襲撃したのは、真田の家臣だということになってしまう。そして、あの一群を指揮したのは、剣持源太夫である、という疑いを持たれる可能性もあるから、うかつには答えられない。

「そうか、なにも知らぬのか、そちは……ところで、あの見越しの松の家にそちが囲っていた、お蝶という女は、どうした」

「お蝶？」

と、源太夫は、とぼけづらをして、首をかしげるのへ、



「お蝶は、そちのことを——〝とうさん〟と呼んでいたではないか」

「め、めっそうもございません。お蝶などと申す女は……」

「知らぬことはあるまい」

左膳は、北町奉行になった、遠山金四郎のように、ひらき直って、

「そちは、あの柳原の土手道の事件のあったあくる日、お蝶へながのいとまを申しわたしたであろう。いわゆる、お払い箱というやつじゃ。その理由はこうだ——若様を、見越しの松の家に、とどめておけと申したのに、早く帰してしまったのはけしからん。そのために、打ちそんじたのは、お蝶の責任じゃと」

「そ、そのようなことは」

「お蝶の口から、直接に予がきいたのじゃ、江戸屋敷を預かる身で、女をかこっておくとは……しかし、それはよいとして、予を柳原の土手道において襲ったのは、いかなる魂胆によるものじゃ」

「けっして、そのような」

「数多くの脇差しが、それを証明いたしておる。予がお蝶の家にて、酒を飲んでいるものと思い、それを襲おうとしたのじゃが、予が帰りにかかったので、柳原の土手道で襲うたのじゃ」

「いえ、そ、そのようなだいそれたことは」

と、源太夫が、なかなかに恐れ入らぬのへ、朽名大和が横から、

「剣持どの、あの夜の柳原の土手道では、貴殿の腹心とおぼしき人物を、三人まで、それがし顔を見ている。そのものの名まえをいちいち申そうか」

と、詰めよると、源太夫は、まなじりを決して、

「さような言いがかりは、この剣持源太夫、はなはだ迷惑」

「いいがかりではない。あの覆面群のなかに、

浅見十兵衛、井戸弦三郎、花村剛之丞もいたのは、いかなる訳か？　当方の探査では、貴殿は、鳥坂源左衛門と腹をあわせ、あの当時、江戸へ参られた若君暗殺をくわだてたること、かずかずの証拠にて動かぬところ……それを、みずから、江戸より、こちらへ飛び込んでまいられるとは……」

「そういう貴殿こそ、君側の奸！　おのれ、覚悟ッ」

源太夫は、もはやのがれられぬところ、と覚悟をすると、いきなり脇差しを抜いて、大和へ——とみせかけて、くるり！　とからだをねじると、信濃守の左膳へ斬りつけた。左膳は、せんすで、その小手をパシッとたたくと、脇息で源太夫の腹を、とん！　とついた。

武術の心得でついたのであるから、源太夫は、思わず、うう……とうめいて、うしろへ、四、五尺よろめいてさがるのへ、

「皆の者、出会え」

大和のさけび声とともに、かねて待機させてあった侍十五、六人、さっとふすまをあけて、とび込んでくると、

「剣持源太夫どの、君の御前でござるぞ、神妙になされい」

たちまち刀をたたきおとし、折りかさなって、とり押えてしまった。そして、幾重にもなわをかけると、

「立たれませい！」

急転直下——江戸家老職は、ここに罪人あつかいをされる身となってしまった。

それから、二時間ののち、本丸の大広間では、先代信濃守の、二逮夜のお経が、十数名の坊主によって、あげられていた。広間には、ぎっしり、家臣が詰めかけている。江戸からもどって来た、浅見、井戸、花村、吉野などの、悪臣連も、なにくわぬ顔で、大ぜいの中にすわっていた。

剣持源太夫が、なにかの合い図をすれば、い



っせいに立って、信濃守を斬る手はずがきまっているのだが、かんじんの源太夫は、どうしたことか、どこにも姿を見せていない。

「剣持どのは、どうなされたのであろう？」

花村剛之丞が、となりにすわっている、井戸弦三郎へささやく。

「拙者もおかしい、と、さきほどからいぶかっているのだが」

「殿にお目どおりを願ったのだから、こうして読経がはじまれば、どこかの席におられなくてはならぬはずだが」

「妙だ」

と、吉野義八郎が、

「その、殿が、すでに、ご仏壇のまえに、ひかえていられるのだから、用談はすんだわけであろうに……」

かれらは、しきりに小首をかしげて、剣持源太夫の、姿のみえないのを、いぶかしがっている。大仏壇のまえには、信濃守、そこから、すこし離れて、先殿の愛妾お千賀の方と、その子亀松がひかえ、すこしさがって、鳥坂源左衛門と、朽名大和が、すわっている。鳥坂源左衛門も、剣持源太夫の姿のみえないのを、しきりに気にしているらしい様子であった。そして、たえず、家臣の中に、一かたまりになっている、三瓶、掛川、相老、花輪の腹心連と、目の合い図で、連絡をとっている。かれら、悪臣ばらにとっては、こよいは関ガ原の分けめの宵であった。

信濃守を、だれかひとりが斬りころす。そして、血路をひらいて逃げさせる。あとは、亀松が城主となる。そうなれば、信濃守を斬ったやつは、いつの間にか城へ迎えて、手あつく養う。

それで、鳥坂一派の計画は、達成したわけである。が、朽名大和にも油断はない。そのうえ、かんじんの剣持源太夫が姿をみせないから、不安がつのる。源太夫が、なぜ、ここへやって来ないのか？　その原因がわからないか

ら、かれらにも、火の手を上げる機会が、容易につかまらないのである。読経はすすんでいった。むほん組の立ち上がるのは、お経の終わりぎわである。お経がおわってしまえば、斬りこむすきがない。

（いまか？）

と、浅見、花村たちは、鳥坂源左衛門のほうへ視線を送れば、鳥坂源左衛門は、三瓶、掛川たちのほうへ、

（立ち上がるか。機会はよいか）

と、目で連絡をする。お経は、あと三分で終わる。

立ち上がるのなら、この一瞬である。

（立ち上がるべきか？　次を待つべきか？）

三瓶たちが、たがいに顔を見合わしたとき、仏壇の前の、信濃守が、すくッと立ち上がった。

立ち上がった信濃守は、もちろん家臣たちへは、うしろ向きである。

「なにごとぞ？」

家臣たちは、一様に動揺した。先殿様の二逮夜の読経のさいちゅうに、跡目相続人が、気がふれたように、立ち上がるとは？

しかも、くるり！　とふりかえった信濃守の顔には、

「あッ、道化！」

驚きの声のわきあがったのは無理からぬことであった。

見よ！

信濃守の顔には、道化の仮面がつけられてあるではないか。六連銭の紋つき衣装に、はかまをつけた信濃守は、大名にあるまじき、道化の仮面をつけ、鳥坂源左衛門をふりかえると、

「源左衛門」

叱咤するように、呼んだ。

「はッ」

源左衛門は、虚をつかれた形で、あわてて両手をつくと、



「こよいは、先殿……いや、予が父君の二逮夜である」

「はッ」

「二逮夜の宵は、整理すべきものを、整理する宵であると昔からいわれている」

「……？」

「よって、こよいは、なんじから整理いたしてくれるぞ」

信濃守――左膳は、そのことばの終わらぬうちに、もう脇差しを引き抜いて、

「父君の恨み、覚えたか！」

ななめに飛んで、

「えいッ」

気合いとともに斬りおろした。鳥坂源左衛門には、かわすべきいとまがなかった。左膳の刃は、あまりに、速く、あまりに、するどすぎた。源左衛門は、あッ！　と叫び声を上げる間もなく、ケサ斬りに斬りさげられ、まっかな血をあたりへ散らして、がばと畳の上へ、うつぶして倒れてしまった。

娘のお千賀の方は、父が斬り倒されたのをみると、もうまっさおになって、亀松をかかえて、ぶるぶる、ふるえている。朽名大和は、しかし、左膳の行動を阻止しようともせず、きっとかまえて、一同をにらみつけている。

三瓶、掛川たちは、その瞬間は色を失ったが、すぐに立ち上がると、

「おのおのがた、殿には乱心めされた。それ、お取り静め申されい」

さけびながら、左膳の信濃守へ駆けよっていった。取り静めるとみせかけて、すきをみて斬りつけよう腹である。

左膳には、それくらいの、かれらの腹がわからないはずはなかった。

「予は乱心してはいない。逆臣、鳥坂源左衛門を、手討ちにいたしたのじゃ」

そう叫びながら、家臣たちの中へとびこんでいった。浅見、井戸、花村、吉野の一群を、ま

ず斬りすてるためであった。左膳の信濃守が、たち騒ぐ家臣たちをかきわけて、自分たちのほうへ突進してくるのを見た、浅見、花村たちは、

「それ、ご乱心の殿を……」

むかえ討つ形で、いっせいに刀を抜いた。江戸では、この道化の顔に、さんざんなやまされているかれらであったから、うかつに斬りかかってはゆけぬ敵であることも、じゅうぶんにわきまえている。

左膳は、浅見たちの前へ家臣たちをかきわけてゆくと、

「江戸は駒形のどじょう屋では、いろいろと剣技をみせてもらったが、こよいは、それの総仕上げを見せてもらおう。あのときの道化、真田鶴太郎は、いまは、そちたちのあるじとなって、そちたちのめんどうをみなくてはならぬ身。どれほどの剣技ができるか、それを知っておくのも、あるじとしての心得」

左膳の信濃守ぶりは、なかなかに板についている。浅見たちは、数歩さがって、がっちりと構えた。もう、こうなれば、いずれにしても、自分たちの命はないものと、あきらめなくてはならない。信濃守は斬ることができても、ほかの忠臣たちが、承知をしないであろう。信濃守を斬った瞬間に、自分たちが包囲されるのは、火を見るよりも、あきらかなことである。

血路……血路をひらいて逃げ出そう。逃げ出す一瞬に、信濃守に、一太刀をあびせる戦法をとろう……。浅見、井戸、花村、吉野の四人は、言いあわせたように、そう考えて、前なる左膳と、うしろに群がる家中の者たちへ、構えをくばった。そういうたくらみは、左膳の、すぐに感知するところとなって、

「皆の者」

と、左膳は、一同へ言いわたした。

「こやつらを逃がさぬよう、厳重に人がきをつくれ。こよい、予が父君への供養に、秘密のおどけ剣法を見せてとらす」



そのことばの終わらぬうちに、左膳の刀は、キラリとひらめいて、

「うう……ッ」

まず、吉野義八郎が、ケサ斬りに斬りさかれ、キリキリッと舞って、同僚三人の足もとへ倒れた。

「それッ！　すきッ」

と、あとの三人が、いっせいに斬りかかるのを、左膳は横ッとびに飛んで、剣をななめに、はねあげた。

「あ、うぅッ」

三人の口から、同時に、うなり声がもれた。ななめに、はね上げられ——花村は腹部を、井戸はわきの下を、浅見が首のつけ根を、思いッきり深く斬り裂かれてしまったのである。

三人が、吉野と同じように、キリキリと舞って、仲よくいっしょに倒れると、

「よッくきけ皆の者、江戸から参った、剣持源太夫は、悪事のかずかずが露見におよんで、召しとられ、鳥坂源左衛門は、予が父のかたきとして討ち果たしたものなるぞ……」

と、左膳は、道化の仮面の奥から、家臣一同へ叫んだ。

鳥坂源左衛門の腹心たちも、続いて縛につくと——朽名大和は、大音声で、一同へ言い渡した。

「殿には、乱心あそばされたのでもなければ、狂言をなされたのでもない。こよいを期して、当城の大そうじをなされたのじゃ。けっして騒ぐではないぞ」

その声に、どうなることかと、右せんか、左せんかと、うろうろしていた家臣たちは、やっと落ちつきをとりもどして、おのおの座に腰をおろした。

「殿には、若君であらせられたみぎり、当城をいでられ、諸国をあんぎゃされ、また江戸にひそまれたのは、市井のことを、ひろく知られんがためであられた」

「……」

「いまや、殿には、広い世界を深くさぐられ、大いに下情に通じ、帰城なされ、われら家臣一同、その徳を喜び奉るの日のきたりたるに、悲しむべし、悪臣ばらありて、殿のおン刃にかかる」

「……」

「悪臣ばらとはいえ、人間である以上は、殿には罪を犯されたことに相なる。よって、殿にはご隠居あそばされて、跡目を若君、友之丞さまにおゆずりなされ、明朝はやく、当城をお立ちのきに相なる」

「いずこへ？」

「殿には、どこへ参られるので」

家臣たちの中から、そんな声がとんだ。朽名大和は、

「されば……」

と、続けて言った。

「高野山に上って、僧籍に入られるおン心と承っている。先殿様の供養が、その第一のお心。つぎに、ただいまお手討ちになられた、剣持、鳥坂のめいふくをいのられるという、ありがたいお心……」

朽名大和と、左膳の間には、かねて、こういう打ち合わせがなされてあったのだった。悪臣ばらを討ち果たしてしまったうえは、高野山にはいって僧になる——といって、この城を左膳に出ていってもらえば、鶴太郎の死は、永遠に秘密の中へ封じこんでしまえるわけである。左膳は、道化の仮面を、まだ顔につけたまま、それをとらないで、

「皆の者、いまの大和のことばをよくきいたか、予の心は高野に走っている。悪い家来といえども、斬ってしまえば、仏と化すのじゃ。その仏のめいふくをいのるために、予は高野へゆく。皆のもの、友之丞をよろしく頼むぞ」

なかなかの千両役者であった。そのことばに、あちらからも、こちらからも、すすり泣きの声が起きた。わけて——扇子が、友之丞をかかえたまま、わッと泣きだしたのには、家臣一同もらい泣きの形で、泣きくずれてしまった。

夕霧城の騒動は、左膳の乗りこみによって、いともみごとにさばかれてしまったのである。あとは、城主ならぬ城主の左膳が、ここから身をひけばよいのである。左膳は、道化の仮面をつけたまま、抜き身を肩にかついで、おどけた足どりで、廊下の外へそうろうと出ていった。

お家騒動のケリは、一応、朽名大和の知略と、左膳の名優ぶりによって解決はしたが、ここに解決しないひとりがいた。

奥方、扇子である。扇子は、夫君の信濃守が、悪臣ばらを、次々と斬り倒していった腕に驚いて、夫君を見直しこそすれ、それがにせものの夫君であろうとは、看破できないでいるから、（ああ、これで、お家は安泰。あしたから、夫は、自分を、すこしは、かえりみてくださるにちがいない）

と、おもっていると、大和が高野山ゆきを発表したので、二度びっくり。ながい廊下を走って、信濃守に追いつき、すがりつかんばかりにして、

「ただいまのおことばは、まことでございますか」

と、泣き声できくと、左膳は、

「だてに頭は丸められない。あすの朝は、出発じゃ。そちは、友之丞をまもって、当城を安きに置くようつとめるのじゃぞ」

と、答えた。

ああ、やっぱり夫の決意は堅いのだ——とハッキリと、そのことを悟ると、扇子は、もう希望もハリも失って、へなへなと、廊下へしゃがみこんでしまった。

帰って来て以来、一夜として愛ぶしてくれたことのない夫。その夫が、いままた旅に出るという。

こんどの旅は、永久に帰って来ない旅である。

俗界をはなれて、仏の道にはいってしまえば、もう二度とまみえることすらできない、遠い遠い、へだたりを持ってしまうのだ。

それでも、左膳は、その夜は、扇子をおのれのへやによんで、夜のあけるまで、すわったまま起きていた。寝れば、扇子は、最後の、わかれの何かをもとめるであろう。左膳は、無言の行にはいった達磨大師のように、朝まで、すわりつづけた。夜があけると、左膳はむぞうさに立ちあがった。

「では、行くぞ」

行ってくるぞ、とはいわなかった。

「あ……」

扇子は、もう何も口には出なかった。一晩じゅう、ふたりは相対していて、なんのことばもかわさなかったのだ。別れのきわになって、なんの贈るべきことばがあろう。

「友之丞を、だいじにしてくれ」

左膳は、なき鶴太郎になりかわって、それだけ言った。すこし、しらじらしい思いはしたが、父としてのつとめは、忘れてはならぬと思った。別れにさいして、父親らしいところを見せずにいて、にせ者であることに気づかれては、左膳自身は、それでもよいが、扇子はかわいそうである。

夫鶴太郎は、高野の山にいると思って、生きてゆく扇子のほうが、鶴太郎の死を知って、悲しく生きてゆくより、どれほど幸福かしれない。御殿の玄関へ出ると、乗り物がすえられてあって、大和と家臣十人ばかりが待っていた。左膳は、だまって、乗り物の人となった。左膳を乗せたりっぱな乗り物は、松代城から、小一里ほど離れた、野の中の別れ道の手前で、ぴたりと、止まった。

戸があけられ、朽名大和が、乗り物のわきにしゃがむと、

「されば、これにて……」

「おう、よしよし、これからあとは、予は世捨



て人じゃ。乗り物をかえよう」

左膳は、気軽に乗り物の外へ出た。大和は乗り物と、扈従の侍たちを、すぐに城へ引っ返させた。ふたりきりになると、大和は目がしらを押えながら、だまって左膳へ頭をさげた。うれし泣きの、目がしらのうるみだった。

「なにごとも申し上げますまい。松代城はご貴殿のおかげで、安泰の姿にもどりましてござる。このご恩は終生忘れはいたしませぬ」

「拙者も、大名というものの、いかに窮屈なものであるかを悟ることができて、よき勉強と相なった。お礼を申す」

左膳も、腰を折った。ふりかえると、松代城の天守閣が、朝の日を受けて、白く輝いている。左膳は、しばらくの間、それをながめて無言でいた。

「さ様」

声がした。お紋であった。大和のはからいで、朝はやくから、ここで待っていた、お紋だった。

「お紋か。この早いのに、どこへ行くのか？」

左膳はきいた。自分に、なんのかかわりあいもない相手に、物をいうような、口のききかたであった。

「どこって……さ様のおゆきになるところへ、わたしもゆきます」

「拙者はどこへ行くかわからん」

左膳はあるきだした。お紋も、それについて、足をあわせた。大和が手をあげると、行く手の道ばたに待っていた、二丁のかごのかごき四人、腰を上げ、かごを道のまん中へすえた。左膳が、かごに近づいてゆくと大和が、

「どうぞ、これへ」

と、前のかごにお紋、うしろのかごへ、左膳が乗るようにすすめた。

「それは相すまぬ」

浮草左膳にもどった左膳は、もはや逆らわない人間になっていた。いわれるままにうしろの

かごに乗ると、お紋も前のかごに乗った。
「左膳どの、まことに失礼でございますが、これはお礼のしるしで……」
大和がかごの中の左膳にそう言うと、かごかきが千両箱を一つ、重そうにかかえて来て、かごの中に置いた。
「これは何か？」
「千両箱で」
「ああ、そうか……かごをやれ」
「さらば」
と、大和が左膳へ腰を折ったとき、かごが浮いて、動きだした。すると、かごの去ったあとの路上に、左膳がぽつんと立っていた。向こう側へ抜け出したのである。大和はあきれた顔で、
「どうして、かごからおりられたので？」
「拙者、千両箱と同席するのが、あまり好み申さんゆえ」
二丁のかごは、別れ道を右へすすんでいった。左膳は左の道へあるいていった。お紋はそれに気づかず、うれしそうに揺られている。うしろのかごには、左膳にきられた千両箱一つ、置き物のように、これも、ゆらゆらと揺れている。



0193-010412-3066

春陽文庫

鍔鳴り天狗

昭和58年8月5日　新装第1刷発行

著者　陣出達朗
1983©
発行者　和田欣之介
印刷　城北印刷製本センター
発行所　株式会社春陽堂書店
東京都中央区日本橋三丁目四番一六号
電話（二七一）〇〇五一番
振替東京　〇一一六一七番

乱丁、落丁のものは本社、またはお買い求めの書店にてお取り替えいたします。

製本・文宝堂

定価はカバーに明記してあります。

**山手樹一郎長編全集　全84巻**

桃太郎侍 山手樹一郎
恋風街道 山手樹一郎
恋天狗 山手樹一郎
華山と長英 山手樹一郎
又四郎行状記(上) 山手樹一郎
又四郎行状記(下) 山手樹一郎
夢介千両みやげ 山手樹一郎
江戸名物からす堂(一) 山手樹一郎
江戸名物からす堂(二) 山手樹一郎
江戸名物からす堂(三) 山手樹一郎
江戸名物からす堂(四) 山手樹一郎
新編八犬伝 山手樹一郎
鳶のぼんくら松 山手樹一郎
遠山の金さん 山手樹一郎
花笠浪太郎 山手樹一郎
はだか大名 山手樹一郎
ぼんくら天狗 山手樹一郎
朝焼け富士 山手樹一郎
浪人横丁 山手樹一郎
素浪人日和 山手樹一郎
青空浪人 山手樹一郎
鉄火奉行 山手樹一郎
野ざらし姫 山手樹一郎
朝晴れ鷹 山手樹一郎
紅顔夜叉 山手樹一郎
浪人八景 山手樹一郎
朝晴れ鷹 山手樹一郎
わんぱく公子 山手樹一郎
江戸の朝風 山手樹一郎
江戸の暴れん坊 山手樹一郎
青春の風 山手樹一郎
浪人若殿 山手樹一郎
天保紅小判 山手樹一郎
浪人市場(一) 山手樹一郎
浪人市場(二) 山手樹一郎
浪人市場(三) 山手樹一郎
浪人市場(四) 山手樹一郎
八幡鳩九郎(上) 山手樹一郎
八幡鳩九郎(下) 山手樹一郎
女人の砦 山手樹一郎
若殿ばんざい 山手樹一郎
紅顔夜叉 山手樹一郎
浪人八景 山手樹一郎
朝晴れ鷹 山手樹一郎
わんぱく公子 山手樹一郎
江戸の朝風 山手樹一郎
江戸の暴れん坊 山手樹一郎
青春の風 山手樹一郎
浪人若殿 山手樹一郎
天保紅小判 山手樹一郎
浪人市場(一) 山手樹一郎
浪人市場(二) 山手樹一郎
浪人市場(三) 山手樹一郎
浪人市場(四) 山手樹一郎
八幡鳩九郎(上) 山手樹一郎
八幡鳩九郎(下) 山手樹一郎
鶴姫やくざ帖 山手樹一郎





天保うき世硯 山手樹一郎
天の火柱 山手樹一郎
隠密三国志 山手樹一郎
江戸へ百七十里 山手樹一郎
江戸の顔役 山手樹一郎
侍の灯(上) 山手樹一郎
侍の灯(下) 山手樹一郎
お助け河岸 山手樹一郎
たのまれ源八(一) 山手樹一郎
たのまれ源八(二) 山手樹一郎
千石鶴(上) 山手樹一郎
千石鶴(下) 山手樹一郎
放れ鷹日記 山手樹一郎
おすねと狂介 山手樹一郎
青雲燃える(上) 山手樹一郎
青雲燃える(下) 山手樹一郎
さむらい読本 山手樹一郎
三百六十五日 山手樹一郎
素浪人案内(上) 山手樹一郎
素浪人案内(下) 山手樹一郎
江戸に夢あり 山手樹一郎
さむらい根性(上) 山手樹一郎
さむらい根性(下) 山手樹一郎
さむらい山脈 山手樹一郎
殿さま浪人 山手樹一郎
虹に立つ侍(上) 山手樹一郎
虹に立つ侍(下) 山手樹一郎
男の星座 山手樹一郎
江戸隠密帖 山手樹一郎
錦の旗風 山手樹一郎
少年の虹 山手樹一郎
天の火山 手樹一郎
恋の酒 山手樹一郎
夕立の女道 山手樹一郎
夜の花道 山手樹一郎
浪人まつり 山手樹一郎
槍一筋 山手樹一郎
秋しぐれ 山手樹一郎
下郎の夢 山手樹一郎
鍔鳴浪人 角田喜久雄
どくろ銭 角田喜久雄
風雲将棋谷 角田喜久雄
妖棋伝 角田喜久雄
将棋大名 角田喜久雄

**山手樹一郎短編全集　全12巻**

矢一筋 山手樹一郎
将棋主従 山手樹一郎
春風街道 山手樹一郎
暴れ姫君 山手樹一郎
恋慕奉行(上) 角田喜久雄
恋慕奉行(下) 角田喜久雄
半九郎闇日記(上) 角田喜久雄
半九郎闇日記(下) 角田喜久雄
寝みだれ夜叉(上) 角田喜久雄

寝みだれ夜叉(下)角田喜久雄
盗っ人奉行(上)角田喜久雄
盗っ人奉行(下)角田喜久雄
花太郎呪文角田喜久雄
折鶴七変化角田喜久雄
闇太郎変化角田喜久雄
妖異忠臣蔵角田喜久雄
春風まぼろし谷(上)角田喜久雄
春風まぼろし谷(下)角田喜久雄
黒潮鬼角田喜久雄
緋牡丹盗賊角田喜久雄
月姫系図角田喜久雄
まぼろし若衆角田喜久雄
酔いどれ牡丹角田喜久雄
姫夜叉行状記角田喜久雄
元禄太平記角田喜久雄
変化如来角田喜久雄
振袖地獄角田喜久雄

緋鹿子伝法角田喜久雄
霧丸霧がくれ角田喜久雄
虹に立つ侍角田喜久雄
兵之介闇問答(上)角田喜久雄
兵之介闇問答(下)角田喜久雄
耳姫三十五夜角田喜久雄
悪霊の城角田喜久雄
影丸極道帖(上)角田喜久雄
影丸極道帖(下)角田喜久雄
海風山風(上)角田喜久雄
海風山風(下)角田喜久雄
白蠟小町角田喜久雄
舟姫潮姫角田喜久雄
お小夜悲願角田喜久雄
神変八咫烏角田喜久雄
雪太郎乳房角田喜久雄
赤姫秘文角田喜久雄
怪塔伝(上)角田喜久雄

怪塔伝(下)角田喜久雄
次郎長三国志村上元三
たつまき奉行陣出達朗
火の玉奉行陣出達朗
はやぶさ奉行陣出達朗
長脇差奉行陣出達朗
けんか奉行陣出達朗
わんぱく大名陣出達朗
わんぱく二度笠陣出達朗
よさこい奉行陣出達朗
まぼろし奉行陣出達朗
すっとび奉行陣出達朗
復讐の美女鬼陣出達朗
孔雀駕籠陣出達朗
隠密姫陣出達朗
隠密将軍と喧嘩大名陣出達朗
らんまん剣士陣出達朗
鬼姫悲願陣出達朗





おんみつ奉行陣出達朗
影の人形師陣出達朗
世直し魔剣陣出達朗
犬姫様陣出達朗
黄金・万花峡陣出達朗
逆立ち大名陣出達朗
わんぱく剣士陣出達朗
騎馬奉行まかり通る陣出達朗
わんぱく将軍陣出達朗
くろかみ秘蝶陣出達朗
鳴門美女剣陣出達朗
夕立けんか旅陣出達朗
わんぱく東海道陣出達朗
鍔鳴美剣士陣出達朗
旗本退屈男佐々木味津三
黄門廻国記直木三十五
水戸黄門山岡荘八
上方武士道司馬遼太郎

梟の城司馬遼太郎
風神の門司馬遼太郎
真田幸村尾崎士郎
仇討ち物語池波正太郎
錯乱池波正太郎
うつせみ忍法帳早乙女貢
まぼろし若殿早乙女貢
伊賀忍法早乙女貢
江戸まだら蛇早乙女貢
斬らずの若殿早乙女貢
忍法女笛早乙女貢
忍法関ガ原早乙女貢
忍法雪月花早乙女貢
さむらい鴉早乙女貢
きまぐれ剣士早乙女貢
忍法紅絵図早乙女貢
大江戸花暦早乙女貢

黒潮姫早乙女貢
江戸浪人街早乙女貢
忍法車一族早乙女貢
戦国恋編笠早乙女貢
慶長水滸伝早乙女貢
八幡船伝奇早乙女貢
鶴千代血笑早乙女貢
風流剣士早乙女貢
江戸の恋とんび早乙女貢
東海道をつっ走れ早乙女貢
志士の女たち早乙女貢
幕末の刺客早乙女貢
竜馬を斬った男早乙女貢
さむらいの詩早乙女貢
青春の剣早乙女貢
御家人無頼早乙女貢

魔笛大名 早乙女貢
花の無法剣 佐竹申伍
若殿まかり通る 佐竹申伍
変化若君 佐竹申伍
真田軍団はゆく 佐竹申伍
むらさき若殿 颯手達治
やまざる大名 颯手達治
若さま地獄旅 颯手達治
ひょうたん侍 颯手達治
若さま隠密帳 颯手達治
若さま恋頭巾 颯手達治
若さま影法師 颯手達治
若さま風来坊 颯手達治
悪たれ若殿 颯手達治
若さま変化 颯手達治
若さま伝法 颯手達治
若さま小天狗 颯手達治
若さま旅日記 颯手達治
若さま青春記 颯手達治
若さま犯科帳 颯手達治
若さま居候 颯手達治
若さま鬼面帳 颯手達治
若さま刺客帳 颯手達治
若さま絵図帳 颯手達治
若さま獄門帳 颯手達治
若さま包丁控 颯手達治
若さま東海道 颯手達治
若さま人別帳 颯手達治
若さま御朱印帳 颯手達治
若さま秘殺帳 颯手達治
若さま中山道 颯手達治
若さま退屈帳 颯手達治
若さま幽霊帳 颯手達治
若さま箱根八里 颯手達治
素浪人大名 江崎俊平
ひとり鷹 江崎俊平
江戸っ子大名 江崎俊平
気まぐれ大名 江崎俊平
闇法師変化 江崎俊平
黒百合秘帖 江崎俊平
おもかげ大名 江崎俊平
夕雲峠 江崎俊平
朝姫夕姫 江崎俊平
江戸の野獣たち 江崎俊平
まぼろし絵図 江崎俊平
影法師推参 江崎俊平
江戸の風来坊 江崎俊平
白面剣士 江崎俊平
孤剣街道 江崎俊平
江戸の小天狗 江崎俊平
恋残月 江崎俊平
月夜に来た男 江崎俊平
消えた若殿 江崎俊平
振袖伝奇 江崎俊平







孤剣士峠 江崎俊平
三日月悲帖 江崎俊平
闇姫伝奇 江崎俊平
花の素浪人 江崎俊平
千両鷹 江崎俊平
剣は流れる 江崎俊平
黒十字秘文 江崎俊平
鬼姫剣法 井口朝生
忍者は斬れ 木屋進
浪人恋変化 木屋進
忍法おぼろ陣 木屋進
仇夢ごよみ 木屋進
赤獅子秘文 木屋進
おとぼけ侍 北園孝吉
めおと大名 風巻紘一
剣豪次男坊侍 風巻紘一
からくり殺法 風巻紘一
竜馬とその女 風巻紘一
柳生十兵衛 大塚雅春
血汐笛 柴田錬三郎
源氏九郎颯爽記 柴田錬三郎
主水血笑録 柴田錬三郎
遊太郎巷談 柴田錬三郎
おれは侍だ 柴田錬三郎
南国群狼伝 柴田錬三郎
異常の門 柴田錬三郎
忍者からす 柴田錬三郎
度胸時代 柴田錬三郎
江戸っ子侍(上) 柴田錬三郎
江戸っ子侍(下) 柴田錬三郎
明治一代男 柴田錬三郎
風魔鬼太郎 柴田錬三郎
剣豪にっぽん 柴田錬三郎
裏返し忠臣蔵 柴田錬三郎
大峰の善鬼 柴田錬三郎
霞の半兵衛 柴田錬三郎
人斬り斑平 柴田錬三郎
旗本伝法 土師清二
無頼三十万石 土師清二
女犯地獄 野村敏雄
異聞忍者列伝 野村敏雄
反江戸獄門党 野村敏雄
風流天狗剣 郡順史
恋ぶみ侍 郡順史
剣に賭ける 佐文字雄策
地獄草紙 名和弓雄
土と炎と城 名和弓雄
天国一刀流 多勢尚一郎
若獅子一刀流 多勢尚一郎
柳生無刀剣 松永義弘
天保あばれ振袖 松永義弘
素浪人横丁 相良俊輔
続・素浪人横丁 相良俊輔
さすらいの狼 生島治郎

恋花　火江本　清

**若さま侍捕物手帳**

双色渦巻城　昌幸
五月雨ごろし城　昌幸
人化け狸城　昌幸
幽霊駕籠城　昌幸
虚無僧変化城　昌幸
天を行く女城　昌幸

**人形佐七捕物帳全集　全14巻**

(1)ほおずき大尽　横溝正史
(2)遠眼鏡の殿様　横溝正史
(3)地獄の花嫁　横溝正史
(4)好色いもり酒　横溝正史
(5)春宵とんとんとん　横溝正史
(6)坊主斬り貞宗　横溝正史
(7)くらやみ婿　横溝正史
(8)三人色若衆　横溝正史
(9)女刺青師　横溝正史
(10)小倉百人一首　横溝正史
(11)鼓狂言　横溝正史
(12)梅若水揚帳　横溝正史
(13)浮世絵師　横溝正史
(14)緋牡丹狂女　横溝正史

**伝七捕物帳**

(1)女孤が来る　陣出達朗
(2)笑いざる　陣出達朗
(3)女狐小判　陣出達朗

右門捕物帖(1)　佐々木味津三
右門捕物帖(2)　佐々木味津三
右門捕物帖(3)　佐々木味津三
右門捕物帖(4)　佐々木味津三
江戸犯科絵図　和巻耿介
江戸ねずみ犯科帳　和巻耿介
ゆっくり雨太郎捕物控　多岐川　恭
続・ゆっくり雨太郎捕物控　多岐川　恭
御朱印銀次捕物帳　島田一男

**同心部屋御用帳**

(1)はだぬぎ弁天　島田一男
(2)紅の小指　島田一男
(3)位牌間男　島田一男
(4)色道丁半　島田一男

**菊太郎事件控**

(1)狂恋ぶろ　島田一男
(2)お腹拝見　島田一男
(3)お添い寝比べ　島田一男
(4)夢屋敷の女　島田一男
開化探偵帳　島田一男
此村大吉無頼帖　早乙女　貢
三角館の恐怖　江戸川乱歩

**江戸川乱歩名作集　全9巻**

(1)陰獣　江戸川乱歩
(2)パノラマ島奇談　江戸川乱歩
(3)屋根裏の散歩者　江戸川乱歩
(4)D坂の殺人事件　江戸川乱歩





(5)人間椅子　江戸川乱歩
(6)月と手袋　江戸川乱歩
(7)心理試験　江戸川乱歩
(8)ペテン師と空気男　江戸川乱歩
(9)偉大なる夢　江戸川乱歩

**江戸川乱歩長編全集　全20巻**

(1)孤島の鬼　江戸川乱歩
(2)蜘蛛男　江戸川乱歩
(3)魔術師　江戸川乱歩
(4)猟奇の果　江戸川乱歩
(5)黄金仮面　江戸川乱歩
(6)吸血鬼　江戸川乱歩
(7)白髪鬼　江戸川乱歩
(8)妖虫　江戸川乱歩
(9)人間豹　江戸川乱歩
(10)黒蜥蜴　湖畔亭事件　江戸川乱歩
(11)緑衣の鬼　江戸川乱歩
(12)大暗室　江戸川乱歩
(13)悪魔の紋章　江戸川乱歩
(14)幽霊塔　江戸川乱歩
(15)一寸法師　地獄の道化師　江戸川乱歩
(16)暗黒星・閻に蠢く　江戸川乱歩
(17)幽鬼の塔・恐怖王　江戸川乱歩
(18)化人幻戯　江戸川乱歩
(19)影男　江戸川乱歩
(20)十字路・盲獣　江戸川乱歩
奇蹟の扉　大下宇陀児
宙に浮く首　大下宇陀児
高木家の惨劇　角田喜久雄
虹男　角田喜久雄
霧に棲む鬼　角田喜久雄
奇跡のボレロ　角田喜久雄
黄昏の悪魔　角田喜久雄
笛吹けば人が死ぬ　角田喜久雄

**横溝正史長編全集　全20巻**

(1)本陣殺人事件　横溝正史
(2)蝶々殺人事件　横溝正史
(3)不死蝶　横溝正史
(4)吸血蛾　横溝正史
(5)スペードの女王　横溝正史
(6)扉の影の女　横溝正史
(7)夜の黒豹　横溝正史
(8)悪魔の百唇譜　横溝正史
(9)火の十字架　横溝正史
(10)魔女の暦　横溝正史
(11)支那扇の女　横溝正史
(12)壺中美人　横溝正史
(13)死神の矢　横溝正史
(14)毒の矢　横溝正史
(15)堕ちたる天女　横溝正史
(16)貸しボート十三号　横溝正史
(17)華やかな野獣　横溝正史
(18)蠟美人　横溝正史
(19)迷路の花嫁　横溝正史

20 金田一耕助の冒険 横溝正史
昼なき男 島田一男
野獣の夜 島田一男
湖底の囚人 島田一男
妖精の指 島田一男
東京暗黒街 島田一男
仮面の花嫁 島田一男
自殺の部屋 島田一男
トップ屋事件簿 島田一男
座席番号13 島田一男
特ダネ記者 島田一男
銀座殺人事件 島田一男
赤い影の女 島田一男
女事件記者 島田一男
特ダネはもらった 島田一男
錦絵殺人事件 島田一男
古墳殺人事件 島田一男
黒いカルテ 島田一男

夜光る妖精 島田一男
冥土の顔 島田一男
黒い霧の東京 島田一男
事件弁護士 島田一男
夜を生きる男 島田一男
黒い事件簿 島田一男
悪魔の系図 島田一男
拳銃を磨く男 島田一男
殺人名簿 島田一男
上を見るな 島田一男
捜査一課 島田一男
最終都内版 島田一男
人喰いの夜 島田一男
犯罪乱流 島田一男
死神の地図 島田一男
白と黒の谷間 島田一男
北向海流 島田一男
炎の地図 島田一男

素足の悪魔 島田一男
青い手の女 島田一男
その灯を消すな 島田一男
青衣の魔女 島田一男
鉄道公安官 島田一男
0番線 島田一男
待避線の狼 島田一男
灰色の終着駅 島田一男
幻の新幹線 島田一男
火の国特急 島田一男
海抜455 島田一男
捜査線ナンバー・ゼロ 島田一男
新宿25時 島田一男
Qを出す男 島田一男
ふざけるな 島田一男
地図を歩く男 島田一男
波の墓標 島田一男
スキャンダル作戦 島田一男